

—— 千葉県市原市 ——

潤井戸西山遺跡

1986

市原市街路課
財団法人 市原市文化財センター

序 文

千葉県ほぼ中央に位置する市原市は、南に養老川、北に村田川を擁し、自然環境に恵まれた市であります。

古くより、多くの人々が、住いと糧とをこの地に求め、上総における古代文化の中心的役割を果たして参りました。以来、それは連綿として今日に受け継がれております。

市内には、数多くの遺跡を今に残しておりますが、その一方では、臨海工業地帯の建設を契機として、地域開発が急速に進みつつある今、これら埋蔵文化財保護との調和が強く求められております。

今回、ここに報告する潤井戸西山遺跡は、市原市都市部街路課による、都市計画道路草刈西広線の建設に先立って、埋蔵文化財の発掘調査が実施されました。その結果、弥生時代の環濠集落、奈良・平安時代の建物跡を中心とした貴重な資料が数多く得られました。従来、西山遺跡の立地するような低地には遺跡が少ないと言われておりましたが発掘調査の結果、多大なる成果が得られたことは、定説の再検討をせまる新発見であります。

本報告書は、この成果をまとめたものであり、研究者のみならず、広く市民の埋蔵文化財に対する理解に活用できれば幸いに存じます。

今回の発掘調査及び、本書の刊行に際し、千葉県教育庁文化課、市原市都市部街路課、市原市教育委員会文化課ならび関係諸機関の御指導、御協力を頂きましたことに、厚くお礼申し上げます。

昭和61年3月25日

財 団 法 人 市原市文化財センター
理 事 長 星 野 一 郎

例 言

1. 本書は、千葉県市原市潤井戸字西山1297番地他に所在する、潤井戸西山遺跡の調査報告書である。
2. 調査は、市原市都市部街路課による、都市計画道路草刈西広線の建設に伴い実施したものである。
3. 発掘調査、整理作業、報告書作成作業は以下のとおり行った。

発掘調査 昭和59年 9 月 1 日～昭和59年 9 月26日（確認調査）

昭和59年11月12日～昭和60年 3 月25日（本 調 査）

整理作業 昭和60年 8 月16日～昭和61年 3 月25日

担当 調査研究員 鈴木英啓

4. 本書の原稿執筆は、鈴木英啓が行った。
5. 発掘調査から整理作業の過程では、以下の諸機関、先学諸氏の御指導、御協力を賜った。記して謝意を表します。（敬称略）

市原市都市部街路課、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会教育指導部文化課、新井重三（埼玉大学教授）、及川淳一（千葉県文化財センター主任調査研究員）、石倉亮治（同主任調査研究員）、渡邊修一（同調査研究員）、穴澤義功（日本考古学協会員）、石坂俊郎（早稲田大学大学院生）、渡辺嘉幸（明治大学生）、吉田誠（同）、矢野淳一（国志館大学生）、安藤敏孝（国学院大学生）。

尚、調査期間中は、潤井戸在住の橘芳雄氏及び付近在住の多くの方々には、深い御理解と御協力をいただいた。

6. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の 1 : 25,000 소가 N 1 - 54 - 19 - 15 - 2（千葉15号 - 2）である。

組 織

発 掘 （昭和59年度）

役 員

理 事 長	星野一郎（教育委員会教育長）	理 事	寺村光晴（和洋女子大学教授）
副理事長	横濱辰夫（教育委員会教育指導部長）	理 事	海上信久（姉崎神社宮司）
常務理事	井原 茂（専任）	理 事	櫻井徹郎（市企画部長）
理 事	滝口 宏（早稲田大学名誉教授）	理 事	松崎良一（市総務部長）

理 事 中島英夫（市都市部長）
理 事 松下 隆（市総務部財政課長）

職 員

庶務課 課 長 小茶文夫
主 事 浅利幸一
主 事 補 相野光江
事務員（嘱託） 秋田晴美
事務員（嘱託） 塚本和江
調査課 課 長 郷田良一
主任調査研究員 山口直樹
調 査 研 究 員 宮本敬一

監 事 白鳥一夫（市会計課長）
監 事 山口 節（教育委員会総務課長）

調 査 研 究 員 米田耕之助
(兼) 調 査 研 究 員 浅利 幸 一
調 査 研 究 員 近 藤 敏
調 査 研 究 員 高 橋 康 男
調 査 研 究 員 田 所 真
調査研究員（嘱託） 鈴木英啓
事 務 員（嘱託） 高 浦 貞 子

整 理 （昭和60年度）

役 員

理 事 長 星野一郎（教育委員会教育長）
副理事長 横濱辰夫（教育委員会教育指導部長）
常務理事 内藤 隆（専任）
理 事 滝口 宏（早稲田大学名誉教授）
理 事 寺村光晴（和洋女子大学教授）
理 事 海上信久（姉崎神社宮司）

理 事 松 崎 良 一 （市企画部長）
理 事 斎 藤 栄 亮 （市総務部長）
理 事 中 島 英 夫 （市都市部長）
理 事 松 下 隆 （市総務部財政課長）
監 事 松本辰之助（教育委員会総務課長）
監 事 白 鳥 一 夫 （市会計課長）

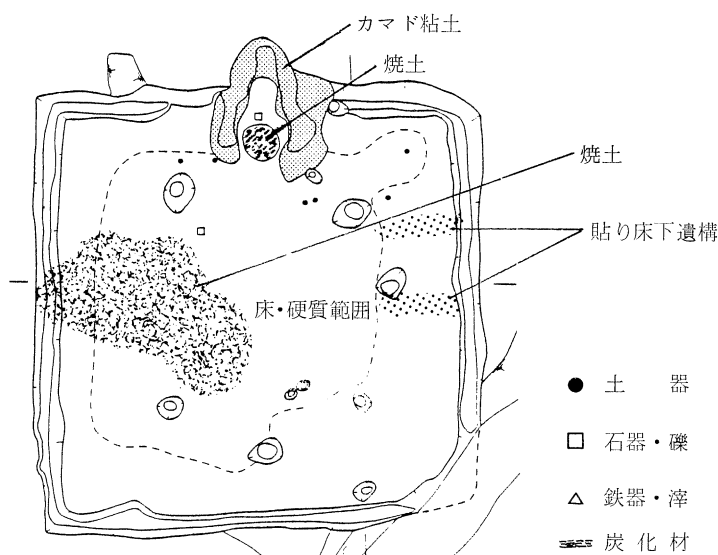
職 員

庶務課 課 長 田丸萬富
主 事 補 大鐘光江
事務員（嘱託） 秋田晴美
事務員（嘱託） 藤澤ひとみ
事務員（嘱託） 石渡あゆみ
調査課 課 長 清藤一順
主 幹 石田広美
主 幹 山口直樹
主任調査研究員 宮本敬一
調 査 研 究 員 米田耕之助
調 査 研 究 員 田中清美

調 査 研 究 員 浅利幸一
調 査 研 究 員 近藤 敏
調 査 研 究 員 高橋康男
調 査 研 究 員 田所 真
調 査 研 究 員 大村 直
調 査 研 究 員 木對和紀
調査研究員（嘱託） 鈴木英啓
調査研究員（嘱託） 半田堅三
調査研究員（嘱託） 田中新史
事 務 員（嘱託） 高浦貞子

凡 例

1. 遺構番号は、整理の都合上、時期別に改訂し、旧調査番号は第1表に記載した。
時期はすべて下記の通り記号化した。
J = 縄文時代, Y = 弥生時代, K = 古墳時代, R = 歴史時代, X = 時期不明遺構。
2. 方位は座標北である。
3. 遺構と遺物図の縮尺は、住居跡は $\frac{1}{60}$ とし、遺存状態の良好な住居に伴うカマド・土壇などの諸施設は $\frac{1}{30}$ とした。土壇は規模によって $\frac{1}{30}$ ・ $\frac{1}{40}$ とした。
遺物は、土器は $\frac{1}{3}$ を原則とし、一部の石製品、鉄製品については、 $\frac{1}{2}$ から原寸大で記載した。
4. 遺構・特に住居跡の発掘状態を、完掘と全掘とに使い分けた。ここでいう完掘とは、床面上の覆土、遺物などを除去し、住居本来の施設の残存部であり、全掘とは、貼り床を除去した掘り方又は荒掘を指す。
5. 遺物観察表の中で、法量の表記は以下の通りである。
1. 器高, 2. 口径, 3. 最大径, 4. 底部径。〈 〉付は残存数値,
() 付は推定数値。
6. 挿図凡例



潤井戸西山遺跡

本文目次

序 文
例 言
組 織
凡 例

I	調査に至る経緯と経過	1
II	遺跡の位置と環境	1
1	地理的環境	1
2	西山遺跡と歴史的環境	4
III	遺構と遺物	12
1	縄文時代	12
2	弥生時代	16
3	古墳時代	24
4	歴史時代	87
5	時期不明遺構	99
1)	土壇	99
2)	溝	101
3)	路	105
6	遺構外出土遺物	108
IV	小 結	116
1	遺構と遺物	116
2	環濠について	121
3	石製垂飾品	123
4	結びにかえて	127

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺遺跡	2	第31図	K-9号住居跡出土遺物-2	46
第2図	潤井戸西部古墳群	5	第32図	K-10号住居跡	47
第3図	遺跡周辺地形図	7	第33図	K-11号住居跡	48
第4図	検出遺構全測図	10	第34図	K-12号住居跡	49
第5図	縄文時代の検出遺構	12	第35図	K-12号住居跡出土遺物	50
第6図	縄文時代の検出遺構-1	14	第36図	K-13号住居跡	51
第7図	縄文時代の検出遺構-2	15	第37図	K-13号住居内カマド	52
第8図	弥生時代の検出遺構	16	第38図	K-13号住居跡出土遺物-1	53
第9図	Y-1号住居跡	17	第39図	K-13号住居跡出土遺物-2	54
第10図	Y-1号住居跡出土遺物	19	第40図	K-14号住居跡	57
第11図	Y-1号溝(環濠)	21	第41図	K-14号住居内カマド	59
第12図	Y-1号溝土層層序	22	第42図	K-14号住居跡出土遺物-1	59
第13図	Y-1号溝出土遺物	23	第43図	K-14号住居跡出土遺物-2	60
第14図	古墳時代の検出遺構	24	第44図	K-15号住居跡	62
第15図	K-1号住居跡	25	第45図	K-15号住居跡出土遺物	63
第16図	K-1号住居跡出土遺物	26	第46図	K-16号住居跡	64
第17図	K-3号住居跡	27	第47図	K-16号住居内カマド	65
第18図	K-3号住居跡出土遺物	29	第48図	K-16号住居跡出土遺物-1	65
第19図	K-4号住居跡出土遺物	31	第49図	K-16号住居跡出土遺物-2	66
第20図	K-5号住居跡	32	第50図	K-17号住居跡	67
第21図	K-5号住居内カマド	33	第51図	K-17号住居内カマド	68
第22図	K-5号住居跡出土遺物	34	第52図	K-17号住居跡出土遺物	69
第23図	K-6号住居跡	35	第53図	K-19・20号住居跡	71
第24図	K-6号住居跡出土遺物	36	第54図	K-20号住居跡出土遺物	72
第25図	K-7号住居跡	37	第55図	K-21号住居跡	73
第26図	K-7号カマド特殊遺構	39	第56図	K-21号住居跡出土遺物	75
第27図	K-7号住居跡出土遺物-1	40	第57図	K-22号・23号住居跡-1	77
第28図	K-7号住居跡出土遺物-2	41	第58図	K-22号・23号住居跡-2	78
第29図	K-8号・9号住居跡	44	第59図	K-22号住居跡出土遺物	80
第30図	K-9号住居跡出土遺物-1	45	第60図	K-23号住居跡出土遺物	83

第61図	K-24号住居跡	84	第72図	時期不明遺構-土壇	100
第62図	K-24号住居跡出土遺物	85	第73図	時期不明遺構-溝	101
第63図	歴史時代の検出遺構	87	第74図	時期不明遺構-溝	103
第64図	R-1号住居跡	88	第75図	時期不明遺構-路	105
第65図	R-1号住居跡内カマド	89	第76図	時期不明遺構出土遺物-1	106
第66図	R-1号住居跡出土遺物-1	90	第77図	時期不明遺構出土遺物-2	107
第67図	R-1号住居跡出土遺物-2	91	第78図	遺構外出土遺物-1	109
第68図	R-1号住居跡出土遺物-3	92	第79図	遺構外出土遺物-2	110
第69図	R-1号・2号柵列堀跡	95	第80図	遺構外出土遺物-3	111
第70図	R-1号掘立建物跡	96	第81図	遺構外出土遺物-4	112
第71図	R-1号門跡	97			

写真図版目次

図版 1	西山遺跡周辺の航空写真	図版11	1. Y-1号溝の北側 2. 同
図版 2	1. 調査区域の南側全景 2. 同上	図版12	1. Y-1号溝の中央部 2. 同上の南端部
図版 3	1. 南側私道移設前の調査 2. 北側の調査風景	図版13	1. 住居跡下のY-1号溝 2. Y-1号溝の内壁
図版 4	1. 調査区域の中央部分 2. 北西隅切り全景	図版14	1. Y-1号溝内の遺物出土状態 2. 同上 3. 同上の遺構出土状況
図版 5	1. J-1号陥し穴状遺構 2. 同上の底部施設	図版15	1. K-3号住居跡 2. 同上の遺物出土状態
図版 6	1. J-2号陥し穴状遺構 2. 同上の底部施設	図版16	1. K-5号住居跡 2. 同上の全部掘状態
図版 7	1. J-3号陥し穴状遺構 2. 同上の底部施設	図版17	1. K-6号住居跡 2. 4上の土壇と遺物出土状態
図版 8	1. J-6号陥し穴状遺構 2. J-7号陥し穴状遺構	図版18	1. K-7号住居跡 2. 同上のカマド 3. 特殊遺構
図版 9	1. Y-1号住居跡 2. 同上の遺物出土状態	図版19	1. K-9号住居跡 2. 同上の遺物出土状態
図版10	1. Y-1号溝(環濠跡) 2. 同		

- 図版20 1. K-8号住居跡
2. K-10号住居跡
- 図版21 1. K-12号住居跡
2. K-13号住居跡
- 図版22 1. K-14号住居跡
2. 同上の柱穴。3. 同上の全掘
- 図版23 1. K-14号住居跡のカマド
2. 同上
- 図版24 1. K-14号住居跡の貼り床除去
2. K-15号住居跡
- 図版25 1. K-16号住居跡
2. 同上の全掘
- 図版26 1. K-17号住居跡
2. 同上のカマド
- 図版27 1. K-20号住居跡
2. 同上の遺物出土状態
- 図版28 1. K-21号住居跡
2. 同上の全掘と石製品の出土
- 図版29 1. K-22・23号住居跡
2. K-22号住居跡出土遺物状況
- 図版30 1. K-22・23号住居跡の完掘
2. K-23号跡のキレツ跡
- 図版31 1. K-24号住居跡
2. 同上の遺物出土状態
- 図版32 1. R-1号住居跡
2. 同上の完掘
- 図版33 1. R-1号住居跡遺物出土状態
2. 同上
- 図版34 1. R-1号住居内カマド
2. 同上の全掘
- 図版35 1. R-1号掘立柱建物跡
2. 同上の柱穴

- 図版36 1. R-1号掘立柱建物跡柱穴
2. 同上の柱穴
- 図版37 1. 門跡 2. 門跡とR-1号
南側柵列塀。3・4柱穴
- 図版38 1. R-2号東側柵列塀
2. ～6. 柵列塀柱穴
- 図版39 1. X-1号路
2. 同上の路面
- 図版40 1. X-1号溝
2. 同上
- 図版41 Y-1号住居跡出土遺物
Y-1号溝（環濠）出土遺物
- 図版42 Y-1号溝出土遺物
K-1号・3号住居跡出土遺物
- 図版43 K-3号住居跡出土遺物
- 図版44 K-4号～6号住居跡出土遺物
- 図版45 K-7号住居跡出土遺物
- 図版46 K-9号・13号住居跡出土遺物
- 図版47 K-13号・14号住居跡出土遺物
- 図版48 K-14号・16号住居跡出土遺物
- 図版49 K-17号・20号住居跡出土遺物
- 図版50 K-21号住居跡出土遺物
- 図版51 K-22号住居跡出土遺物
- 図版52 K-23号・24号住居跡出土遺物
- 図版53 R-1号住居跡出土遺物
- 図版54 時期不明遺構出土遺物
- 図版55 遺構外出土遺物-1
- 図版56 遺構外出土遺物-2
- 図版57 遺構外出土遺物-3

I 調査に至る経緯と経過

昭和58年3月31日付けで、市原市長井原恒治は、都市計画道路草刈西広線の建設に伴い、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会を、千葉県教育委員会教育長及び市原市教育委員会教育長に行った。

それを受けて、千葉県教育庁文化課と市原市教育委員会の現地路査の結果により、昭和58年7月15日付けで「土師器散布地1か所」の回答がなされた。回答により、三者による度重なる協議の結果、全域記録保存とする方針が確定した。

発掘調査は、財団法人市原市文化財センターへの委託事業として、調査対象地区の4,500㎡を昭和59年9月1日より実施した。

確認調査の結果、北側の2,770㎡が本調査の対象となり、昭和59年11月12日より開始した。

(市原市教育委員会文化課)

II 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

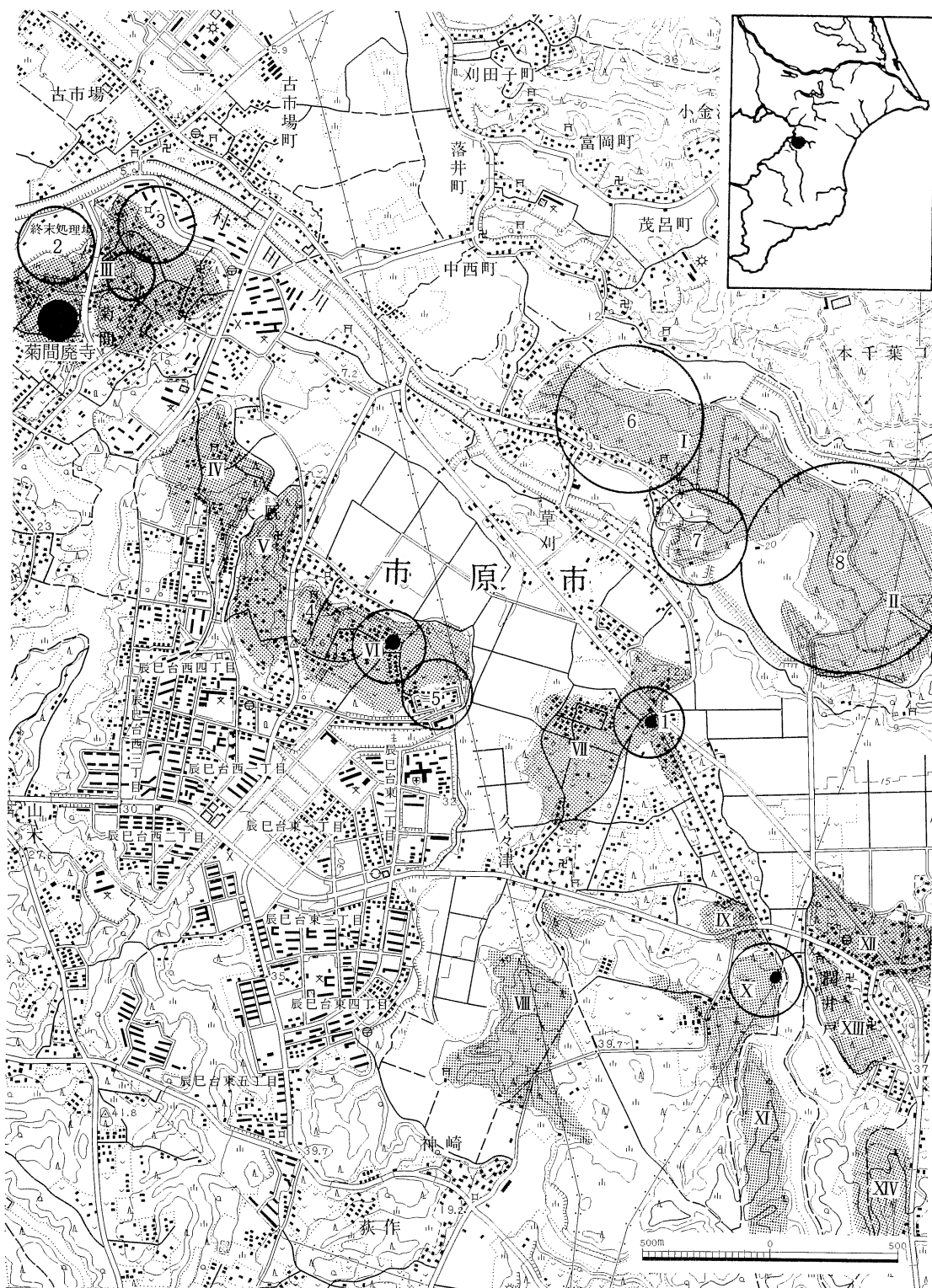
西山遺跡の所在する潤井戸は、村田川左岸中流域のやや奥まった部分を占めている。

村田川は、市原・千葉の両市を分かち如く流れる、全長21kmの中小河川である。上流は、市原北東部の台地を深く切り込み、多くの樹枝状支谷を形成する。中流から下流近くでは、潤井戸・菊間の間は左岸に、又、草刈から千葉市の南生実にかけた右岸に、それぞれ中規模の沖積地を形成している。更に下流では、東京湾に沿って広がる海岸平野を貫いて、湾内に河口を開いている。市原中部を流れる養老川ほど知られてないが、別名を境川ともいう。それは、とりもなおさず上総と下総の国境を証す名称である。その意味では養老川以上に重要な位置を占めているといえよう。

村田川左岸の中では、最大クラスの支流である、神崎川を始めとする幾多の支流群によって開折された支谷により、菊間、大厩、久久津、潤井戸などの一連の千葉第Ⅰ段丘群が形成されている。西端に位置する菊間台地は、かつての攻撃面を忍ばせる急崖を呈する他、東西2つの台地からなる潤井戸の北部は、沖積地に向って張り出した、なだらかな段丘であり、立川ローム層によって覆われている。

西山遺跡は、潤井戸の西側台地に位置する。標高14.1m、比高0.8～1.2mを測る。台地の先端は、T字状に張り出した小台地があり、その東側基部が調査の対象となった。

台地の東側は、潤井戸の語源とも言われる潤井戸堰がある支谷が入り込み、西側は、神崎川によって形成された、比較的巾のある沖積地を伴う支谷に面している。



第1図 遺跡の位置と周辺遺跡

村田川中流域の遺跡分布一覧表

弥生時代・中期を主体

- | | |
|-----------|-----------|
| 1 潤井戸西山遺跡 | 5 大厩遺跡 |
| 2 菊間手永遺跡 | 6 草刈遺跡 |
| 3 菊間遺跡 | 7 草刈六之台遺跡 |
| 4 大厩弁天台遺跡 | 8 川焼台遺跡 |

古墳時代・古墳群と集落跡

- | | |
|-----------------------|----------------|
| I 草刈遺跡 | VIII 潤井戸西部古墳群※ |
| II 川焼台古墳群を含む遺跡群※ | IX 潤井戸杉山古墳群 |
| III 菊間古墳群・集落跡 | X 〃 山王後古墳群 |
| IV 大厩細野・新田台遺跡 | XI 〃 下鈴野遺跡 |
| V 大厩かなほり遺跡他 | XII 〃 |
| VI 大厩浅間山古墳を中心とする遺跡群※ | XIII 〃 小谷古墳群 |
| VII 西山を中心とする潤井戸北部遺跡群※ | XIV 〃 長者塚古墳群 |

注 分布図中の○印は調査歴がある遺跡。トーンは文献及び踏査による古墳と遺物の散布範囲である。遺跡所在地は、流域端に限定したため、図中の千葉市南部側、市原市南部は図化していない。※印は、複数の古墳群を含んだ総称であり、遺跡名ではない。参考文献は、千葉県遺跡分布図を元に、菊間遺跡、大厩遺跡などの報告書の他、市原市教育委員会の分布調査票及び踏査成果を主とするものである。

尚、踏査では市文化課の田中清美、小出紳夫、国学院学生安藤敏孝、国志館大学生矢野淳一の諸士のご協力をいただいた。

2. 西山遺跡と歴史的環境

両総を分かち1つの指標たる流域の中で、特に中流から下流にかかる一帯はまた、村田川流域における古代文化圏の中心的存在でもある。左右兩岸には、多くの遺跡が密集し、西山遺跡はその一角を占めている。とりわけ、弥生時代及び古墳時代の遺跡では、調査、未調査分を含めるとかなりの数にのぼり、流域に依存した幾多の人々との関りを強く感じさせる。

弥生時代中期では、西山遺跡（1）を始めとし、菊間手永遺跡（2）、菊間遺跡（3）、大厩遺跡（5）など。また右岸では、草刈遺跡（6）がそれぞれ調査されている。その内、環濠が検出されているのは、西山と大厩及び草刈の3遺跡である。後期では、菊間手永、菊間、大厩及び草刈台後方の川焼台遺跡（8）に検出されているが、西山では確認されていない。

古墳時代では、先に記述の遺跡全般に認められている。中でも、菊間国造との関りが推定される菊間古墳群（Ⅲ）、市内最大クラスの円墳として調査された大厩浅間様古墳（1984年市原市文化財センター調査）を中心とする大厩古墳群（Ⅵ）などがある。

潤井戸では、東・西両台地の周縁部一帯に、杉山古墳、山王後古墳（1975年市原市調査）、などの前方後円墳を始めとする、多数の古墳群と集落推定地（Ⅶ～ⅩⅣ）などがみられる。

これらの内、特に西山遺跡が位置する西側台地における、古墳時代の遺跡分布図（第2図）から、集落推定地は比較的に低い部分に多く、それに伴うとみられる古墳群は、細かい段丘面の端に集中している。以下、北端から南端までをa～e段面とし、踏査範囲内での広がりを追ってみた。

a段面。標高13～14m、比高0.8～1.2m。西山遺跡を中心としてかなりの範囲に遺物が散っている。時期的には、前半期を主とし後期までの土師片が多いようである。古墳群では、先端に張り出した、T字状台地上の字尾梨に、方墳状（塚に改造？）1基、円墳2基からなる。木津古墳群（a-I）があり、西側谷に面した、久久津茅林には、方墳状1基、円墳3～4基の茅林古墳群（a-II）が位置している。

b段面。標高19～22m、a段面との比高6～8m。東側周縁部の字上新宿に、前方後円墳1基（杉山古墳）と2基以上の小型円墳からなる杉山古墳群（b-I）がある。

c段面。標高28～30m、b段面との比高8～10m。東側周縁部の字山王後に、前方後円墳1基と小円墳1基以上（c-I）がある。

d段面。標高35～40m、c段面との比高7～11m。東側周縁部の尾根頂部に、前方後円墳1基（調査消滅）と円墳4基の山王後古墳群（d-I）があり、その南側の字山王台には、大型円墳を含め2基以上の一群（d-II）がある。西側周縁部では、字南大林に円墳4基からなる一群（d-Ⅲ）、更に小谷を越えた字天王台には、円墳16基、不明確2基の一群（d-Ⅳ）がある。また、やや間を置いて、円墳10基、不明確4基以上の一群（d-V）などがある。



e 段面。標高45～48m，d 段面との比高 5～8 m。現段階では，中央南端に，中潤ヶ広 1 号墳（1985年市原市文化財センター調査）の 1 基のみである。この他，東側の支谷を越えた，下鈴野遺跡（1985年市・センター調査）では，円・方墳合せて 4 基が確認されている。

この他，対岸の字宿後，小谷などには，前方後円墳，大型円墳を含む数群が確認されている。

以上，西側台地では，潤井戸地区内における古墳時代の遺跡の約 $\frac{1}{2}$ があり，その内調査の手が加えられたのは，山王後（c－I）1 基にすぎない。

周知の遺跡名としては，b・c・d 段面の東側一帯を杉山古墳群，また d 段面の西側一帯を潤井戸古墳群と総称している⁽¹⁾が，その後，市原市の調査では，c・d 段面の東側を山王後古墳群と称しており，杉山古墳群とは切り離している。また，ここでは，d 段面の西側では，南大林（d－III），字天王台（d－IV）及び（d－V）の 3 群は，位置的にも離れているため，d－IIIを南大林古墳群に，d－IVを天王台古墳群，d－Vを上潤ヶ台古墳群とした。

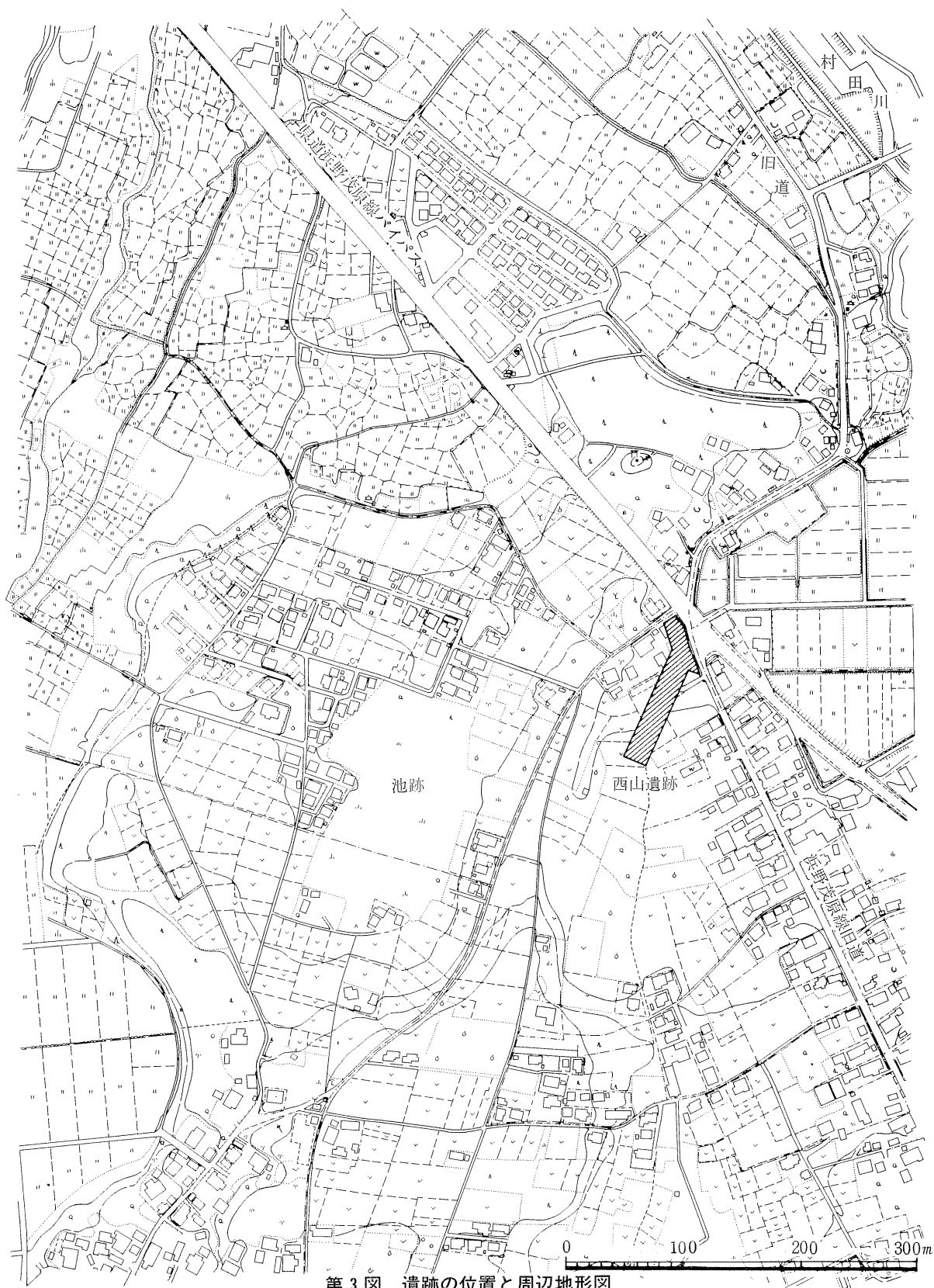
踏査でみる限りでは，集落の最つとも密集している部分は，a 段面の北端から，西山遺跡の東側周縁部に，また西側では，池跡の北から西側一帯にかけてみられる。台地上では，d 段面の西側，d－IV・Vの中間付近に a 段面ほどではないが確認される。時期では，a 段面が前・中期及び後期後半が多いのに比べ，d 段面では，後期前半が多いようである。

唯一，古墳群中であって調査された，山王後古墳（c－I）は 6 世紀代の造営と言われ，直刀 2 点と鉄鏃 1 点を検出している⁽²⁾。その他，宅地造成及び道路建設により，多くの古墳が破壊され，石室，石棺，刀の他，ハニワなどが出土したとも伝えられている⁽³⁾。

潤井戸西側台地にみられる多数の古墳はまた，西山遺跡に検出の同期の集落とも密接な関係下にある。特に，潤井戸付近では，大厩遺跡に検出例をみる前期古墳も多く含まれるものと推定できる。a－I，II群では，半壊及び全壊の遺構もあり，西山遺跡の性格を解明する上でも早急な対策が望まれる。

註及び参考文献

1. 「千葉県遺跡分布図」の名称による。
2. 田中清美氏のご教示による。1975年東京電力の鉄塔建設時に市原市が調査。
3. 中村てい他「上総市原第 5 号」1984 市原市文化財研究会誌
『市原市大厩遺跡』 財団法人千葉県開発公社 1974
『菊間遺跡』 財団法人千葉県開発公社 1975

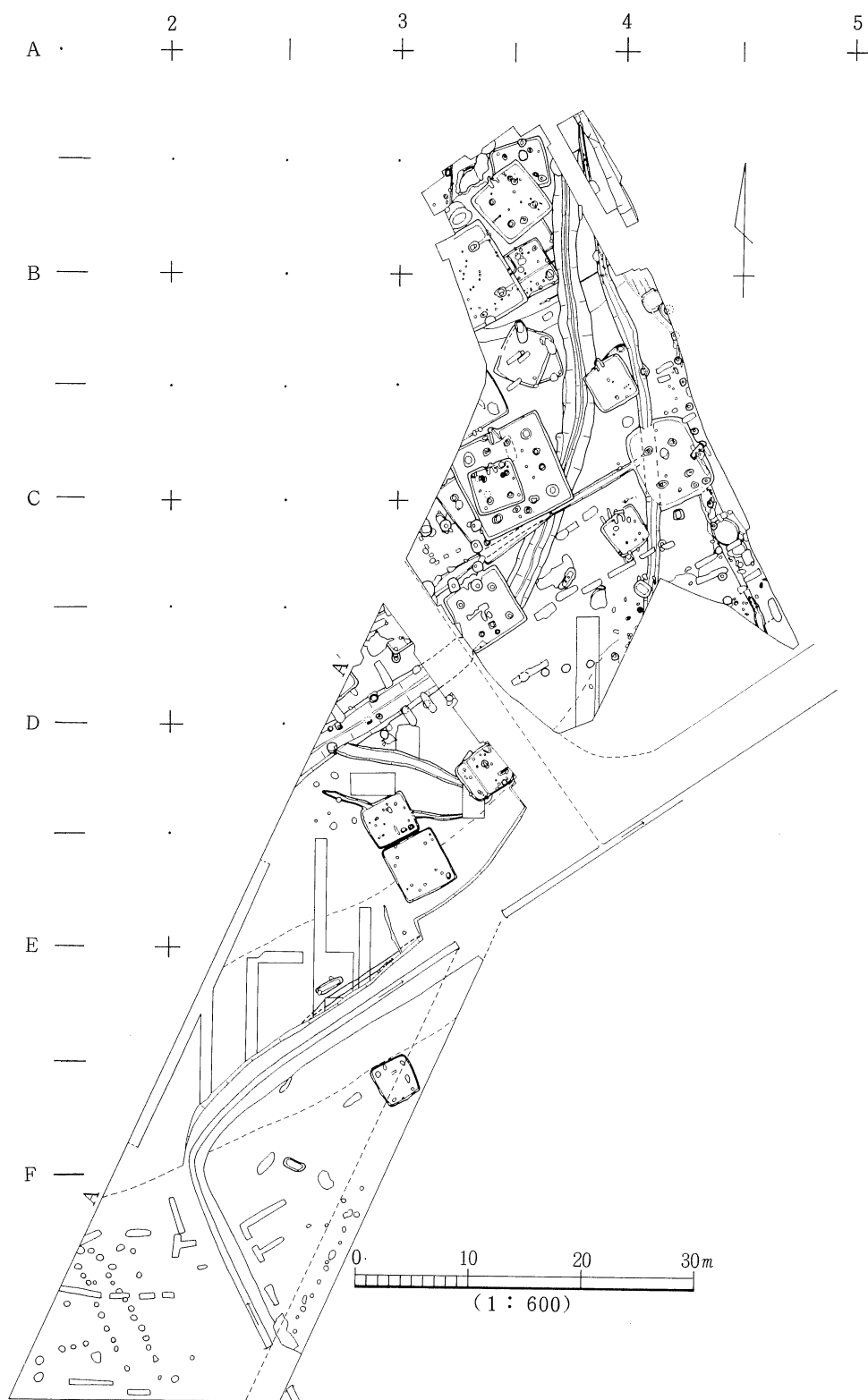


第3図 遺跡の位置と周辺地形図

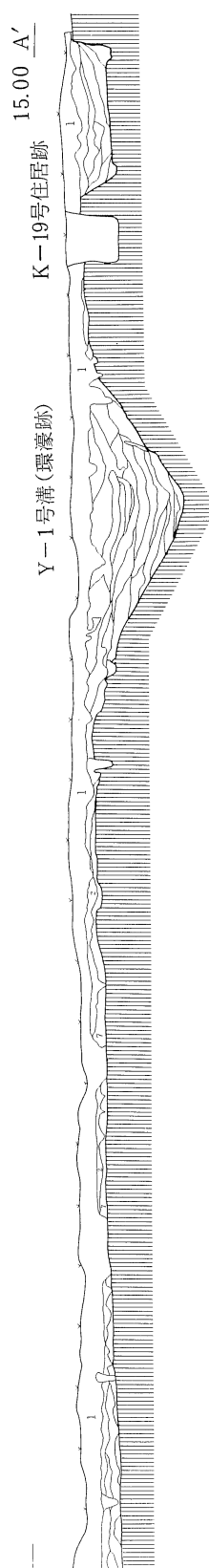
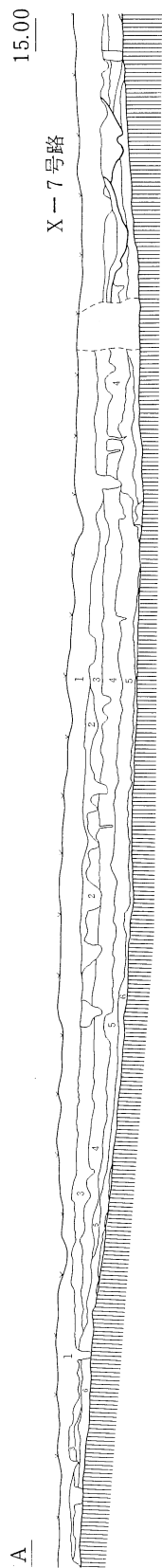
第1表 西山遺跡出土遺構一覽表

遺 構 番 号	性 格	時 代	出 土 遺 物	調査番号
J-1号 遺 構	陥し穴状	縄 文		413
J-2号 〃	〃	〃		406
J-3号 〃	〃	〃		412
J-4号 〃	土 墳	〃		404
J-5号 〃	〃	〃		415
J-6号 〃	陥し穴状	〃		414
J-7号 〃	〃	〃		401
Y-1号 住居跡	住 居 跡	弥 生	土器, 石斧	17
Y-1号 溝	環 濠 跡	〃	土器	201
K-1号 住居跡	住 居 跡	古 墳	土師器	4
K-2号 〃	〃	〃	土師器	2
K-3号 〃	〃	〃	土師器, 石製鉄床, 鉄滓, 支脚	9
K-4号 〃	〃	〃	土師器	7
K-5号 〃	〃	〃	土師器	5
K-6号 〃	〃	〃	土師器	11
K-7号 〃	〃	〃	土師器, 須恵器, 支脚, 鉄滓	6
K-8号 〃	〃	〃	土師器	13
K-9号 〃	〃	〃	土師器, 支脚	14
K-10号 〃	〃	〃	土師器	29
K-11号 〃	〃	〃	土師器	12
K-12号 〃	〃	〃	土師器, 鉄滓	15
K-13号 〃	〃	〃	土師器, 鉋, 鉄片, 鉄滓, 支脚	16
K-14号 〃	〃	〃	土師器, 須恵器, 管玉, 支脚	21
K-15号 〃	〃	〃	土師器, 砥石	22
K-16号 〃	〃	〃	土師器, 白玉	19
K-17号 〃	〃	〃	土師器, 土玉, 砥石	24
K-19号 〃	住 居 跡	〃	土師器	30
K-20号 〃	〃	〃	土師器, 和釘, 軽石	25

遺 構 番 号	性 格	時 代	出 土 遺 物	調査番号
K-21号 住居跡	住居跡	古墳	土師器, 蠟石製垂飾品	26
K-22号 //	//	//	土師器, 砥石	27
K-23号 //	//	//	土師器	28
K-24号 //	//	//	土師器, 鉄棒片	1
R-1号 //	//	歴史	土師器, 須恵器, 支脚, 鉄片	20
R-1号掘立建物跡	床貼住居	//		101
R-1号門跡	四脚門跡	//		102
R-1号柵列	柵列塀-南	//		103
R-2号 //	// -東	//		104
X-1号土墳	不明	不明		408
X-2号 //	//	//	土師器	402
X-3号 //	//	//		401
X-4号 //	//	//		410
X-5号 //	//	//		411
X-6号 //	//	//		412
X-1号溝	路と関係か	//	土師質土器	202
X-2号 //	不明	//		203
X-3号 //	//	//		204
X-4号 //	//	//	鉄滓	205
X-5号 //	//	古墳?	土師器, 鉄滓	206
X-6号 //	//	不明		207
X-7号 //	//	//		208
X-1号路	道路	近世?	土師器, 文久銭	301
X-2号 //	//	不明		302
X-3号 //	//	//		303
X-4号 //	//	//		304
X-5号 //	//	近世	寛永銭	305



第4図 西山遺跡全測図 (A～A'は土層図)



1. 耕作土
2. 黒褐色ー有機性が強く、よくしまる
3. 暗褐色ー淡褐色土小塊を含む
4. 黒褐色ー〃〃, しまる
5. 黒褐色ー有機性が強く、淡黄褐色土を含む
6. 淡黄色ーサラサラして山砂と粘土、ロームの混り、
谷の二次堆積土
- 自然層

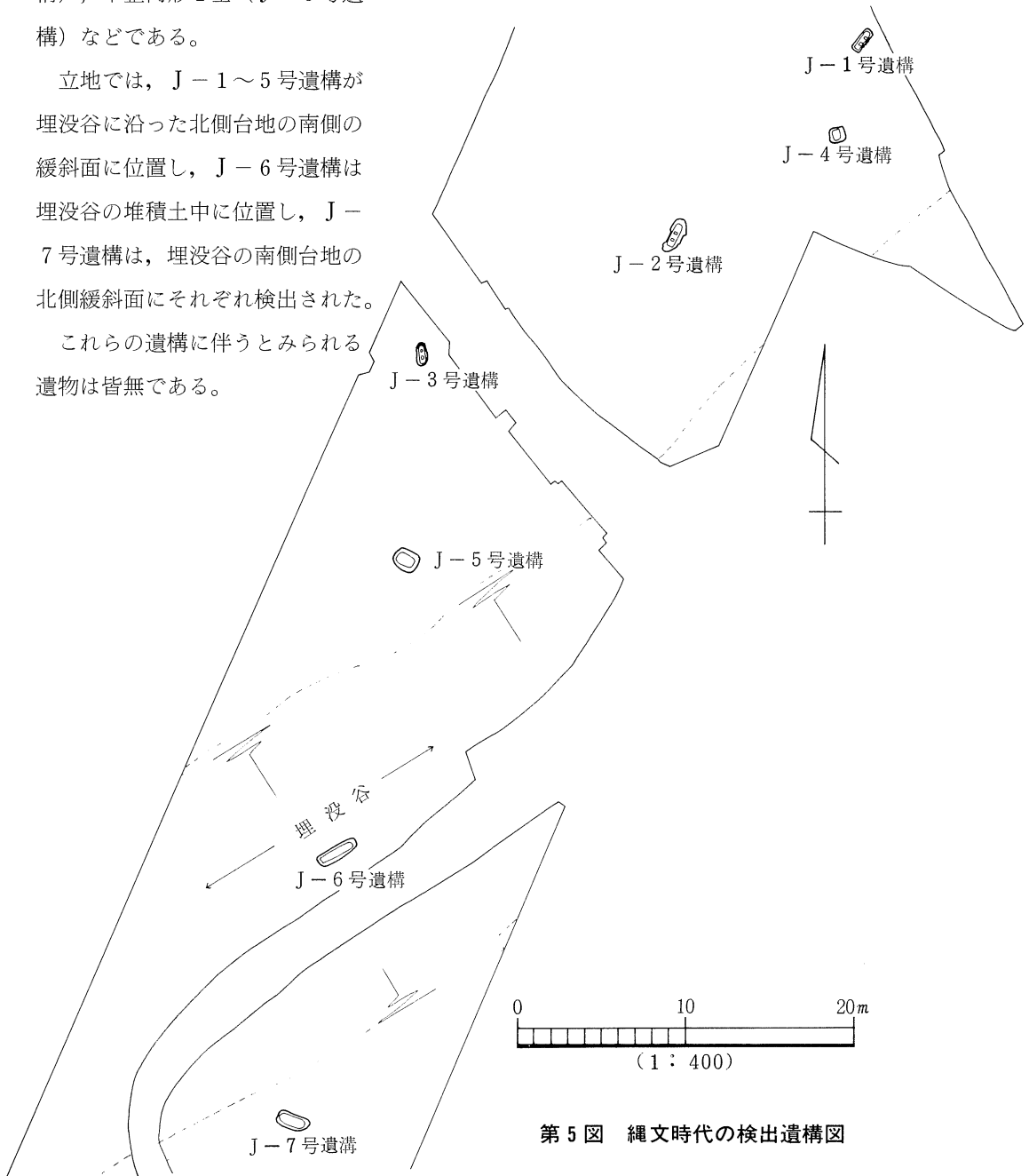
埋没谷を中心とした西壁土層図

Ⅲ 遺 構 と 遺 跡

1. 縄文時代 (図版-5~8) 縄文時代に比定される遺構は、いわゆる陥し穴状遺構を主とし、計7基を検出した。遺構のプランは、長方形を呈し、底部に柱状穴を伴うの3基(J-1~3号遺構)、柱状穴のないもの2基(J-6, 7号遺構)、方形1基(J-4号遺構)、不整円形1基(J-5号遺構)などである。

立地では、J-1~5号遺構が埋没谷に沿った北側台地の南側の緩斜面に位置し、J-6号遺構は埋没谷の堆積土中に位置し、J-7号遺構は、埋没谷の南側台地の北側緩斜面にそれぞれ検出された。

これらの遺構に伴うとみられる遺物は皆無である。



第5図 縄文時代の検出遺構図

J－1号遺構 本跡は、南から東側をY－1号住居及び柵列などにより切り込まれ上層の大半を失っている。プランは、長方形を呈すが、東西の両壁がやや外側に膨み気味である。側壁は、東西が垂直状、南北は上位が斜行、下位は垂直に近く、縦位の山ヒダを呈する掘り跡が残る。底面は平滑に整形され、正方形と長方形を呈する2本のピットを伴う。

J－2号遺構 本跡は、北から西側上位を芋芽穴によって失っている。プランは長方形を呈する。側壁は、南壁が2段、北壁は上位が斜行、下位が垂直状で東西の側壁と同形であり、J－1号と同じく縦ヒダ状の掘り跡がある。底面は、平滑に整形され、正方形と長方形の2本のピットを伴う。

J－3遺構 本跡は、北側面約 $\frac{1}{3}$ 部分の上層を、K－20号住居及び攪乱によって失っている。プランは隅丸長方形を呈する。側壁は4面共に、上位が斜行、下位は垂直に掘り込まれており、側壁はJ－1・2号と同様の掘り跡がある。底面は、緩やかな凹凸があるものの比較的平坦に整形され、長方形と不整長方形の2本のピットを伴う。

J－4号遺構 本跡は、Y－1号住居跡の南壁に接して位置し、プランは長方形を呈する。側壁は、上位が斜行、下位が垂直であり、底面を含め平坦に整形している。

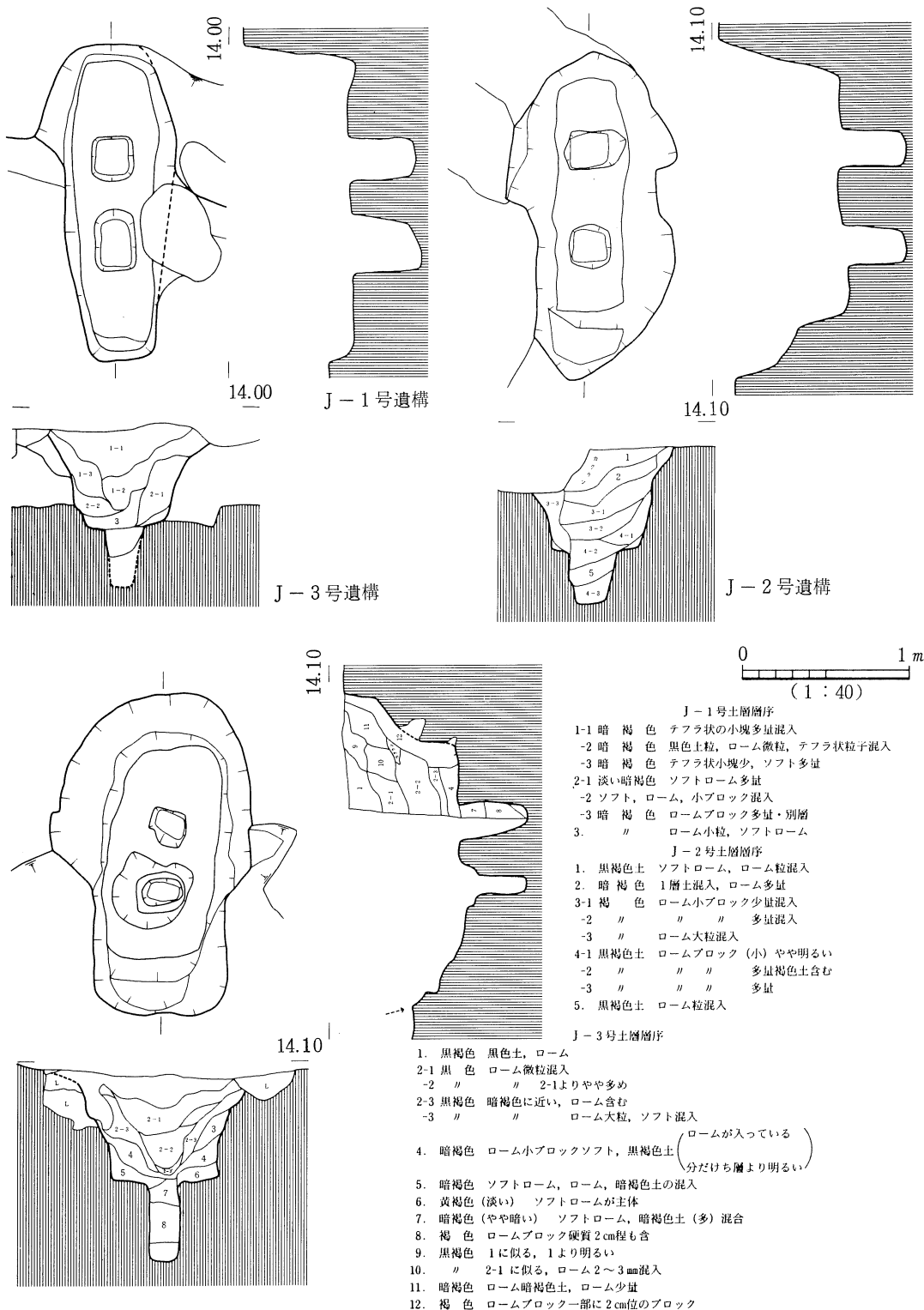
J－5号遺構 本跡は、K－22号住居跡の貼り床下に検出した。プランは不整楕円形を呈する。側壁は凹凸が激しく、未整形である。底面はやや丸味を帯びてはいるが滑らかである。

J－6号遺構 本跡は、埋没谷の黒色堆積土の中層に確認され、黒色土下層の二次堆積とみられる淡い黄褐色土（ロームと山土を混ぜ合わせた如き土）層を貫き、ローム面を約20cm掘り込んでいる。プランは長方形を呈する。側壁は垂直状で底面と共に整形されている。出水多し。

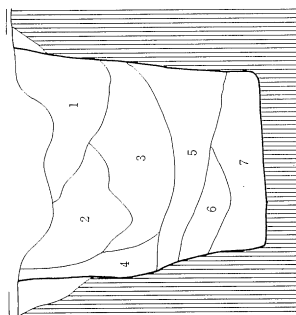
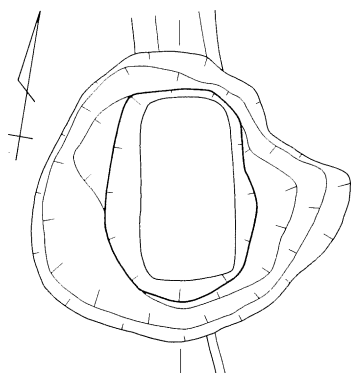
J－7号遺構 埋没谷の南側台地における唯一の縄文時代の遺構である。プランは長方形を呈する。側壁は、上位が斜行、下位は垂直である。底面はローム下層の粘土層上位にあり、壁と共に平滑に整形されている。

第2表 縄文時代の遺構計測値表

遺構番号	規 模 cm		残存 壁高	ピ ッ ト の 規 模 cm							
	残 存 上 面	底 面			上面	下面	深さ		上面	下面	深さ
J－1号遺構	191× 68	175×49	52.0	P ₁	28×26	22×20	38.0	P ₂	38×25	29×17	40.0
J－2号遺構	198× 90	141×40	61.0	P ₁	36×23	24×22	37.0	P ₂	27×25	20×19	38.0
J－3号遺構	193× 119	140×65	68.5	P ₁	44×40	18×11	32.8	P ₂	22×22	18×14	41.7
J－4号遺構	128× 115	73×48	50.0								
J－5号遺構	156× 125	92×79	46.0								
J－6号遺構	252× 81	183×53	78.5								
J－7号遺構	192× 166	162×71	76.0								



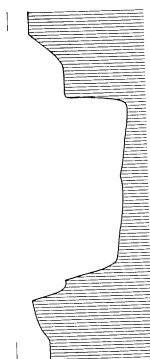
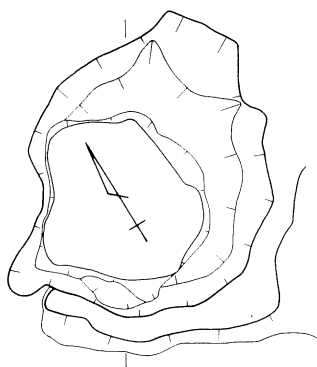
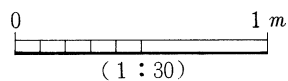
第6図 縄文時代遺構図-1



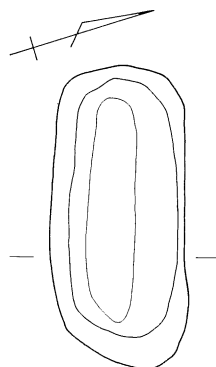
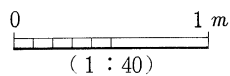
J-4号遺構

J-4号土層層序

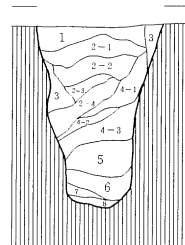
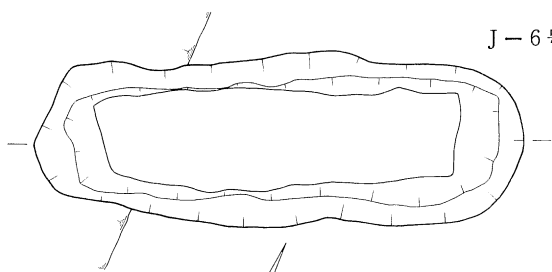
- 1～3・暗褐色・ローム微粒
- 4・ロームブロック
- 5～7・黒褐色・ローム粒



J-5号遺構



J-6号遺構



J-7号遺構

J-7号土層層序

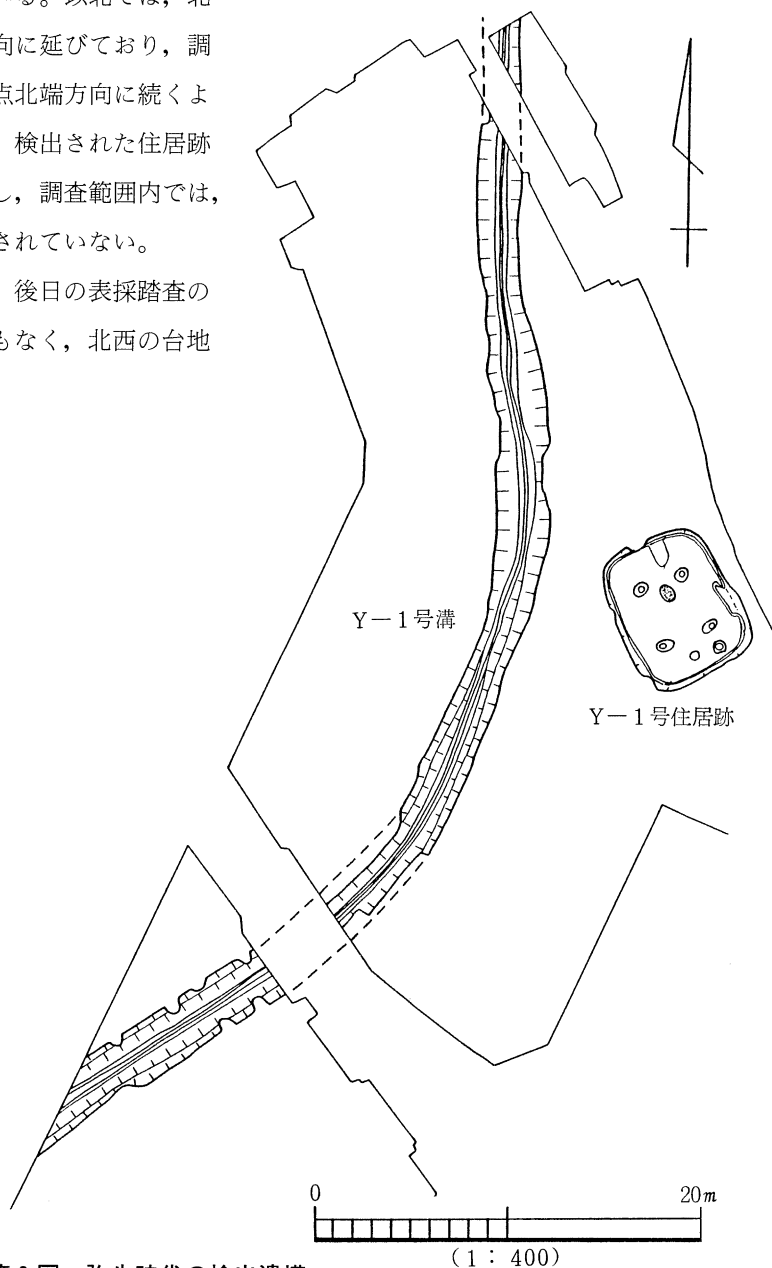
- 1・黒色・ローム微粒
- 2～4-3・暗褐色土が主体
- 5・7黄褐色・黒色土混入
- 6・暗灰色・粘土・ローム

第7図 縄文時代遺構図-2

2. 弥生時代 (図版-9~14)

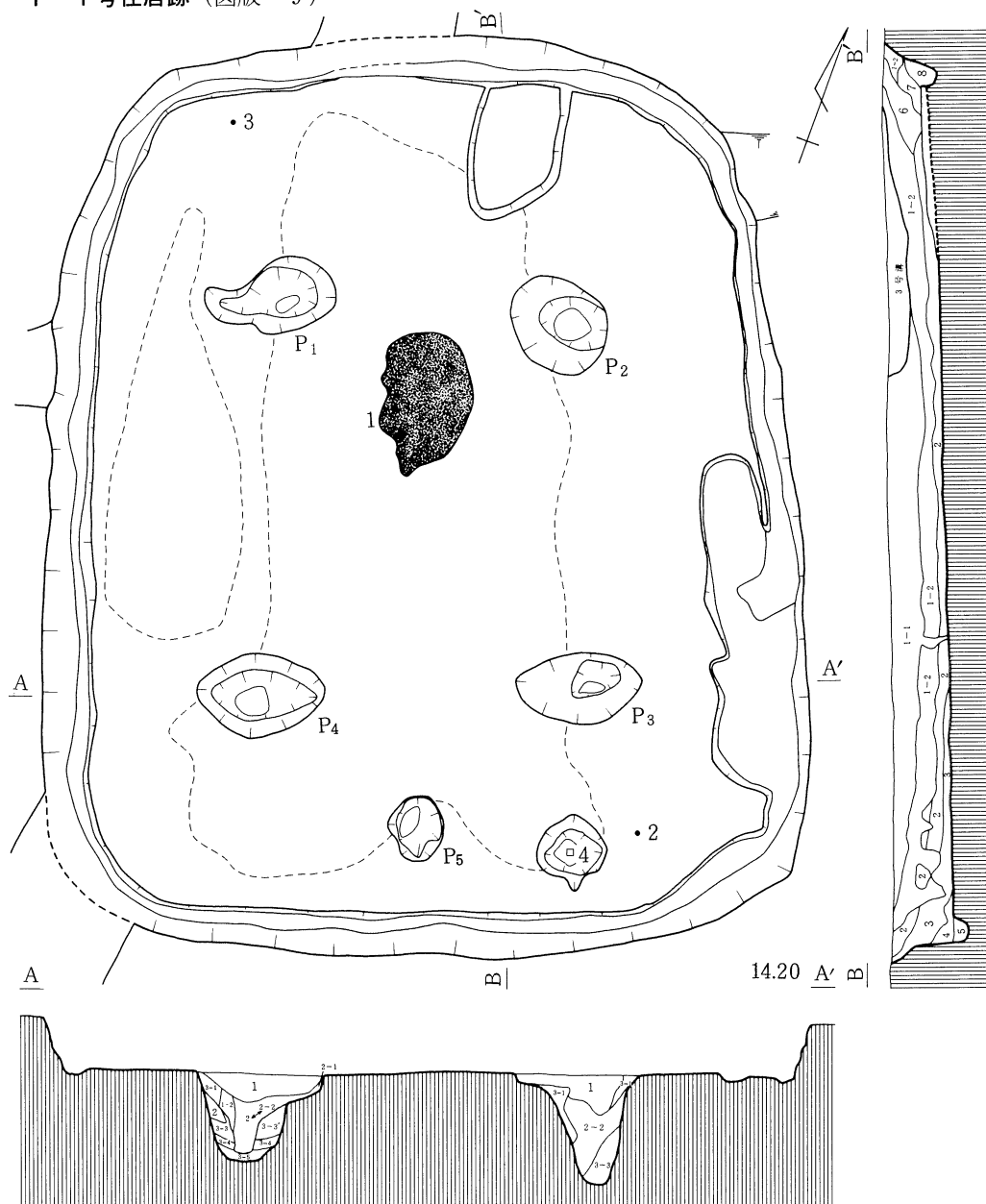
弥生時代の遺構は、住居跡1軒と環濠跡の一部を検出した。立地的には、南側の埋没谷と西側の沖積地及び、北西のくびれ部分とに面した北側台地上に位置している。環濠は、埋没谷方向に傾斜が始まる変換線付近を平行に掘り込んでいる。以北では、北側くびれ部分方向に延びており、調査範囲外の交差点北端方向に続くようである。唯一、検出された住居跡は、濠外に位置し、調査範囲内では、濠内からは検出されていない。

集落の中心は、後日の表採踏査の成果をみるまでもなく、北西の台地上にある。



第8図 弥生時代の検出遺構

Y-1号住居跡（図版-9）



柱穴 1～3-3層はロームブロックを主とし、暗褐色土を混入

4・5層はロームブロックと黒色土、ヌキトリ以前の埋土

住居内 1-1・2層は黒色土を主とし、軟質で攪乱気味。

古墳時代前期五領式を多量出土

2. 暗褐色 ローム粒、焼土微粒を含む

3. // ややくすんだ褐色、ローム、焼土粒、ソフトを多く含む
3層は、他には認められていない

4. 黒褐色 軟質の黒褐色土でロームを混入

5. 褐色 3層に類似

6. 暗褐色 ソフト又は、やや微粒（極めて微）混入

7. 褐色 焼土、炭化微粒混入

8. 褐色 ローム大粒少量

第9図 Y-1号住居跡実測図

Y-1号住居跡は、本道部の北端部、地形的には、埋没谷の開口部に近い台地上に位置している。同時期に比定される環濠跡の東外側にあたる。検出状態は、南西隅から、北壁中央にかけ、溝が切り込み、その部分の壁を失っている他、南東端は歴史時代の柵列及び攪乱などがあるが、おおむね良好な状態を残している。覆土は、上下2層に別れており、上層は攪乱土、下層は自然流入を呈する。

住居跡のプランは、南側に比べ、北壁は巾狭まで丸味を帯びる隅丸方形を呈する。規模は、長軸 7.2m、短軸 5.8m（中心部分の）、残存の壁高は、40cmを測る。主軸方向は、N-27°-Wを指す。

床面は、主柱穴を結んだ内面とその南北側、西壁に沿った一帯に踏み締められた硬質面を残す他、東側一帯は総じて軟質である。壁溝は完周している。

主柱穴は、4か所を検出した。その内、P₁のみ円形であるのに対し、P₁・P₃・P₄は横長であるが、土層からは抜き取られた痕跡が認められる。その他、主柱穴以外では、南壁の中央に出入口に伴うとみられる小ピットを1か所検出したのみである。

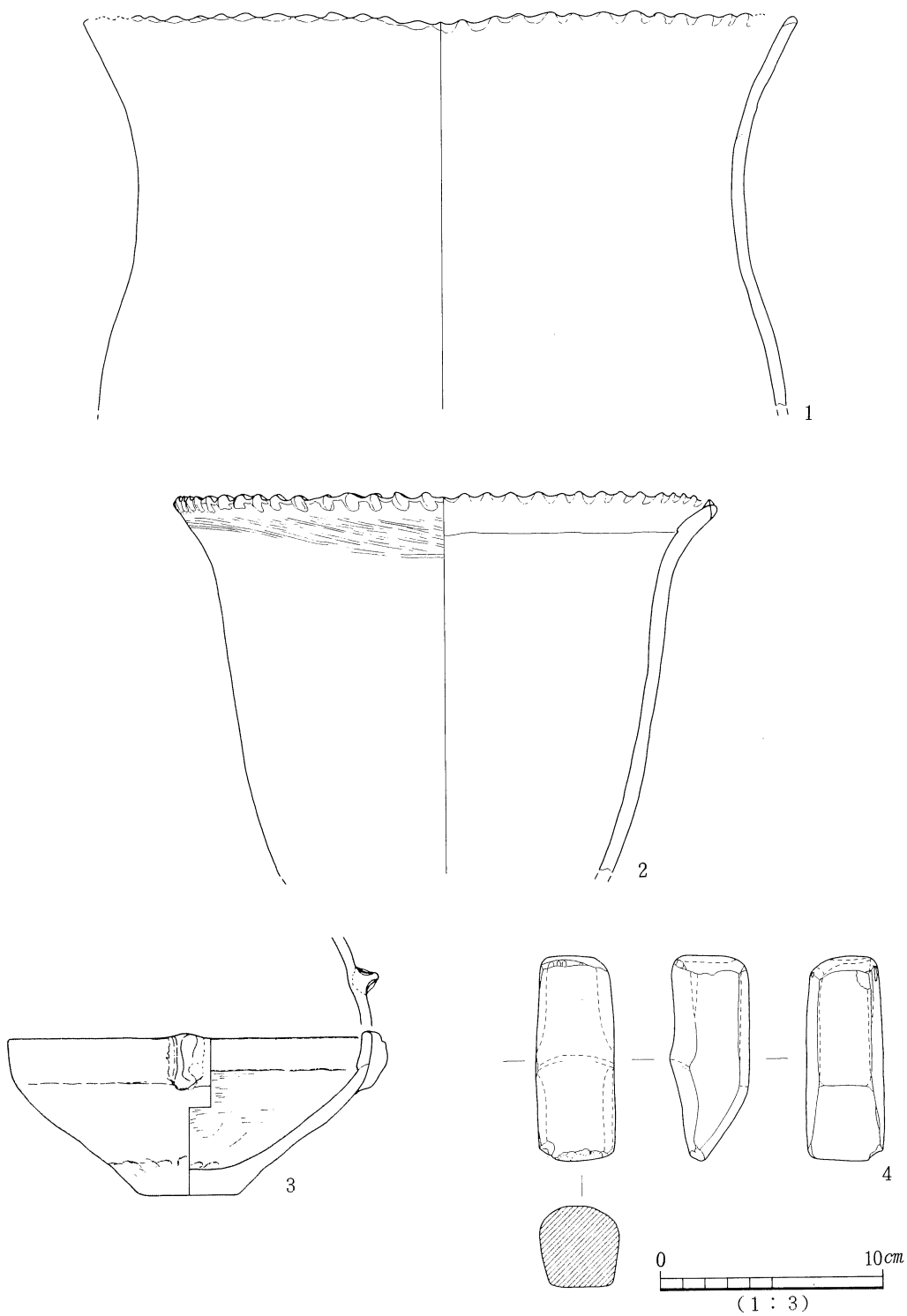
炉跡は、本跡の中央北寄りに位置する。プランは不整楕円形、規模は長軸 1.1m、短軸70cm、最深部は中心で17cmを測る大型炉である。炉の中央部分には、深鉢形土器片を埋設してあり、側壁は東西が急斜面、南側が緩やかに立ち上がる。炉床のロームは強く焼けている。

土壇は、P₅から南東隅に至るほぼ中間に位置する。プランは、直径55cmを測る円形で、底部は未整形である。その他、特異な施設としては、北壁近くロームの盛り土による低い台地状施設がある。住居の床面から5cmの高さ、表面は平坦に整形されており、硬質で貼り床状を呈す。

遺物は、炉内埋設土器の他、床面直上に逆向き状態の深鉢形土器1点、土器小片10点の他、土壇の底部から、完形の挟り付片刃石斧1点を検出した。覆土の上層からは、2,700点に及ぶ土器片を出土しているが、時期的にも、層序的にも本跡と係わるものではなく、遺構外出土土器として、一括処理とした。

第3表 Y-1号住居跡ピット等計測値表

主 柱 穴 cm				柱 状 穴 cm				住 居 内 土 壇 cm			床面積 m ²
NO.	上 面	底 面	深 さ	NO.	上 面	底 面	深 さ	上 面	底 面	深 さ	
1	108・61	21・10	86.1	5	53・45	19・14	54.4	58	24		17.6
2	88・76	31・27	80.8					55	23	25	
3	104・60	23・9	73.3								
4	106・70	28・27	75.8								



第10图 Y-1号住居跡出土遺物実測図

第4表 Y-1号住居跡出土遺物観察表

挿図 NO.	器 種	(推) 法 量	胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
	遺存度	〈残〉					
1	深鉢	1 < 18 >	白 砂	外ー上位・斜め・縦ヘラナデ (波状口縁) 内ー入念なナデ	良 好	内外共に 黒 褐 色 暗 褐 色	炉穴埋設器
		2 < 32 >					
	大型片	3 < 31 >					
2	深鉢	1 < 17.2 >	白 砂 多 量	外ー口縁・斜行条痕, 以下ナ デ (波状口縁) 内ー口縁・横ナデ, 以下全面 入念なナデ	良 好	外ー赤 褐 色 内ー暗黄褐色	口縁は内面に 有段
		2 24.5					
3	浅鉢	1 7.3	白 砂 多 量	外ー口縁・横ナデ, 体部・ナデ, 下端・指頭圧痕 内ー口縁・横ナデ, 体部・横ミ ガキ, 底部・指頭圧痕	良 好	外ー淡黄褐色 内ー黒 色	3～4 かの 棒状 浮文付加, 両 面赤彩
	(赤彩)	2 16.5					
		4 4.5					
4	片刃石斧 (挟り入り)	長・92mm 巾・3.5mm 厚・7～35mm, 重量・210g, 石質・砂岩				明 灰 色	刃先欠落

注 遺構外出土遺物として扱った壺形土器(第81図-36)は, 本跡の覆土上層から出土して
おり, 本跡に伴う可能性が強い。

Y-1号溝(図版-10~14)

Y-1号溝とは環濠跡を指す。環濠跡は, 本道部の中央西端から, 北西隅み切り部分の最北
端の間, 地形的には, 埋没谷を挟んだ北側台地上縁辺に位置する。北端の延長上は, 県道浜野
茂原線のバイパス工事により破壊されている。

環濠跡は, 全長68m部分を検出した。プランは, 南から北側約 $\frac{1}{3}$ 部分は円弧を描き, 北端は
直線状に掘り込まれている。上巾は最大で2.5m, 基底部巾は10~20cm, 残存の壁高は2mを
測る。

側壁の傾斜角度は, 上位が35~45°, 上位は60~80°と大きく2段に別れ, 断面の形状は, 屈
曲したV字形のいわゆる薬研形を呈する。

濠は, ローム層を貫ぬき, 下層の粘土層をも掘り込んでいるため, 降雨の翌日からは絶え間

ない出水が数日間続き、さながら水濠を呈す如き状態がつづいた。

濠はまた、北端の延長線上の東側くびれ方向に傾斜している。

遺構の覆土は、3層に大別される。

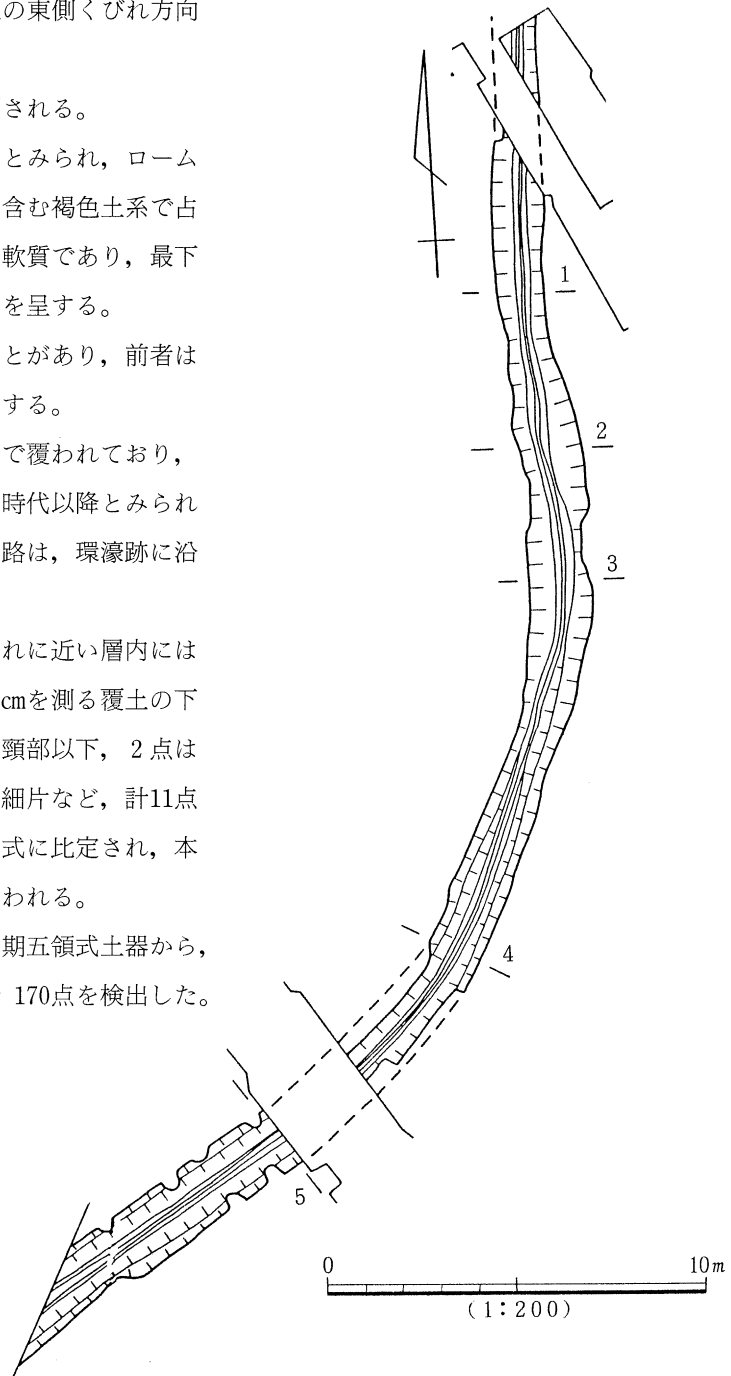
下層は早い時期に埋没したとみられ、ロームブロック及び粘土粒を多量に含む褐色土系で占められている。覆土は総じて軟質であり、最下層は人為による埋め元し状態を呈する。

中層は、褐色系と黒褐色土とがあり、前者は硬質で、後者は自然流入を呈する。

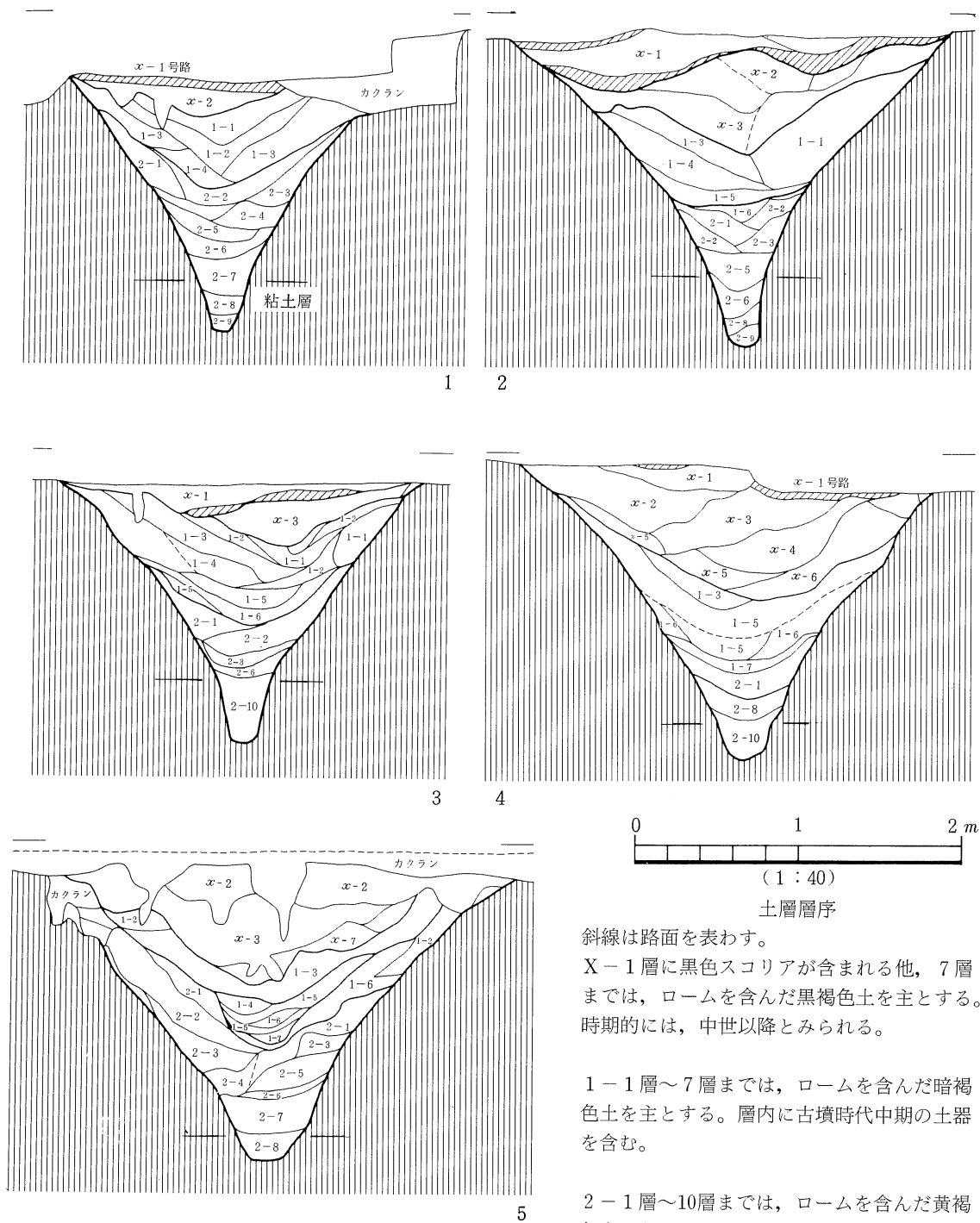
上層は、全体に荒い褐色土で覆われており、中位から上位にかけて、歴史時代以降とみられる「路」が敷設されている。路は、環濠跡に沿った全面に検出されている。

遺物は、本跡の底部又はそれに近い層内には皆無であり、底部から30～50cmを測る覆土の下層上位から、壺4点（2点は頸部以下、2点は頸部以上）の他、深鉢の小・細片など、計11点を検出した。いずれも宮ノ台式に比定され、本跡の存在時期と係わると思われる。

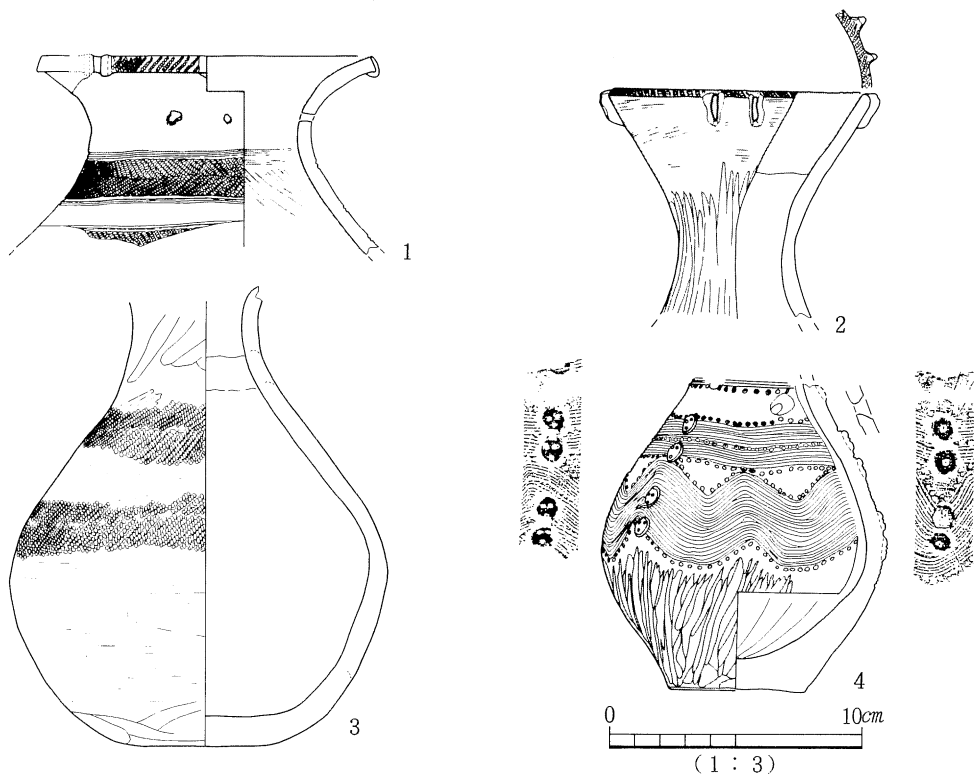
中層上位では、古墳時代前期五領式土器から、中期和泉式土器を主とし、計170点を検出した。



第11図 Y-1号溝（環濠）全測図



第12図 Y-1号溝（環濠跡）土層層序



第13図 Y-1号溝（環濠跡）出土遺物実測図（図版-42）

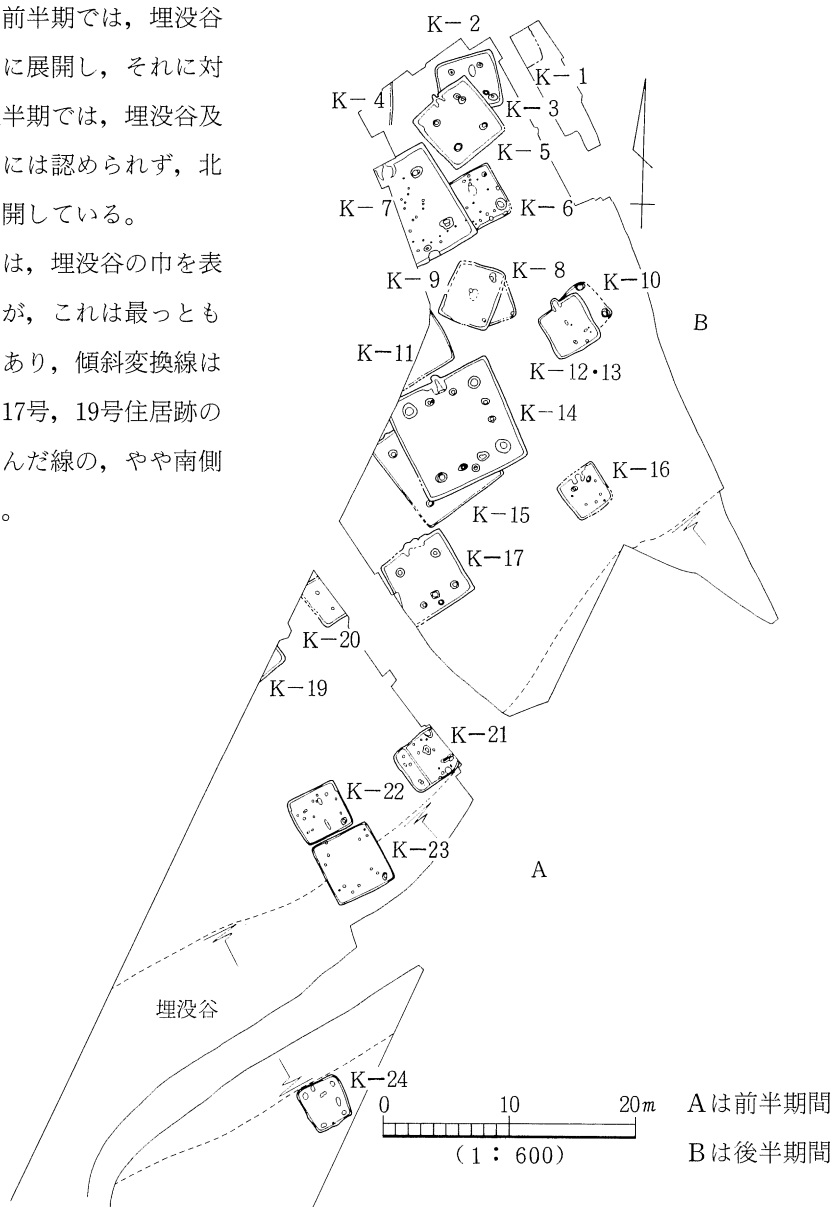
第5表 Y-1号溝出土遺物観察表

挿図 NO.	器 種	法 量 (推) 〈残〉	胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
	遺存度						
1	壺 (赤彩)	1 < 8.0 > 13.1	微 石 粒	外-無文部・横ナデ, 口唇・斜 行縄文, 2個1対の棒状浮 文, 頸・小孔2個1対, 平 行沈線区画の羽状縄文 内- ナデ	良 好	施文部以外 赤褐色	
	口縁片	頸 8.7					
2	壺 (赤彩)	1 < 9.0 > 2 10.5	長石多量	外-上半部, 横ナデ, 頸・縦ミ ガキ・口唇に縄目キザミ, 口縁に2点1対の棒状浮文 内-	良 好 (軟)	外-赤茶褐色 内-上半赤褐	棒状浮文は4 か所と推定
	頸部片	頸 4.7					
3	壺 (赤彩)	1 18.3	白砂粒多量	外-胴下端のナデ以外の無文部 はミガキ, 片・胴上位に斜 行縄文 内-全面ナデ	良 好 (軟)	内外共に淡黄 褐色, 外面 一部分淡赤色	
	口縁欠 90%	頸 5.0 3 15.0 4 6.0					
4	壺 (赤彩)	1 < 12.5 > 頸 5.0		外-底部のナデを除く無文部は ミガキ, 竹筒状刺突文区画 の平行, 波状連続沈線と縦 列円形浮文。 内-へら状ナデツケ	良 好 (軟)	外-赤茶褐色 内-明 褐 色	肩部付近に焼 成以後の穿孔 1か所 浮文刺突文は 1点が1列, 2点が2列
		3 11.2 4 5.5					

3. 古墳時代（図版-15～31）

古墳時代の遺構は、前半期から後半期に至る、計24軒の住居跡を検出した。台地の縁辺、しかも道路巾という限定された範囲では、集落の構成及び性格づけはできないが、立地的には、前半と後半期では顕著な差が認められる。前半期では、埋没谷以南の台地に展開し、それに対して、中後半期では、埋没谷及び南側台地には認められず、北側台地に展開している。

第14図では、埋没谷の巾を表わしているが、これは最つとも深い部分であり、傾斜変換線はK-16号、17号、19号住居跡の3遺構を結んだ線の、やや南側から始まる。



第14図 古墳時代の遺構配置図

K-1号住居跡（図版-42）



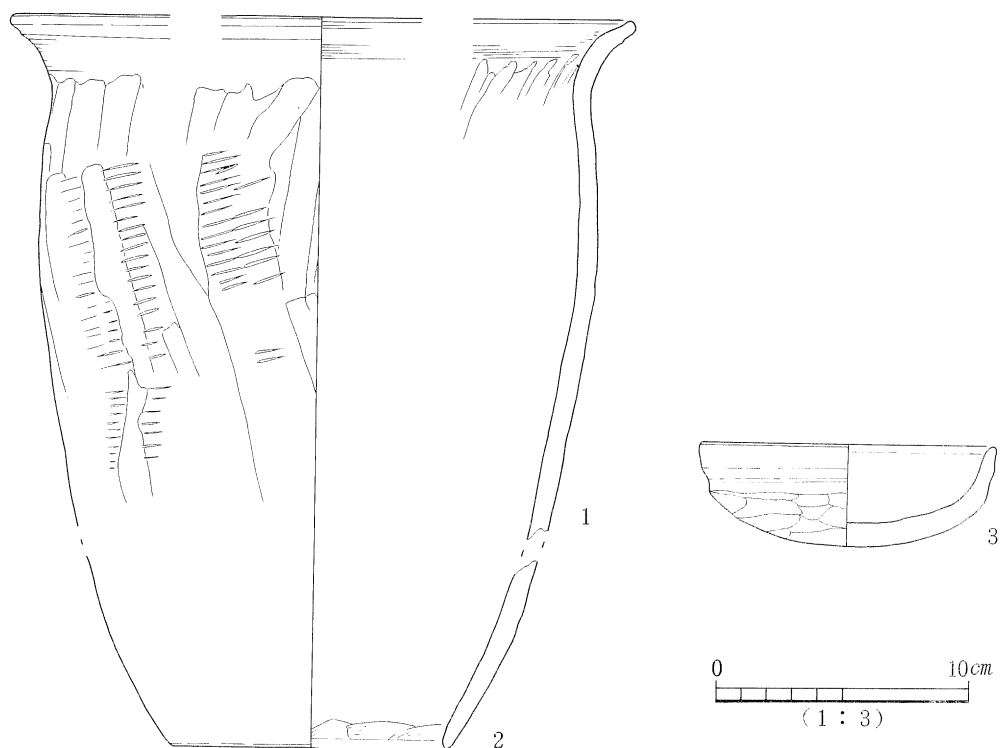
第15図 K-1号住居跡実測図

K-1号住居跡は、北西隅切りの最北端、地形的には東側くびれ部に面した台地東端に位置する。東側は旧道の掘り込み（旧道とは、下総の浜野方向から潤井戸宿に入る桁形進入路であり、現在の県道路面から60～80cm下位に道路があったという）と小ピット群などによって切られている。西側は、市営水道が埋設されているため調査できなかった。

住居跡のプランは、一辺、約 4.5m前後の方形と推定される。床面下は、弥生時代中期の環濠跡が位置し、硬く踏み締められた部分に沈下現象がみられる。主柱穴は不明である。

カマドは、未検出ではあるが、北端にカマドの崩壊土と思われる焼土化粘土塊を検出した。遺物は、焼土化粘土脇に甗を1点、床面の中央から坏形土器を1点検出したにとどまる。

K-2号住居跡 遺構は、北西隅切りの中央北端に位置する。周囲は、生垣、道路、市営。自家水道、浴槽などの基礎と攪乱が激しく、規模・形状共に不明確である。床面はK-3号住居跡の北側約 $\frac{1}{5}$ 部分に貼り床がある他、北壁を切り込む円形土壇があり、以北は、ローム面に硬く踏み締められた面がよく残っている。遺物は皆無である。

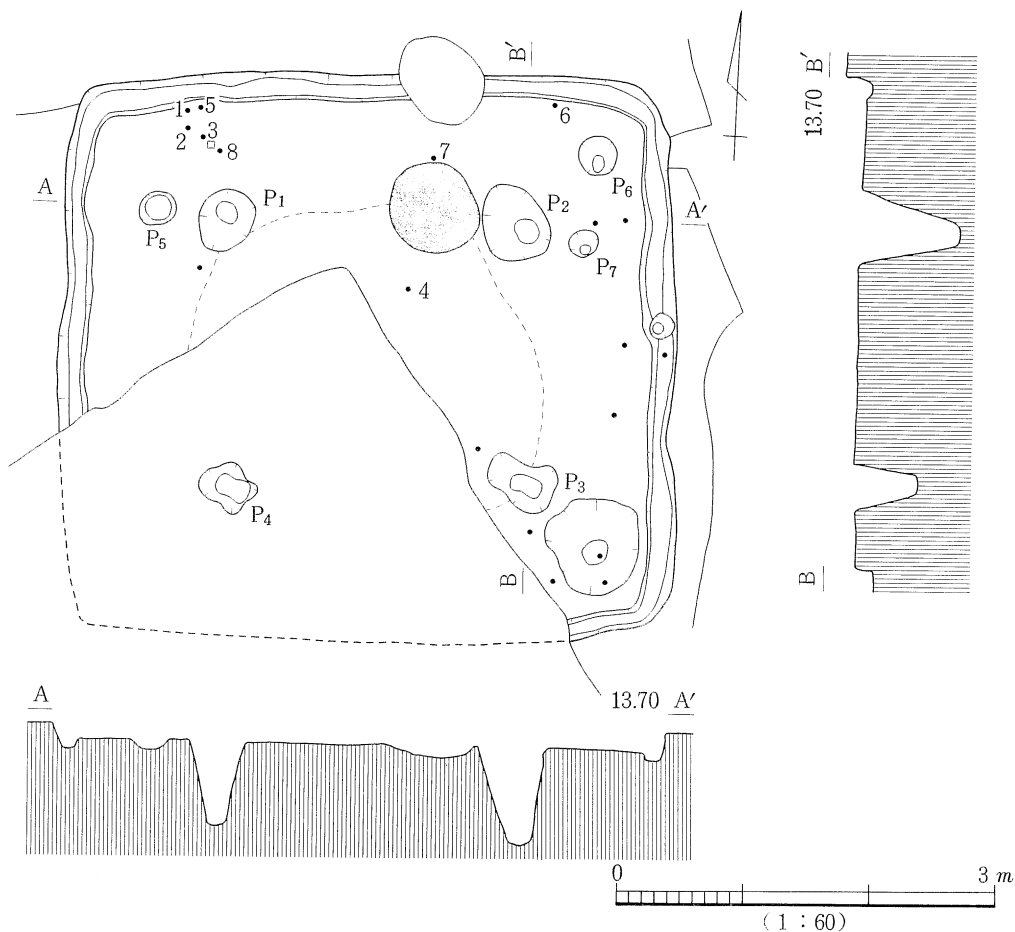


第16図 K-1号住居跡出土遺物実測図

第6表 K-1号住居跡出土遺物観察表

挿図 NO.	器 種	(推) 法 量 〈残〉	胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
	遺存度						
1	甗	1 (29~30) 2 (25) 3 (22) 4 (11)	赤 色 土 粒	外-口縁・横ナデ, 以下縦ヘラケズリ 内-口縁・横ナデ, 以下横ナデ →縦ミガキ (入念) 下端・横ヘラケズリ, 底口唇・ヘラナデ	良 好 (軟)	外-明 褐 色 茶 褐 色 内-赤っぽい 茶 褐 色	外面にヘラケズリ時の連続ハズミ傷がある。クシ目ではない
	全体の 40%						
3	坏	1 4.0 2 12.0	微 石 粒 赤 色 土 粒 (スコリア?)	外-口縁・横ナデ, 体・ヘラケズリ→ナデ 内-上半部・横ナデ→ミガキ, 以下ミガキ	良 好 (軟)	内外共にくすんだ明褐色	口縁下位にくびれ
	全体の 50%						

K-3号住居跡（図版-17, 42, 43）



第17図 K-3号住居跡実測図

K-3号住居跡は、北西隅切りの中央北端、地形的には東側くびれ部に接した、台地東側縁辺に位置する。遺構は、周辺の住居跡同様、数次の宅造によって床面近くまで削平されており、残存壁高は10cm前後と浅い。南側は、K-5号住居跡に切り込まれている。

住居跡のプランは、長軸 4.8m、短軸 4.4mを測るやや横長の方形を呈する。主軸方向は、N-21°-Wを示す。

床面は、中央部分に円形状の踏み固めが残る他、総じて硬質である。壁溝は完周している。

主柱穴は、P₁～P₄の4か所を検出した。それ以外では、主柱穴P₁・P₂の両外側を含め、3か所の浅い小ピットが位置している。炉跡は、主柱穴P₂の両端に接して掘りこまれる。炉跡のプランは楕円形を呈し、住居床面からの深さは、中心部で10cmを測る。火床のローム面は焼土化し、強く焼けている。更に、炉の周囲から西側一帯の広範囲に炭粒を含んだ焼土を検出した。

第7表 K-3号住居跡ピット等計測値表

主 柱 穴 cm				柱 状 穴 cm				住 居 内 土 壇 cm			床面積
NO.	上 面	底 面	深 さ	NO.	上 面	底 面	深 さ	上 面	底 面	深 さ	m ²
1	50・44	19・16	27.8	5	30・27	20・20	10.2	86	20		(10.9)
2	61・54	23・19	74.9	6	32・32	15・10	15.2	77	23	52	
3	55・36	27・15	63.9	7	24・23	10・8	15.3				
4	47・40	28・19	42.2								

土壇は、南東隅の壁際に接して掘られており、プランは楕円形、断面は半円錐形を呈する。

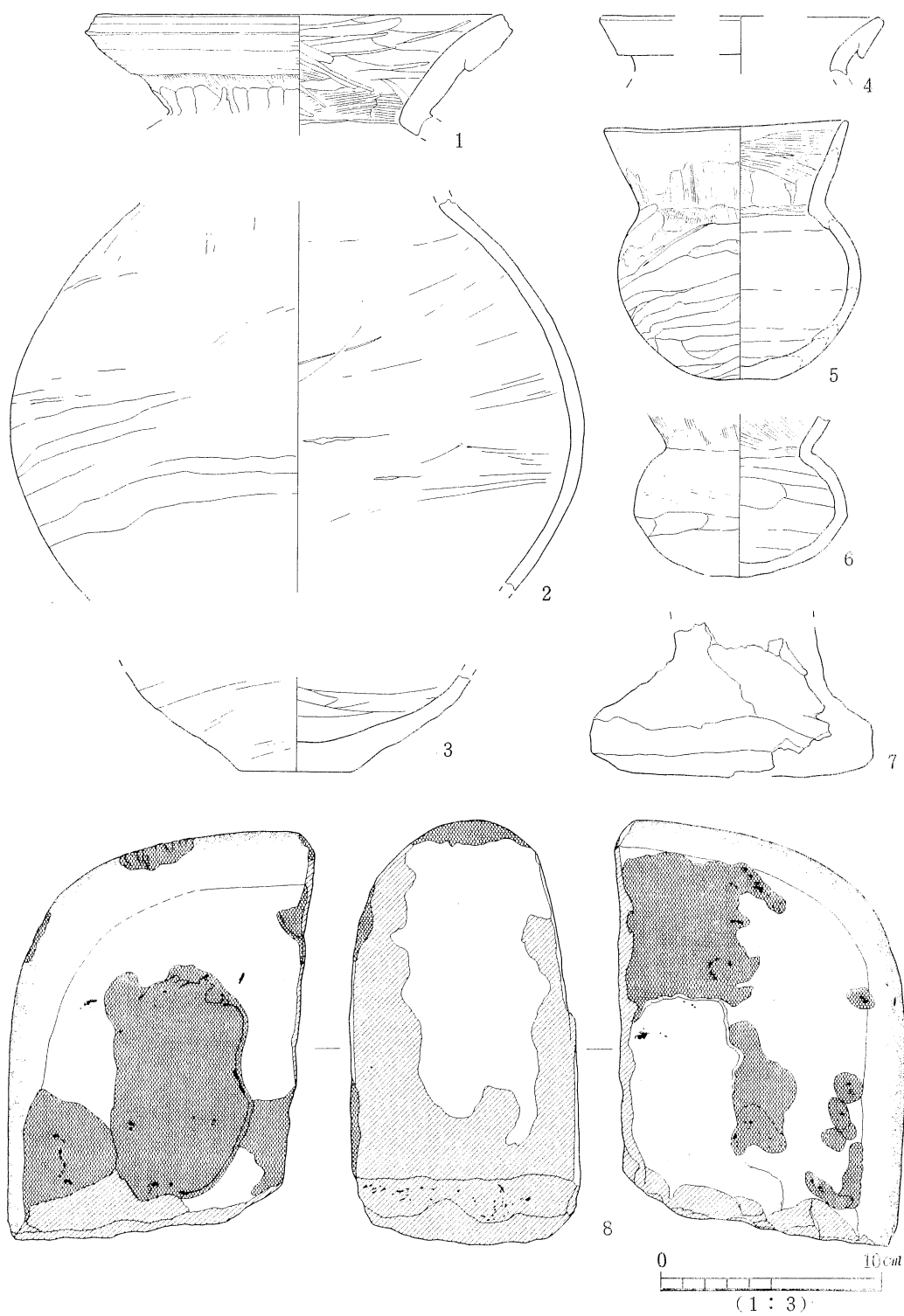
土壇の覆土は、ロームブロックを多量に含む軟弱な黒色土が充満し、多くの土器細片を伴っている。覆土及び土器の出土状況から、後に掘り返されたものと考えられる。

遺物は、北側の支柱穴P₁と壁溝の間に、壺形土器の口縁部1点、甕形土器3点と鉄床として使用した石台（以下石製鉄床と称す）1点を検出した他、炉跡からは支脚1点と周囲から甕形土器を主とする計94点の土器小、細片を検出した。本跡の北側端部は、K-2号住居跡の貼り床があり、その下層からは、小型の鍛冶滓を1点検出している。

出土遺物の内、北西端に出土の壺形土器口縁部（第18図-1）は、口縁を下に向けた状態に加えて、頸部以下は認められず、器台として二次利用したものと思われる。

石製鉄床（第18図-8）は、鉄床と同じ機能を果たす石の台であり、通称「鉄床石」という。石製鉄床は、浅く窪んだ床面上に出土し、周囲は、炭粒を多く含む暗赤褐色の焼土が薄く積っている。石の周囲は、一面を除いて磨滅しており、ほぼ全面に二化鉄が付着している。更に、表裏の平坦な面には、鉄器の加工、又は、修理時における浅い剝落部分が多く残っている。又、滑らかなアールのついた部分には、直線的な複数の擦過状痕があり、製品の折り曲げに使われたと思われる打痕が多数残っている。

石製鉄床は、その出土状態及び、支柱穴P₂に極端に接する炉の位置と、支柱穴P₁との空間などに加え、覆土出土の小型鉄滓と合わせて、本跡に伴うものとして扱った。その反面、鍛冶炉及び炉に伴う、羽口などの諸物、石製鉄床に伴う鍛造剝片などは未検出であり、本跡を、小鍛冶跡と判定しうる物証に欠けている。そのため、本跡がK-7号住居跡の特殊遺構にみられる如く、廃絶後の再利用か否かは断定できない。



第18図 K-3号住居跡出土遺物実測図

石製鉄床の表面観察



磨面部分



二化鉄の付着が集中している部分



打ち込みによる剥落部分

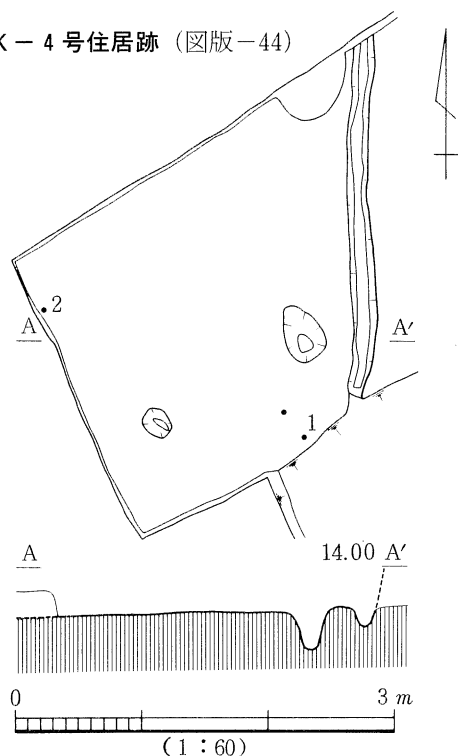


割れ口部分

第 8 表 K-3 号住居跡出土遺物観察表

挿図 NO.	器 種	(推) 法 量	胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
	遺存度	〈残〉					
1	壺	1 < 5.5 > 2 18.5	長石, 石英 系 微 石 粒 多量	外ー口縁・横ナデ, 以下・縦ハ ケ目→縦ナデツケ 内ー口縁・横ミガキ, 以下・縦 ハケ目, 縦以下に指頭圧痕	良 好 (硬)	内外共に 茶 褐 色	口縁は外側巻 き付けて有段 器台として二 次利用か
	口縁のみ 100%	2' 19.3 頸 12.0					
2	壺	1 < 18 > 3 (26)	長石, 石英 系 石 粒, 黒 色 粒	外ー上半部・縦ヘラナデ, 下半 部横ヘラナデ 内ーナデツケ→入念なミガキ	良 好 (硬)	外ー暗 赤 色 黒 褐 色 内ー赤 褐 色	No 1, 3 とは 別個体
	胴大型片						
3	壺	1 < 5.5 > 3 (15.5)	長石, 石英 系 微 石 粒	外ー全面ナデ 内ーナデ→横ミガキ	良 好	内外共に 暗茶褐色	甕?
	底部片	4 (5.0)					
4	壺	1 < 5.5 > 2 (13)	長 石 多 量	外ー口縁・横ナデ→ミガキ, 以 下・横ナデ 内ーミガキ	良 好 (硬)	外ー黒 褐 色 内ー明茶褐色	口縁は外側巻 き付けて有段
	口縁片						
5	壺 柑形	1 11.8 2 11.1 3 11.0 4 3.0	長石, 黒色 粒多量	外ー口縁・ハケ目→なで, 頸・ 縦ハケ目, 胴・ハケ目→横 ヘラナデツケ, 底・ケズリ 内ー口縁・横ナデ, 頸まで・斜 めハケ目→ナデ, 胴・ナデ	良 好	外ー茶 褐 色 内ー赤茶褐色 明・褐色	内面胴部に輪 積の痕多し外 面にスス付着
	100%						
6	壺 柑形	1 < 7.5 > 頸 6.5 3 9.7 4 丸底	長 石	外ー頸・縦ハケ目→軽いナデ, 胴上半部・ハケ目→ナデ, 下半部・横ヘラケズリ 内ー頸・斜めハケ目, 胴上端・ ナデツケ, 以下ナデ底・押 しツケ	良 好 (軟)	外ー明茶褐色 赤茶褐色 内ー明赤褐色	外面胴部中位 がケズリによ り, ソロバン 玉のようにと がっている
	口縁除く 70%						
7	支柱	1 < 70 > 柱径(6.5)	長 石 多 量	全面に指の圧痕, ナデツケ		茶 褐 色	
	底部片	4 (12.0)					
8	石製鉄床	高・19.8 巾・13.0	厚・10.5	石質・砂岩 色調 明灰色	5面に使用痕があり, ほぼ全面に二化鉄が付着している。		

K-4号住居跡（図版-44）

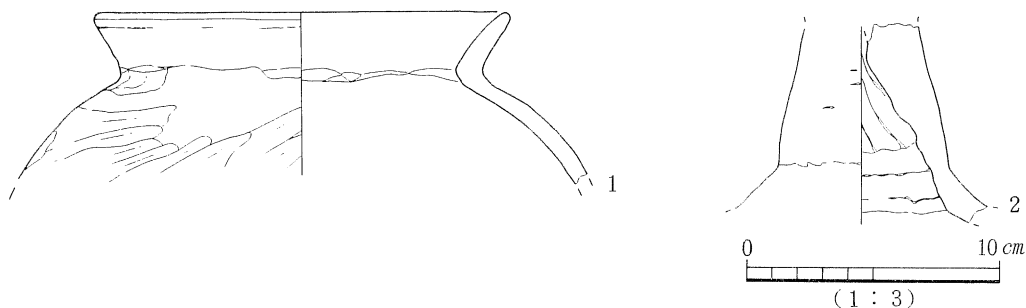


遺構は、北西隅切りの南西端部に位置し、西と北側は未調査に、又、南側一帯は攪乱を受けている。

遺構の規模、形態等は不明。主軸方向は、西側壁溝から、 $N-2^{\circ}-W$ と、ほぼ真北を示す。床面は、検出面の南端から、中央西側にかけて硬質の踏み固めが残る。小規模なピットを2か所に検出するが、支柱穴ではないと思われる。

遺物は、南東端などの床面真上から、甕形土器と器台形土器の脚部を各1点ずつ検出したにとどまる。

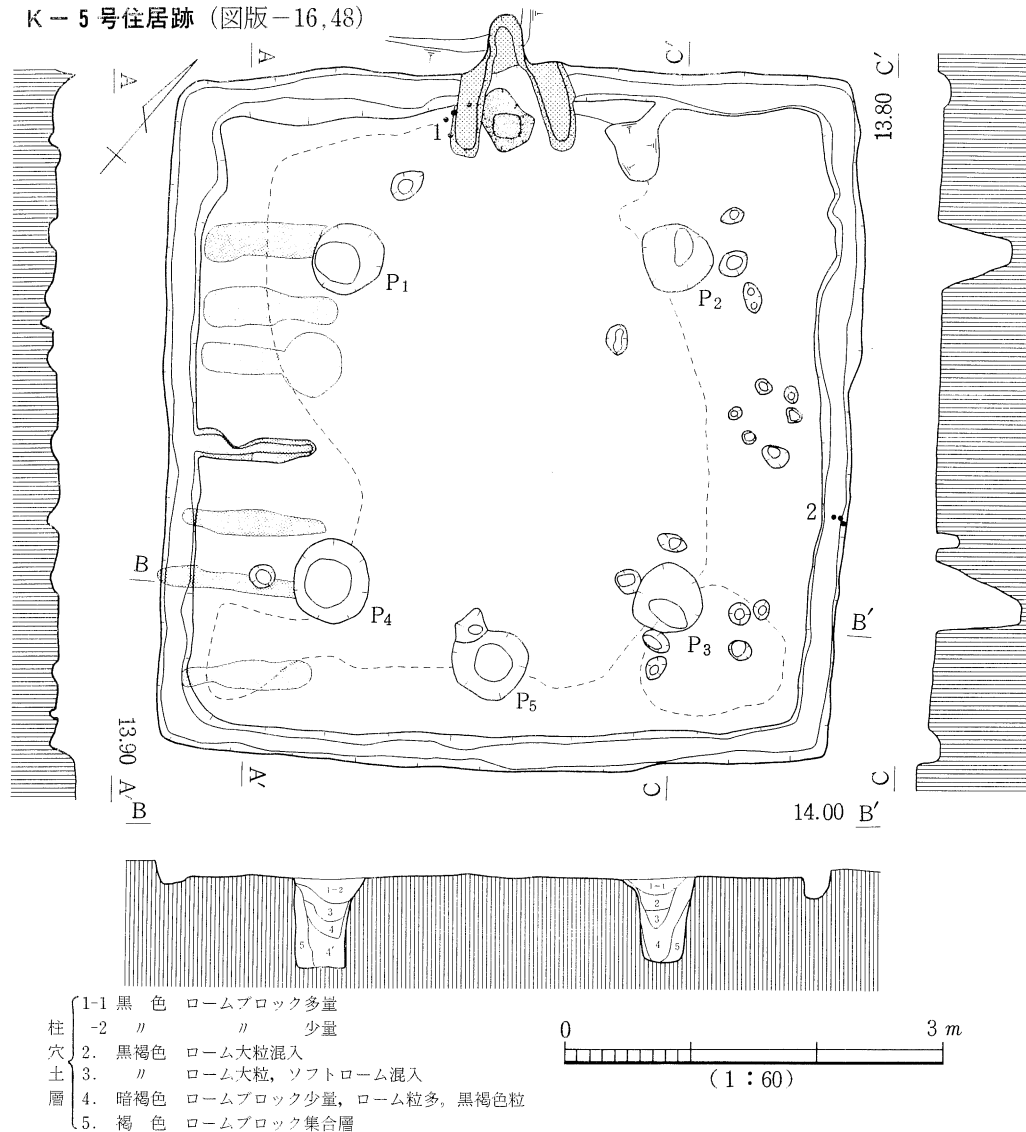
第19図 K-4号住居跡及び出土遺物実測図



第9表 K-4号住居跡出土遺物計測値表

挿図 NO.	器 種	(推) 法 量 〈残〉	胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
	遺存度						
1	甕	1 < 6.7 >	長 黒 色 石 粒	外-口縁・横ナデ、頸・ナデツケ、胴・横ヘラナデ 内-口縁・横ナデ、以下ナデ	良 好 (硬)	内外共に 暗 赤 色 暗 褐 色	広口壺に相当
		2 (16.5)					
		3 < 22.7 >					
3	器台	1 < 7.0 >	長石多量	外-軽いミガキ 内-上半部・縦ナデツケ、下半部・押しツケ	良 好 (硬)	内外共に 淡赤褐色	内面に輪積み痕
		脚 6.5					

K-5号住居跡 (図版-16,48)



第20図 K-5号住居跡実測図

K-5号住居跡は、北西隅切りの中央、やや北寄りに位置する。北東部分は、K-3号住居跡を切り込んでいる。遺構上位は、昭和初期からの数次に及び宅地造成のため、本跡の床面から、約10cmを残して上層は失なわれており、床面真上からは昭和初期の民家の礎石も出土している。

住居跡のプランは、一辺 5.4mを測る正方形を呈し、主軸は、N-41°-Wを指す。

床面は、南側の両端から、カマドの前面に到る間の中央やや西寄りに、硬質の踏み固めがみられる。壁溝は完周し、ローム微粒を含んだ黒色土が流入している。支柱穴は、4か所を検出

し、西側のP₁・P₄の床部は円形状であるのに対し、東側のP₂・P₃は半月状を呈する。支柱穴以外では、南壁中央に、出入口に付属するとみられる柱状穴がある他、東側には、多数の小ピットが集中している。これらの小ピットの中でP₆・P₇・P₈の3か所については、ローム粒を含んだ黒色土を覆土とする点で一致し、それ以外の小ピット内にみられる軟質の暗褐色土とは異なっている。

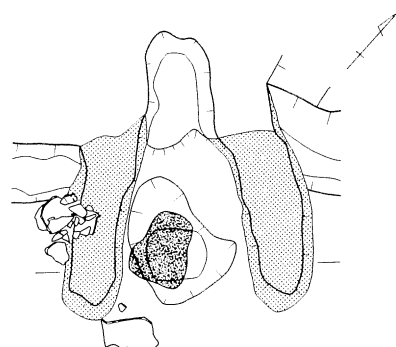
カマドは、北壁中央に設けられ、上部のほとんどは失われている。両袖の基部と燃烧部及び煙導の基底部が、かろうじて残る。燃烧部の焼けは弱く、焼土は極めて薄い。

この他、本跡の西側壁溝から支柱穴P₁・P₄の間に計7か所の平行縦列溝を検出した。

溝の規模は、平均で上場25×100cm、下場は10×80cm深さは、住居床面から10～15cmを測る。溝の東端部分は、いずれも小ピット、又は、やや深めに掘り込まれており、支柱穴の底部中心に東端を揃えている。西端は、住居跡の西側壁溝と接するもの5か所、壁溝をも掘り込んでいるもの2か所と均一ではない。これらの縦列溝は、中央の1か所及び、それぞれの東端を除いて貼り床がなされている。

一方、相対する東側では同様の遺構は未検出である。これは、住居自体の東側の掘り方が、西に対して深く、ロームブロックを多量に貼っているために不明瞭であり、必ずしも無いとは言えず、支柱穴P₂・P₃の周辺に検出の小ピットとの係わりも否定できない。

遺物は、カマド脇から甕1点、同周辺の床面から甕の破片6点を含む、小破片32点を検出した。更に、攪乱層内からは、合計220点の土器小・細片を出土しているが、同レベルからは、周辺住居に伴うとみられる遺物の他、近・現代の金物、石油製品などが混在している。



— 14.00 —

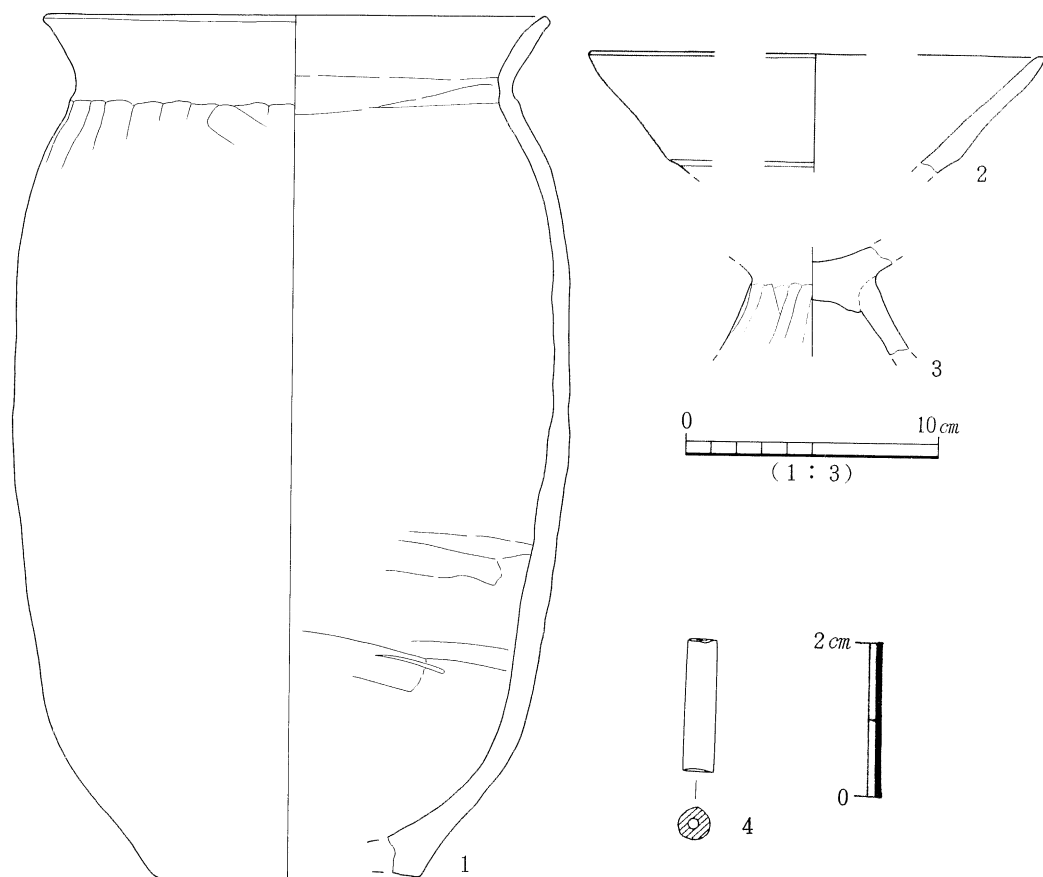


1・2 明褐色 粘土主体
3 褐色 ロームと粘土・焼土

第21図 K-5号住・カマド側図

第10表 K-5号住居跡ピット等計測値表

主 柱 穴 cm				柱 状 穴 cm				床面積 m ²
NO.	上 面	底 面	深 さ	NO.	上 面	底 面	深 さ	
1	57・56	37・32	57.1	6	19・13	9	17	24.6
2	59・54	31・15	56.9	7	25・20	13	17	
3	57・56	35・18	69.9	8	18	10	15	
4	67・60	38・37	73.2	9	20・15	13	20	
5	61・55	30	34	10	21	13	20	

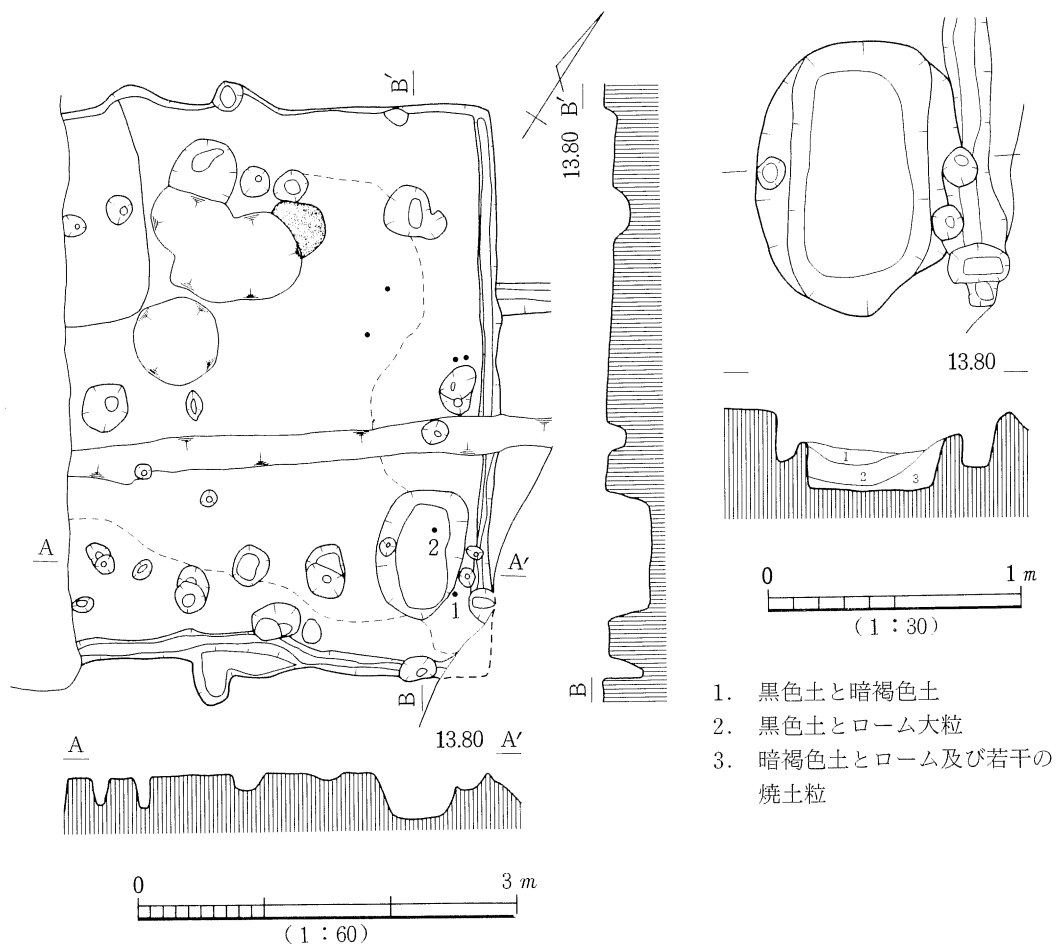


第22図 K-5号住居跡出土遺物実測図

第11表 K-5号住居跡出土遺物観察表

挿図 NO.	器 種	(推) 法 量	胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
	遺存度	〈残〉					
1	甕	1 < 34.2 > 2 (20)	4 mm以下の 石 粒 多 量	外ー口縁・横ナデ, 以下・縦へ ラケズリ→ナデツケ 内ー入念なナデ, 局部的に横へ ラナデ	良 好 (軟)	外ー茶 褐 色 内ー黒・茶褐色	
	全体の 40%	3 (22) 4 (10.5)					
2	高坏	1 < 4.8 > 2 (18.5)	微 石 粒	外ーヘラケズリ→ミガキ 内ー入念なミガキ	良 好	外ー淡 褐 色 内ー明 褐 色	下位に綫入る
	破片						
4	管玉	長・17mm, 径・4 mm・孔径 1.3mm 石質・蛇紋岩 色調・表面は黒色					

K-6 号住居跡 (図版-17)



第23図 K-6 号住居跡実測図

K-6 号住居跡は、北西隅切りのほぼ中央に位置する。西側約 $\frac{1}{4}$ は、K-7 号住居跡に切られ、中央から北側にかけて、自家水道の配管、民家の礎石などの攪乱を受けている。

住居跡のプランは、長軸4.25m、短軸3.35m (残存部) を測る方形を呈する。主軸方向は、N-31°-Wを指す。覆土は、床上1-3cmの黒褐色土を残すのみである。

床面は、南東隅から中央部分一帯に硬質に踏み固めがみられる。壁溝は、検出面でみる限りでは、南と東側に掘り込まれている。支柱穴は、南、北の両壁に沿って、多数の小ピットがあり、これといって特定できないでいる。

炉は、北壁寄りの中央、やや東側に位置する。検出部分から楕円形と思われる。底部は強く焼けている。住居内土壌は、南東隅に位置し、プランは、隅丸長方形を呈する。規模は、上場

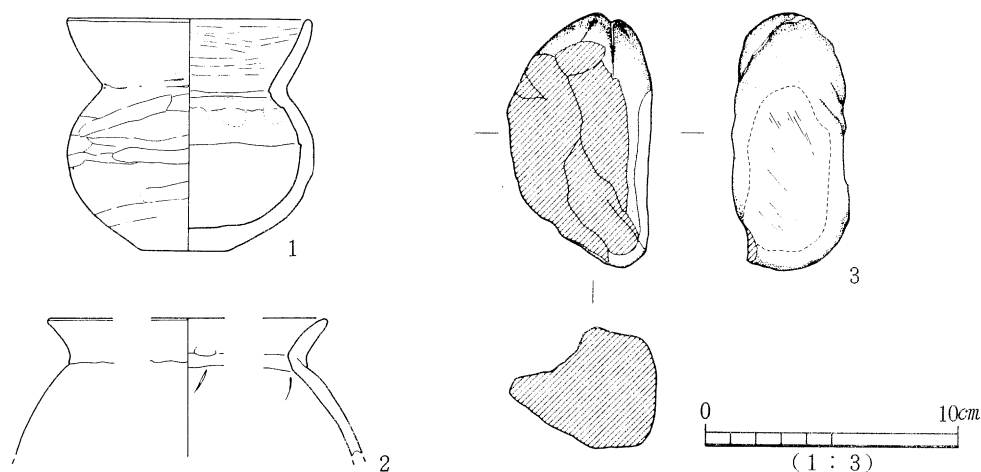
が 106×69cm, 下場は, 82×39cm, 深さは, 本跡の床面から32cmを測る。

土壌の床面は, 平坦に整形されており, 床面から完形の甕 1 点を検出した。

遺物は, 土壌内の出土を合わせ, 11 点を検出したが, 本跡の検出状況からは, 土壌内の 1 点を除いて, 必ずしも本跡と共伴関係にあるとはいえない。

第12表 K-6号住居跡ピット等計測値表

NO.	柱 状 穴 cm			住 居 内 土 壌 cm			床面積 m ²
	上 面	底 面	深 さ	上 面	底 面	深 さ	
1	18・17	4・4	5.8	109	82		(14.3)
2	22・20	8・6	8.9	69	39	32	
3	50・46	18・13	7.6				
4	25・25	5・5	11.5				

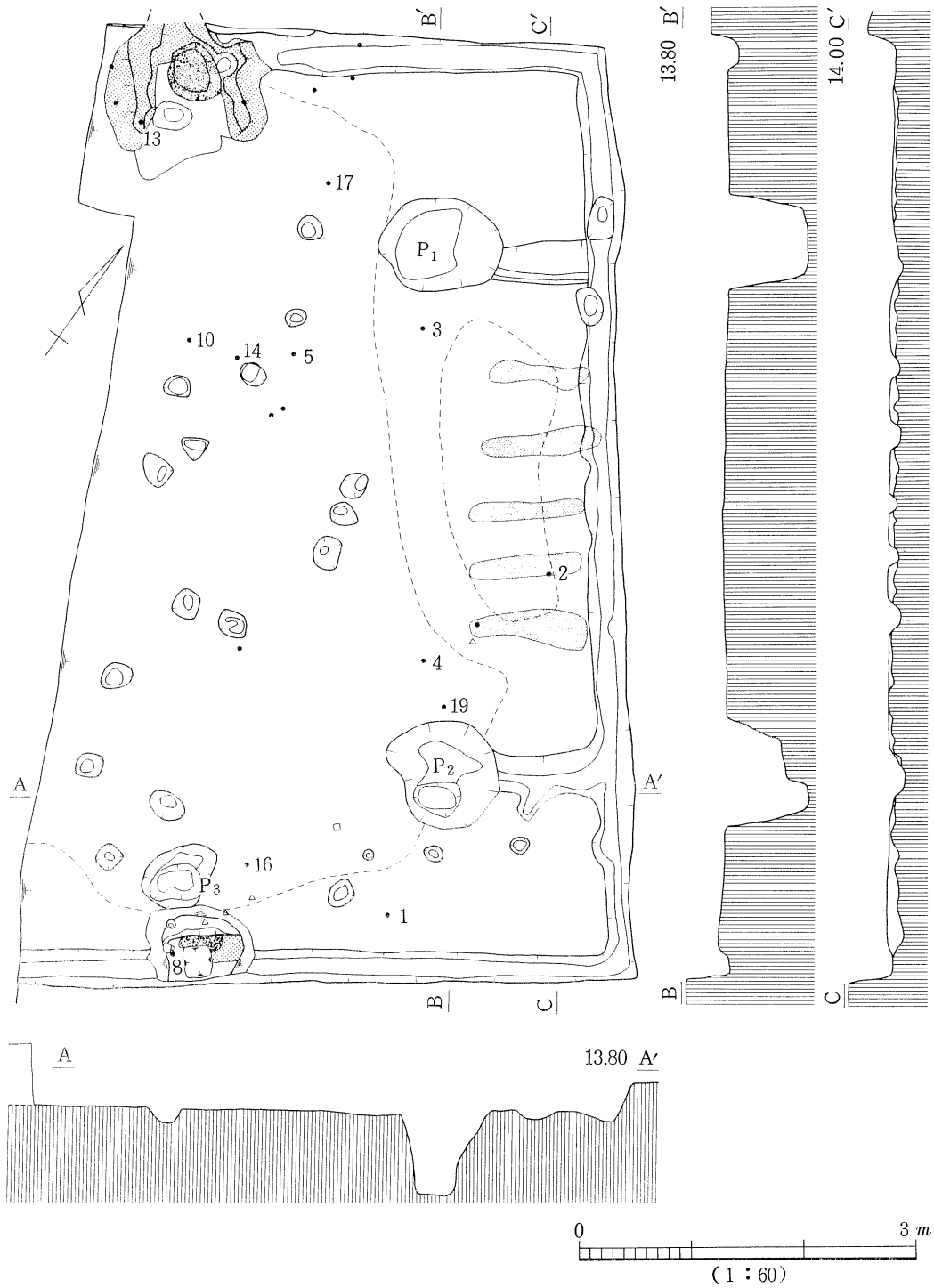


第24図 K-6号住居跡出土遺物実測図

第13表 K-6号住居跡出土遺物観察表

挿図 NO.	器 種 遺存度	(推) 法 量 〈残〉	胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
1	甕?	1 9.3 2 9.7 3 9.8 4 3.7	長 石 粒 微 石 粒	外-口縁・横ナデ, 頸・ナデツケ, 胴・横ヘラナデツケ 内-口縁・横クシ目→ミガキ, 肩・押しツケ, 胴・全面ナ	良 好	外-明茶褐色 暗茶褐色 内-暗茶褐色	内面に剝落多し
2	甕 破片	1 < 5.5 > 2 (11) 3 (14)	長石, 石英系微石粒	外-口縁・横ナデ, 横ナデ, 以下ナデ 内-口縁・横ナデ, 横ナデ, 以下ナデ	良 好 (硬)	外-明 赤 色 内-明 褐 色	
3	礫	長・10cm, 巾・4.5cm, 重量 207g, 石質・赤色チャート				褐 色	擦過痕・砥面

K-7号住居跡 (図版-18,49)



第25図 K-7号住居跡実測図

K-7号住居跡は、北西隅切りの西端に位置し、東側約½が調査対象となった。

本跡の上層は、数次の宅造で失われ、特に東・北側は激しく、床面近くまで削平されている部分もあり、昭和初期の民家の礎石も混在する。

住居跡のプランは、一辺 8.3mを測る正方形を呈する。

主軸はN-10.5°-Wを示す。床面は、南壁中央から、カマド全面に到る間と、東側中央端が硬く踏み締められている。壁溝は、検出部分では完周している。主柱穴は、東側のP₁・P₂の2か所を検出し、2度の建て替えがなされている。主柱穴以外では、南壁中央端に、出入口に伴うとみられる柱状穴が位置する他、南壁から内側に約1mの所に並行する形で、P4~P8の小ピットを検出した。いずれも、微粒の炭化物を含んだ黒色土を覆土とすることで一致している。

カマドは、北壁中央に位置する。煙導はやや西側に振っているようである。煙導部については、調査以前から、内容物が充満した状態の便槽が2基、埋設しており、その規模から、煙導部の破壊が考えられたため掘り残した。カマドの上半部は失われているが、下部施設は良く残っている。燃焼部は壁際に接する。両袖の内面は、ほぼ垂直状に立ち上がり、叩きによる整形跡が良く残っている。

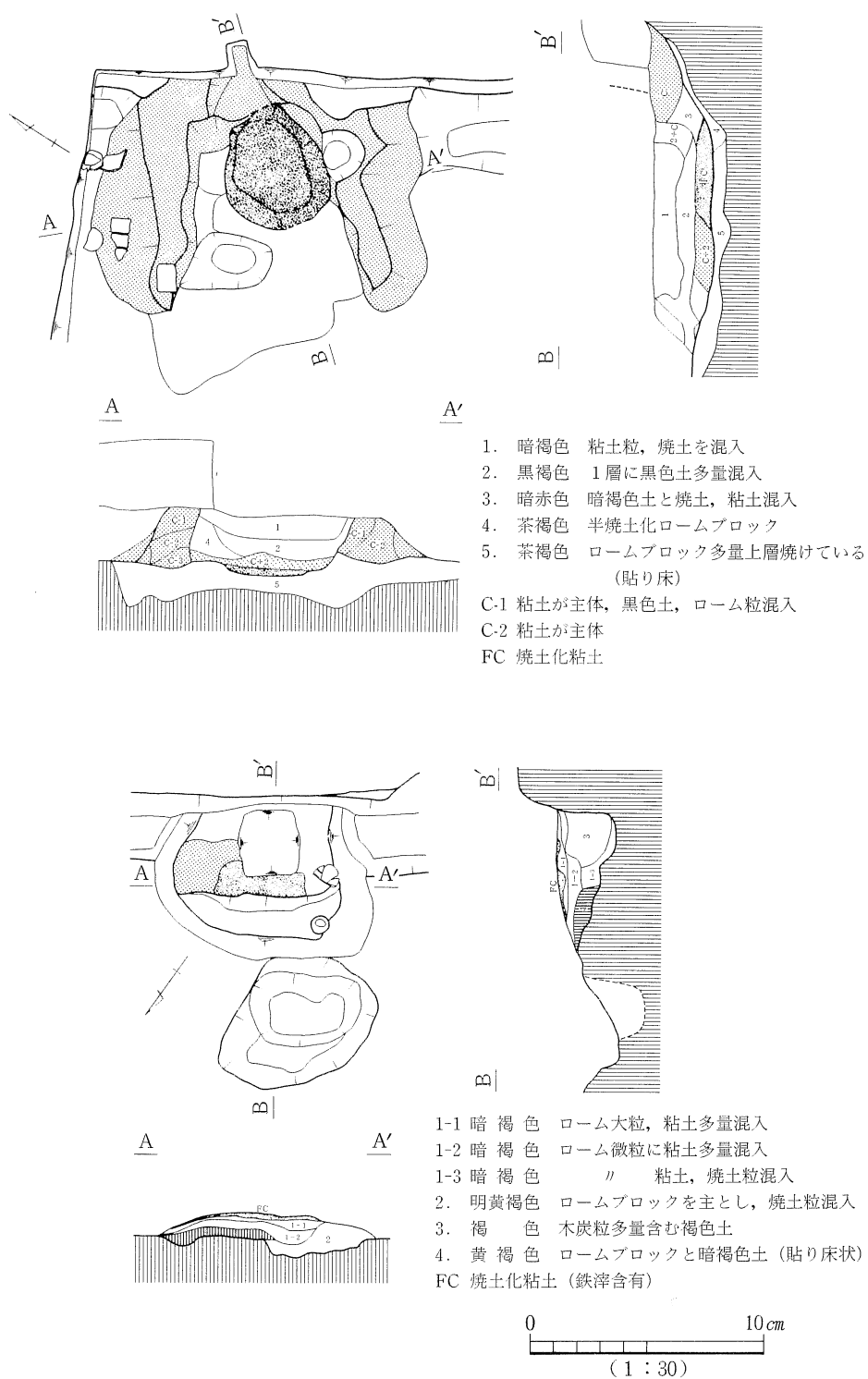
本跡の東側主柱穴の間には、K-5号住居跡にみられる並行縦列溝を検出した。溝の規模、深さ共にK-5号に検出のベッド状施設（と思われる）と一致しており、主柱穴と壁溝を直結する浅溝とは一体化した施設跡であろう。

遺物は、カマドの周辺に集中しており、甗1点、甕9点、杯6点（内1点は須恵器）、鉢1点及び支柱1点をそれぞれ検出した。これらの出土遺物の中では、完形又はそれに近い状態のものは皆無に近い。その他、覆土中からは、甕を主とし、計600点もの小・細片を出土したが、いずれも攪乱層内であり、周辺遺構と同様に、近・現代の雑器類が混在している。

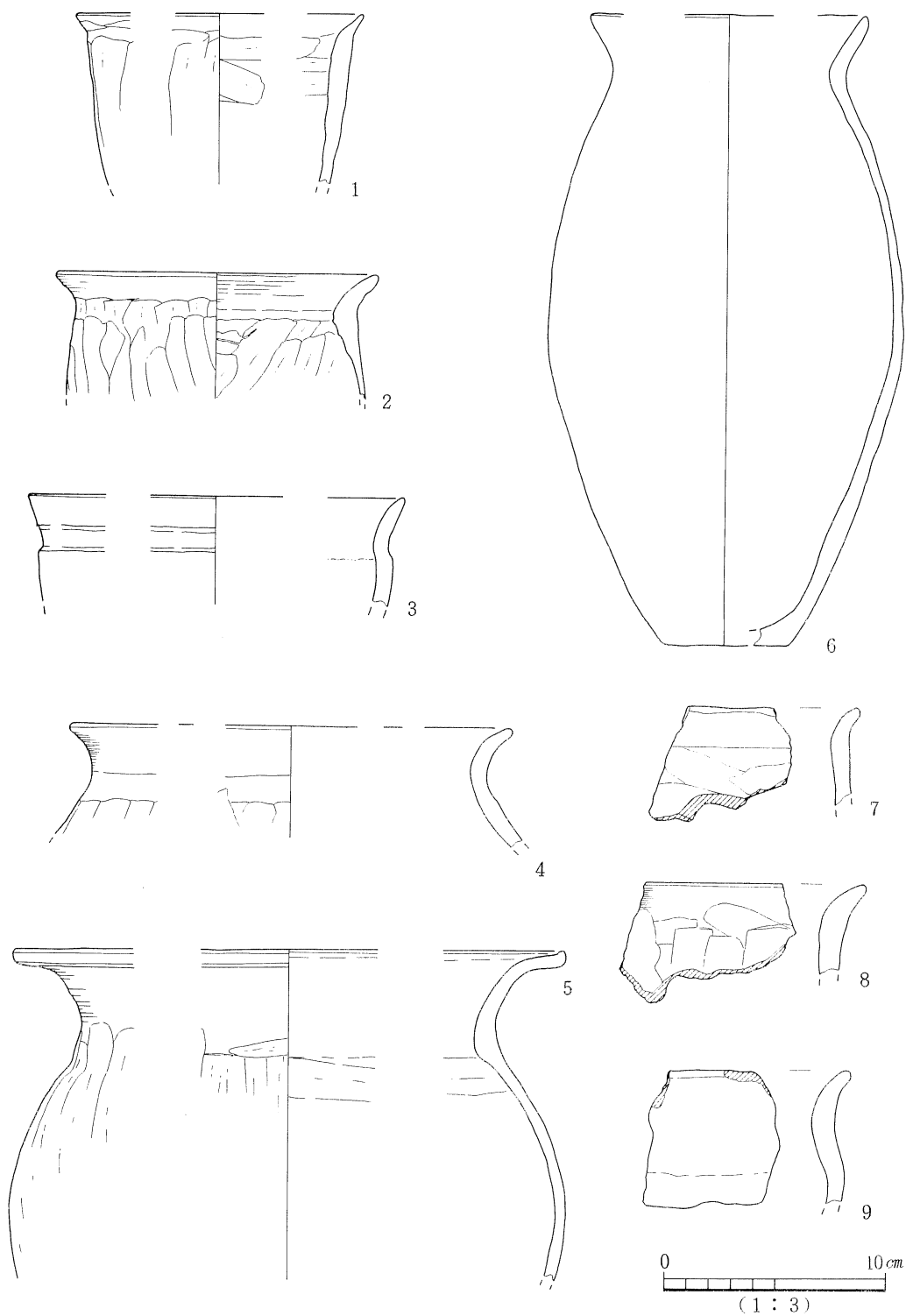
特殊遺構 本跡の南壁中央、カマドと相対して位置する。規模は、上場で70×80cm、高さは住居の床面から10cmを測る。中央の壁際には30cm四方の小ピットがあり、山砂と炭化粒を含む褐色土が充満している。ピットの北側には粘土が敷かれ、中央部分は焼けている。焼土化粘土からは10mm大の鉄滓2点、25mm大の球形鉄塊1点をそれぞれ検出したが、鍛冶に伴う剝片は認められていない。更にP₃が住居の出入口に伴う施設跡とするならば、位置的にも不自然であり、住居が廃絶して間もない時期に構築されたものと考えられる。性格は不明である。

第14表 K-7号住居跡ピット等計測値表

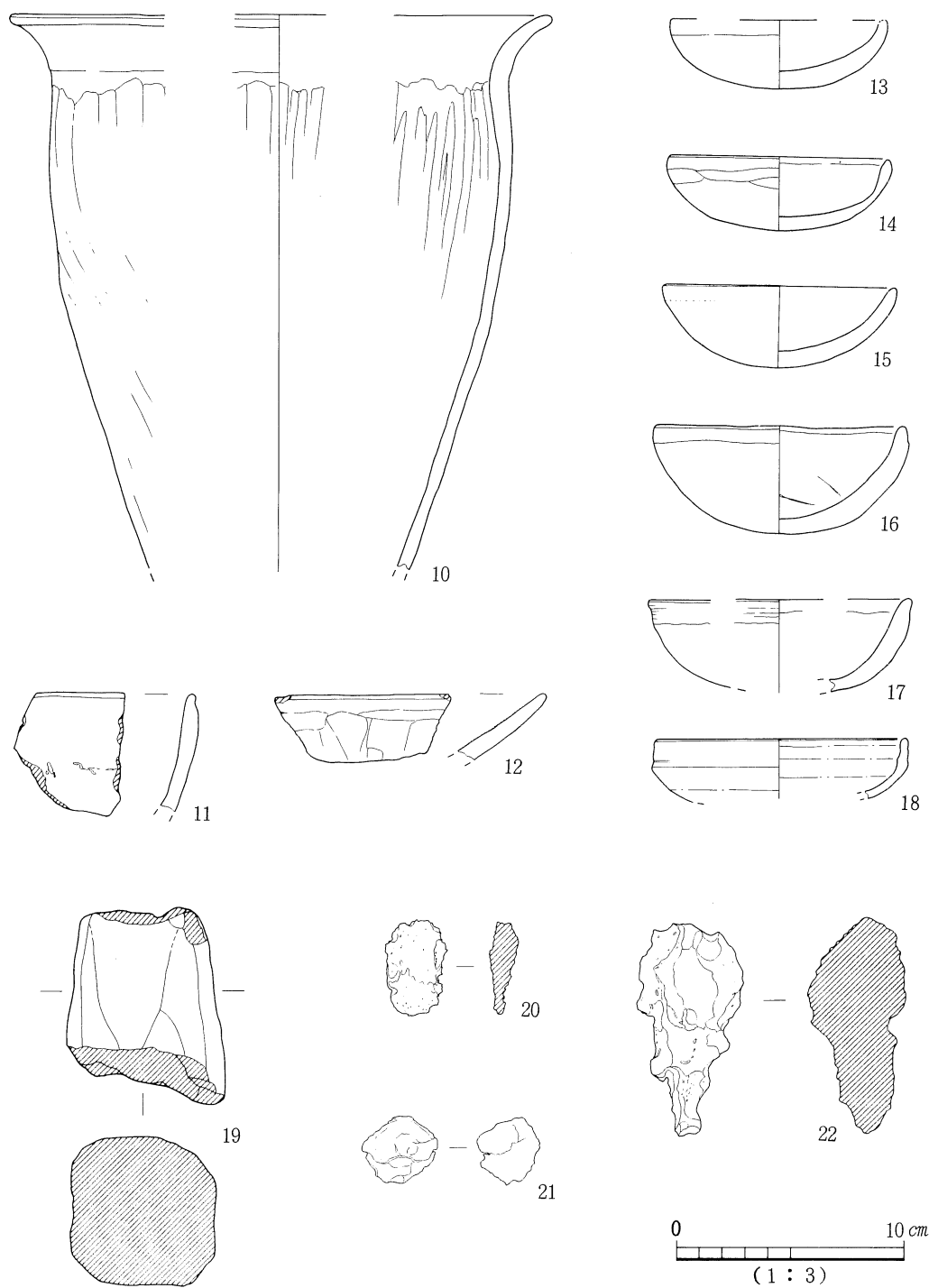
主 柱 穴 cm				柱 状 穴 cm				床面積 m ²
NO.	上 面	底 面	深 さ	NO.	上面	底面	深 さ	
1	110・83	78・57	29.6	5	14	8	13.2	(35.8)
2	105・94	65・59	73.8	6	12	6	6.4	
				7	18	10	8.9	
3	73・55	48・34	27.7	8	17	12	15	
4	26	10	21.4					



第26図 K-7号住居跡のカマド・遺殊遺構実測図



第27図 K-7号住居跡出土遺物実測図-1



第28図 K-7号住居跡出土遺物実測図-2

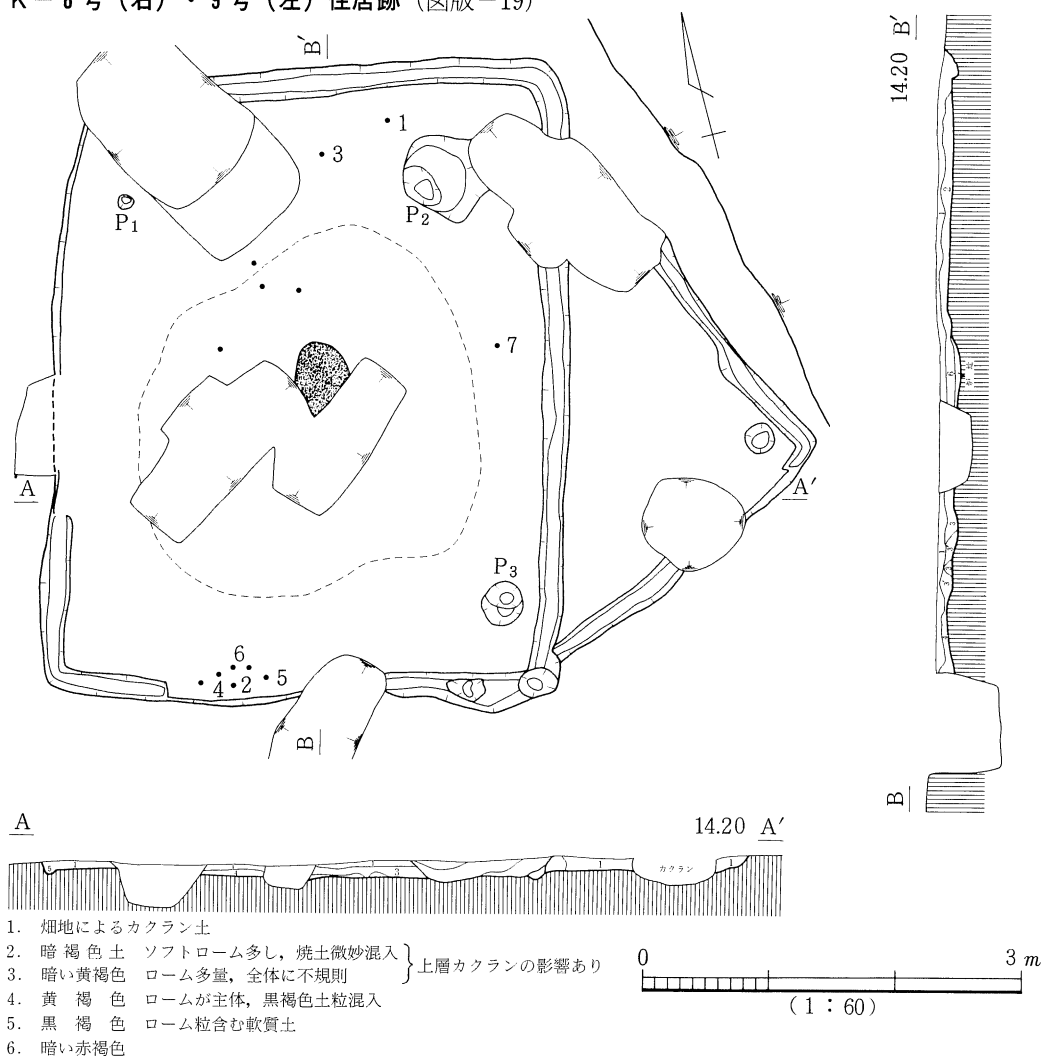
第15表 K-7号住居跡出土遺物観察表-1

挿図 NO.	器 種	(推) 法 量 〈残〉	胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
	遺存度						
1	甕	1 < 7.7 > 2 (13)	長 石 金 雲 母	外-口縁・横ナデ, 以下・ヘラ ケズリ→縦ヘラナデツケ 内-口縁・横ナデ, 以下・縦ヘ ラナデツケ	良 好 (硬)	内外共に 暗 褐 色 茶 褐 色	鉢か
	破片						
2	甕	1 < 5.7 > 2 (14.5)	長 石 金 雲 母	外-口縁・横ナデ, 頸・横ヘラ ナデツケ, 胴縦ヘラナデ 内-口縁・横ナデ, 以下・横ヘ ラナデツケ	良 好 (硬)	内外共に 暗 褐 色 茶 褐 色	胴部が極端に 薄い
	口縁片						
3	甕	1 < 4.9 > 2 (17)	長 石 金 雲 母	外-口縁・横ナデ, 以下ナデ 内-口縁・横ナデ, 以下ナデツ ケ	良 好 (硬)	内外共に 赤 褐 色	鉢か, 12~13 mm巾のくびれ
	口縁片						
4	甕	1 < 5.4 > 2 (20)	長 石 赤 色 土 粒	外-口縁・横ナデ, 頸・横ナデ ツケ, 胴縦ヘラナデ 内-ナデ	良 好 (軟)	内外共に 淡 褐 色	外面局部的に スス付着
	口縁片						
5	甕	1 < 15 > 2 (25)	赤 色 土 粒	外-口縁・頸・横ナデ, 以下・ 縦ヘラケズリ→ナデ 内-口縁・頸・横ナデ, 以下ナ デ	良 好 (軟)	内外共に 明 褐 色	口唇はツマミ 上げ
	口縁片 破片	3 (25.5)					
6	甕	1 28.6 2 (12.5)	2mm以下の 石粒過多	外-口縁・横ナデ, 以下・縦ヘ ラケズリ 内-入念なナデ	不 良 (軟)	外-淡茶褐色 内-白っぽい 淡 褐 色	全体に細長い
	全体の 40%	3 (16) 4 5.7					
7	甕		長 石 多 量 金 雲 母	外-口縁・横ナデ, 以下横ヘラ ナデツケ 内-口縁・横ナデ, 以下ヘラナ デ	良 好 (硬)	外-褐 色 内-明 褐 色	鉢か
	口縁片						
8	甕		長 石 多 量	外-口縁・横ナデ, 以下縦ヘラ ナデツケ 内-口縁・横ナデ, 以下ナデ	良 好 (硬)	内外共に 暗 褐 色	鉢か
	口縁片						
9	甕		長 石 多 量	外-口縁・横ナデ, 以下ヘラナ デ 内-全面ナデ	良 好 (軟)	外-淡 赤 色 内-暗 褐 色	
	口縁片						
10	甕	1 < 24.5 > 2 (24) 3 (20.5)	長石, 黒色 粒多量	外-口縁・横ナデ, 胴上位・縦 ヘラケズリ→ナデ, 胴中・ 下位・斜めヘラケズリ→ナ デ 内-口縁・横ナデ, 以下縦ミガ キ	良 好 (軟)	内外共に 淡い褐色	
	口縁胴片						

第16表 K-7号住居跡出土遺物観察表-2

挿図 NO.	器 種	(推) 法 量		胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
	遺存度	〈残〉						
11	鉢			長 石	外－不明 内－入念なミガキ	良 好	内外共に 暗 褐 色	
12	高坏			長石、雲母 多量	外－口縁・ナデ，上位・横ヘラ ナデ，下位・縦ケズリ 内－ミガキ	良 好 (軟)	外－淡 赤 色 内－暗 褐 色	内面のみ赤彩
	口縁片							
13	坏	1 3.0	2mm以下の 赤色土粒	外－口縁・横ナデ，以下ナデ？ 内－全面ミガキ	良 好 (軟)	外－淡 褐 色 内－黒 褐 色	口唇不明確 内面黒彩	
	破片	2 9.5						
14	坏	1 3.2		外－口縁・横ナデ，以下横ヘラ ケズリ 内－横ナデ→ミガキ	良 好 (軟)	内外共に明褐色， 褐色，暗 褐色	内面に細かい 剝落	
		2 9.6						
15	坏 (黒彩)	1 36 2 10.3	赤 色 土 粒	外－口縁・横ナデ，以下ヘラケ ズリ 内－入念なミガキ	良 好 (軟)	外－淡 褐 色 内－黒 色	特殊遺構内出 土	
16	坏	1 47 2 11.0	微石粒多量	外－口縁・横ナデ，以下ヘラケ ズリ 内－入念なミガキ	良 好 (軟)	内外共に 明茶褐色	半球状	
17	坏	1 (4.0)	3mm以下の 石 粒 過 多	外－口縁・横ナデ，以下ヘラケ ズリ 内－口縁・横ナデ，以下ナデ	不 良	内外共にくす んだ赤褐色		
	破片	2 11.5						
18	須恵坏	2 11.0		ロクロ挽き	良 好	内外共に 乳 灰 色	蓋か？	
	破片							
19	支柱	高 < 7.7> 巾 6.5× 6.5の方形，長石多く，全面ヘラケズリ					淡 赤 色	面トりの方形
20	鉄滓	長 4.1cm 巾25cm 厚3 ～12mm 素材・鉾石か？					銀 色	特殊遺構内出 土
21	鉄滓	径 3.4× 2.8cm 素材・鉾石か？					銀 色	〃
22	鉄滓	長 9.5cm，巾 1.2～ 4.5cm，厚 1～ 4.5cm 素材・？						床面直上

K-8号(右)・9号(左)住居跡(図版-19)



第29図 K-8, 9号住居跡実測図

K-8号住居跡は、北西隅切りと本道部の接点近くに位置する。北西部分は、K-9号住居及び攪乱墳などによって切られている。

住居跡のプランは、一辺 3.3mを測る方形を呈する。主軸方向はN-30°-Wを指す。

床面は、中央部に硬質面が残る他、総じて軟らかい。炉跡は、K-9号住居跡の東壁中央部分の床下に若干量の焼土化ロームを認める。位置的には、北壁中央から、東側寄りにある。

壁溝は、K-9号住居の床下に浅い溝が認められており、完周している。遺物は皆無である。

K-9号住居跡は、周辺の壁及び中央部分を多数の芋芽穴によって切られている。

住居跡のプランは、長軸 4.9m、短軸 4.0mを測る長方形を呈する。主軸方向はN-21°-

Wを指す。

床面は、炉を中心として、半径約1mの楕円形内のみに硬質の踏み固めがみられる他、総体に軟らかい。壁溝は、南壁中央と、西壁の大部分にはみられず、完周はしていない。主柱穴は不明確なるも、3か所検出した。

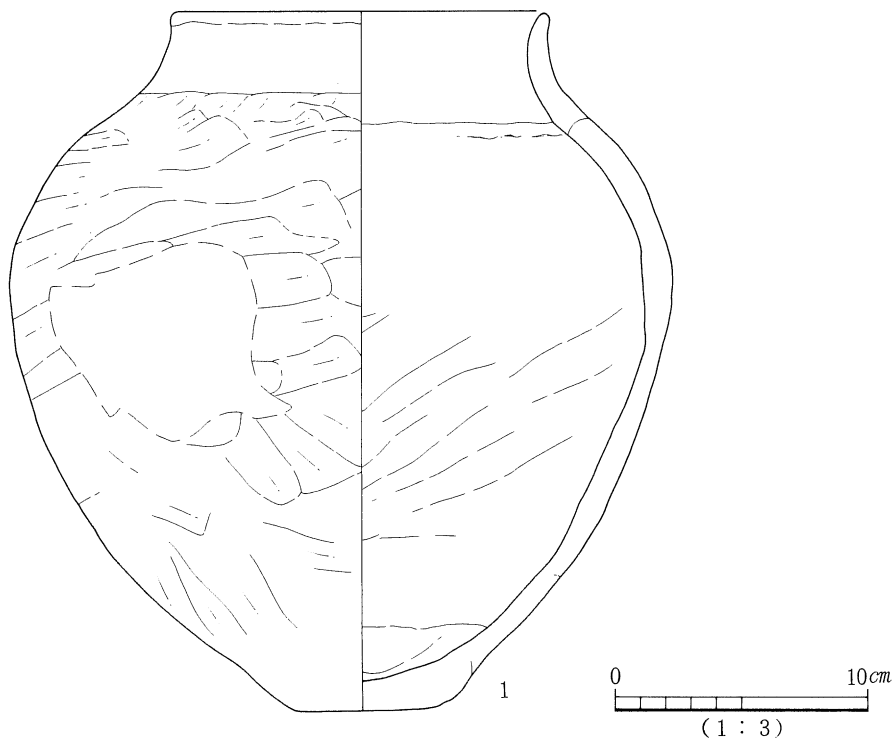
炉跡は、本跡の中央に位置している。

遺物は、南壁中央端の壁溝がとぎれている位置に、甕1点、深鉢1点、高杯の脚片一点と他一点を、又、北壁寄りに、壺2点を、更に東壁には、支脚片一点を、それぞれ検出した。

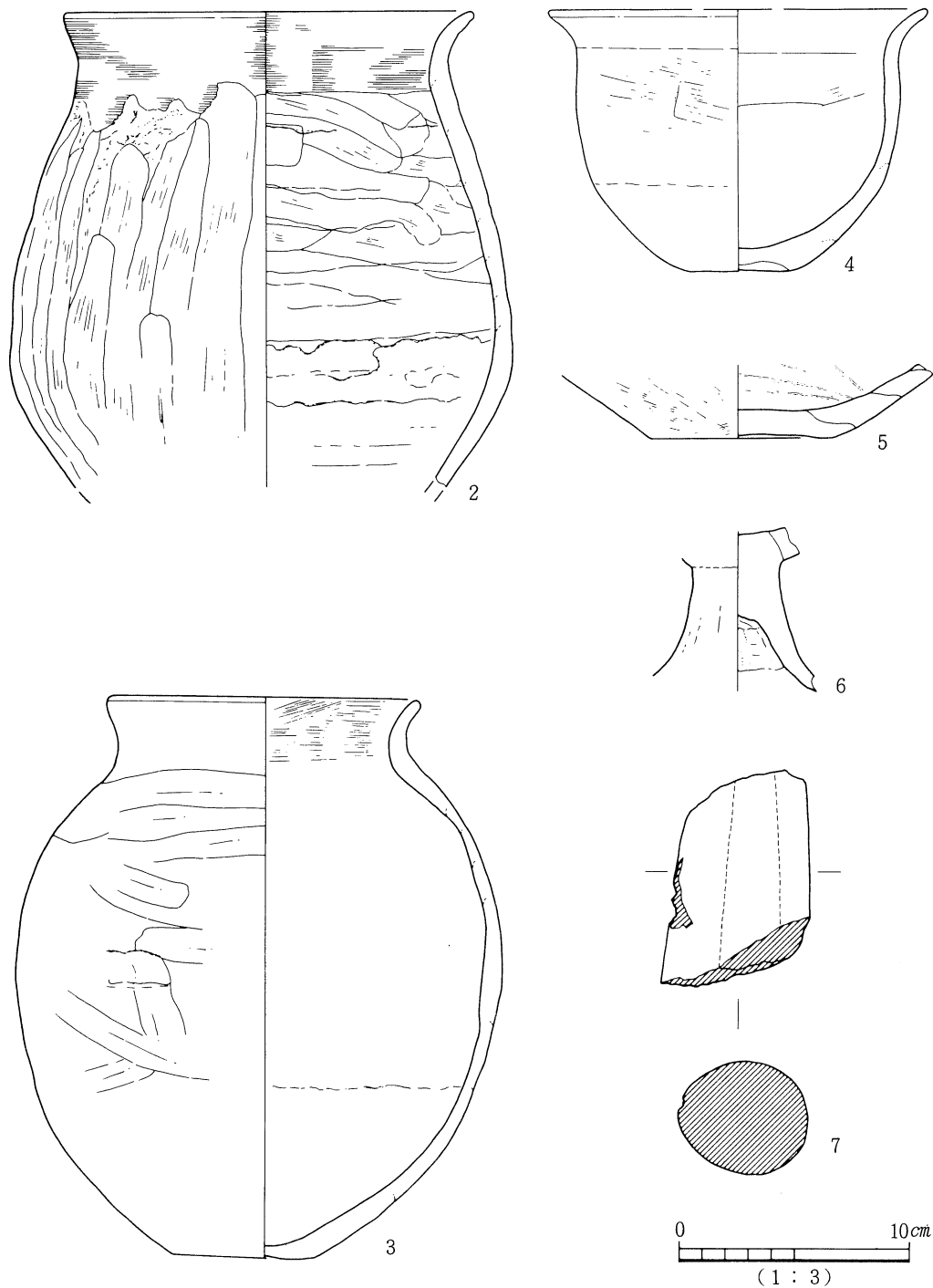
これらの遺物は、古墳時代の後半期に比定される。加えて、中央に炉を備える住居跡としては、調査区域内では他例をみない。このことから、本跡が住居としての性格をもつものとは考え難い面もある。

第17表 K-9号住居跡ピット等計測値

NO.	主 柱 穴 cm			床面積 m ²
	上 面	底 面	深 さ	
1	13・12	7・6	13.6	(17.6)
2	55・51	17・14	16.8	
3	28・22	12・10	20.7	



第30図 K-9号住居跡出土遺物実測図-1

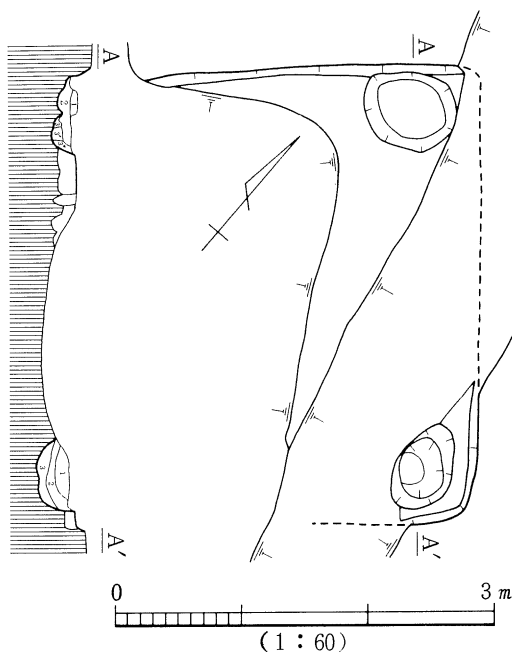


第31図 K-9号住居跡出土遺物実測図-2

第18表 K-9号住居跡出土遺物観察表

挿図 NO.	器 種	(推) 法 量 〈残〉		胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
	遺存度							
1	壺 全体の 50%	1	27.8		外ー口縁・横ナデ, 以下・横ヘ ラケズリ 内ー口縁・横ナデ, 以下・斜め ナデ	良 好 (軟)	外ー淡黄褐色 黒 褐 色 内ー赤 褐 色 黒 褐 色	肩部に輪積痕
		2	15.2					
		3	26.5					
		4	6.0					
2	甕 	1	< 20.7 >	長石, 石英 系微石粒	外ー口縁・横ナデ, 以下・縦ヘ ラナデツケ 内ー口縁・横ナデ, 以下・横ナ デ, ナデツケ, 中・下端・ 荒いナデツケ	良 好 (硬)	外ー暗 褐 色 黒 褐 色 内ー淡茶褐色	内面頸部に2 本の平行沈線 内面に巻き上 げ輪積痕
		2	18.0					
		3	22.0					
3	甕 (広口壺?)	1	24.5	砂 粒 多 量	外ー口縁・横ナデ, 以下・主に 横ヘラケズリ 内ー口縁・横ナデ, 以下・ナデ	良 好 (硬)	外ー淡茶褐色 内ー淡赤褐色	球 体
		2	13.5					
		3	21.1					
		4	(4.6)					
4	甕 (赤彩) 全体の 20%	1	11.3	長石, 石英 系微石粒	外ー口縁から胴中位・入念なナ デ下端・荒いナデ 内ー全面入念なミガキ	良 好	内外共に赤褐色, 外面下位 明褐色	赤彩は外面下 位を除く全面
		2	(17)					
		3	(14.8)					
		4	5.3					
5	甕 底部	1	< 3.0 >	白 色 粒	外ー横・斜めヘラナデ 内ー横ナデ	良 好	外ー暗・黒色 内ー淡 赤 色	
		4	8.0					
6	高坏 脚部	1	< 7.2 >	白 色 粒	外ー主にヘラナデ 内ー横ヘラナデ	良 好 (硬)	外ー明茶褐色	
		頸	3.8					
7	支脚	高・< 9.5 >, 径・5×5.5cm, 調整・ヘラナデ, 断面・タマゴ形					淡赤褐色	

K-10号住居跡 (図版-20)



第32図 K-10号住居跡実測図

K-10号住居跡。遺構は、本道部の中央先端に位置する。西側の約 と中央部分は、K-13号住居跡及び溝によって切りこまれている。

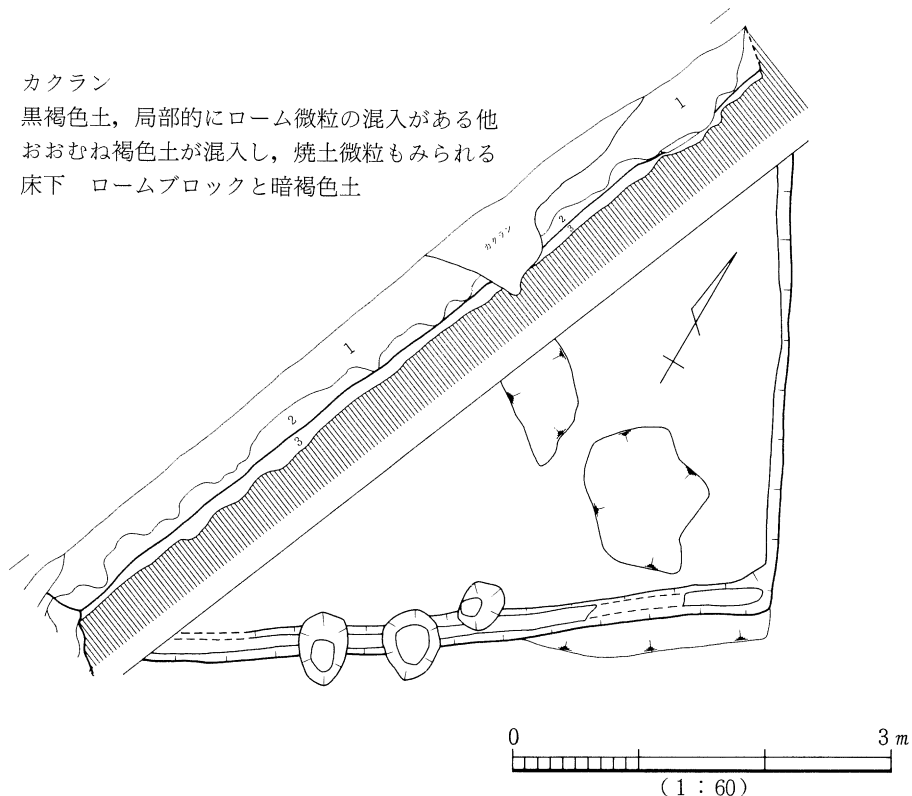
住居跡のプランは、一辺3.45mを測る方形を呈する。

床面は、総体に軟質である。東側の南北両隅には浅いピットが位置し、支柱穴に相当するものと思われる。

遺物は皆無である。

K-11号住居跡

1. カクラン
2. 黒褐色土，局部的にローム微粒の混入がある他
おおむね褐色土が混入し，焼土微粒もみられる
3. 床下 ロームブロックと暗褐色土



第33図 K-11号住居跡実測図

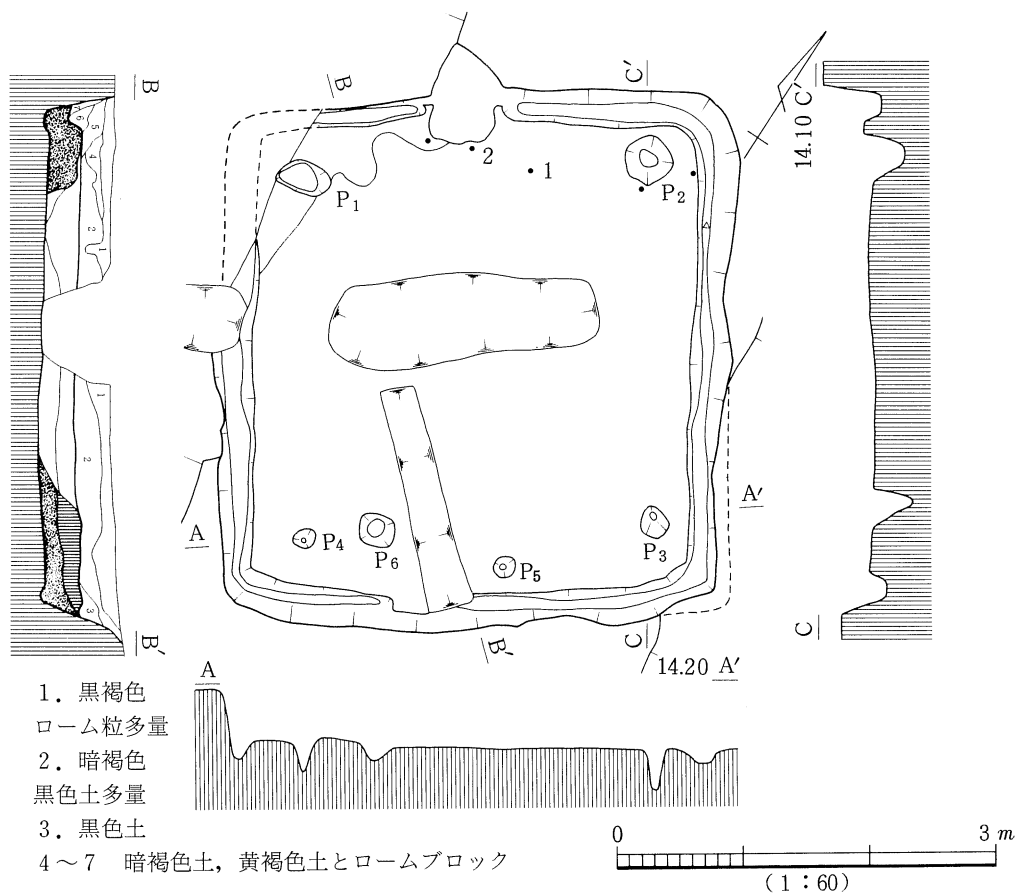
K-11号住居跡は，本道部と北西隅切りの接する部分にあり，地形的には，台地のやや奥まった所に位置する。北西側の大部分は未調査区域に含まれる。

住居跡のプランは方形とみられる。残存の壁高は30cmを測る。主軸はN-11°-Wを指す。

床面はかなり上位にあり，部分的に硬質の踏み固めが認められる。壁溝は，南側のみに検出した。本跡の南東隅付近に所在するとみられる主柱穴は攪乱のため不明確である。その他，壁溝の西端に2か所の小ピットを検出した。

遺物は，覆土下層から，土師器の細片2点の他，上層から，弥生式土器片を1点検出した他は皆無に等しい。

K-12号住居跡 (図版-21)



第34図 K-12号住居跡実測図

K-12号住居跡は、本道部の中央端に位置し、地形的には南に埋没谷、東は沖積地に面した台地の東側縁辺部にあたる。西側は環濠端を、北東側はK-10号住居跡を切り込む。

遺構自体は、直下のK-13号住居跡を利用し、カマド周辺と中央部分の黒色土を除き、ロームブロックを敷きつめて貼り床としている。

住居跡のプランは、一辺 3.9mを測る正方形を呈する。主軸方向はN-30°-Wを示す。床面は、北側のカマド周辺を除き、硬く踏み締められている。壁溝は完周している。主柱穴は、壁際に接して4か所を検出し、南側のP₃・P₄は、北側に比べて小規模であり、底部は円錐形に近い。主柱穴の位置する所は、ロームブロックを敷いて貼り床とした部分に設けられている。床面積は13.2m²を測る。

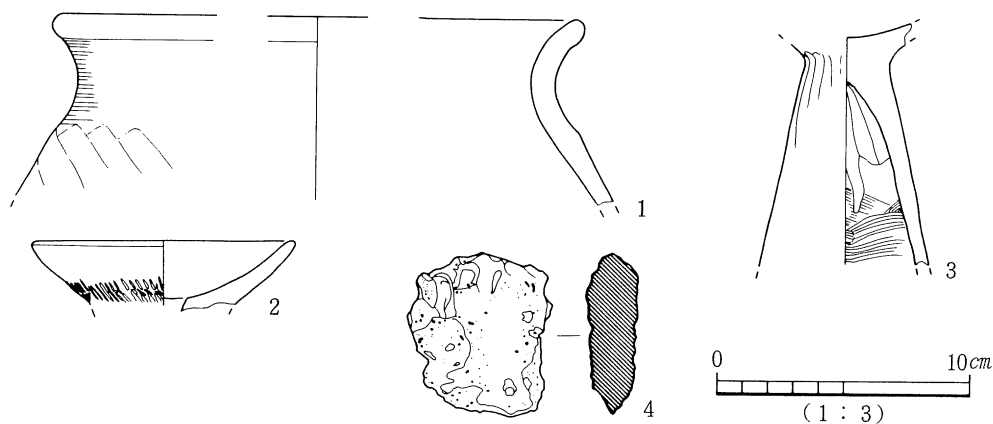
カマドは、北壁中央付近から、多量の焼土と若干量の粘土ブロックを検出した。位置的には直下のK-13号住居に付属するカマドと一致しており、K-13号カマドの上部が崩壊したまま

残っていることから、下の住居が焼失した直後に建てられ、間もなく廃絶したか、又は、住いとは別の目的を有するかは明らかではないが、いずれにせよ、カマドは再構築されずに残っている状態を示している。

遺物は、甕1点、高坏片2点、鉄滓1点を検出した。

第19表 K-12号住居跡ピット等計測値表

主 柱 穴 cm				柱 状 穴 cm			
NO.	上 面	底 面	深 さ	NO.	上 面	底 面	深 さ
1	45・27	32・22	26.4	5	33・29	14・12	9.9
2	41・40	17・13	31.6	6	20・17	6・5	8.8
3	28・25	8・6	32.1				
4	20・17	5・4	23.2				

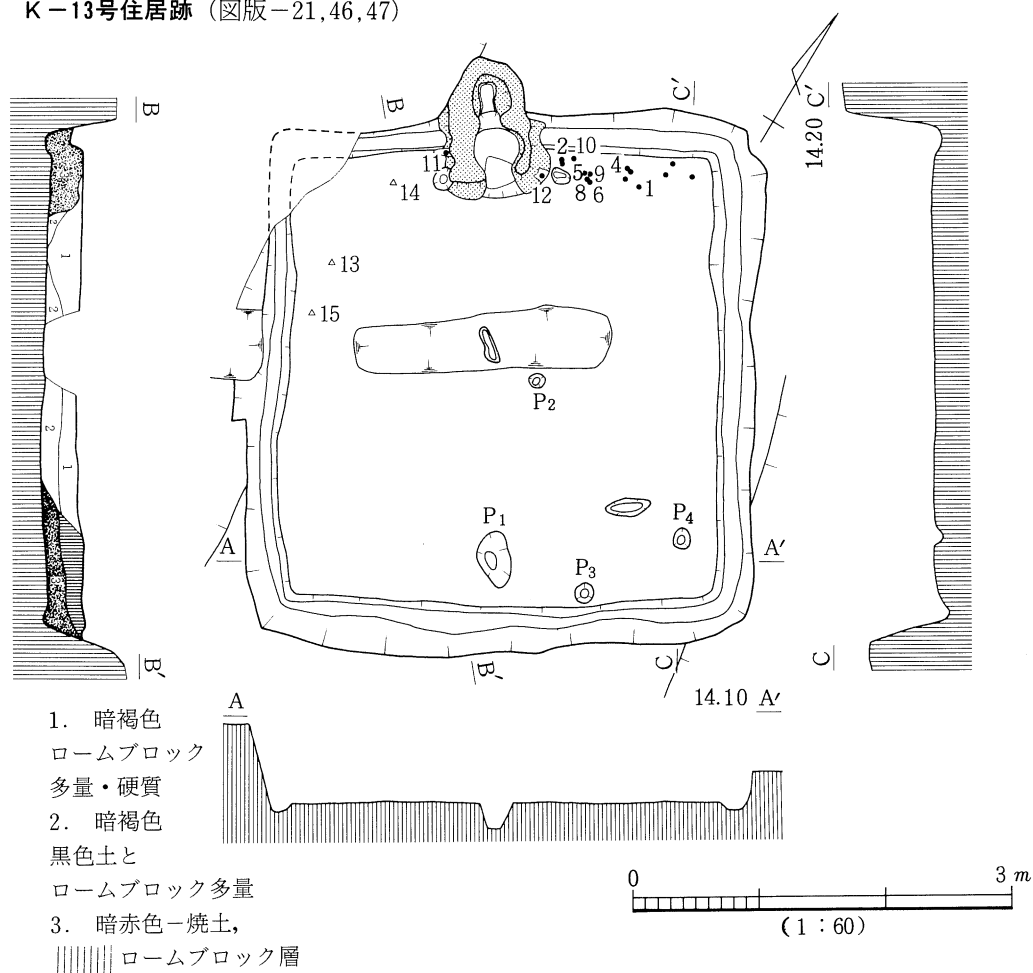


第35図 K-12号住居跡出土遺物実測図

第20表 K-12号住居跡出土遺物観察表

挿図 NO.	器 種 遺存度	(推) 法 量 〈残〉	胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
1	甕 口縁片	1 < 7.3 > 2 (21)	微 石 粒 白 色 土 粒	外-口縁・横ナデ, 以下・斜め ヘラナデツケ 内-全面入念なナデ	良 好 (軟)	外-明 褐 色 内-褐 色	
2	高坏 脚部片	1 < 10.5 > 頸 3.6	長 石 多 量	外-縦ナデツケ→ミガキ 内-上半部・ナデツケ, 下半部 ・横ハケ目	良 好 (硬)	外-淡 赤 色 内-淡 褐 色	
3	器台	1 < 2.5 > 2 10.5		外-口縁・横ナデ, 下端・縦ク シ目 内-入念なナデ	良 好 (硬)	内外共に 淡茶褐色 暗茶褐色	
4	鉄滓	長さ 6.3cm, 巾・ 5.6cm, 厚・ 1.8cm 素材・鉱石か?					

K-13号住居跡 (図版-21,46,47)



第36図 K-13号住居跡実測図

K-13号住居跡は、K-12号住居跡の直下に位置する。遺構の南側から西・北側にかけて、掃き寄せられた状態の焼土が環状に堆積し、覆土は、人による埋め戻し状態を示している。

住居跡のプランは、一辺 3.8mを測る正方形を呈する。残存する壁高は50cm。主軸方向は、N-30°-Wを指す。床面はローム上にあり、北西隅環濠覆土にかかる部分のみ、ロームブロックを敷設した貼り床を検出した。壁溝は完周し、焼土を多量に含む黒色土で覆われている。

主柱穴は、本跡内には認められず、遺構の周辺を約 2 m精査したが未検出であった。

カマドは、北壁中央に位置し、良好な状態を残す。特に、最終段階の煙導部分は、当初の掘り方とは大きく異なる形状を呈し、3度以上の修復がなされたとみられる。燃焼部は壁際に接して、側壁内面と共に強く焼けている。

右袖の先端には、刳入りの柱状粘土 (第39図-12) が遺存し、両袖の外側に位置する小ピツ

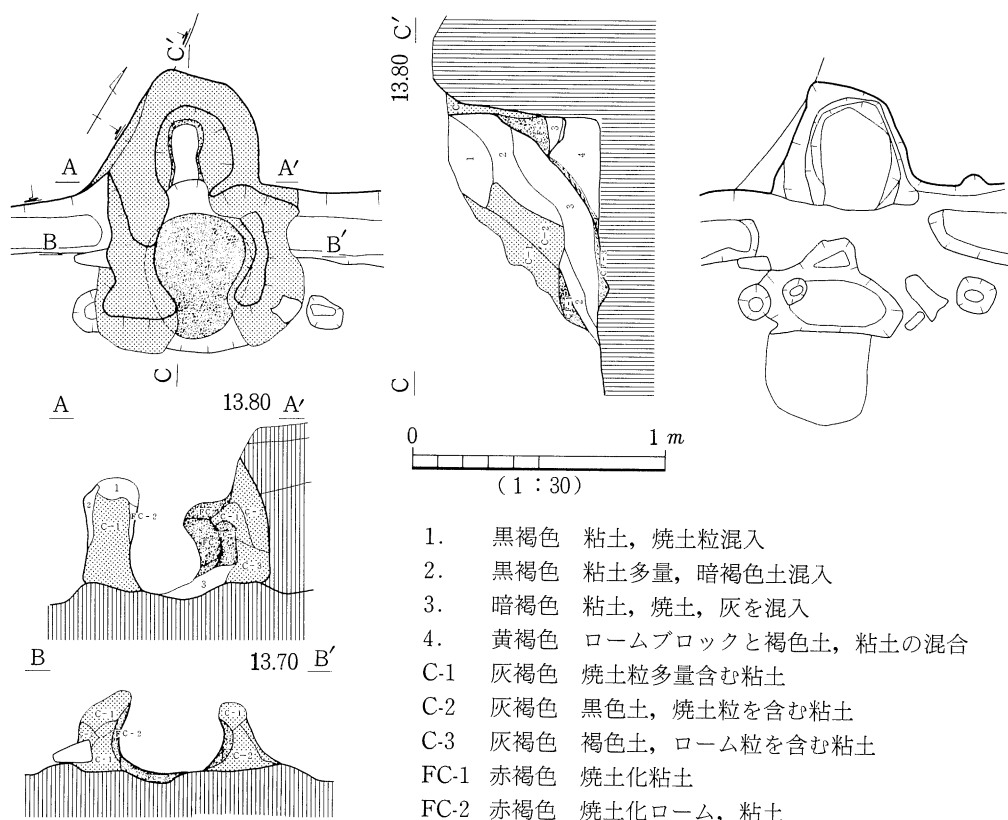
トは並行しており、焚口の前面側壁部とみられる。一方、左袖の中央下位には、完形の支脚1点が貫通状態で検出されており、それに伴って、焼土及び天井壁の一部と思われる粘土ブロックが多くみられ、左側方向に崩壊した状態を示している。

遺物は、カマドの東側から、甕又は甕形を4点、鉢1点、坏5点を含む78点の土器を検出し、西側からは、鉢1点、角釘1点の鉄製品と、製品の一部分と思われる腐食した鉄塊1点をそれぞれ検出した。これらの内、土器は、主に焼土中及び焼土上に細片化して混在しており、鉄製品では、鉢が焼土上に、他は焼土下に出土している。

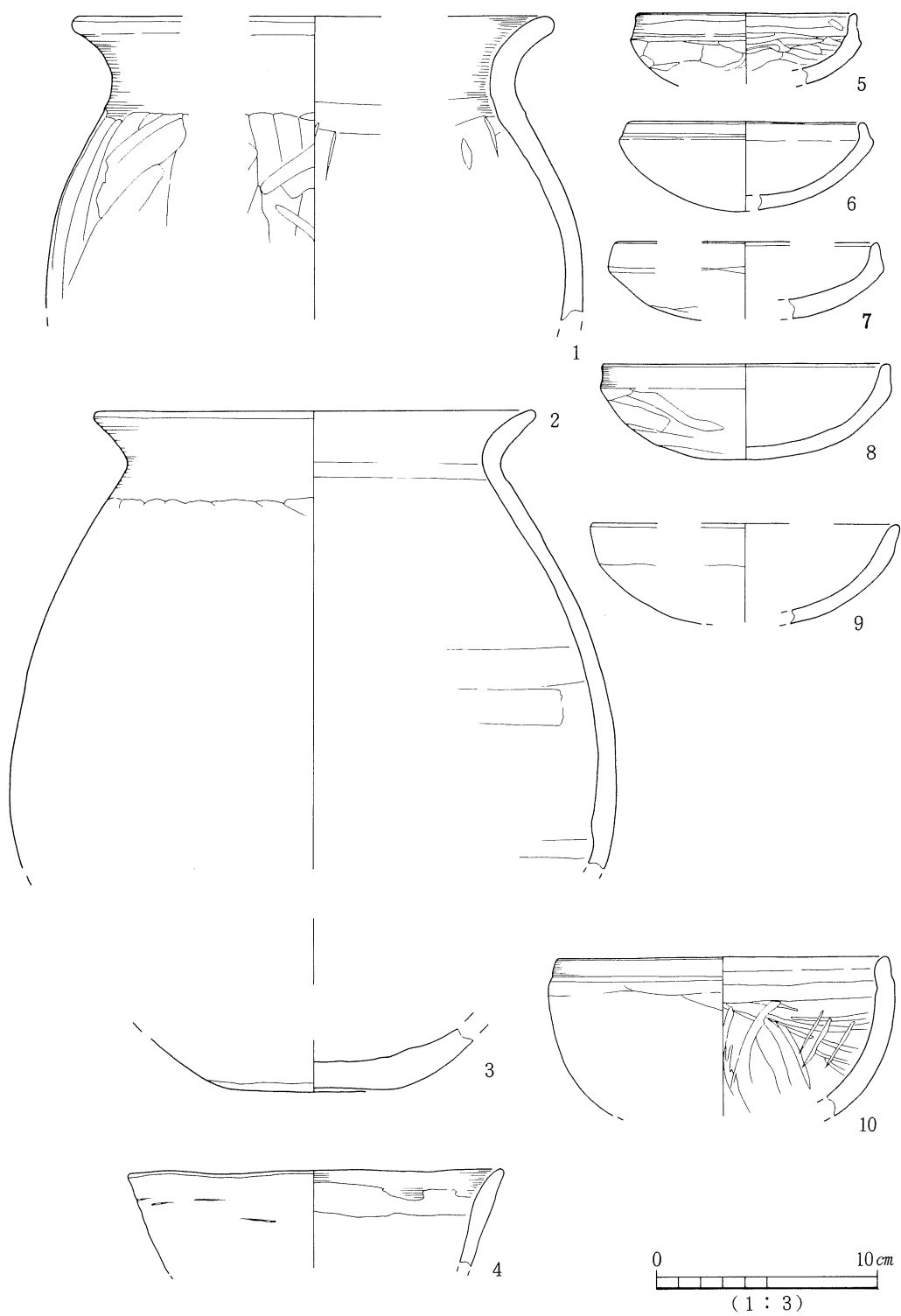
遺物の出土状況及び、焼土の集積と本跡直上に位置するK-12号住居跡の状態と合わせ、本跡が、焼失した直後に埋め戻されたものと推定できる。

第21表 K-13号住居跡ピット等計測値表

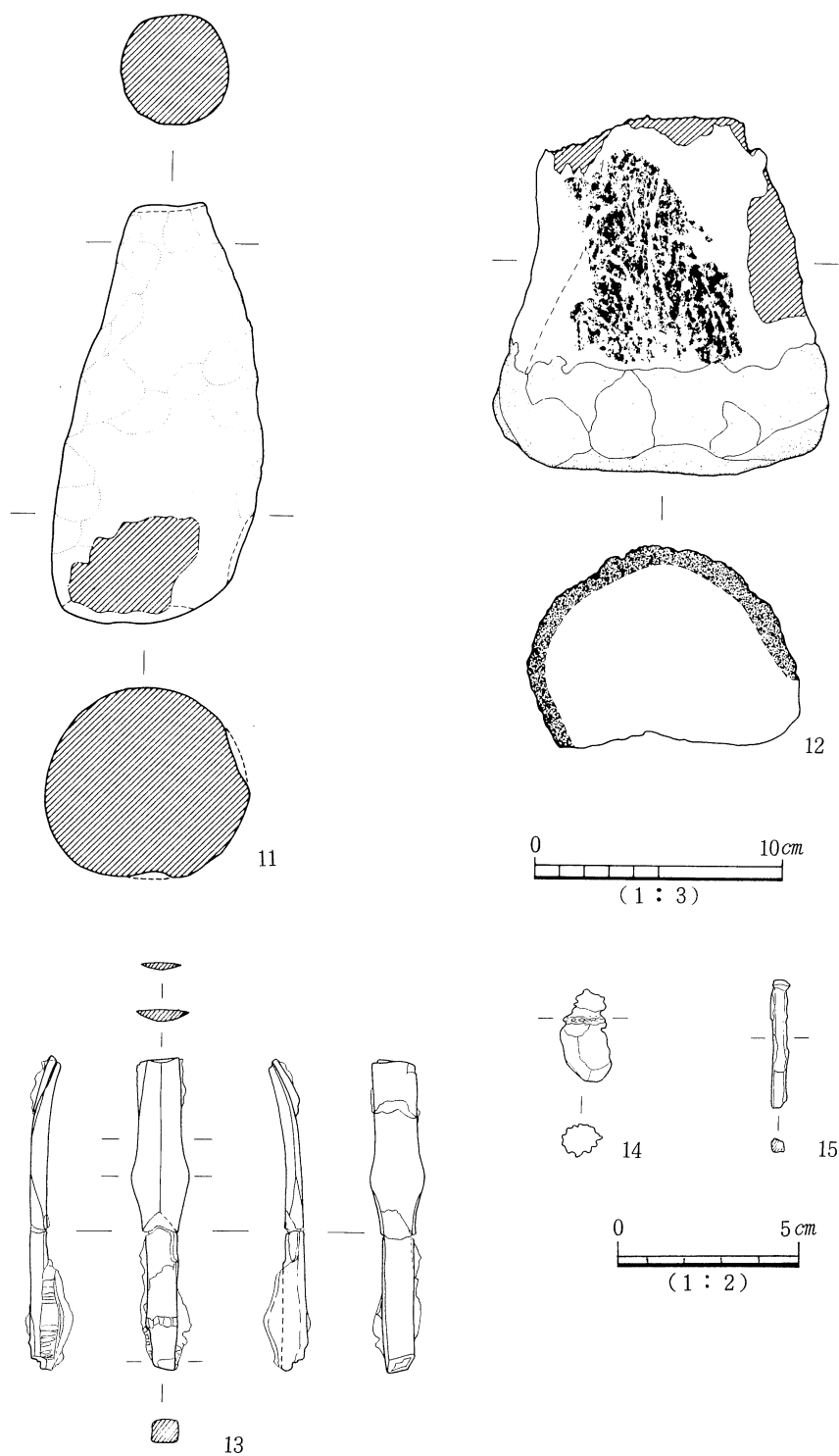
NO.	柱 穴 cm			床面積 m ²
	上 面	底 面	深 さ	
1	45・26	15・9	19	12.0
2	13・12	7・6	41.5	
3	17・13	7・6	6	
4	16・15	7・6	17.8	



第37図 K-13号住居跡カマド実測図



第38図 K-13号住居跡出土遺物実測図-1



第39図 K-13号住居跡出土遺物実測図-2

第22表 K-13号住居跡出土遺物観察表

挿図 NO.	器 種	(推) 法 量	胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
	遺存度	〈残〉					
1	甕	1 < 13.8 > 2 (22) 3 24.3	長石, 石英 系石粒多量	外ー口縁へ頸・横ナデ, 胴・斜 ・縦ヘラナデツケ 内ー口縁へ頸・横ナデ, 肩・横 ヘラナデツケ, 胴・入念な ナデ	良 好 (軟)	外ー淡茶褐色 内ー明 褐 色	総じて厚手
	上半30%						
2	甕	1 < 20.7 > 2 20.0 3 27.5	長 石 粒 微 石 粒	外ー口縁へ頸・横ナデ, 以下ヘ ラナデツケ 内ー口縁へ頸・横ナデ, 以下入 念なナデ	良 好 (軟)		内面胴部下端 に隆帯(輪積 接合上の)
	上半50%						
3	甕	1 < 2.5 > 4 9.0	長 石 粒 微 石 粒	外ーナデツケ 内ーナデ, 押ツケ	良 好 (軟)		2 と同一個体 か
4	鉢? (黒彩?)	1 < 4.5 > 2 17.0		外ー主に横ナデ 内ー口縁・横ナデ→ミガキ, 以 下・ミガキ	良 好 (軟)	外ー淡 褐 色 内ー黒 色	内面は黒彩の 可能性高い
	口縁片						
5	坏	1 < 3.2 > 2 (10) 3 10.5	石粒, 赤 色土粒多量	外ー口縁・横ナデ, 以下・横ヘ ラナデ 内ー全面横ミガキ	良 好 (軟)	内外共に 淡茶褐色	
	40%						
6	坏	1 4.1 2 (11) 3 (11.5)	長 石 粒 黒 色 粒	内外共に入念なミガキ	良 好 (軟)	内外共に白っ ぽい淡褐色, 一部黒褐色	
	30%						
7	坏	1 < 3.5 > 2 (12) 3 (12.5)		外ー口縁・横ナデ→ミガキ, 以 下ナデツケ 内ー入念なミガキ	良 好 (軟)	外ー明 褐 色 暗 褐 色 内ー明 褐 色	
	20%						
8	坏	1 4.3 2 13.0 3 13.2	赤 色 土 粒	外ー口縁・横ナデ, 以下ヘラナ デツケ 内ー入念な横ミガキ	良 好 (軟)	内外共に白っ ぽい淡褐色	
	40%						
9	坏	1 < 4.5 > 2 (14)	長石, 黒色 粒, 金雲母	外ー口縁・横ミガキ, 以下不明 内ー入念なミガキ	良 好 (軟)	外ー暗 褐 色 淡茶褐色 内ー暗 赤 色	内面に赤彩か ?
	20%						
10	鉢	1 < 7.2 > 2 (15) 3 (15.5)	長石, 石英 系石粒, 赤 色土粒	外ー口縁・横ナデ, 以下横ヘラ ケズリ→軽いミガキ 内ー口縁・ミガキ, 体上位・横 イッキミガキ, 以下・斜め の入念なミガキ	良 好 (軟)	外ー明茶褐色 茶 褐 色 内ー茶 褐 色	総じて厚手, ポツツリした 感じ
11	支柱	高 17.0 上径 3.2 下径 8.0	2mm以下の 石粒	手づくね(両手で握り, 整形) 指の圧痕あり 最終的に軽いナデ	—	上から, 暗褐 色, 灰褐色, 淡褐色	全体に盃む
	100%						
12	壁材	高 < 14.5 > 上径 10.0 下径 13.5	石 粒	粘土塊の表面を刮で固めてある		茶 褐 色 灰 褐 色 赤 褐 色	カマド焚口の 側壁材
13	鈍	長・ 8.4 刃巾・1.2 ~ 1.5cm, 柄巾・8mm 刃の中央に陵, 両刃で刃先は反る 重量・ 12g 刃厚・3 ~ 4mm, 柄原・5mm 茎の断面形は長方形					
14	鉄片	高・2.5, 径・0.8 ~ 1.5 重量2g 袋状に腐食					
15	和釘	長・3.5 径・4mm 重量・1g					

住居のプランは、一辺 8.7mを測る正方形を呈する。残存する壁高は、44cm、主軸方向は、N-28°-Wを指す。

主柱穴は、4か所を、更に、各主柱穴間には、2か所つづ、計8か所の床柱穴を検出した。

主柱穴，床柱穴以外では，
南壁中央に出入口に伴うと

みられる柱穴状がある。

主 柱 穴 cm				柱 状 穴 cm				床面積 m ²
NO.	上 面	底 面	深 さ	NO.	上 面	底 面	深 さ	
1	107・108	58・61	75.8	8	52・50	X	29.0	69.0
2	112・110	29・7	86.5	9	75・67	39・20	26.0	
3	139・105	77・53	93.9	10	61・48	30・19	24.8	
4	113・91	63・58	89.2	11		44・38		
5	68・47	56・39	26.2	12		45・42		
6	47	20	27.4	13	39・30	14・9	37.5	
7	61・55	27・22	23.0					

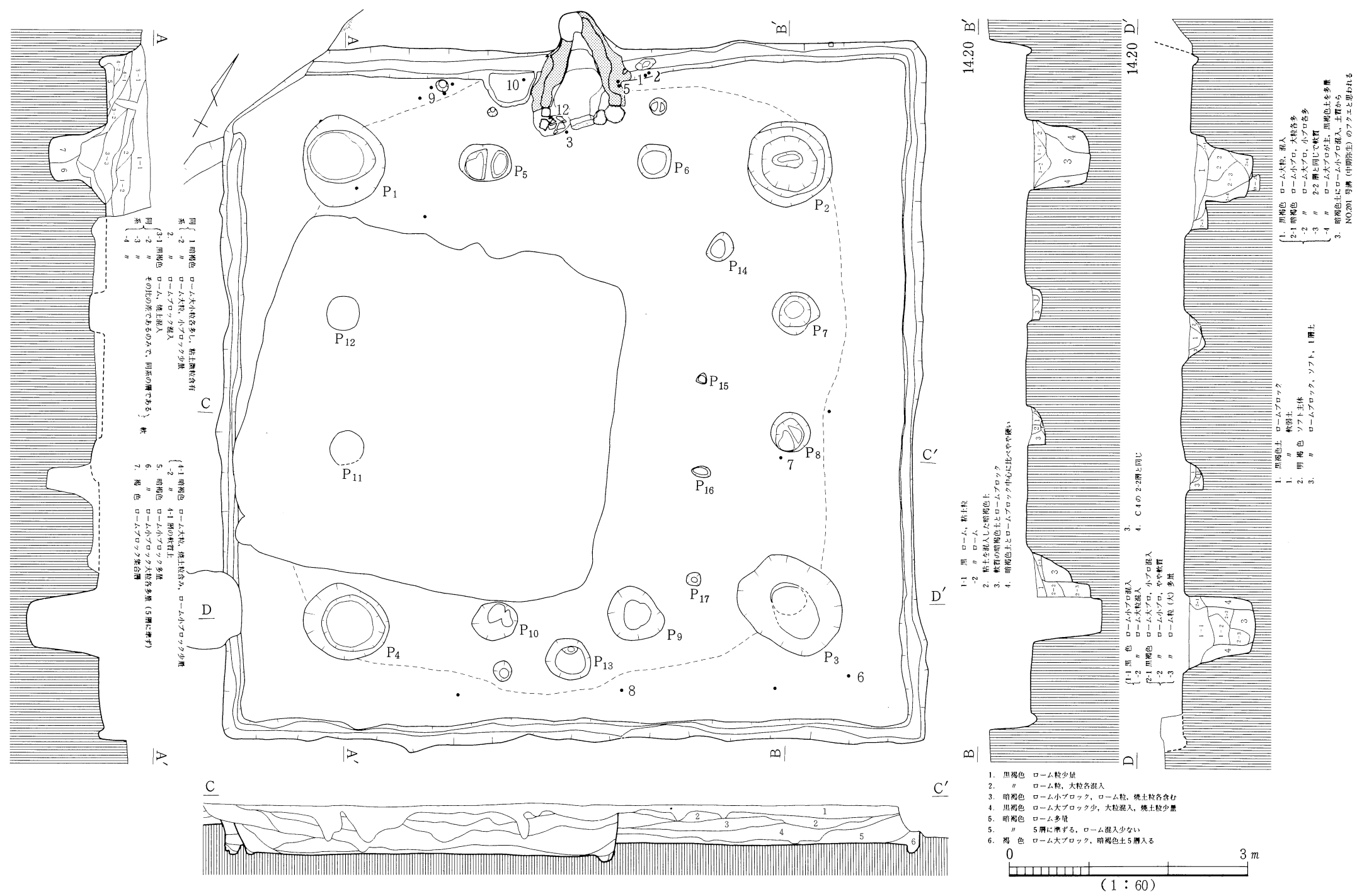
れる。更に、焚口に近い両袖先端には、レンガ状に加

工した粘土及び、成田層岩を切り取りしたレンガを固定しており、その間には加工粘土ブロックが崩壊状態で検出された。崩壊した加工粘土の下面にはアールが認められる。このことから、前者は、橋脚の機能を、又、後者は、橋梁の機能を果すものと考えられ、カマド前面部（焚口）の形状は、左右が垂直状、天井部が緩いアーチ形を呈していたものと推定できる。

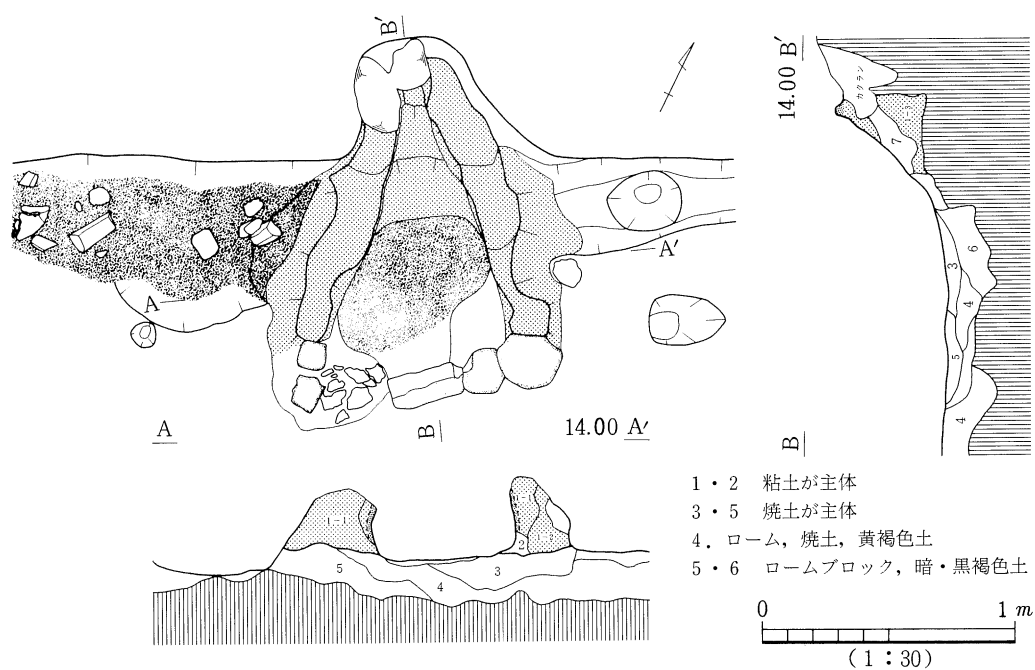
カマドの左側には、残い土壌があり、焼土化粘土壁及び焼土粒が充満し、多数の破損した支脚を検出した。これらの出土状況から、土壌は集積場とみられる。

遺物は、本跡の北から東側にかけて、甕 1 点、高坏片 4 点、須恵器 2 点を含む、坏又は蓋 3 点、支脚 3 個体分の破片を検出した。その他、北東壁の端部から、勾玉 1 点を出土したが、覆土の上層にあり、流れ込みと思われる。

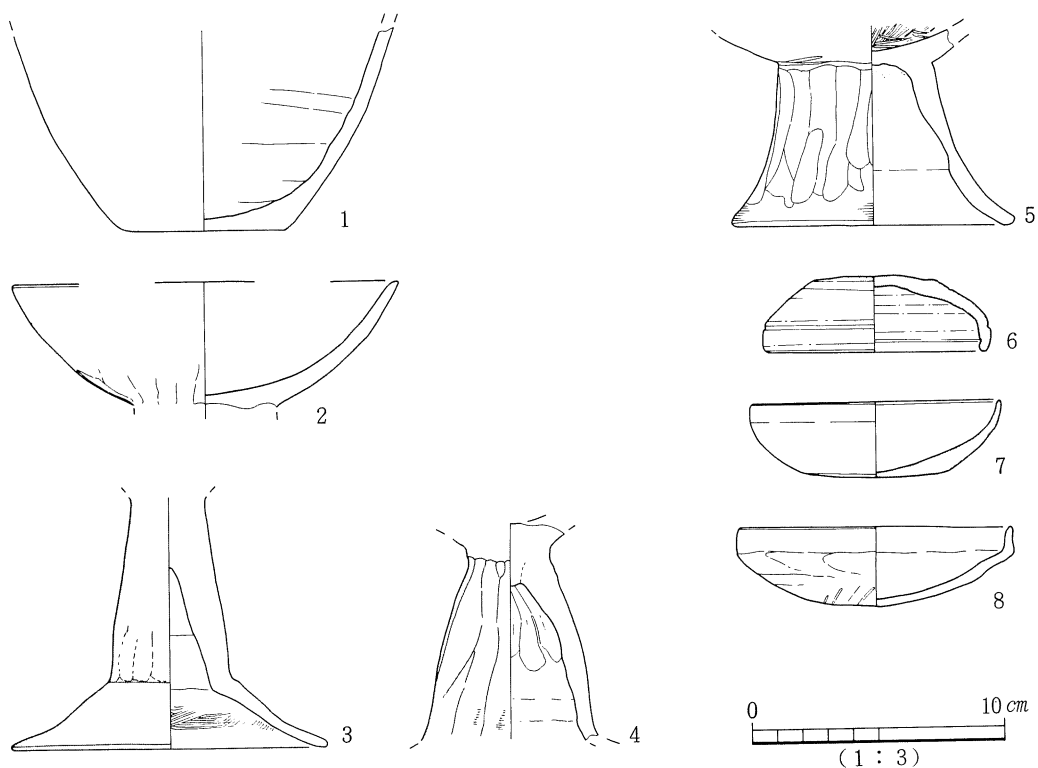
本跡の貼り床下からは新たに 4 か所の柱穴を検出し、同心状に拡張したとみられる。



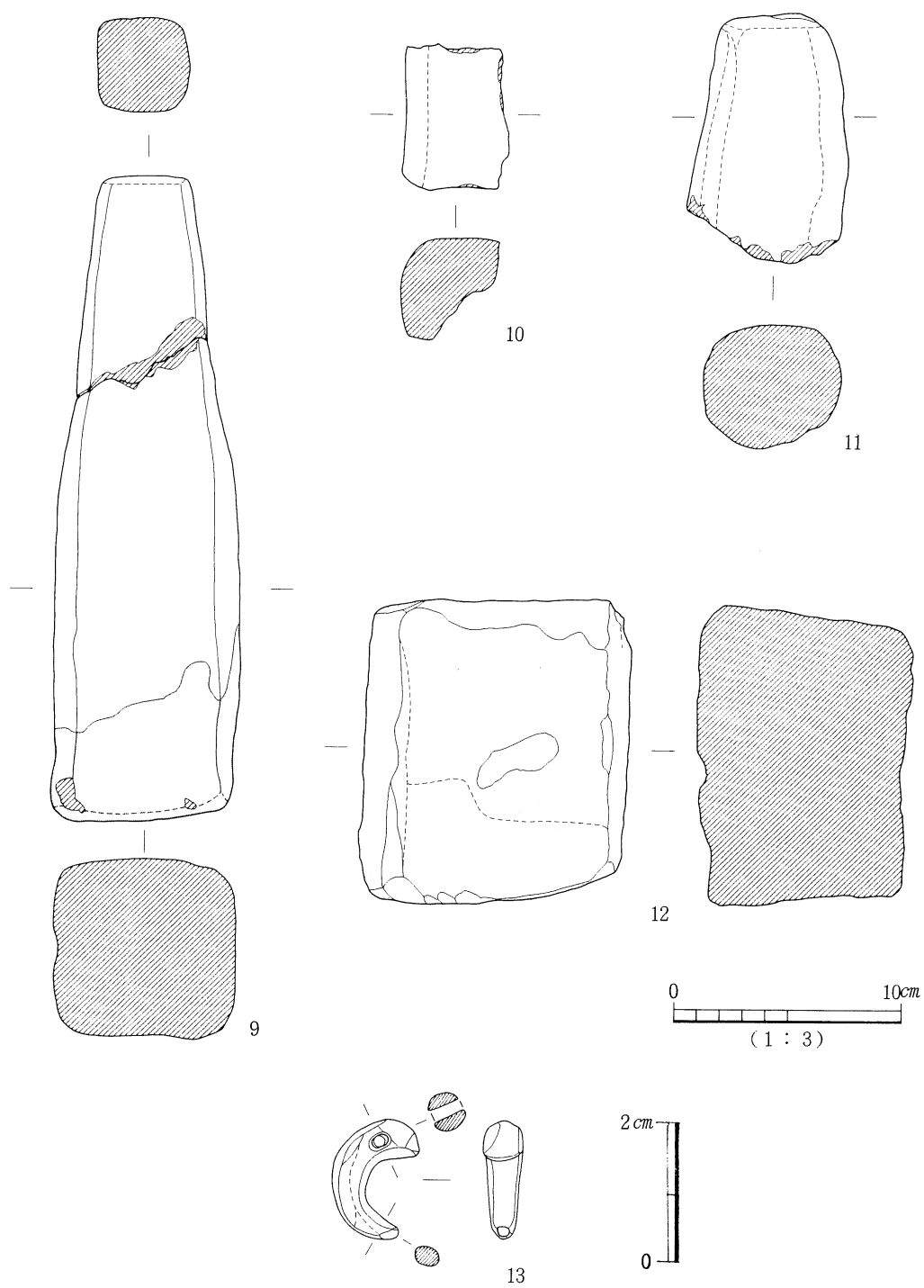
第40図 K-14号住居跡実測図



第41図 K-14号住居跡カマド実測図



第42図 K-14号住居跡出土遺物実測図-1

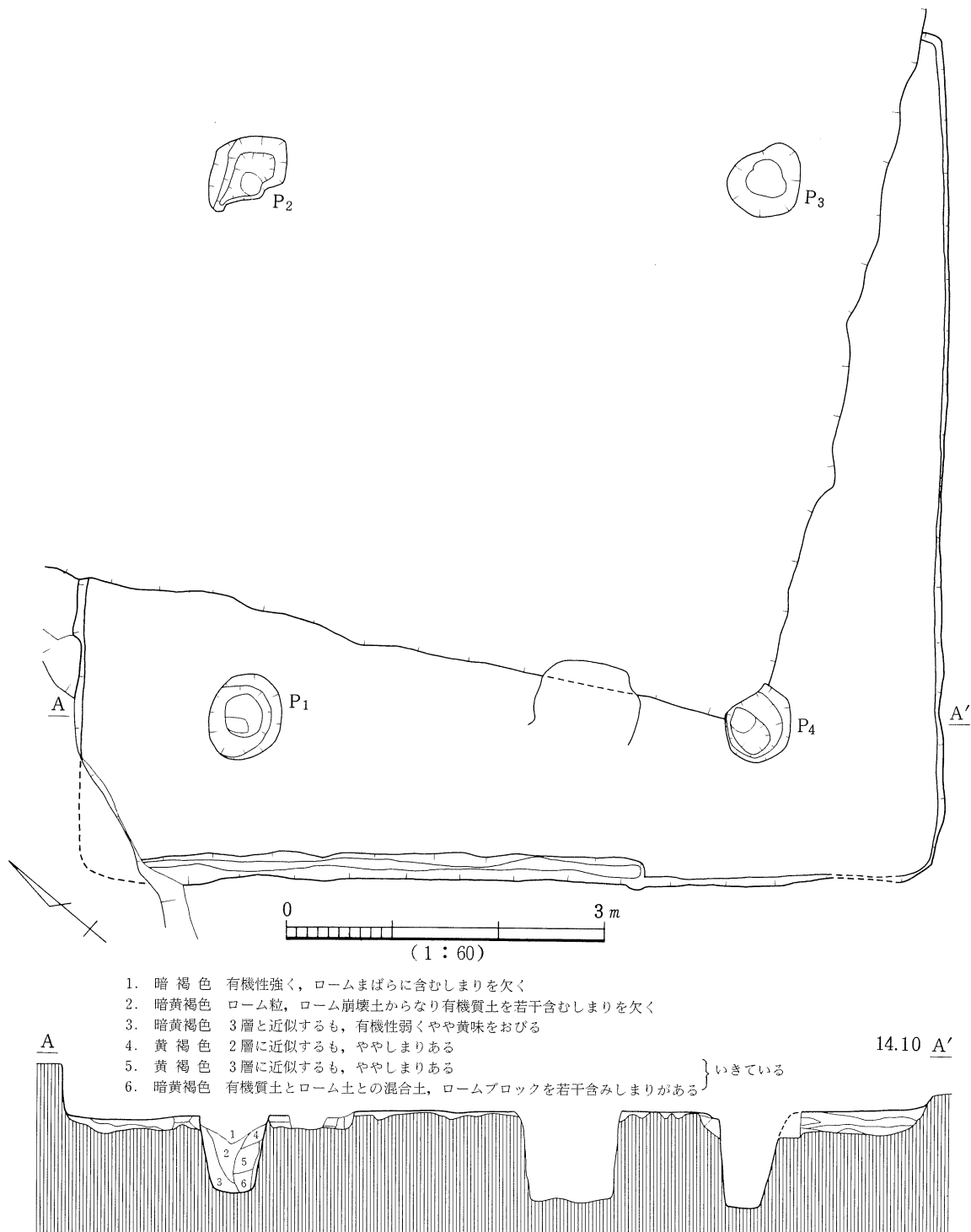


第43図 K-14号住居跡出土遺物実測図-2

第24表 K-14号住居跡出土遺物観察表

挿図 NO.	器 種	(推) 法 量 〈残〉	胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
	遺存度						
1	甕	1 < 8.0 > 3 < 15 >	1mm大の石 英系石粒 多量	外-ヘラケズリ→ヘラナデ 内-主に横ヘラナデ	良 好 (硬)	外-暗 褐 色 内-明 褐 色	外面は石粒が 浮き、ザラザ ラしている
	底部片	4 6.5					
2	高坏	1 < 5.3 > 2 (15.5)		外-上半部・横ナデ, 下半部・ 縦ヘラナデツケ 内-全面入念なミガキ	良 好 (軟)	内外共に 淡 褐 色	内面に有機物 付着
	坏部	頸 5.7					
3	高坏 (赤彩)	1 < 10.4 > 4 12.5		外-全面ミガキ 内-脚内・強いナデツケ・裾内 ・ハケ目→ナデ, 下端・横 ナデ	良 好 (硬)	外-くすんだ 赤 褐 色 内-褐 色	内面に赤彩の ハネ
	脚部	頸 3.0					
4	高坏 (赤彩)	1 < 8.5 > 頸 3.6	微 石 粒	外-坏底・ナデ, 脚・縦ヘラナ デ 内-上半部・ヘラナデツケ, 下 半部・ナデ	良 好 (硬)	外-明茶褐色 内-暗 褐 色	坏部は埋め込 み内面に輪積 痕
	脚部						
5	高坏	1 < 7.8 > 4 11.2	石 英 系 微 石 粒 白 色 微 粒	外-坏底・ナデ, 脚・縦ヘラナ デツケ, 下端・横ナデ 内-坏・放射状のミガキ, 脚上 端・指頭左痕, 以下横ナデ	良 好 (軟)	坏内面は暗茶 褐色, 他, 明 褐色	脚内面中位に くびれあり
	脚部	頸 6.0					
6	須恵蓋	1 3.1 2 8.9		ロクロ挽き, 口縁上に沈線	良 好 (硬)	外-灰色, 黒 っぽい灰 色 内-明 灰 色	坏? 自然釉
	全体の 70%	4 9.1					
7	坏	1 3.0 2 10.0	赤 色 土 粒 多 量	外-口縁・横ナデ, 体部・ヘラ ケズリ, 底・ヘラケズリ→ ナデ 内-全面入念なミガキ	良 好 (軟)	外-褐 色 暗 褐 色 内-褐 色 黒 褐 色	
	全体の 80%	4 6.0					
8	坏	1 3.2 2 11.0	1mm以下の 石粒多量	外-口縁・横ナデ, 体部・ヘラ ケズリ 内-口縁・横ナデ, 入念なナデ	良 好 (軟)	内外共に 明茶褐色	蓋?
	全体の 60%						
9	支脚	高・28.6 径・6.2~8.0	長 石 多 量	全面入念なヘラナデツケ	—	白っぽい淡褐 色, 下端は赤 褐色	断面は隅丸正 方形
	100%						
10	支脚	高 < 11.0 > 径 5.5 × 6		ヘラケズリ, ナデ 指の圧痕 (指頭にあらず)	—		断面は楕円形
	破片						
11	支脚	高・ < 6.3 >	長 石 多 量	全面ナデ		淡茶褐色	断面は隅丸形
	破片						
12	レンガ	高・13.3cm	巾・11.6cm	厚・9.5 cm	岩質・成田層岩	白っぽい 淡黄褐色	カマド焚口の 左側支柱
	100%						
13	勾玉	高・17.5cm	厚・3~5 mm	孔・1.2 × 4.0mm	石質・蛇紋岩	黒っぽい 深 緑	流入土中

K-15号住居跡 (図版-24)



第44図 K-15号住居跡実測図

K-15号住居跡は、K-11号、17号住居跡間に位置し、K-14号住居跡によって東側の大半を失い、西から西側には、掘立建物跡の柱穴及び、浅溝などにより切り込れている。

住居跡のプランは、一辺8mを測る正方形を呈し、K-14号住居跡に次ぐ規模である。壁高は僅か10cmを残す。主軸方向は、N-33°-Wを指す。床面は、検出部分をみる限りでは硬質である。壁溝は、西側のみに検出するが、南北の両側にはみられない。

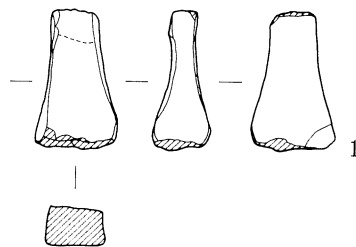
主柱穴は、4か所を検出した。主柱穴以外では、南壁中央に、出入口に伴うとみられる柱状穴及び、長方形を呈すると思われる土壌を検出したが、共に、基底部の一部分を検出したにすぎない。

カマドは破壊され、痕跡すら残っていない。

遺物は、薄い覆土中又は上層より、土師器の細片と、砥石1点を検出した他、本跡と直接的に共伴関係にある遺物は皆無である。

第25表 K-15号住居跡ピット等計測値表

NO.	主 柱 穴 cm			床面積
	上 面	底 面	深 さ	m ²
1	80・71	26・15	75.7	(62)
2	92・59	23・19	79.2	
3	75・67	39・20	80.0	
4	77・64	26・22	83.2	

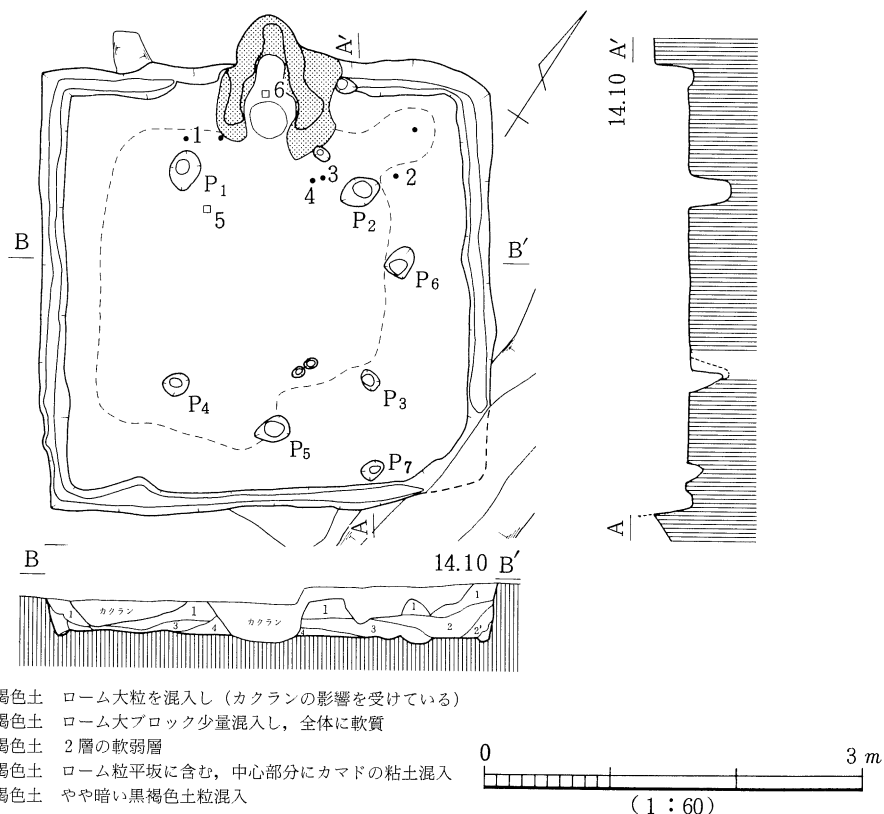


第45図 K-15号住居跡出土遺物実測図

第26表 K-15号住居跡出土遺物観察表

NO.	器 種	法 量 cm	重 量 g	石 質	備 考
1	砥石	長・5.5, 巾・1.9 ~ 3.2, 厚・0.9 ~ 2.4	46	砂岩	4面を使用し, 中央が極端に減っている

K-16号住居跡 (図版-25, 48)



第46図 K-16号住居跡実測図

K-16号住居跡は、本道部の北東寄りに位置し、地形的には、埋没谷に面した台地の南側縁辺部にあたる。南東隅を溝に、北壁は多数の小規模な攪乱墳などによって切り込まれている。

住居跡のプランは、一辺 3.4mを測る正方形を呈する。残存の壁高は、平均で30cm、主軸方向はN-38°-Wを指す。床面は、中央やや西寄りから、カマド前面部分と、北東隅にかけて、硬質の踏み固めがみられる。

第27表 K-16号住居跡ピット計測値表

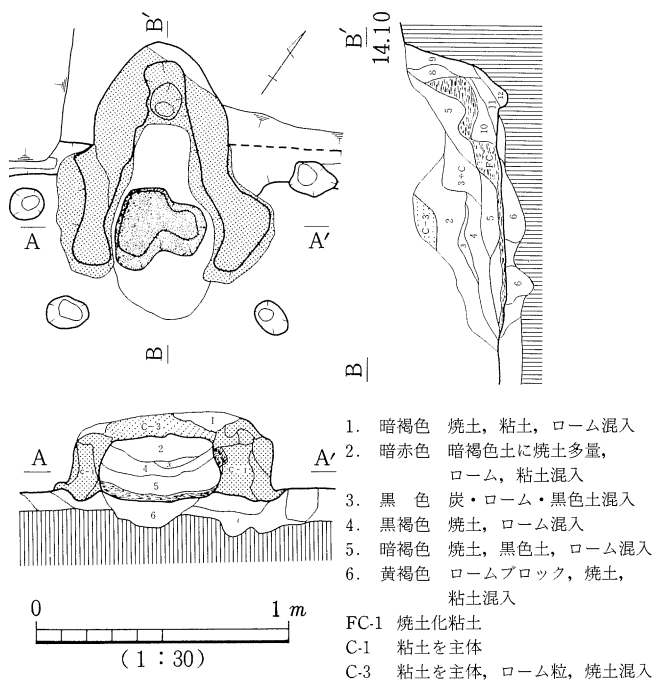
床面積は 9.7m²を測り、壁溝は完周している。

主柱穴は 4 か所を検出した。掘り方は同等であるが、南側のP₃・P₄では、径15cmの柱痕を認める。

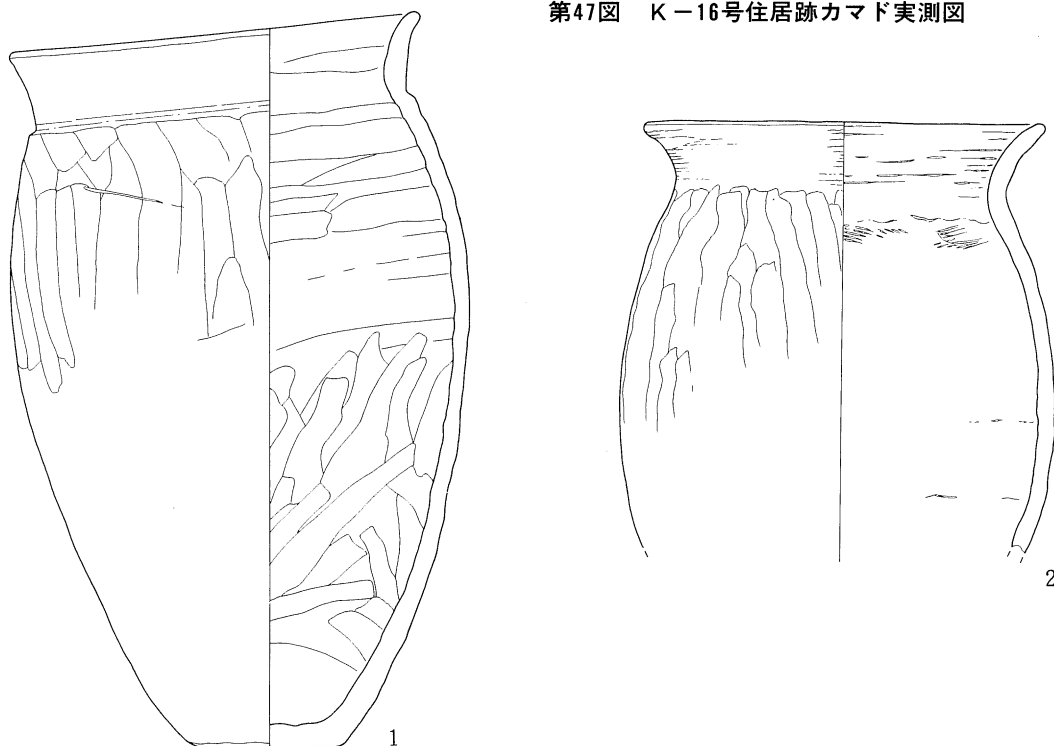
主 柱 穴 cm				柱 状 穴 cm			
NO.	上 面	底 面	深 さ	NO.	上 面	底 面	深 さ
1	32・25	11・10	26.2	5	29・20	15	24
2	33・23	15・13	55.8	6	25・13	13	31
3	17・14	10・7	32	7	11・8	5	11
4	21・18	12・8	31				

カマドは、北壁中央に位置し、燃焼部はやや前方（内側）にあり、両袖と共に強く焼けている。両側には、カマドに付すると推定の4か所の小ピットを検出した。

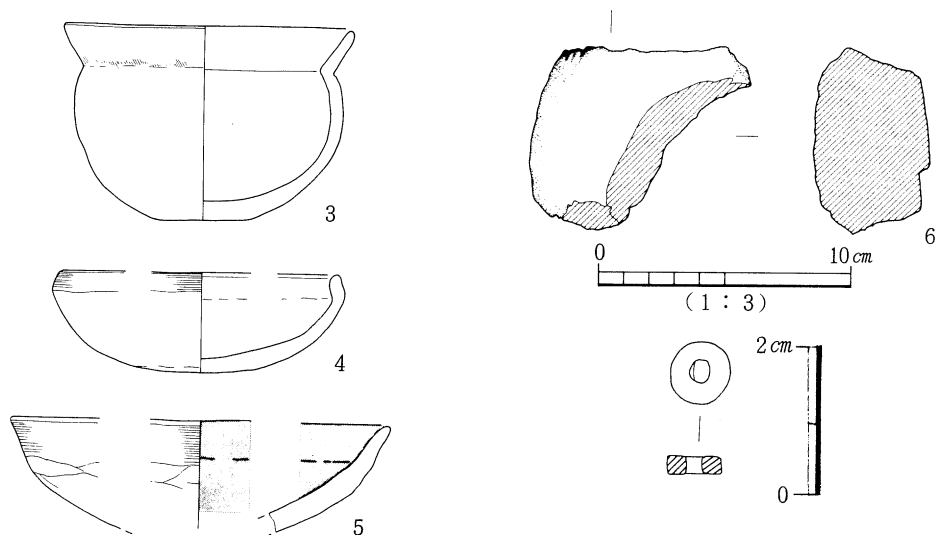
遺物は、カマド付近から、甕1点、鉢1点、高坏1点、坏1点と礫片1点を検出した他、カマドの崩壊土上位から臼玉1点を出土したが、流入土中にあり、本跡との関連はないものとみられる。



第47図 K-16号住居跡カマド実測図



第48図 K-16号住居跡出土遺物実測図-1

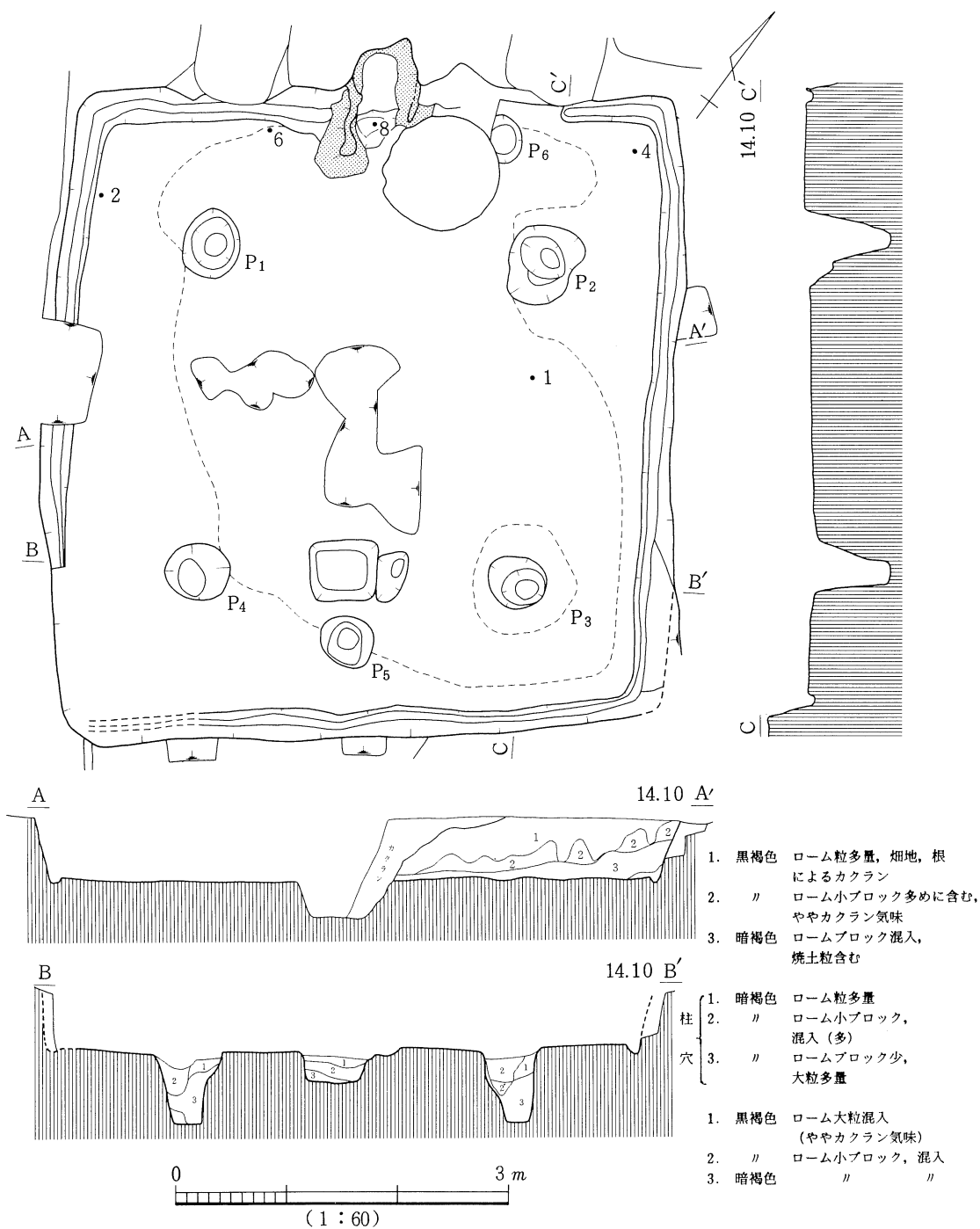


第49図 K-16号住居跡出土遺物実測図-2

第28表 K-16号住居跡出土遺物観察表

挿図 NO.	器 種	法 量 (推) 遺存度 〈残〉	胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
1	甕	1 29.2 2 16.0 3 18.2 4 5.8	長石、微石 粒、赤色土 粒多し	外—口縁・横ナデ、胴上半部・ 縦ヘラケズリ、以下・底部 共ナデ 内—口縁・横ナデ、胴上半部・ 横ヘラナデツケ、下半部・ 縦・斜めヘラナデツケ、下 位横ナデツケ	不 良 (軟)	外—明 褐 色 暗 褐 色 内—上 半 部 茶 褐 色 下 半 部 黒 褐 色	
	全体の 80%						
2	甕	1 〈 17.0 〉 2 16.0 3 17.4	長石、微石 粒、赤色土 粒多し	外—口縁・横ナデ、胴・縦ヘラ ケズリ 内—口縁・横ナデ、肩・クシ目 →ナデツケ→ナデ	良 好 (硬)	外—明 褐 色 内—褐 色	
	胴以上						
3	小甕	1 7.7 2 11.5 3 11.7 4 3.8	1mm以下の 微石粒、白 色土粒	外—口縁・縦ハケ→縦ミガキ、 胴・横ハケ→ミガキ、底・ ナデツケ 内—全面入念なミガキ	良 好 (硬)	外—赤茶褐色 内—明茶褐色	罎の類
	全体の 90%						
4	坏	1 〈 4.0 〉 2 (11.0) 4 5.0		外—口縁・横ナデ、以下ヘラケ ズリ 内—全面入念なミガキ	良 好 (軟)	内外共に 淡褐色 外側やや 暗い	底部はやや丸 味を帯る
	全体の 30%						
5	坏	1 〈 4.3 〉 2 (15)		外—口縁・横ナデ、以下ヘラケ ズリ 内—全面ミガキ	良 好 (軟)	外—茶 褐 色 内—暗い茶褐 色	内面は黒彩
	体部以上 30%						
6	礫片	長・7.3 cm、巾・4～8.2cm、厚・4.5 cm、重量 258g、石質・赤色チャート 暗茶褐色 使用痕不明					
7	白玉	径・8 mm、厚・2.5 mm、孔・2.5 mm、調整・両面刷り込み 石質・蛇紋岩				白っぽい 灰 色	面取りなし

K-17号住居跡 (図版-26, 47)



第50図 K-17号住居跡実測図

K-17号住居跡は、本道部の北側私道脇に位置し、調査前は、水槽が埋設されており、その移設時の工事によって、覆土の大半を失った。南側は、環濠跡を切り込み、北端は、掘立建物跡の柱穴などによって切り込まれている。

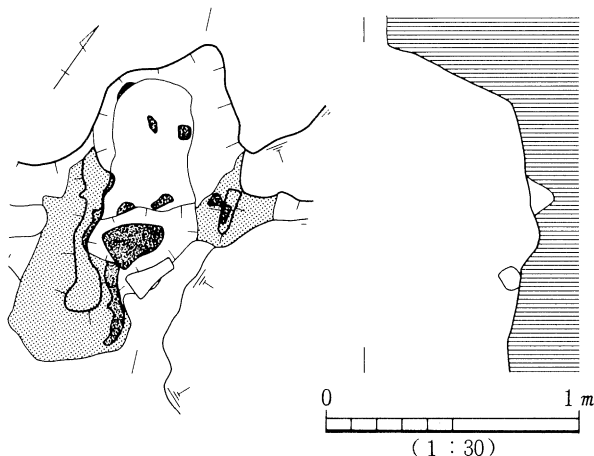
住居跡のプランは、一辺 5.6mを測る正方形を呈し、残壁高は80cm、主軸方向はN-42°-Wを指す。

床面は、南東端からカマドの周囲にかけ、硬質面が残る。南側一帯は、環濠跡の覆土を貼り床としているため、激しい沈下現象がみられる。壁溝は、ほぼ完周している。主柱穴は、4か所

を検出した。主柱穴以外では、南側中央付近に、出入口に伴うとみられるP₅がある他、南側主柱穴のP₃・P₄の間には、長方形の土壇が所在する。土壇は、位置的に不都合な部分を占めるが、覆土の状態から、本跡に伴うものとして扱った。

カマドは、北壁中央に位置する。右袖は、掘立建物跡の柱穴によって、又、煙導部分は、溝などによる破損があり、全体に損傷が激しい。燃焼部から煙導下部では、焼土が飛散状態にあり、原形を留めていない。

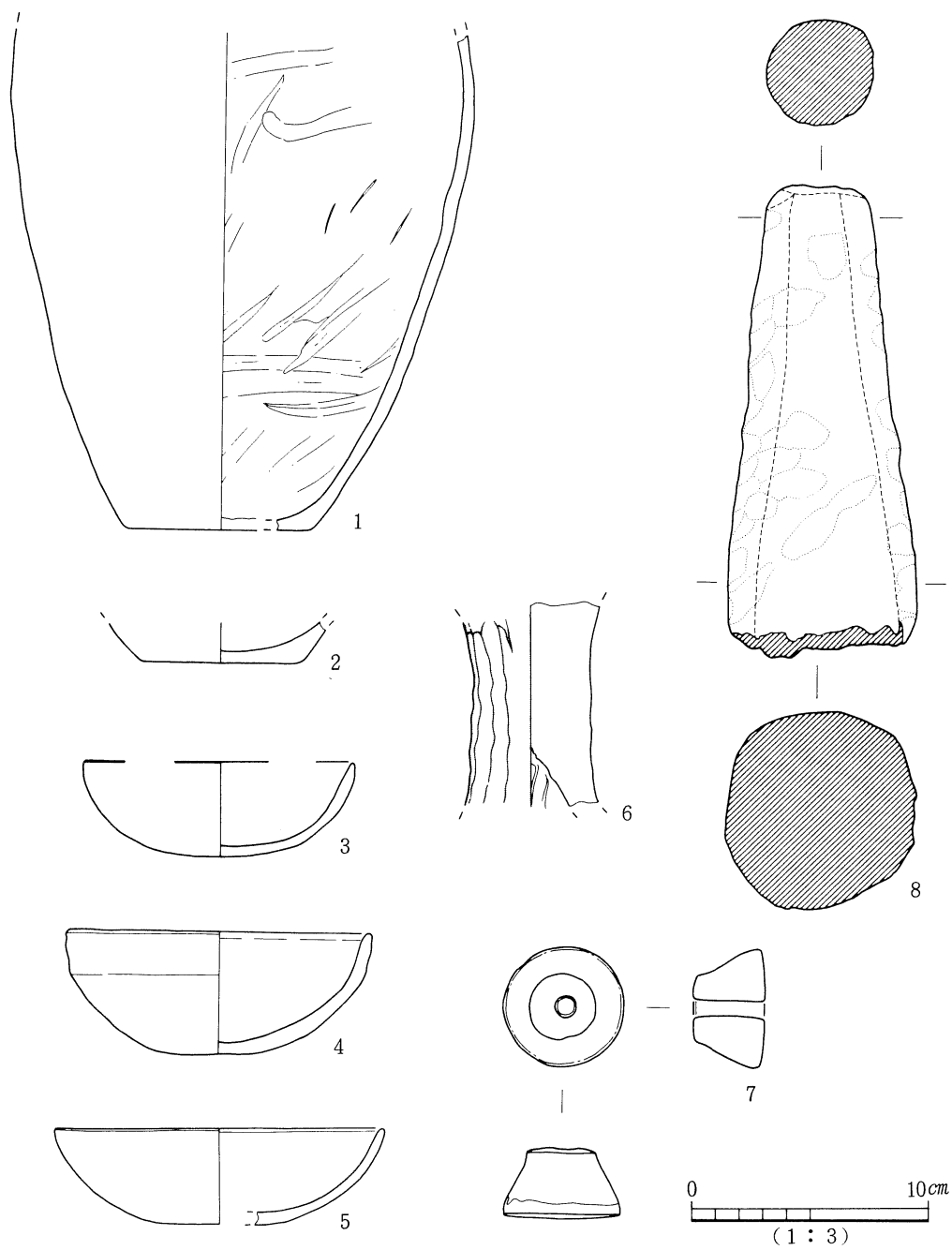
遺物は、カマド付近から、甕1点、坏3点、高坏片1点の他、カマド内部から、完形に近い支脚1点を検出した。更に、中央の攪乱土中からは、紡錘車1点を含む、土器の小・細片を計700点を出土した。



第51図 K-17号住居跡カマド実測図

第29表 K-17号住居跡ビット等計測値表

主 柱 穴 cm				柱 状 穴 cm				床面積 m ²
NO.	上 面	底 面	深 さ	NO.	上 面	底 面	深 さ	
1	65・53	21・20	70.4	5	53・46	20・19	32.8	28.6
2	78・57	20・15	71.4	6	62・55	45・36	31.1	
3	100・96	20・19	71.3					
4	60・50	38・24	20.5					

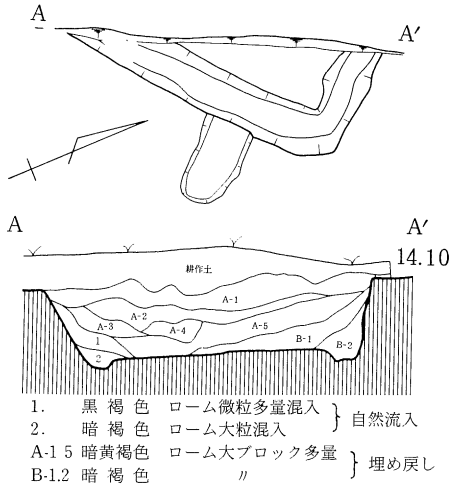


第52図 K-17号住居跡出土遺物実測図

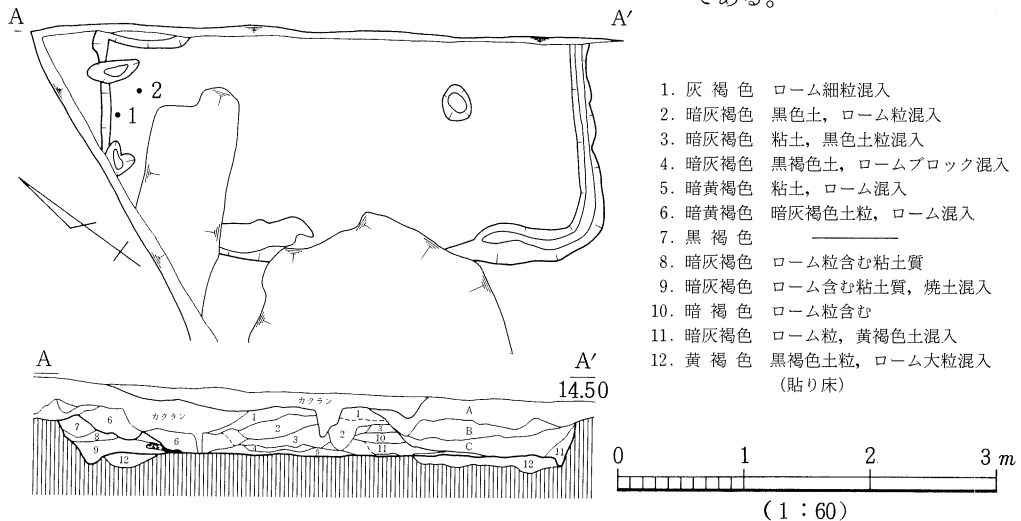
第30表 K-17号住居跡出土遺物観察表

挿図 NO.	器 種	(推) 法 量	胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
	遺存度	<残>					
1	甕	1 < 21.2 >	5mm以下の 石粒多量	外-縦ヘラナデツケ 内-上から、横→斜→横→斜め のナデツケ	良 好 (硬)	外-暗 褐 色 内-暗 褐 色 褐 色	底部は中心が 円形状に欠落 し、甕として 利用したか？
	胴部の 80%	3 19.5					
		4 7.8					
2	坏？	1 < 1.7 >	微 石 粒	外-上位・ミガキ，下端・横ヘ ラケズリ，底・ヘラケズリ →ミガキ 内-入念なミガキ	良 好	外-明茶褐色 内-暗茶褐色	
	底部	4 7.0					
3	坏	1 4.0	砂 粒	外-入念なヘラミガキ 内-放射状のミガキ	良 好 (軟)	外-明 褐 色 明茶褐色 内-明 褐 色	内外面磨減
	全体の 30%	2 (11.5)					
4	坏	1 5.2	長石，黒色 粒，雲母	外-横ミガキ 内-放射状のミガキ	良 好 (軟)	内外共に茶褐 色，局部的に 黒褐色	
	全体の 70%	2 13.0					
5	坏	1 4.0	砂 粒	外-主に横ミガキ，底・入念な ミガキ 内-入念なミガキ	良 好 (軟)	外-黒 褐 色 淡茶褐色 内-淡茶褐色	
		2 14.0					
	全体の 60%	4 (5.5)					
6	高坏	1 < 8.5 >	1mm大の石 英系石粒	外-縦ヘラケズリ→ナデツケ 内-ナデツケ	良 好 (硬)	外-淡 赤 色 内-淡 褐 色	赤彩
		脚径 5.0					
7	土製 紡錘車	高・4.0， 径・1.3～2.5	孔径 6mm	全面ミガキ	良 好 (硬)	褐 色	
8	支脚	高・< 20 >		ナデ，指の圧痕多し (指頭にあらず)		暗赤褐色 淡 褐 色	カマド燃焼部
	90%	上径・4.5 下径・8.0					

K-19号住居跡



K-20号住居跡 (図版-27,49)



第53図 K-19号・20号住居跡実測図

K-20号住居跡は、K-19号の東隣りに位置し、地形的には、埋没谷に面した台地の南側縁辺にあたる西側約 部分を検出した。西壁一带は、芋芽穴他の攪乱によって破壊されている。

住居跡のプランは、一辺 3.8mを測る方形を呈する。主軸方向は、N-35°-Wを指す。床面は、中央部分に踏み固めがみられる他、総じて軟質である。壁溝は、南側にみられる他は不明確。支柱穴は、南西に1か所を検出(上場29cm, 下場18cm, 深さ54cm)した他は、攪乱により失っている。残存の壁高は40cmを残す。

カマドは、北壁中央に位置するとみられ、検出面では、粘土、焼土化粒を伴う左袖の端部を

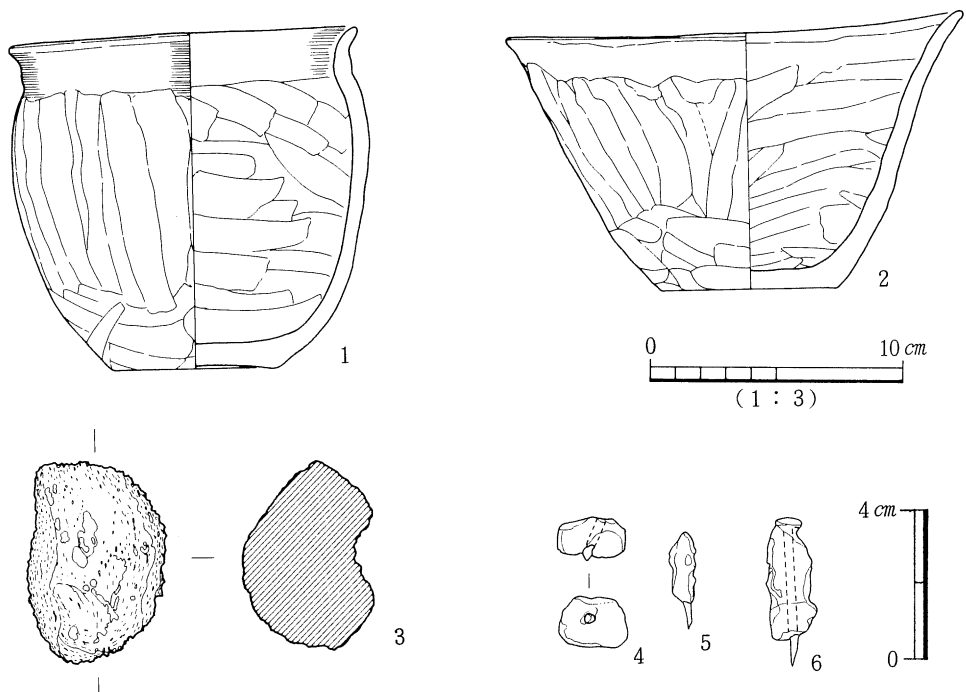
K-19号住居跡は、本道部の中央西端に位置し、南東隅を検出したにすぎない。

住居跡のプランは、方形を呈す。主軸方向は、N-35°-Wで、K-20号住居跡の主軸と並行する。床面は、検出部分を見る限り、硬質であり、壁溝は完周していると思われる。

遺物は、古墳時代の土師小片1点を検出した他は、皆無である。

検出した。

遺物は、カマドの西側脇から、完形の甕1点、鉢1点を検出した他、床面の中央以南から、軽石1点、鉄製の和釘3点をそれぞれ検出した。

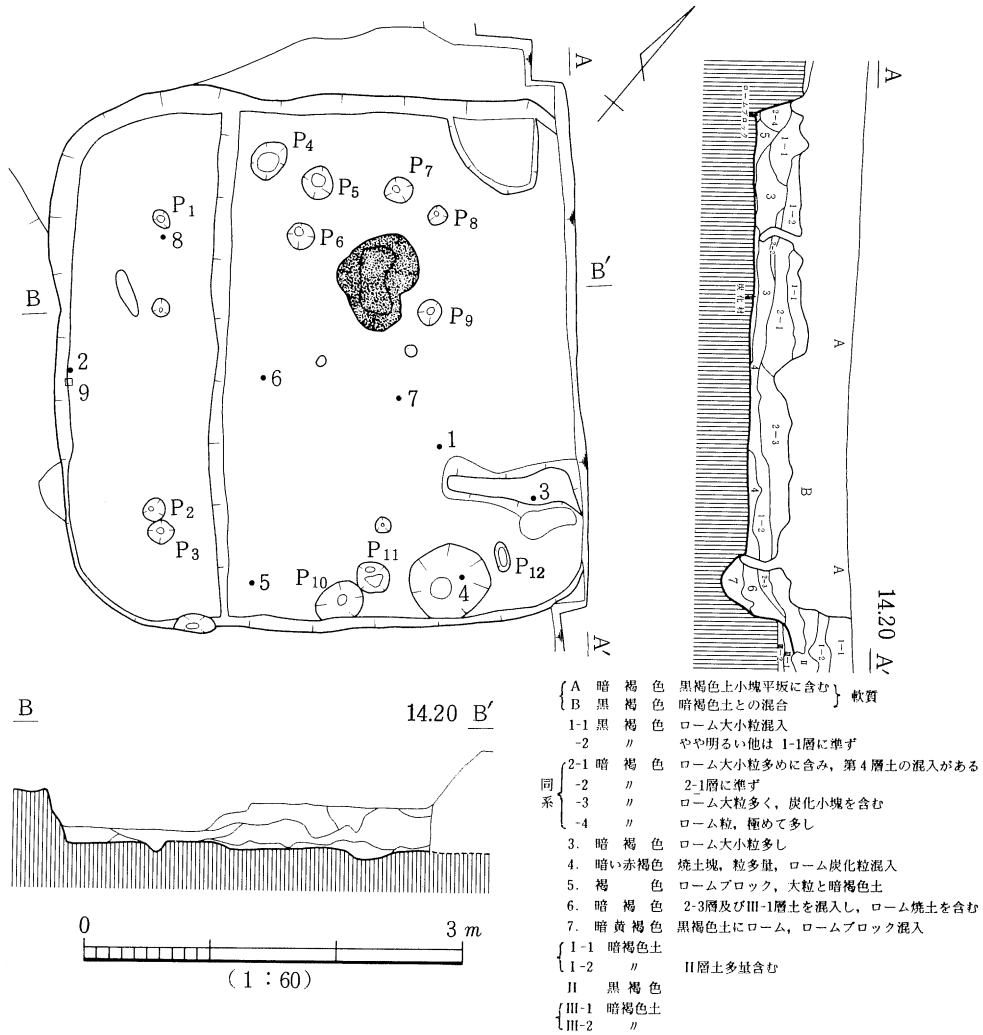


第54図 K-20号住居跡出土遺物実測図

第31表 K-20号住居跡出土遺物観察表

挿図 NO.	器 種 遺存度	(推) 法 量 〈残〉		胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
		1	2					
1	甕 100%	13.5	13.8	長石、微石 粒	外-口縁・横ナデ、縦ヘラケズ リ、下端横ヘラケズリ 内-口縁・横ナデ、胴・横ヘラ ナデツケ	良 好 (硬)	外-明赤褐色 暗 褐 色 内-暗 褐 色	荒い調整
		3	14.2					
		4	6.5					
2	鉢 100%	10.9	18.2	長石、微石 粒	外-口縁・横ナデ、胴・縦ヘラ ナデツケ、下端・横ヘラナ デツケ・底ナデ、ナデツケ 内-口縁・横ナデ、胴・横ナデ ツケ (指頭)	良 好 (硬)	内外共に褐色 暗褐色	胎土、調整共 に1と同じ
		2	—					
		3	7.0					
3	軽石	長・8 cm	巾・5.3 cm	重量・58g	加工痕不明		黒 色	表面に多量の 気泡孔
4	和釘	長・11 mm	径・1.7 mm	} 3点共に茶褐色で酸化が激しい				
5	和釘	長・25 mm	径・2.0 mm					
6	和釘	長・40 mm	径・2.5 mm					

K-21号住居跡 (図版-28,50)



第55図 K-21号住居跡実測図

K-21号住居跡は、本道部の中央、やや東寄りに位置し、地形的には埋没谷に面した台地の南側緩斜面に位置する。東端は私道にかかるが、ほぼ全容を検出した。

住居跡のプランは、長軸4.17m、短軸 3.8mを測る隅丸長方形を呈する。残存の壁高は40cm 主軸方向は、N-36°-Wを指す。

本跡の床面は、西側の約 $\frac{1}{3}$ 部分が高い、いわゆるベッド状を呈し、以東の床面との比高は、平均5cmを測る。床の硬度は、南壁から中央一帯及び、ベッド状遺構の全域に及ぶ。床面直上

には、薄い焼土及び炭化粒が広がり、局部的ではあるが、焼けた床も認められ、焼失住居と思われる。

主柱穴は、西側のベッド遺構内に、それとみられる2～3か所を検出した他、東側は、該当するピットは未検出に終わった。その他、炉の周囲に多数の小ピットを、又、南壁中央付近には、出入口に伴うとみられるピットをそれぞれ検出した。

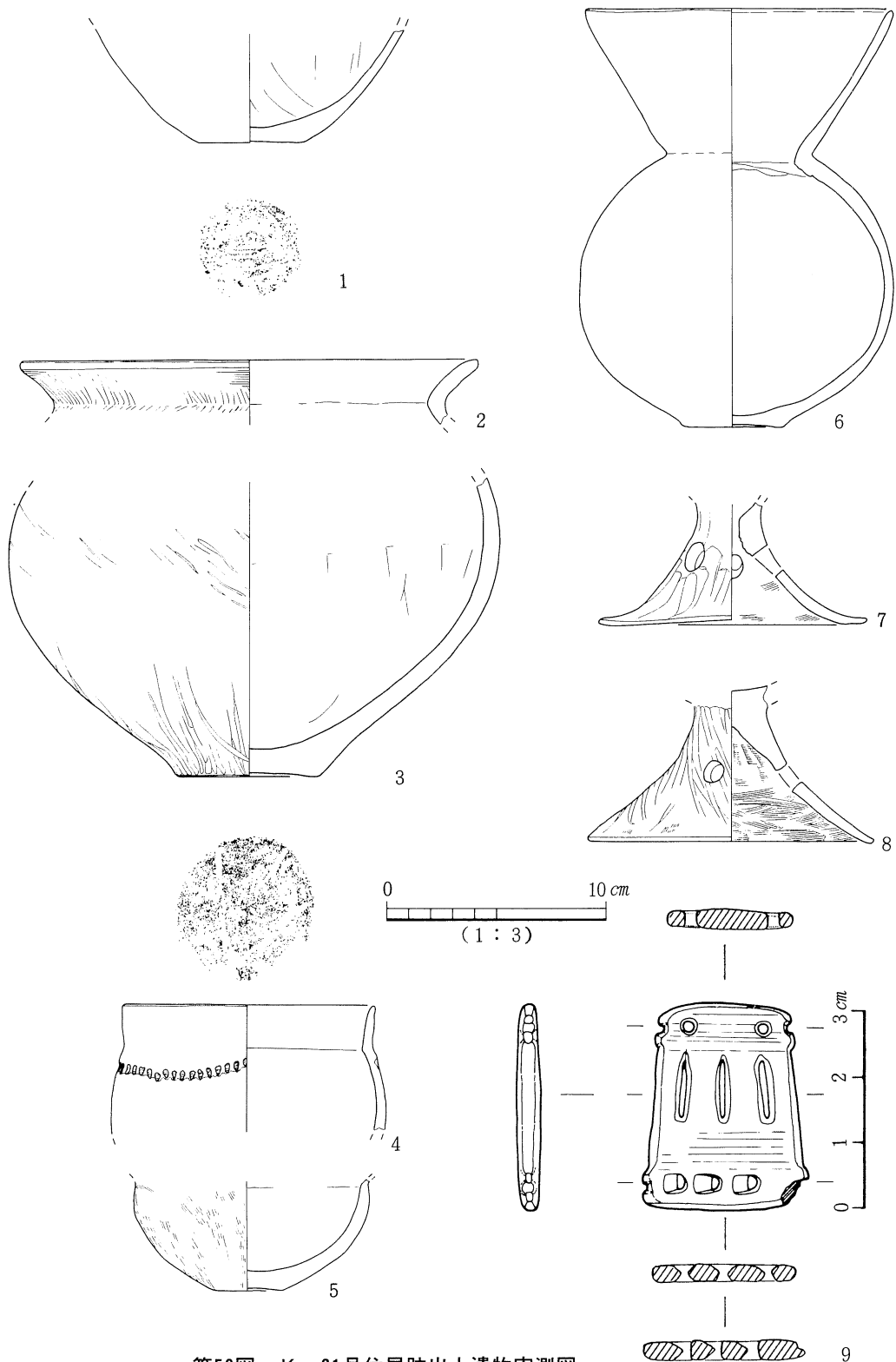
炉跡は、ベッド状の面を除いた東側床面の中央北寄りに位置している。炉のプランは、楕円形の掘り込み2つが重なり合うもので、北端は浅く、若干量の木灰を検出し、炉床は強く焼けている。炉の周囲には、付属施設と思われる複数の小ピットがあり、微粒の焼土を含む、軟弱の黒色土を覆土としている。

本跡に付属する土壌は2か所を検出した。1か所は、北東隅に近い北壁に接し、平均的に浅く掘り込まれている。覆土は、焼土粒を含んだ黒色土で、床面は総じて軟質である。残る1か所は、南壁中央から、やや東寄りに位置し、不整形を呈する。土壌の北側にはロームブロックを主とした低い隔壁状の盛土があり、間仕切りの施設の基礎部であろうか。

遺物は、南側から中央にかけて、甕及び甕形土器3点、鉢及び鉢形土器2点、高坏と器台の脚部各1点を、又、西壁の中央端から、完形の蛇紋岩製垂飾品1点を検出した。この他、覆土中から計62点の小・細片を出土した。

第32表 K-21号住居跡ピット等計測値表

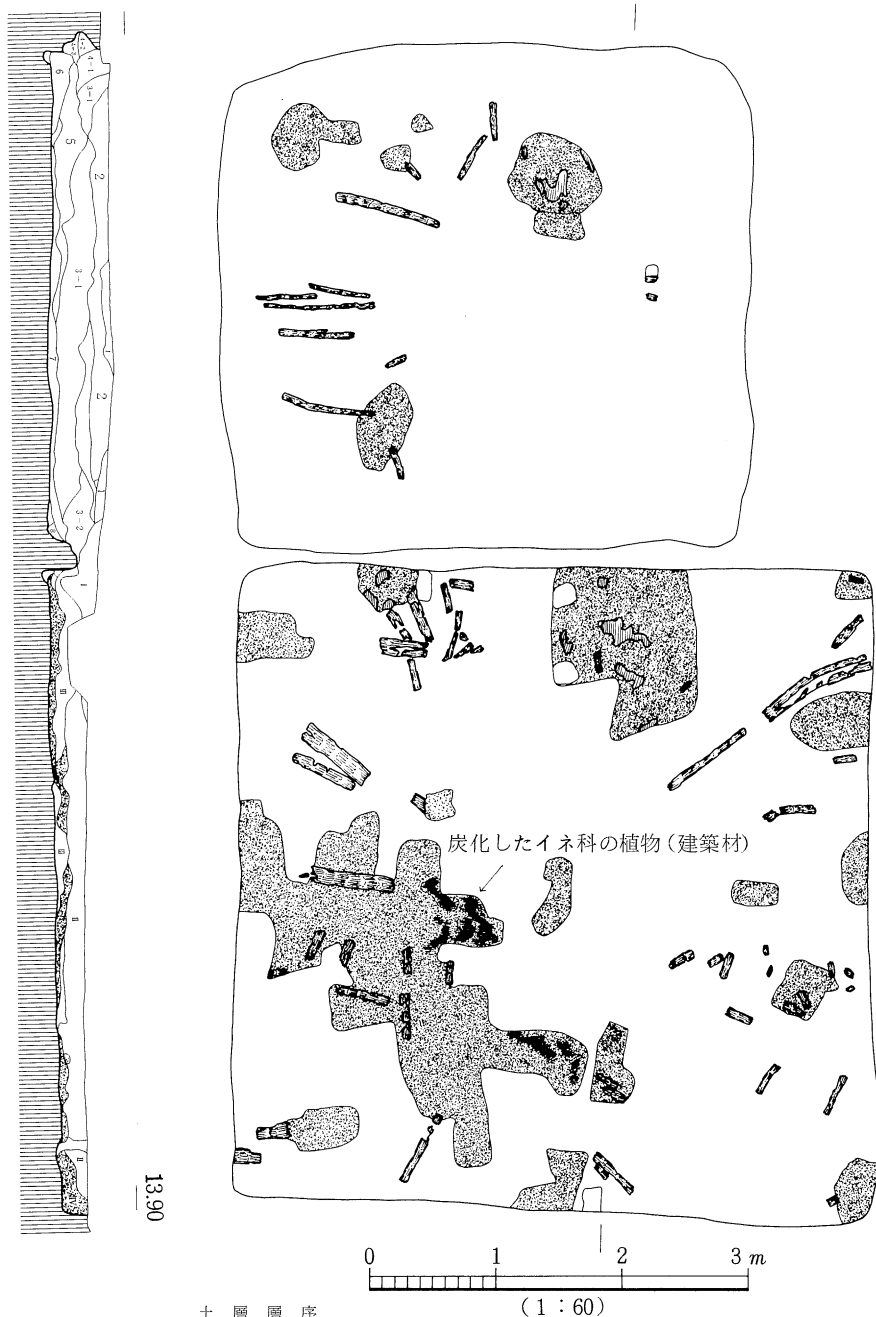
柱 状 穴 cm								床面積 m ²
NO.	上 面	底 面	深 さ	NO.	上 面	底 面	深 さ	
1	15	7	13	7	22	5	16	24.8
2	18	5	10	8	15	4	12	
3	18	5	18	9	20	6	5	
4	33	15	6	10	38	10	18	
5	25	10	7	11	22	8	30	
6	21	8	7	12	25・10	18・5	13	



第56図 K-21号住居跡出土遺物実測図

第33表 K-21号住居跡出土遺物観察表

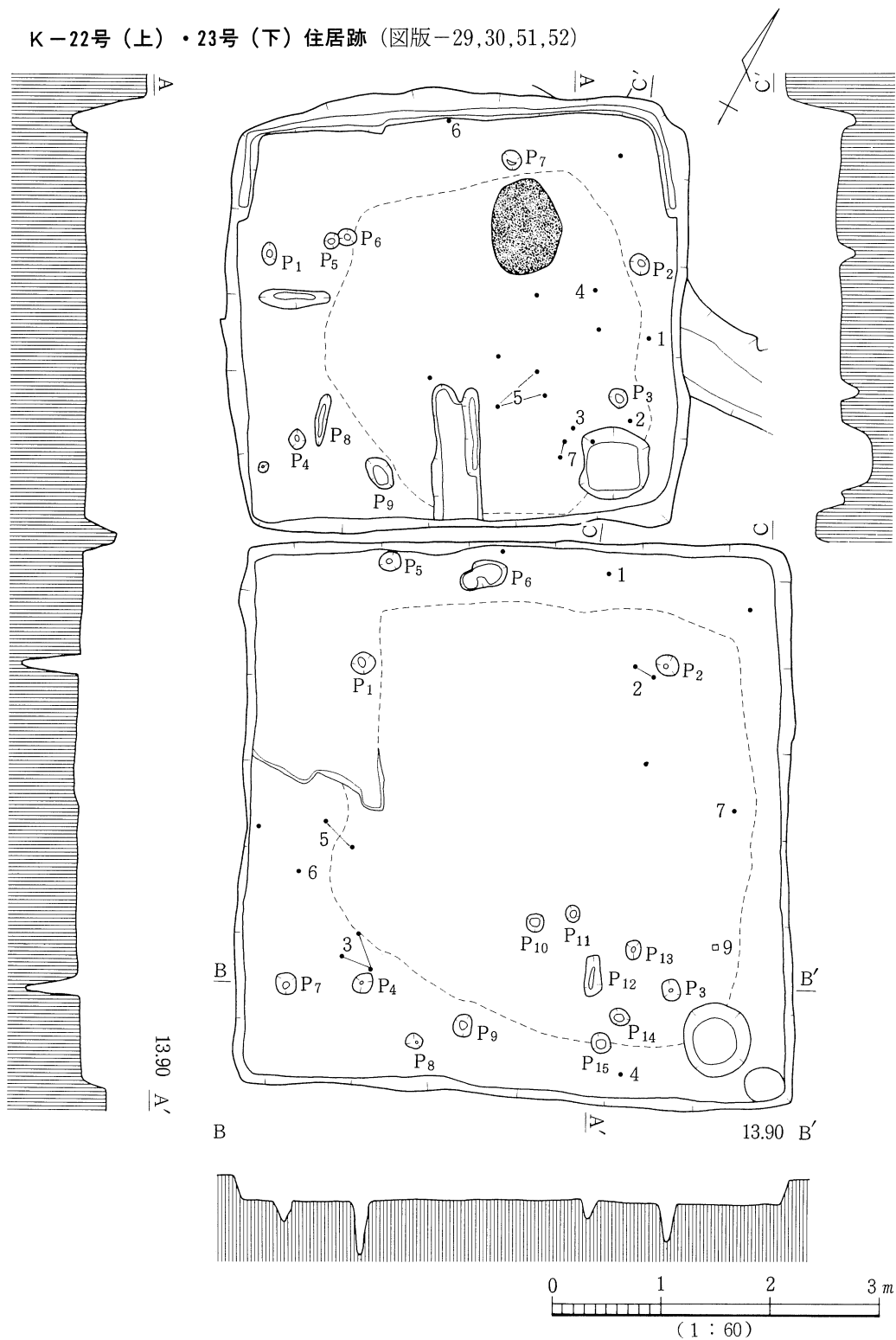
挿図 NO.	器 種	(推) 法 量 〈残〉	胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
	遺存度						
1	甕	1 < 5.2 > 3 < 14 > 4 4.7	石英系微石粒, 白色土粒, 黒色石粒	外ー縦ヘラナデ 内ー入念なナデ	良 好 (硬)	外ー暗 褐 色 茶 褐 色 内ー暗 褐 色 淡 褐 色	木ノ葉底
	底部						
2	甕	1 < 3.0 > 2 (21)	石 英 系 微 石 粒	外ー口唇・横ナデ, 頸・縦クシ目→横ナデ 内ー横ミガキ	良 好 (硬)	外ー暗茶褐色 内ー茶 褐 色	
	口縁片						
3	甕	1 < 14.0 > 3 22.4 4 6.6	石英系微石粒, 白色土粒, 黒色石粒	外ー胴上半部・斜めクシ目→ヘラナデツケ→ミガキ, 下半部・縦ミガキ 内ー入念な横ヘラナデ	良 好 (硬)	外ー明茶褐色 局部に暗褐色 内ー明茶褐色	木ノ葉底
	肩以下50%						
4	鉢 赤彩	1 < 6.0 > 2 (11.5) 3 (12.5)	1mm以下の石英系微石粒多量	外ーナデ, 肩に縄目キザミ 内ー全面入念な横ミガキ	良 好 (軟)	外ー淡 赤 色 明 褐 色 内ー暗赤褐色	内外共に赤彩
	上半部30%						
5	小甕	1 < 5.0 > 3 (10.7) 4 3.0		外ー縦ハケ目→ナデ 内ー全面入念なミガキ	良 好 (硬)	内外共に明 褐 色	
	頸以下40%						
6	埴	1 19.0 2 14.0 3 14.5 4 4.6	1mm以下の微石粒	外ー全面縦ミガキ 内ー頸以上・縦ミガキ, 以下, 入念なナデ	不 良 粘土の質	内底の暗茶褐色, 以下, 白っぽい淡褐色	内面下位にヒビ
	全体の60%						
7	器台	1 < 8.1 > 4 7.2 孔 1.3	2mm以下の石粒, 長石白色土粒	外ー縦ヘラナデツケ, 下端・横ナデ 内ー上端・下端ナデ, 中位・クシ目→ナデ	良 好 (硬)	外ー暗 褐 色 内ー暗 褐 色 明 褐 色	上位に孔3か所 裾端は平行
	脚部						
8	高坏	1 < 8.1 > 4 7.2 孔 1.0	2mm以下の石粒, 白色土	外ー縦クシ目→縦ヘラナデ→ミガキ 内ー横クシ目→ヘラナデ	良 好 (硬)	内外共に明茶褐色	上位に孔3か所
	脚部						
9	垂飾品	高・31mm, 上巾・20mm, 下巾・25mm, 厚・3mm, 円孔径・2mm, 長孔・9mm, 半円孔径・1mm×2mm			石質・蛇紋岩 上位平行線刻 下位 //	緑がかった暗灰色	円孔×2 長孔×3 半円孔×3
	95%				6本 10本		



- 土 層 層 序
- | | | | |
|---------|-------------------|---------|---------------------------|
| 1. 黒褐色 | ローム微粒混入 | 6. 黒褐色 | 焼土多量 |
| 2. 暗褐色 | ローム粒混入 | 7. 暗褐色 | 焼土, 炭化粒多量, 軟質 |
| 3-1 暗褐色 | ローム大・小粒多量混入 | 8. 褐色 | ロームと壁上位土の混合 |
| 3-2 暗褐色 | ローム小粒多量混入 | I 黒褐色 | ローム, 焼土粒を混入 |
| 4-1 褐色 | ローム大粒多量混入 | II 黒褐色 | ローム, 焼土粒, 炭化粒を多量混入 |
| 4-2 褐色 | ローム微粒混入し, 軟質 | III 暗褐色 | ソフトローム塊, ローム微粒, 焼土混入 |
| 4-3 褐色 | ローム粒, 大粒少量混入 | IV 暗赤色 | 炭化材を多量に含む焼土層 |
| 5. 暗褐色 | ローム粒多量, 炭粒, 焼土粒混入 | | (1~8までK-22号, I~IVまでK-23号) |

第57図 K-22号・23号住居跡実測図-1

K-22号(上)・23号(下)住居跡(図版-29,30,51,52)



第58図 K-22号・23号住居跡実測図-2

K-22号住居跡は、K-21号住居跡から、約5mの西隣り、南側には、10～20cmを隔ててK-23号住居跡が位置する。地形的には、K-21号住居跡同様、埋没谷に面した台地の南側緩斜面に位置する。

住居跡のプランは、長軸4m、短軸3.8mとほぼ正方形に等しい。残存の壁高は40cmを測り、主軸方向はN-23°-Wを指す。全面に焼土、炭粒及び炭化材などを検出し、床面も強く焼けていることから、本跡が焼失したことを示している。

本跡の床面は、南壁から中央にかけて踏み締められており、炉穴から西側一帯が強く焼けている。壁溝は、北壁から東西の北側端にかけ、コの字形に掘り込まれている。

支柱穴に該当するとみられる小ピットは、不明瞭な4か所を検出した。ピットの覆土は焼土混りの黒色土で占められている。4か所共に掘り込みは浅く、底部は丸味を帯びる。

本跡の南壁中央に細溝を伴う、巾50cm、全長1.2cmを測る巾広の浅溝を検出した。底部はやや丸味を帯びてはいるが硬質である。巾広溝は本址の長軸と一致し、それに伴う細溝は、支柱穴P₁の南端に検出の細溝と近似しており、両者を直線で結合すると正方形の区画を呈するのは偶然であろうか。

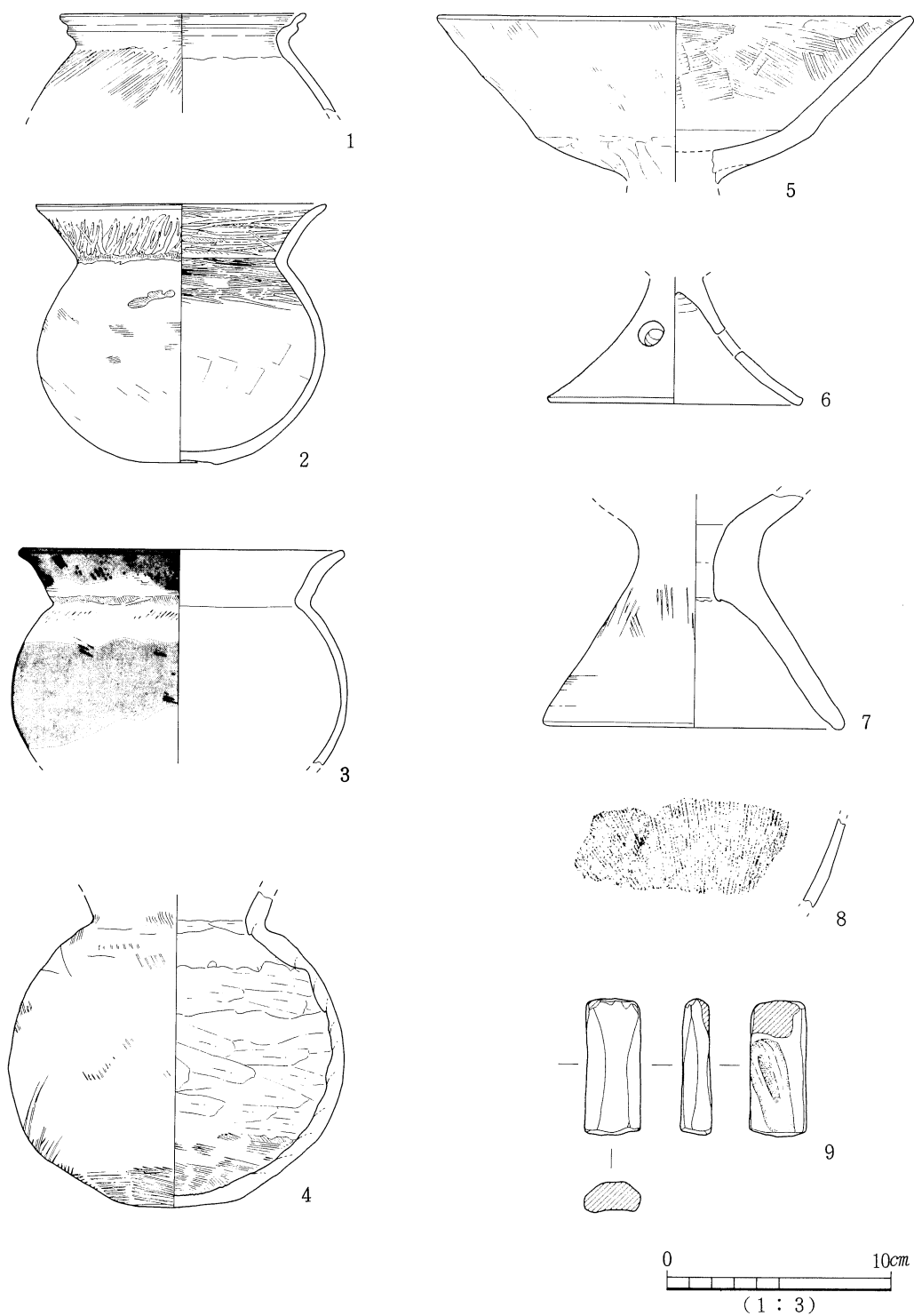
炉跡は北東寄りに位置し、プランは、長軸85cm、短軸60cmを測る楕円形で、住居の主軸と一致している。深さは、住居の床面から7cmで、最深部は北側に寄っている。

土壌は、南東隅の壁際に接し、ほぼ正方形を呈する。土壌覆土は、黒色土を主とする比較的柔らかい土で占られ、下層に少量の焼土粒を混入している。内壁、特に底部は平坦に整形されている。

遺物は、焼土の堆積が比較的少ない南東側に集中しており、床面直上からは、完形の甕1点と同形の小片を検出したのみである。床上5～20cmの間を含めた総数では、S字口縁を含む、甕3点、壺1点、高坏の坏部1点、同脚部1点、器台の脚部1点の他、携行砥石1点を検出した。覆土の上層出土を合わせ、計86点を数える。

第34表 K-22号住居跡ピット等計測値表

主 柱 穴 cm				柱 状 穴 cm				住 居 内 土 壌 cm			床面積 m ²
NO.	上 面	底 面	深 さ	NO.	上 面	底 面	深 さ	上 面	底 面	深 さ	
1	21・15	7・6	14	5	15・14	7.6	16.8	67	49		14
2	21・18	8・6	14.1	6	18・16	7.6	15.8	・	・	24	
3	19・17	10・8	14.3	7	21・18	7.4	9.7	59	45		
4	20・15	7・5	15.2	8	50・12	23.4	6.1				



第59図 K-22号住居跡出土遺物実測図

第35表 K-22号住居跡出土遺物観察表

挿図 NO.	器 種	(推) 法 量	胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
	遺存度	<残>					
1	甕	1 < 4.5 > 2 11	1mm以下の 微石粒, 長 石	外-口縁・横ナデ, 以下・斜め クシ目 内-口縁・横ナデ, 以下入念な ナデ	良 好 (硬)	外-黒 褐 色 暗 褐 色 内-明 褐 色	S字口縁
	破片						
2	甕	1 11.7 2 13.0 3 12.8 4 3.2	微 石 粒 山 砂 多 量	外-口縁・横ナデ, 頸・縦ハケ →縦ミガキ, 胴上半部・ハ ケ目→ミガキ, 下半部・入 念なナデ, 底・ケズリ 内-口縁・横ナデ, 頸・ハケ目 →横ミガキ, 肩・横ハケ, 胴・ミガキ, 下半部・ナデ →ミガキ	良 好 (硬)	外-淡・暗褐 色 内-上半・淡 褐色 下半・暗 褐色	
	100%						
3	甕	1 < 9.5 > 2 14.5 3 (15)	長 石 黒色粒多量	外-口縁・斜めハケ→横ナデ, 一部ハケ目廻る, 肩・胴・ ハケ→ナデツケ→ナデ 内-頸以上・横ミガキ, 以下入 念なナデ	良 好 (硬)	外-明 褐 色 内-明 褐 色 暗 褐 色	外面の口縁と 胴中位にスス 付着
	胴部以上 50%						
4	壺	1 < 14.2 > 頸 7.5 3 15 4 5.0	1mm以下の 石粒, 長石 白色土粒	外-頸・ハケ目→縦ナデツケ, 胴・クシ目→荒いヘラナデ ツケ→ナデ, 下端・横クシ 目, 底・ケズリ 内-頸・ナデツケ, 肩・指頭圧 痕, 胴・指ナデツケ, 下端 ・横クシ目	良 好 (硬)	外-明茶褐色 黒 褐 色 内-白っぽい 明 褐 色	内面は荒い調 整, 上位に輪 積痕
	頸以下 90%						
5	高坏	1 < 7.5 > 2 21.3 頸 4.0		外-体部・ハケ目→ナデツケ→ ナデ→ミガキ, 下位・横ヘ ラナデツケ, 底・縦ヘラケ ズリ 内-体部・横・斜めのハケ目, 底・ヘラナデツケ→荒いミ ガキ	良 好 (硬)	内外共に茶褐 色, 一部分, 暗茶褐色	
	坏部のみ 60%						
6	高坏 (赤彩)	1 < 5.6 > 4 11.5	1mm以下の 石粒, 長石	外-縦ミガキ 内-上端・回転ナデツケ, 以下 ・横ミガキ	良 好 (軟)	外-赤 褐 色 内-明 褐 色	孔・3か所 孔径・12mm
	脚部						
7	器台	1 < 10.5 > 頸 5.4	1mm以下の 石粒, 白色 土粒	外-中位・クシ目→ナデ, 下端 →横ナデ 内-上位・ナデツケ, 以下・横 ナデ	良 好 (硬)	内外共に 明茶褐色	
	脚のみ 100%	4 13.5					
8	甕	—	微 石 粒	外-縦ハケ目 内-入念なミガキ	良 好 (硬)	外-暗 褐 色 内-明 褐 色	
9	砥石	長・6.1 cm	巾・2.5 cm	厚・1.4 cm	重量・38 g	白っぽい 灰 褐 色	6面に使用痕
	95%	石質・砂岩					

K-23号住居跡は、K-22号住居跡の南壁に接し、両者の西壁は一線上にある。地形的には斜面から、埋没谷の堆積土上にかけて掘り込まれている。

住居跡のプランは、一辺 4.9mを測る正方形を呈する。残存の壁高は30cm、主軸方向は、N-23°-Wを指す。K-22号同様、遺構内は多量の焼土、炭粒を検出した。それらの中でも、建築主材である柱状の炭化材、屋根又は側壁に用いたとみられる。揃えた状態で炭化したイネ科の植物を検出している。

床面は、東側から中央一帯にかけて踏み締められている他、総じて硬質である。南側の約は谷の堆積土上に貼っているためか、中央部分に沈下現象がみられる。その他、得意な現象として、周壁から床面一帯にかけ、平均 2 cm巾、長さ 1～4 m前後の多数のヒビ割れが認められる。裂け目には、暗褐色土が流れ込んでおり、その上位は焼土に覆われている。

この現象は、ロームを床面とする、他の遺構にはみられず、調査範囲内では、本跡のみに限られている。確証はないが、本跡の焼失という事態を招いた原因との係わり合いも否定出来ない。

本跡の支柱穴は、4か所を検出した。東側と西側とでは、深さが異なる以外の差は認められず、覆土は、炭化粒を多量に含む暗褐色土で占められている。

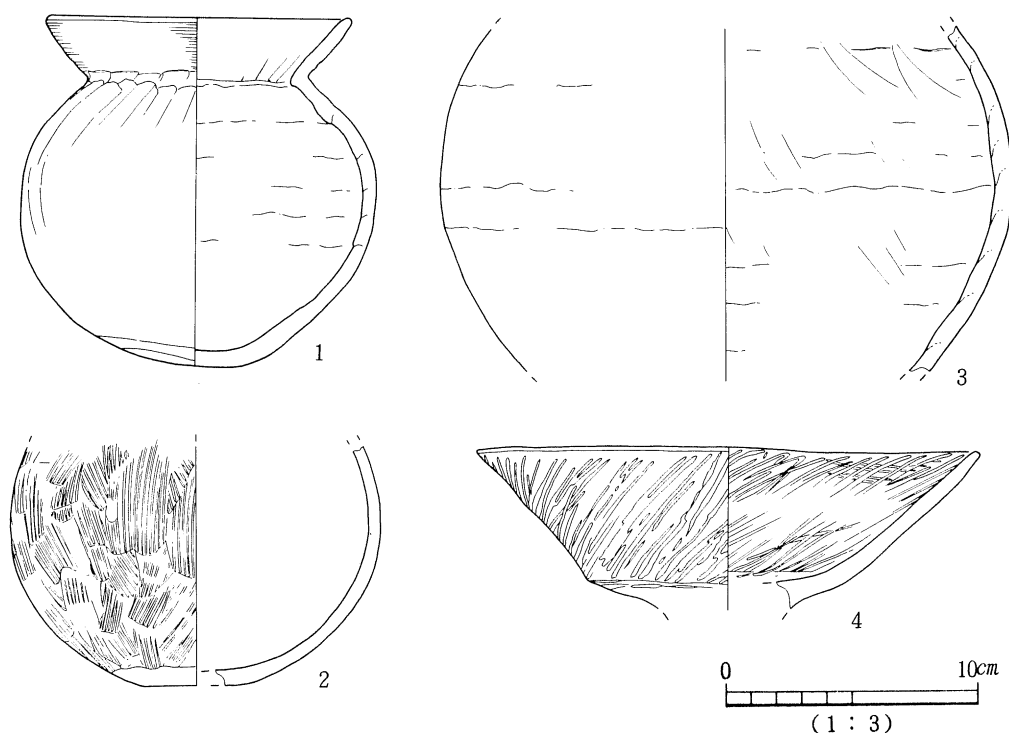
炉跡については、中央北壁に粘土の薄い広がりがあり、周囲に比べて、強く焼けた個所があるが、通常みられる炉の施設ではないようである。

土壌は、南東隅に位置し、プランは円形を呈する。底部は、内壁と共に整形されている。覆土は、焼土粒、炭粒、ローム微粒を含んだ黒褐色土で占められ、底部に近い部分では薄い炭粒の層がみられる。

遺物は、北壁から南西側にかけて、甕3点、高坏の坏部1点の他、床面直上から15点の破片を検出し、覆土の出土と合わせた総数は119点に及ぶ。

第36表 K-23号住居跡ビット等計測値表

主 柱 穴 cm				柱 状 穴 cm				住 居 内 土 壌 cm			床面積 m ²
NO.	上 面	底 面	深 さ	NO.	上 面	底 面	深 さ	上 面	底 面	深 さ	
1	23・21	10・8	61.6	5	22・19	6.5	17	68	42	60.6	24.4
2	23・20	5・5	29.2	6	33・26	26・20	7	・	・		
3	20・17	5・4	36.4	7	21・20	9.0	20	65	40		
4	19・18	4・3	48.7	8	17・15	3.5	355				

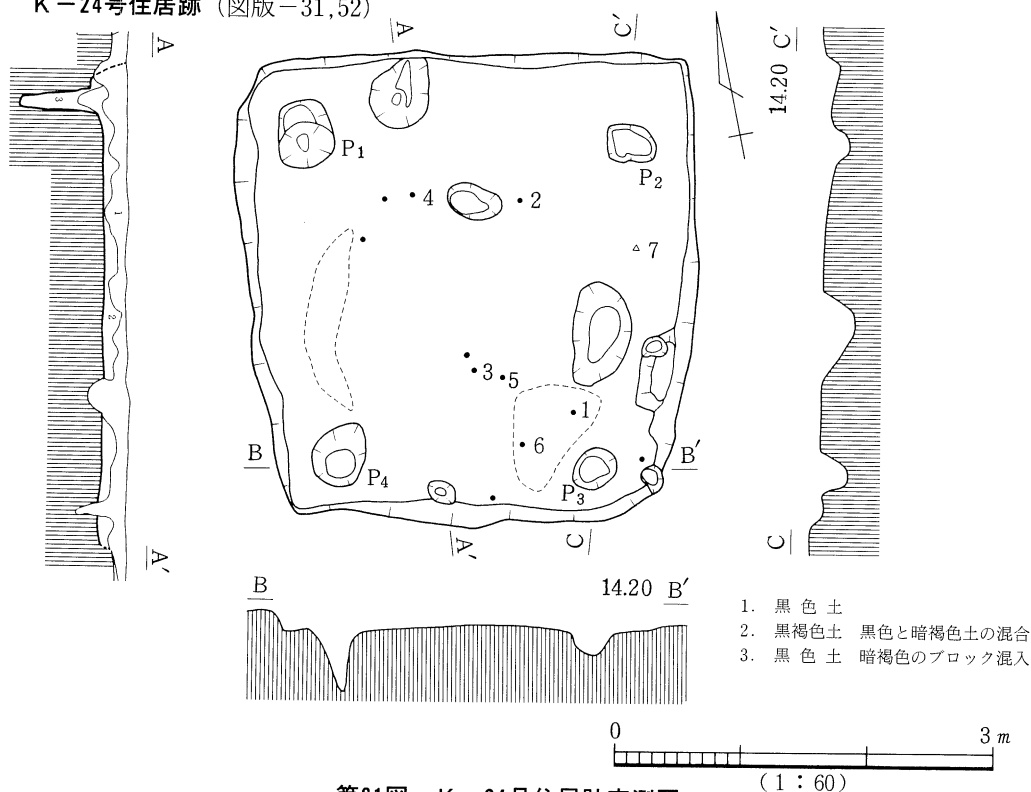


第60図 K-23号住居跡出土遺物実測図

第37表 K-23号住居跡出土遺物観測表

挿図 NO.	器 種	(推) 法 量 〈残〉	胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
	遺存度						
1	甕	1 13.8 2 12.2 3 14.0 4 7.0	1mm以下の 石英系石粒	外-口縁・横ナデ, 頸以下肩・ 斜めヘラナデツケ, 胴・ヘ ラナデ, 下端から底・ヘラ ケズリ 内-口縁・横ヘラナデ, 以下ナ デ	良 好 (硬)	内外共に底部 暗褐色, 以下 茶褐色	底部は削り出 して丸味を帯 びる 内面の胴に輪 積痕あり
	全体の 90%						
2	甕	1 < 9.5 > 3 (14.5) 4 4.5	赤 色 土 粒	外-縦クシ目, 下端・横ミガキ, 底・クシ目 内-上半部ナデ, 下半部・縦ミ ガキ	良 好 (硬)	外-暗・明褐 色 内-淡 褐 色	球体
	胴・底部 の 30%						
3	甕	1 < 13.5 > 3 22.5	長 微 石 粒	外-全面入念なナデ, 輪積痕残 る 内-全面入念なナデ, 輪積痕残 る	良 好 (硬)	内外共に 褐 色 暗 褐 色	球体
	胴中位 100%						
4	高坏	1 < 6.5 > 2 20.0	長 金 雲 母	外-一体部・斜めヘラミガキ, 底 ・入念なナデ 内-横・斜めのミガキ	良 好 (硬)	内外共に 赤 褐 色	本跡焼失時の スス付着
	坏部のみ 80%						

K-24号住居跡 (図版-31,52)



第61図 K-24号住居跡実測図

K-24号住居跡は、本道部の南側に入り込む、埋没谷の南側台地端に位置する。周辺一帯は牛蒡畑として耕作されているため、遺構の損傷が激しい。

住居跡のプランは、長軸3.52m、短軸3.34mと、南側がやや狭まる形の不正方形を呈する。

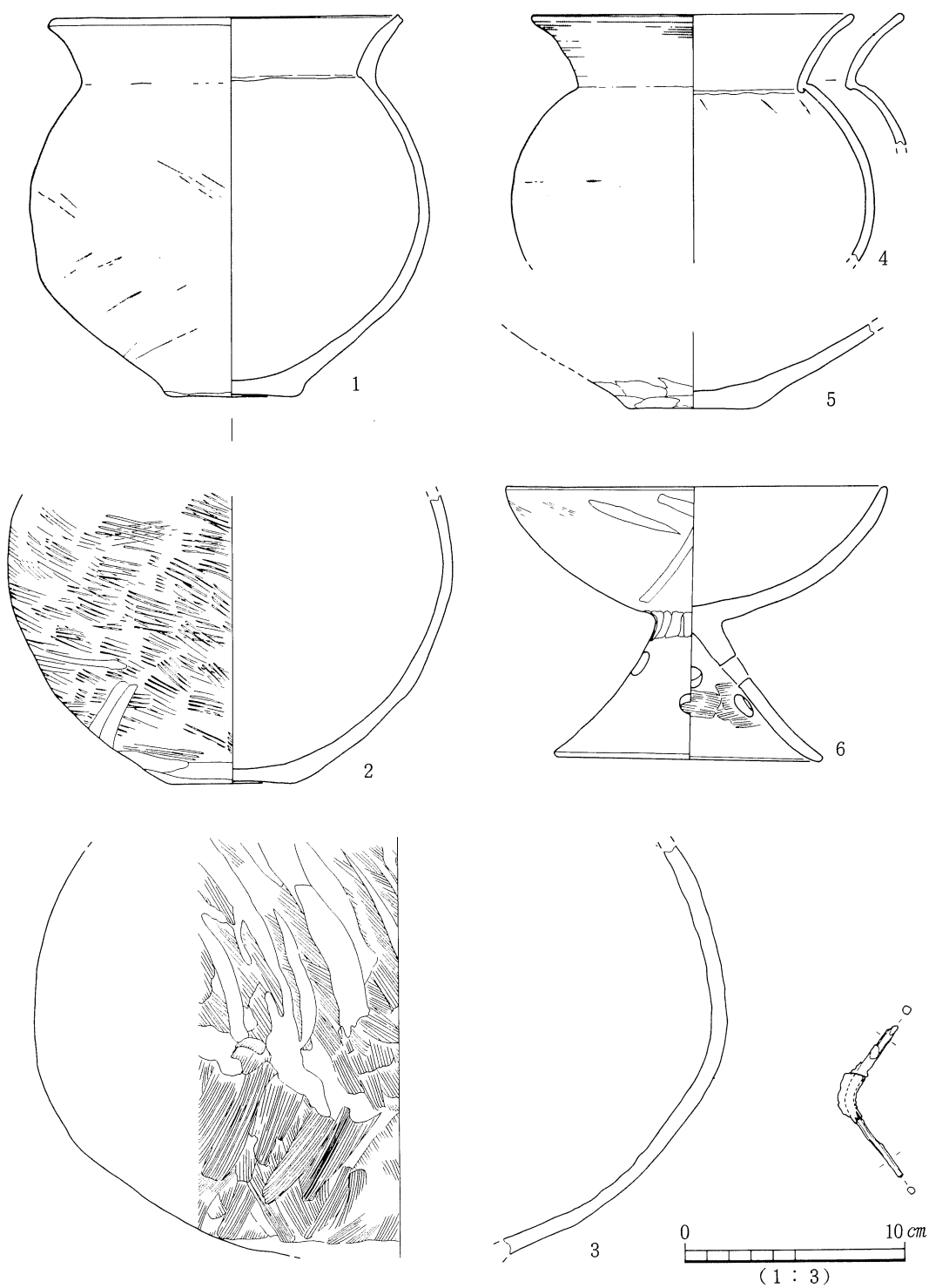
主軸はN-10°-Wを示す。床面は、局部的に遺存するのみであり、壁溝は不明確である。

主柱穴は、4か所を検出した。この内、東側のP₂・P₃は西側に比べて極端に浅く、P₃のみ、底部に少量の粘土を含む暗褐色土で覆われている、炉跡は、北側の主柱穴P₁・P₂の中央やや内側に小ピットが位置し、若干量の焼土を検出するが、床の焼けは認められず、炉の可能性は薄いと思われる。

第38表 K-24号住居跡ピット等計測値

遺物は、甕4点、高坏1点、鉄製品1点を検出した。これらは散乱状態を呈し、覆土の攪乱状態と合せ、かなりの移動が考えられる。

主 柱 穴 cm				柱 状 穴 cm				床面積 m ²
NO.	上 面	底 面	深 さ	NO.	上 面	底 面	深 さ	
1	45・37	14・9	51	5	44・26	31・18	16	11.3
2	43・31	35・22	9	6	23・17	14・11	13	
3	38・30	22・19	16	7	25・18	9・6	10	
4	53・41	24・23	52					



第62図 K-24号住居跡出土遺物実測図

第39表 K-24号住居跡出土遺物観測表

挿図 NO.	器 種	(推) 法 量 〈残〉		胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
	遺存度							
1	甕 全体の 90%	1	17.4	微 石 粒 白 色 粒 (スコリアか)	外ー口縁・横ナデ, 以下・全面 ナデ 内ー口縁・横ナデ, 以下ナデ→ ミガキ	良 好 (硬)	外ー黒 褐 色 暗赤褐色 内ー班紋状の 暗褐色	木ノ葉底 調整は全体に 荒い, 胴下位 以上にスス付 着
		2	16.7					
		3	18.2					
		4	6.4					
2	甕 胴・底部 60%	1	〈 13 〉	石粒, 微石 粒多量	外ー胴・横クシ目, 下端から底 ・ヘラナデツケ 内ー全面ナデ	不 良	外ー褐色・暗 褐色 内ー明 褐 色	内底に焼成時 のヒビ入る
		3	(20.0)					
		4	5.7					
3	甕 胴部片	1	〈 19.4 〉	長 石 微 石 粒 赤 色 土 粒	外ー斜めハケ目→上位に縦ヘラ ナデツケ 内ー入念なナデ	良 好 (硬)	外ー暗 褐 色 内ー明 褐 色	内面に輪積痕
		3	31.5					
4	甕 胴以上 70%	1	〈 11.4 〉	長 石 微 石 粒	外ー口縁・横ナデ, 胴・全面ナ デ 内ー口縁・横ナデ, 胴・全面ナ デ	やや 不良	外ー明茶褐色 内ー赤 褐 色 暗 褐 色	球体, 口縁と 胴中位にスス 付着
		2	14.7					
		3	16.5					
5	甕 底部	1	〈 3.8 〉	2mm以下の 白色土粒, 微石粒多量	外ー胴・ヘラナデ, 下端・横ヘ ラケズリ, 底・ケズリ 内ー入念なナデ	良 好 (硬)	外ー茶 褐 色 内ー褐 色	
		4	6.0					
6	高坏 全体の 80%	1	12.6	微 石 粒 山 砂	外ー坏・斜めハケ目→ナデ, 頸 ・縦ナデツケ, 脚・縦ミガ キ, 下端・横ナデ 内ー坏・縦ハケ目→放射状・ミ ガキ, 脚・ナデ, 中位に横 ハケ目	良 好 (硬)	外ー暗・淡褐 色 内ー暗・淡褐 色 脚内・暗褐色 黒褐色	孔×5か所 孔径・12mm
		2	17.2					
		頸	3.1					
		4	12.2					
7	金具	長・6.6 mm, 径・5 mm, くの字形に折れている鉄製品						

4. 歴史時代 (図版-32~38)

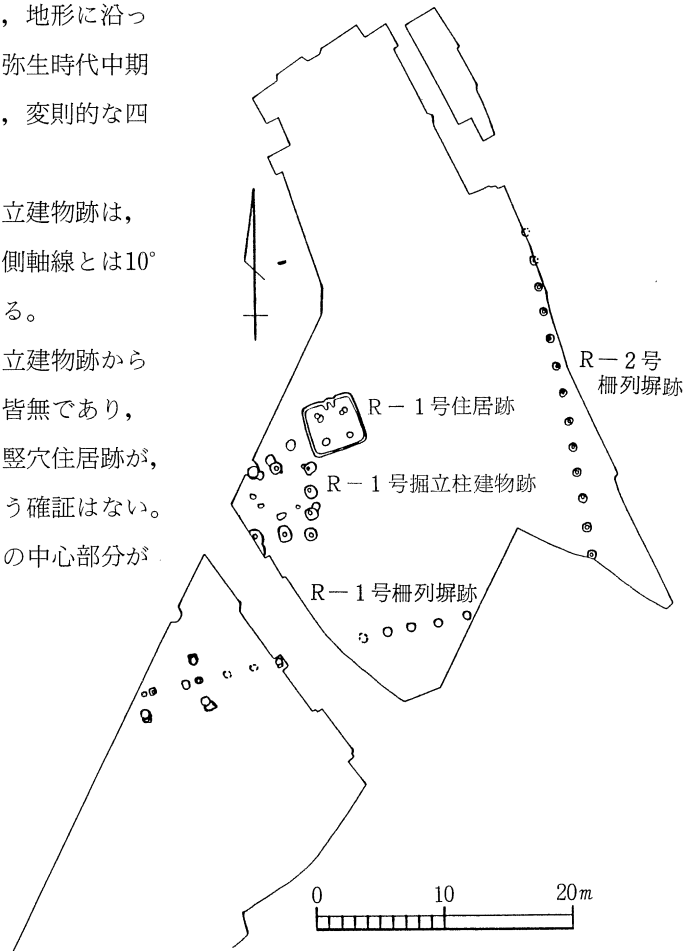
歴史時代の遺構は、竪穴住居跡1軒、掘立建物跡1棟、四脚門跡1か所と柵列跡を検出した。

立地的には、南側の埋没谷方向へ緩い傾斜が始まる変換点付近に、門跡を伴う東側の柵列跡が東西に延びている(西側は未調査)。柵列の東隅部分は、埋没谷の開口部付近とみられており、そこから、 88° 北方向に折れ、地形に沿って直線的に延びている。門跡は、弥生時代中期の環濠跡を跨ぐように掘り込まれ、変則的な四脚門(南門)跡をとどめている。

竪穴住居跡の南隣りに検出の掘立建物跡は、 3×4 間以上の規模で、柵列の南側軸線とは 10° 又、東側軸線とは 4° と振れている。

この門跡及び柵列跡、更には掘立建物跡からは、それに伴うとみられる遺物は皆無であり、唯一、8世紀代の遺物を検出した竪穴住居跡が、必ずしも同時期の所産であるという確証はない。

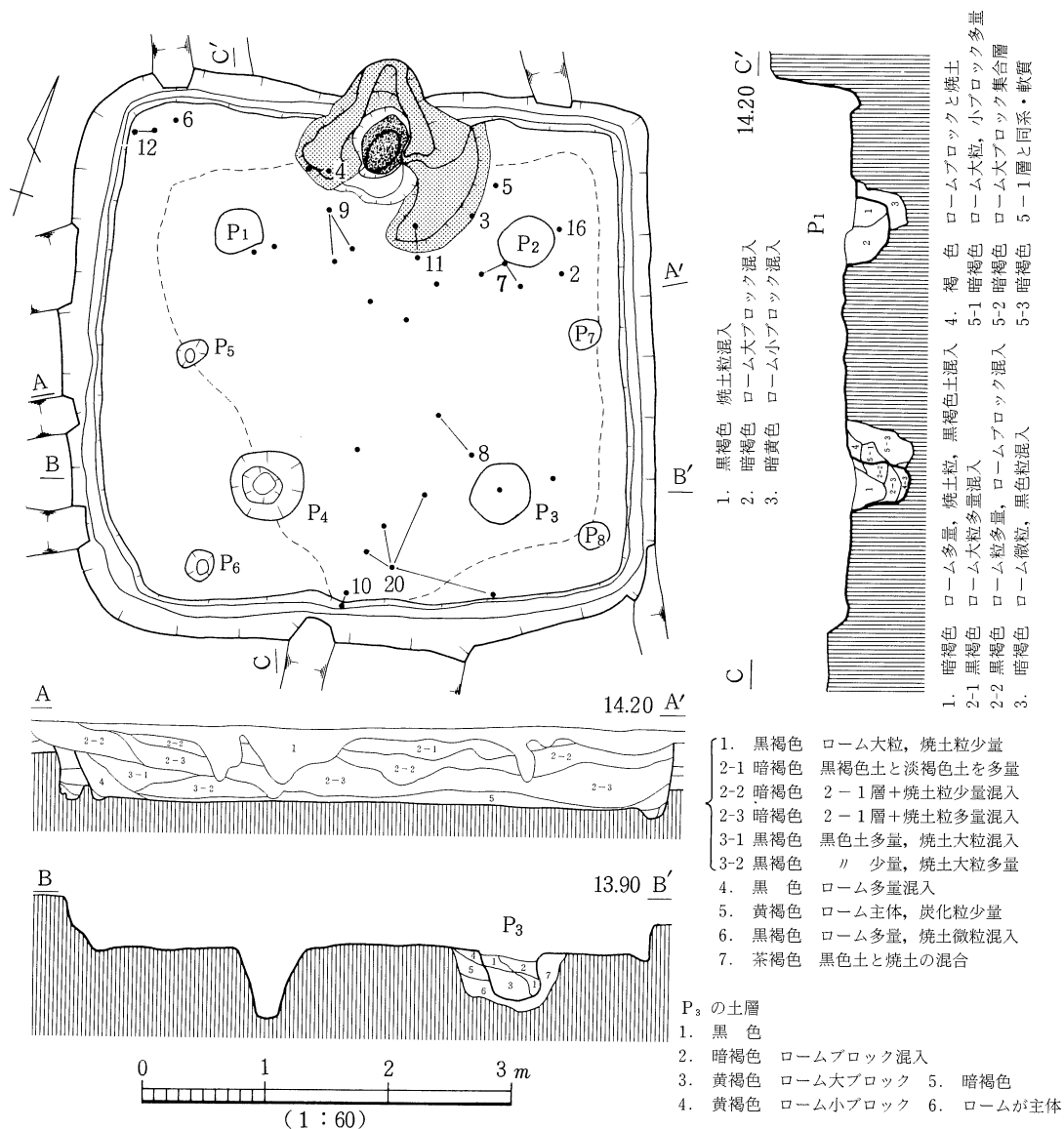
これら一連の遺構の解明は、その中心部分があると考えられる西側の調査を待つ以外に方法はないと思われる。



第63図 歴史時代の遺構全体図

R-1号住居跡は、本道部の北西寄り、地形的には、南側の埋没谷から20m、北東の沖積地からは約30mほど奥まった台地上に位置する。当遺跡中最大規模のK-14号住居跡の西側を切り込んでいる。更に、同時期と推定される柵列跡の南辺及び東辺部からの距離は、共に15mを測る。主軸方向はN- 33° -Wを指し、柵列の東辺部の軸線とも一致している。本跡は全掘の結果、2度の建て替えが判明した。

R-1号住居跡 (図版-32~53)



第64図 R-1号(歴史時代)住居跡実測図

住居跡のプランは、西側が丸味を帯びる方形を呈する。規模は、長軸 4.4m、短軸は 4.2m を測り、ほぼ正方形に近い。残存の壁高は40cmと遺存状態は良好である。

床面は、南壁中央から、カマドに到る間と、カマドの両面部分に硬質面が認められる他は、総じて軟質である。壁溝はカマド下で途切れている他は、完周している。

主柱穴は、P₁~P₄の4か所を検出した。4か所共に建て替え前の柱穴は利用しておらず、新

たに掘られ、一部は重複している。主柱穴では、北側に比べ南側は間隔が狭く、外側に2か所ずつ検出の小ピットとの係わりが推定される。

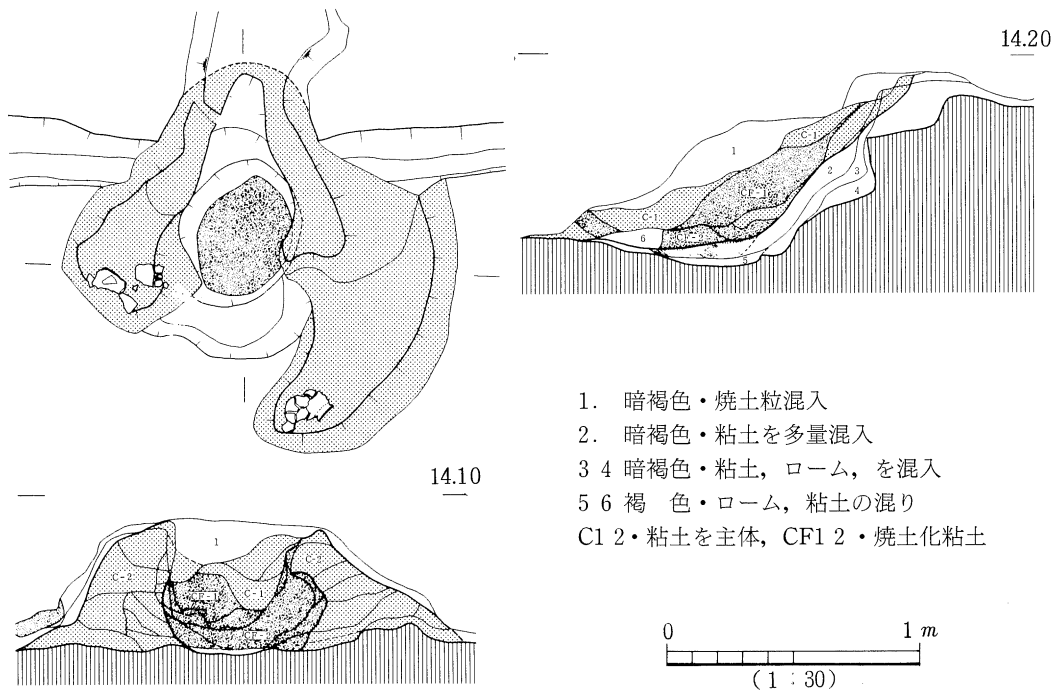
第40表 R-1 住居跡ピット等計測値

主 柱 穴 cm				柱 状 穴 cm				床面積
NO.	上 面	底 面	深 さ	NO.	上 面	底 面	深 さ	m ²
1	38・35	18・15	59.5	5	28・20	10・8	23	16.3
2	46・41	20・18	60.0	6	26・25	13・10	18.7	
3	50・48	20・15	60.5	7	28・25	10・7	22.5	
4	61・61	19・15	60.5	8	25・22	12・10	21.0	

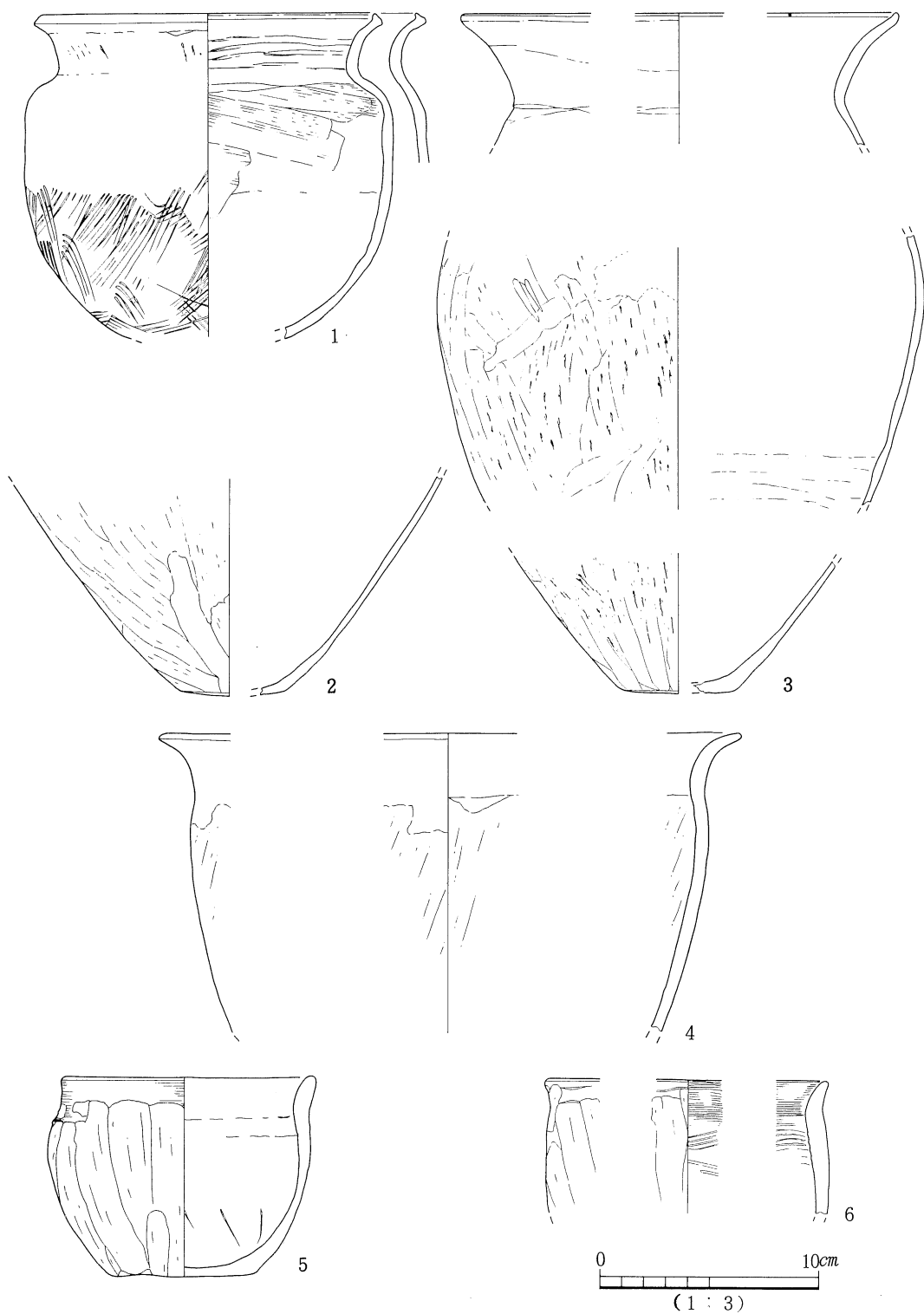
主柱穴は、1か所共に引き抜かれた状態を示す。

カマドは、北壁中央に位置する。右袖の先端には、舌状に張り出した粘土による台状施設がある。台状の上面は平坦に整形されており、単なる流出粘土とは考え難い。カマドの内壁は、半円状を呈し、ヘラ状工具によるナデツケ痕が残っている。火床は壁に接し、側壁と共に強く焼けている。煙導は短く、より上方は不明乍ら、粘土、焼土等がみられないことから、急角度に立ち上がるものと考えられる。

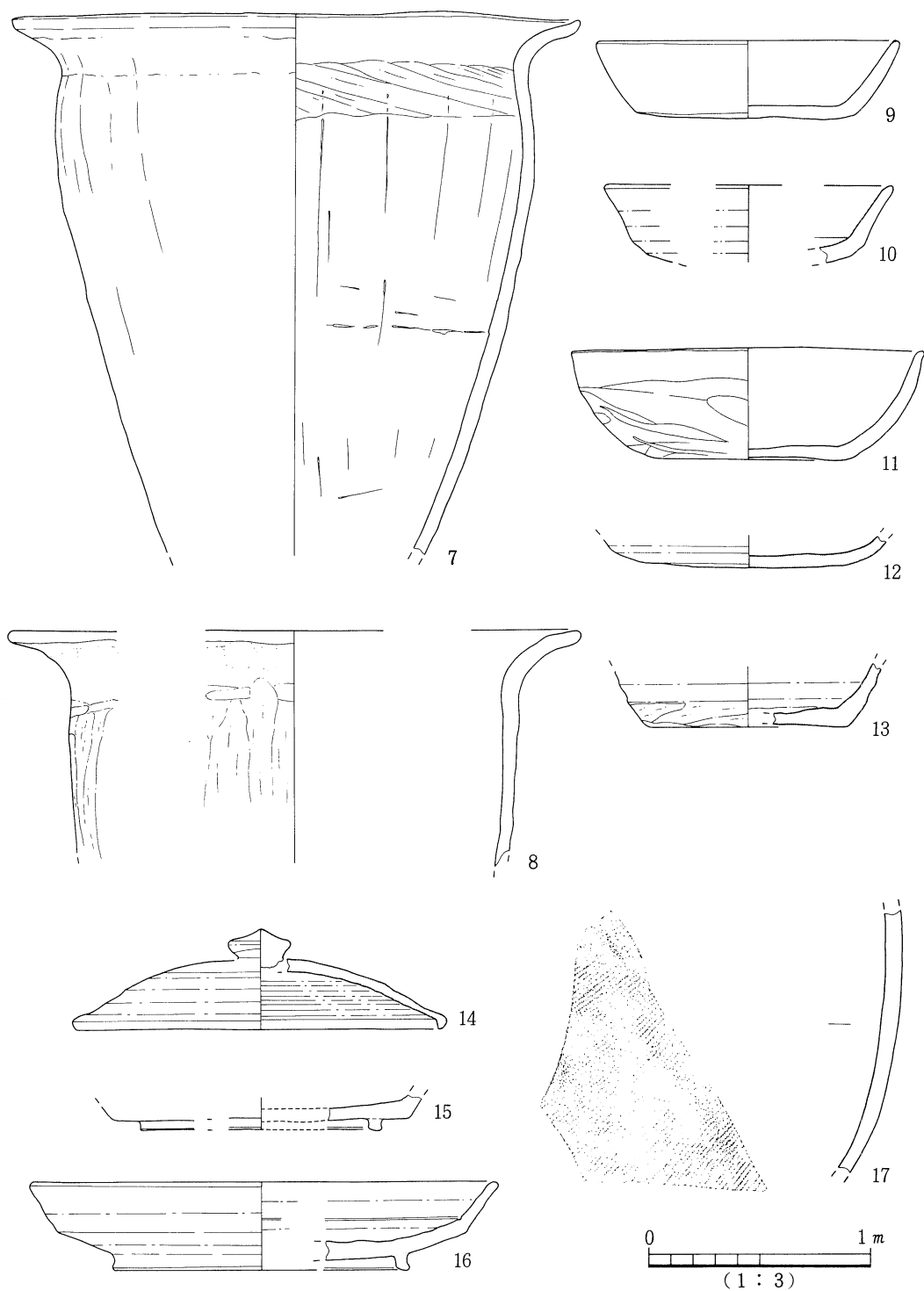
遺物は、南壁中央から、カマド前面の間に散乱した状態で検出された。内訳は、甕7点（内2点は鉢に近い破片）、甑2点、須恵2点を含む坏を5点、須恵蓋1点、高台付皿2点（内1点はいわゆる高台付盤と称されるもの）、須恵甕の破片3点、支脚片1点の他、鉄製品1点を含め74点を超える。その他、覆土の出土数は790点に及ぶ。



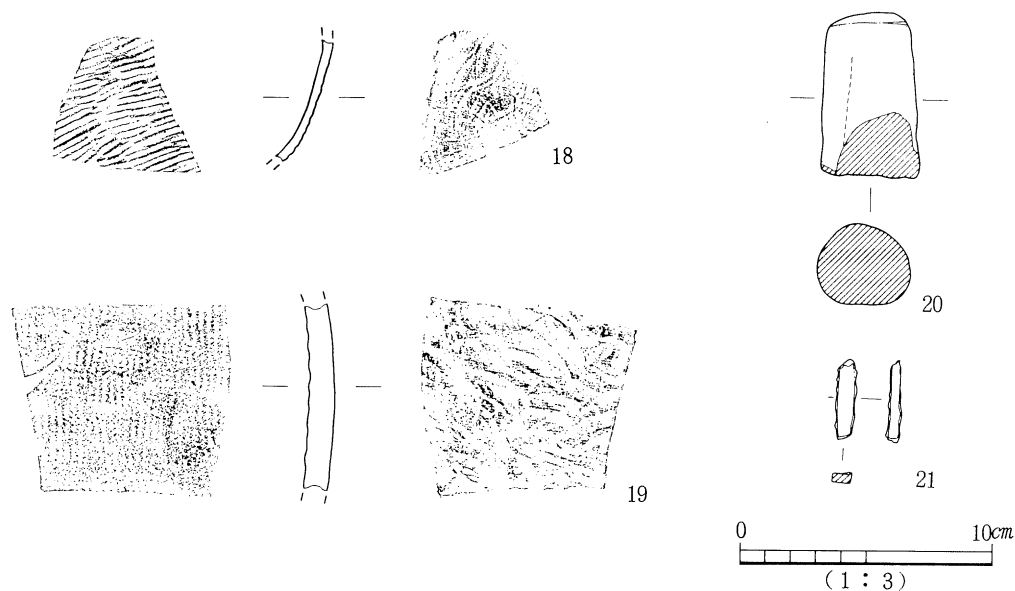
第65図 R-1 号住居跡カマド実測図



第66図 R-1号住居跡出土遺物実測図-1



第67図 R-1号住居跡出土遺物実測図-2



第68図 R-1号住居跡出土遺物実測図-3

第41表 R-1号住居跡出土遺物観察表

挿図 NO.	器 種 遺存度	(推) 法 量 〈残〉	胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
1	甕 全体の 60%	1 < 15.0 > 2 (16.0) 3 4 丸 底	微 石 粒	外-口縁から胴中位〜ナデ以下 はクシ目からナデ 内-口縁・横ナデ, 頸・横クシ →ナデツケ, 肩・クシ目→ ナデツケ, 胴・ナデ・指頭 圧痕	良 好	外-明 褐 色 内-淡 褐 色	
2	甕 底 部	1 < 10.0 > 2 4 5.0	微 石 粒	外-縦ヘラズリ, 一部ナデツケ 内-入念なナデ	良 好	外-淡 褐 色 内-暗 褐 色	肉厚は 2.5mm
3	甕 口縁 20% 胴 40% 底 30%	1 < 6.0 > 2 (20) 3 (22) 4 5.0	微 石 粒	外-口縁・頸・横ナデ, 胴・縦 ヘラナデ 内-全面入念なナデ, 胴中位に 強いナデツケ	良 好 (硬)	外-淡 褐 色 内-淡 褐 色	肉厚は 3 mm
4	甕 破 片	1 < 13.5 > 2 25 3 21.5	長 石 等	外-口縁・頸・横ナデ, 胴・縦 ヘラナデ 内-口縁・頸・横ナデ, 胴・縦 ヘラナデ	良 好	外-暗 褐 色 内-暗 褐 色	
5	鉢 全体の 80%	1 9.2 2 11.6 3 (12) 4 6.5	長 石 多し	外-口縁・横ナデ, 以下縦ヘラ チズリ 内-口縁・横ナデ, 以下入念な ナデ, 底・粗雑	やや 不良 (軟)	外-暗 褐 色 内-茶 褐 色	

挿図 NO.	器 種	(推) 法 量	胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
	遺存度	<残>					
6	鉢	1 < 6.3 > 2 (13) 3		外ー口縁・横ナデ, 以下縦ヘラ ナデツケ 内ー口縁・横ハケ, 胴上位横ク シ以下ヘラナデ	良 好 (硬)	外ー暗 褐 色 褐 色 内ー暗 褐 色 茶 褐 色	全体に厚く, ぼってりした 感
	口縁の 25%						
7	甌	1 < 12.0 > 2 (20) 3	石 粒	外ー口縁・横ナデ, 肩以下, ヘ ラケズリ→ナデツケ→軽い ミガキ 内ー口縁・横ナデ, 斜めヘラナ デツケ, 胴・ヘラケズリ→ 入念なナデ	良 好	外ー茶 褐 色 黒 褐 色 内ー茶 褐 色	内面胴下位に 輪積痕残る
	大型片						
8	甌	1 < 12.0 > 2 (26)	2mm以下の 石粒と長石	外ー口唇・横ナデ, 頸・指頭圧 痕・胴・縦ヘラケズリ 内ー入念な横ナデ	良 好 (硬)	内外共に 明 褐 色 暗 褐 色	
	破 片						
9	坏	1 3.5 2 13.5 4 9.7	2mm以下の 石粒と長石 多量	外ーヘラケズリ (表面磨減) 内ーナデ? (表面磨減)	不 良 (軟)	外ー淡 赤 色 内ー淡 褐 色	
	全体の 50%						
10	坏 (赤彩)	1 < 3.5 > 2 (13)	微 石 粒 白 色 土 粒	外ー体部・ロクロ挽き, 底・ヘ ラナデ 内ー入念な横ミガキ	良 好 (軟)	外ーくすんだ 赤 褐 色 内ー暗 赤 色	高坏か?
	全体の 20%						
11	坏	1 5.0 2 14 ~16 4 9.0	石英系石粒 長石, 雲母	外ー口縁・横ナデ, 以下ヘラケ ズリ→ミガキ 内ー入念なミガキ	良 好 (硬)	内外共に 明赤褐色	全体に歪みがある
	全体の 90%						
12	須恵坏	1 < 2.8 > 4 9.0	微 石 粒 白 色 土 粒	外ー体部上位・ロクロ挽き, 下 位・横ヘラケズリ, 底・静 止ヘラケズリ 内ーロクロ挽き	良 好 (軟)	内外共に 灰 褐 色	
	体部の 50%						
13	須恵坏	1 < 1.5 > 4 9.0	白 色 土 粒	外ー体部・ロクロ挽き, 底・回 転ヘラケズリ→ナデ 内ーロクロ挽き	良 好 (硬)	内外共に 淡茶褐色 赤茶褐色	火ダスキ
	底部の 90%						
14	須恵蓋	1 7.8 2 17.0	黒 色 白 色 土 粒	外ー体部上位・回転ヘラケズリ 以下内外共ロクロ挽き	良 好 (硬)	内外共に 淡茶褐色	
	全体の 50%						
15	須恵坏 高台付	1 < 1.5 > 4 10.8		ロクロ挽き	良 好 (軟)	内外共に 明 灰 色	
16	須恵皿 (高台付盤)	1 4.0 2 (21) 4 13.5	石英系石粒	ロクロ挽き	良 好 (軟)	内外共に 乳 灰 色	
	全体の 25%						
17	須恵甕			外ータタキ目	良 好	灰 褐 色	
18	須恵甕			外ータタキ目 内ー	〃	明 灰 色	
19	須恵甕			外ータタキ目 内ー	〃	灰 褐 色	
20	支脚	1 < 6.5 >		入念なミガキ, 指の圧痕	良 好	淡 褐 色	

R-1号掘立柱建物跡 R-1号住居跡（竪穴）の南隣りに位置している。検出した規模は南北は4柱3間、東西は西側が未掘のため、4間又はそれ以上としか判明しない。南北の柱の間は、平均1.9mに対し、東西では2.2m前後を測る。南北の主軸は、N-3°-Wを指す。

柱穴は、上端に比べて基底面が広い箇所もあり、壁は垂直又は、オーバーハング状に掘り込まれている。柱穴のプランは、円形、楕円形、長円形と一定していない。柱穴の規模は、80～110cm、残存壁高は平均で80cmを測る。柱痕は比較的よく残っており、柱の径は20cm前後を測る。柱穴の内、a-1～3柱、c-1柱、d-2、3柱には隅丸長形状の掘り込みがみられるが、柱の抜き取り穴ではないようである。本跡以前の柱穴の可能性もあるが、現時点では不明確である。

本跡の特徴は、床柱を伴うことであり、床貼り（板貼り）式の住居跡としてとらえられる。

R-1号・2号柵列塀跡 1号は南辺部に検出された掘立柱塀を指す。軸線は、E-5°-N方向に設定され、柱穴は私道の東側に5基、西側に5基の計10基を検出した。プランは円形を呈し、径は50～60cm、残存壁高は50～70cmを測る。壁は垂直状に掘り込んだものが多い。基底部分は柱の径の部分が1段深い有段を呈する。柱の径は、14～17cm程である。

本跡の西端には、門が設けられている。門跡は、弥生時代中期の環濠跡の両壁に主柱をもつ四脚門である。南北は3.8m、東西は4.6mを測り、先の掘立柱建物跡の東西列の3柱分、及び南北列の3柱分と一致する。柱穴のプランは楕円形で、平均70cmを又、残存壁高は110cmを測る。柱の径は15cm前後である。

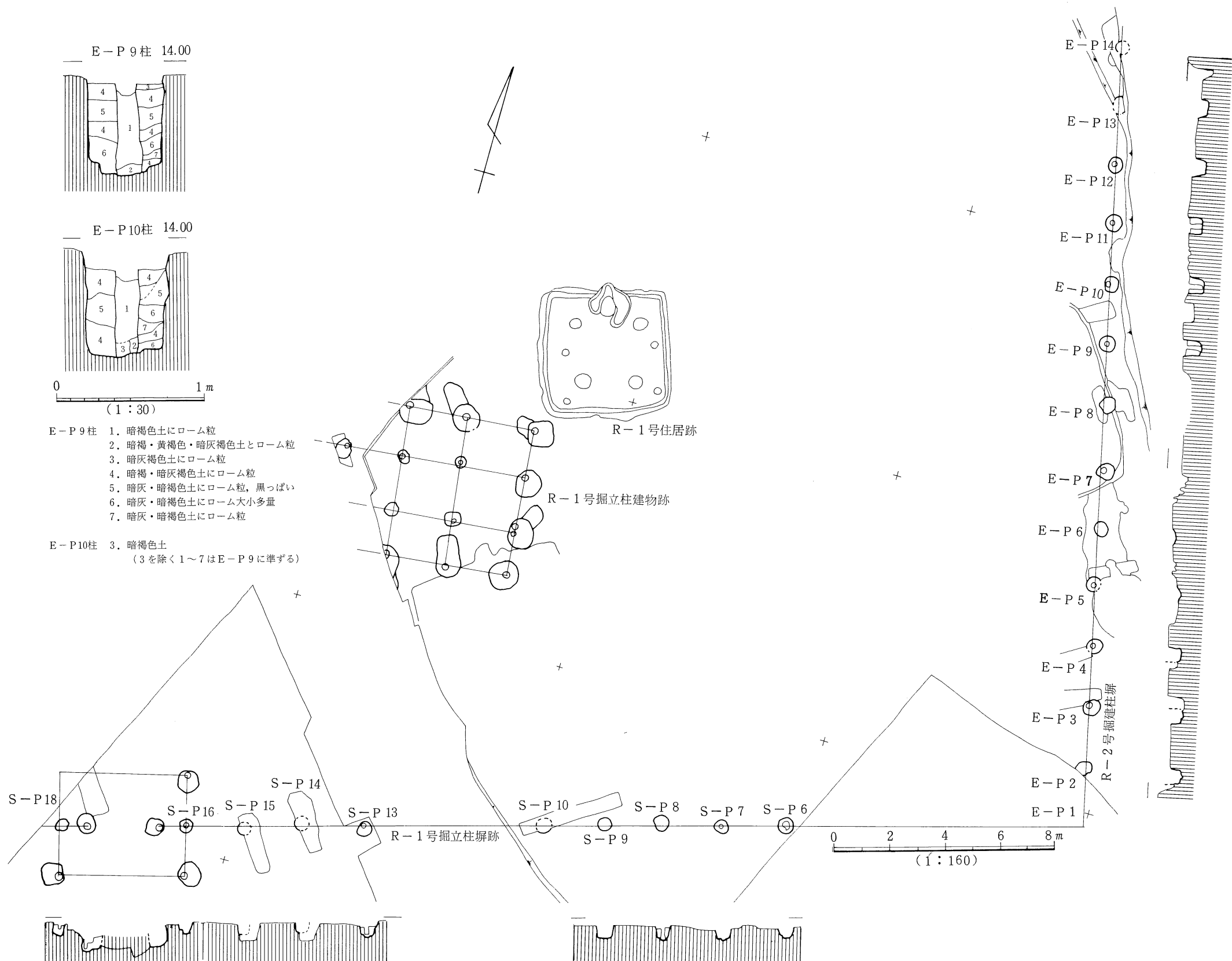
門の内側の左右には、柵列塀の軸線上に位置する妻中央柱（S-16柱、18柱）の内側に、中規模の柱穴2本を検出している。位置から、あるいは扉を付した柱とみられる。

1号の柵列塀跡に対し、2号は東辺部の遺構であり、全長24m部分の13基の柱穴を検出した。

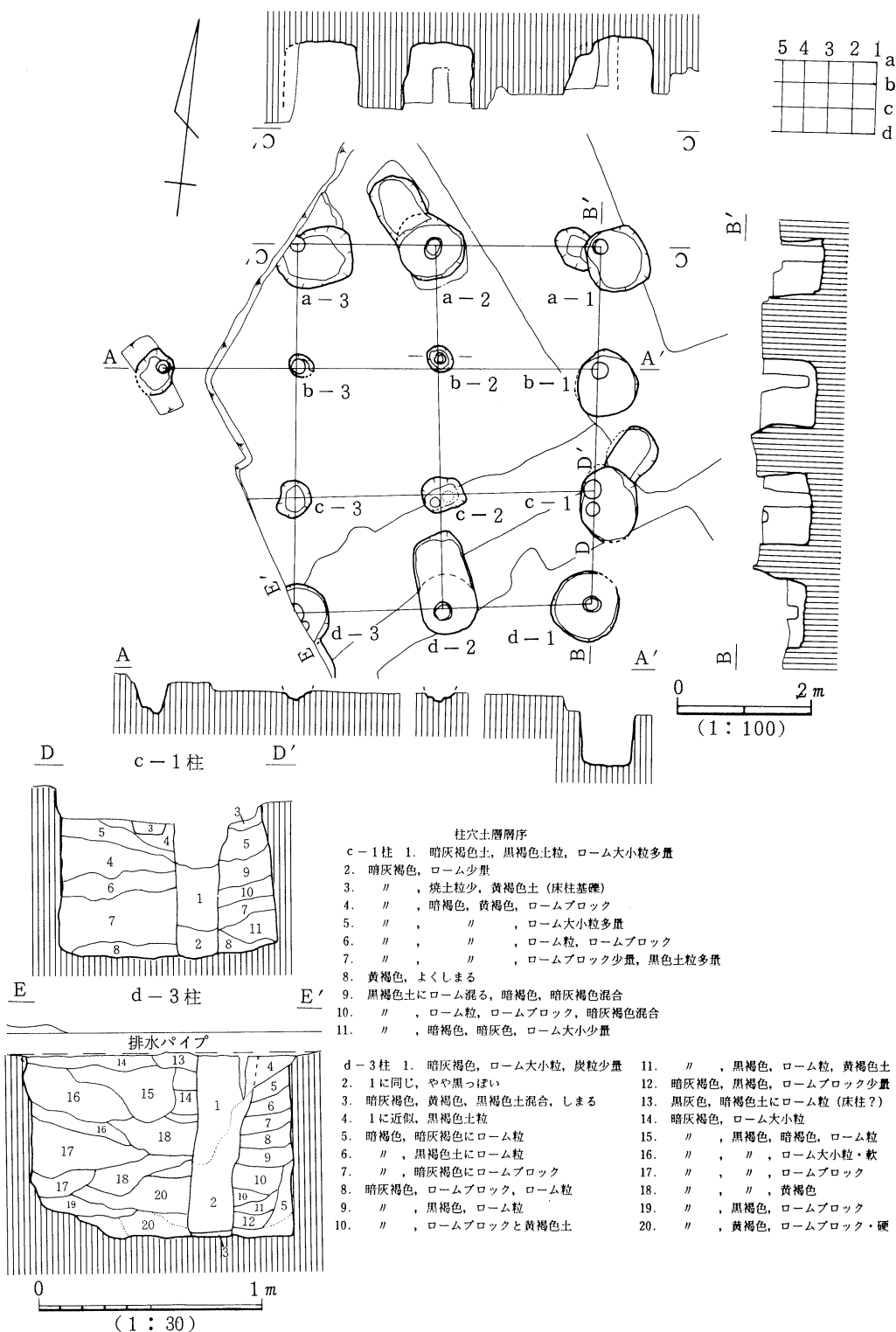
軸線はN-14°-Wを指し、南側遺構とは直角ではなく、2°東に開いている。柱穴の規模、形状は南側遺構と同様である。

以上が検出した限りにおける、本跡の概要である。これら一連の掘立柱式建築物が、先のR-1号住居跡（竪穴式）と時期的には、同じ奈良時代の遺構である可能性は大きい、掘立柱建物跡と接近しており、同時に存在したとは言い切れない。

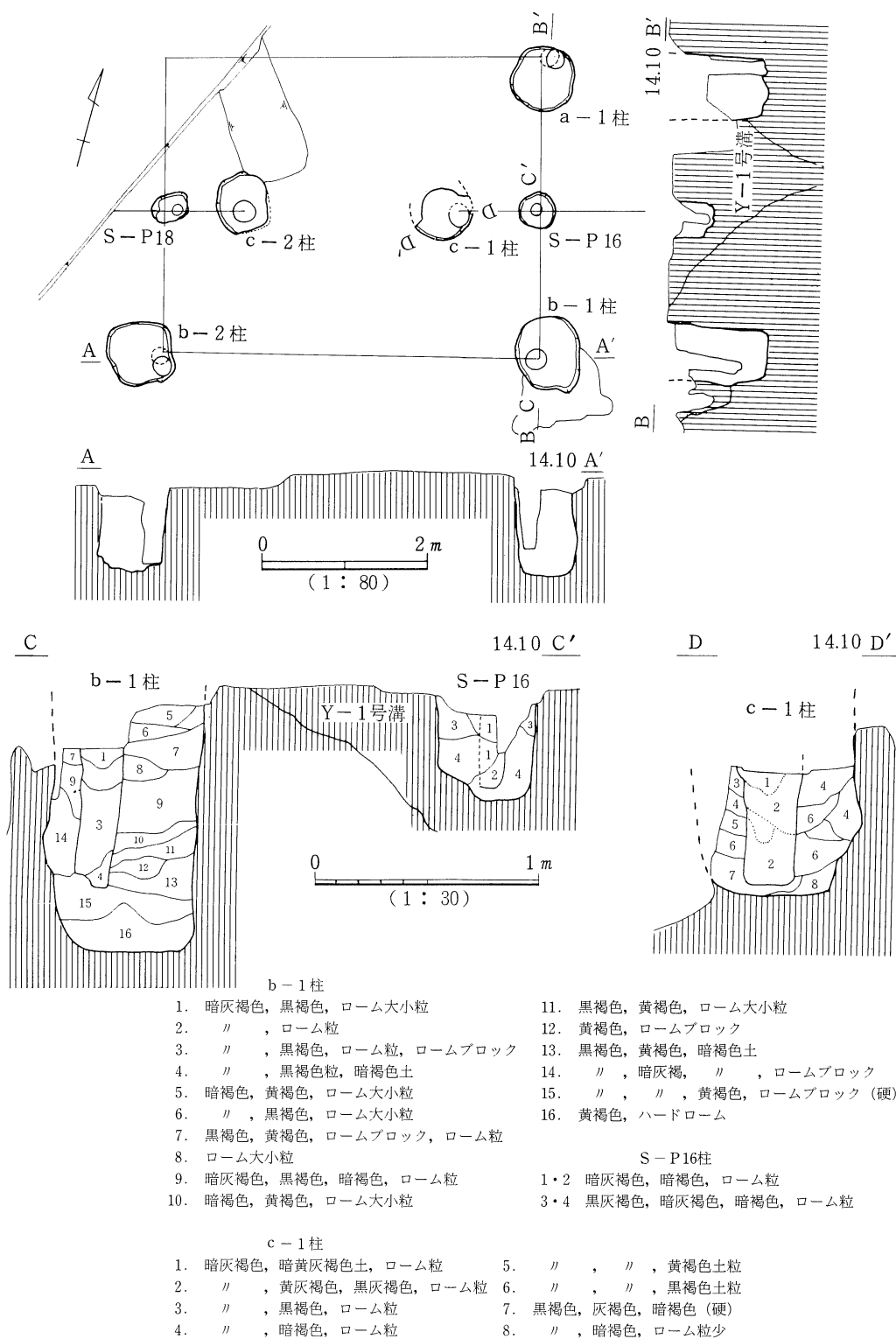
尚、本跡の発掘では、当センターの宮本敬一氏のご協力をいただいた。



第69図 歴史時代遺構・R-1号・2号柵列堀跡全測図 (図版-37,38)



第70図 R-1号掘立柱建物跡（図版-35,36）



第71図 R-1号門跡 (図版-37)

5. 時期不明遺構

調査成果の内、時期的に不明確な遺構は、土壇、溝跡、路跡などがある。その内の数か所は、遺物を検出するものもあるが、土層、土質及び遺物の時期巾などから、必ずしもその遺構に伴うとは限らない場合もある。ここでは、X記号を付するが、大まかには時期分けが可能な遺構も含めて、その性格別に記述した。

1) 土壇 調査地域内検出の土壇は、縄文時代に比定されるものを除き6基を数える。プランは、円形、方形、長方形、楕円形と様々である。

X-1号土壇 北西隅み切りの北端に位置する。プランは長方形を呈する。規模は、長軸 cm、短軸 cmを測る。上位の大部分を攪乱によって失い、残る壁高は1～4cm部分である。側壁、底面共に荒く掘られており、微量の覆土はロームを多く含んだ暗褐色系の軟質土である。

X-2号土壇 K-4号住居跡北端に位置する。プランは円形を呈する。規模は、上端78cm、下端は16cm、残存壁高は65cmを測る。覆土は、下層に炭化層、焼土層があり、上層は黒色土系で占められるが、総じて軟弱である。

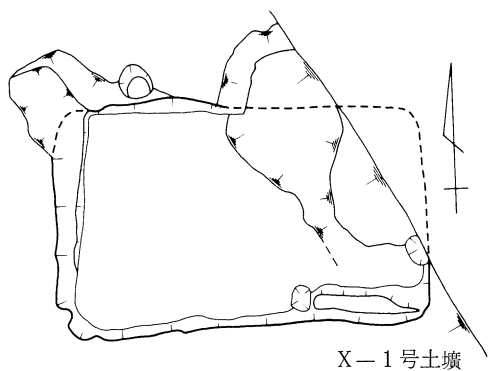
遺物は、古墳時代の中期に比定の甕の大型片と、石油製品とが混在している。この内、甕は、K-4号住居跡に伴うとみられる。

X-3号土壇 K-10号住居跡の北、約5mに位置する。プランは長方形を呈する。規模は長軸 cm、短軸 cm、残存壁高は42cmを測る。南側は市営水道で、北側は攪乱などによって失なわれている。覆土は大型のロームブロックを多く含む暗褐色土で占められ、攪乱気味である。

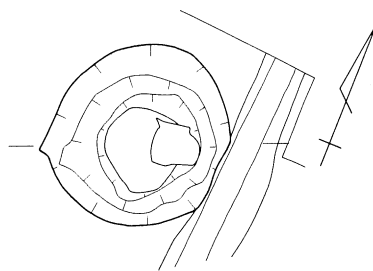
X-4号土壇 K-9号住居跡の北西隅に位置する。プランは丸味を帯た長方形を呈する。規模は、長軸 210cm、短軸 103cm、残存壁高は10cmを測る。北側の約 部分を攪乱により失なう。残る覆土は、褐色、暗褐色土で軟質である。遺物は皆無である。

X-5号土壇 K-14号住居跡のP₆付近の貼り床下に検出された。プランは丸味を帯た長方形を呈する。規模は、長軸 150cm、短軸45cm、壁高は20cmを測る。覆土は、上層はV字形の黒色土がみられ、下層はロームを多く含んだ暗褐色土であり、最上層の貼り床を除き、総じて軟弱で荒い。形態からは、縄文時代の他の遺構と近似し、土質、土層では異なるが、古墳時代の終末期以前であることは間違いない。底部北端には、円形の浅いピットがある。

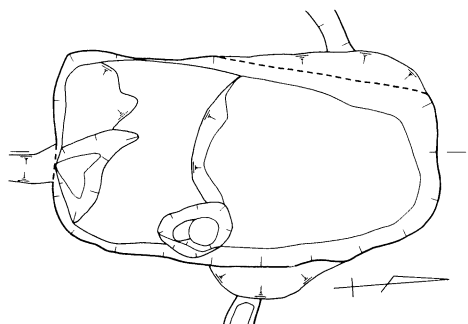
X-6号土壇 R-2号柵列塀の北端に位置する。土壇としたが、住居跡の可能性もある。遺物は皆無であり、時期は不明である。



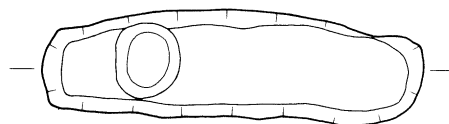
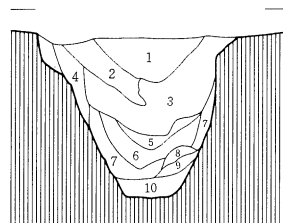
X-1号土坑



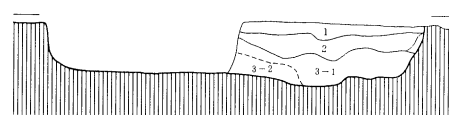
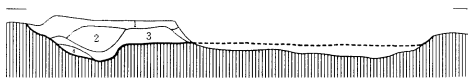
X-2号土坑



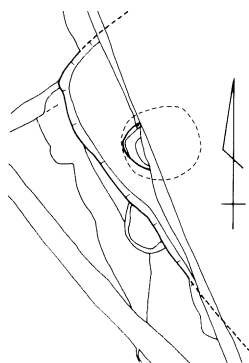
X-4号土坑



X-5号土坑



0 1 m
(1 : 30)



X-2号 1~5・黒色土を主とし、焼土粒を混入
6~10・暗褐色土を主とし、炭化粒混入

X-4号 1・暗褐色・ローム微粒混入
2~4・黒褐色・ローム粒混入

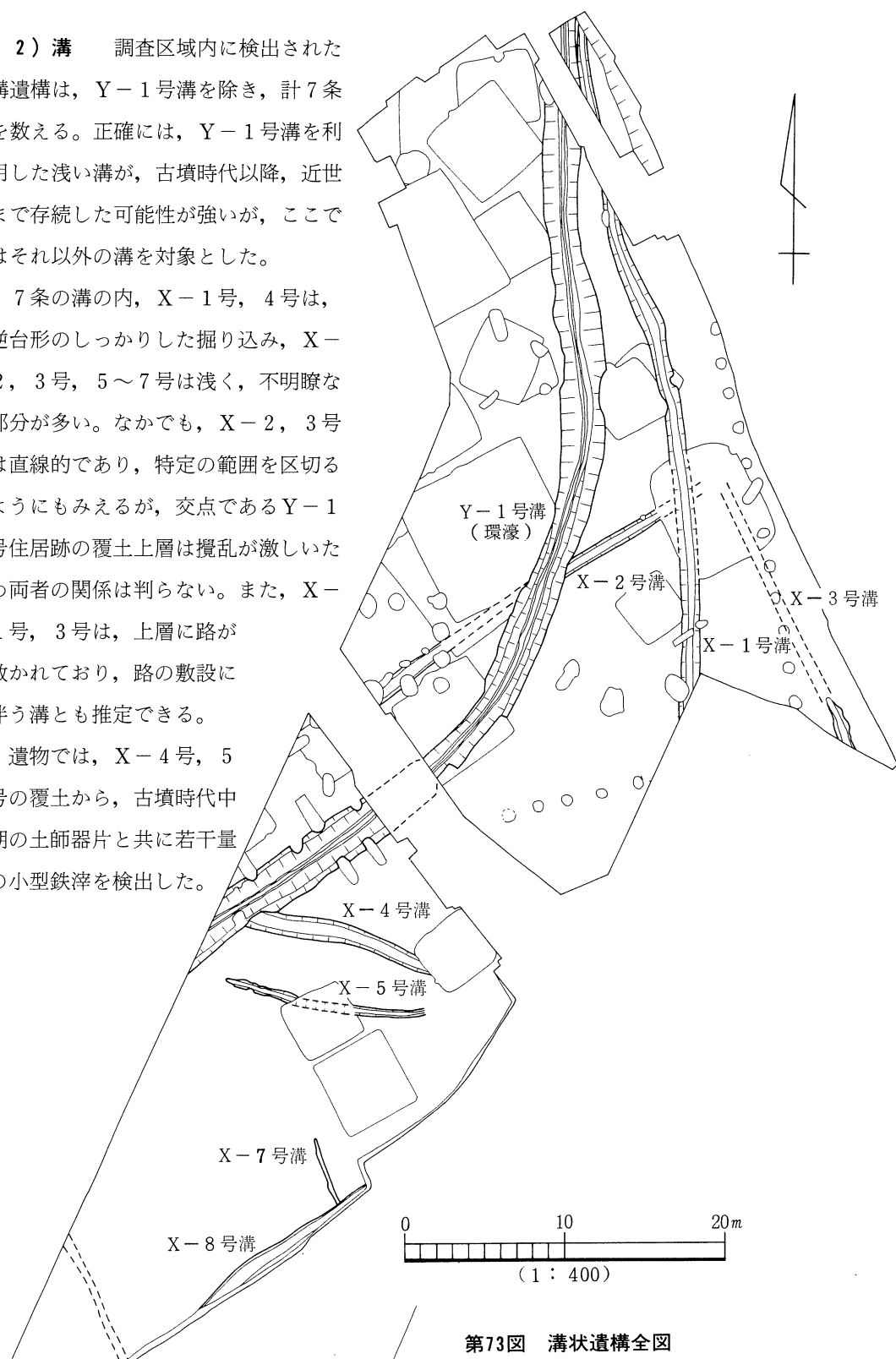
X-5号 1 2・黒色土にロームブロック
3-1 2 褐色ローム大ブロック

第72図 時期不明遺構・土坑

2) 溝 調査区域内に検出された溝遺構は、Y-1号溝を除き、計7条を数える。正確には、Y-1号溝を利用した浅い溝が、古墳時代以降、近世まで存続した可能性が強いが、ここではそれ以外の溝を対象とした。

7条の溝の内、X-1号、4号は、逆台形のしっかりした掘り込み、X-2、3号、5～7号は浅く、不明瞭な部分が多い。なかでも、X-2、3号は直線的であり、特定の範囲を区切るようにも見えるが、交点であるY-1号住居跡の覆土上層は攪乱が激しいため両者の関係は判らない。また、X-1号、3号は、上層に路が敷かれており、路の敷設に伴う溝とも推定できる。

遺物では、X-4号、5号の覆土から、古墳時代中期の土師器片と共に若干量の小型鉄滓を検出した。



第73図 溝状遺構全図

X－1号溝 遺構は、調査区域の北端を南北に走っている。規模は、上巾1m前後、平巾は平均で50cm、深さは30～45cmを測り、全長43m部分を検出した。溝の最北端は、浜野・茂原間の旧街道敷設時の切り落としに直行して途切れている。側壁は40°以上の急斜面であり、底面共に平坦に整形されている。覆土は、下層が暗褐色系、上層が黒褐色系と全線を通じてほぼ、一定である。更に溝の上巾と覆土上に敷設された路巾は、ほぼ一致している。

遺物は、覆土中から、弥生～土師器の細片を計105点出土した。

X－2号溝 調査区域の北側を、南西から北東方向に直線状に掘られている。残存の上巾70cm～1m、下巾は50～60cm、深さは7～15cmを測り、全長24m部分を検出した。側壁、底面共に整形されている。覆土は、やや明るい暗褐色系で占められている。遺物は皆無である。

X－3号溝 遺構は、北東の隅切りから北方向にX－2号溝と同様、直線状である。上巾は80cm、下巾は平均で60cm、深さは20～30cmを測り、全長17m部分を検出した。覆土は、ロームブロックを含んだ軟質の黒褐色、暗褐色土であり、側壁及び底面の掘り方は荒く不規則である。溝の北端は、Y－1号住居跡の覆土中で途切れている。遺物は皆無である。

X－4号溝 遺構は、調査区域のほぼ中央に位置し、東端はK－21号住居跡を、また西端はY－1号溝の上層を切り込んでいる。残存の上巾1.3m、下巾は90cm前後で深さは10～17cmを測り、全長16m部分を検出した。覆土は暗褐色系の土で占められる。側壁は底面と共に平坦に整形されている。遺物は、覆土中から、小型鉄滓2点を出土した。

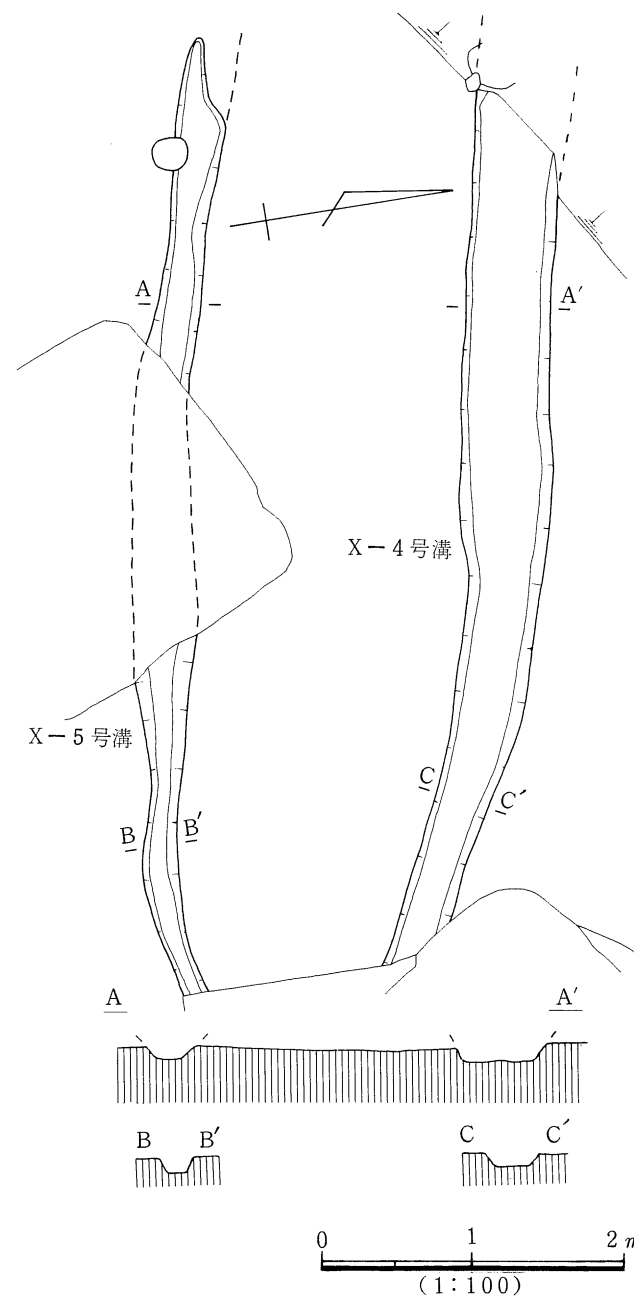
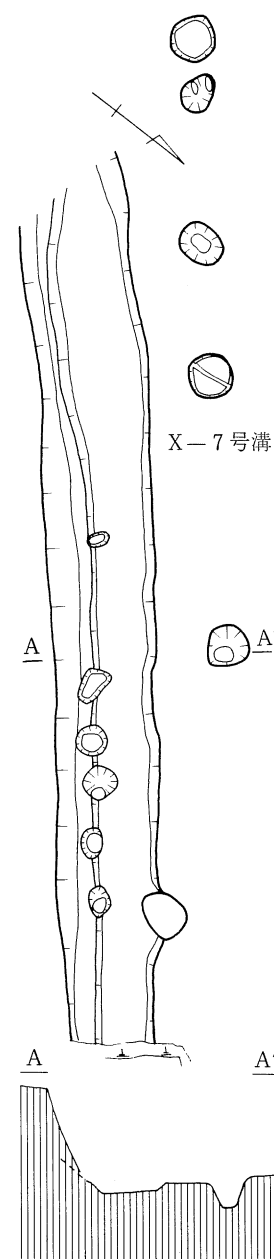
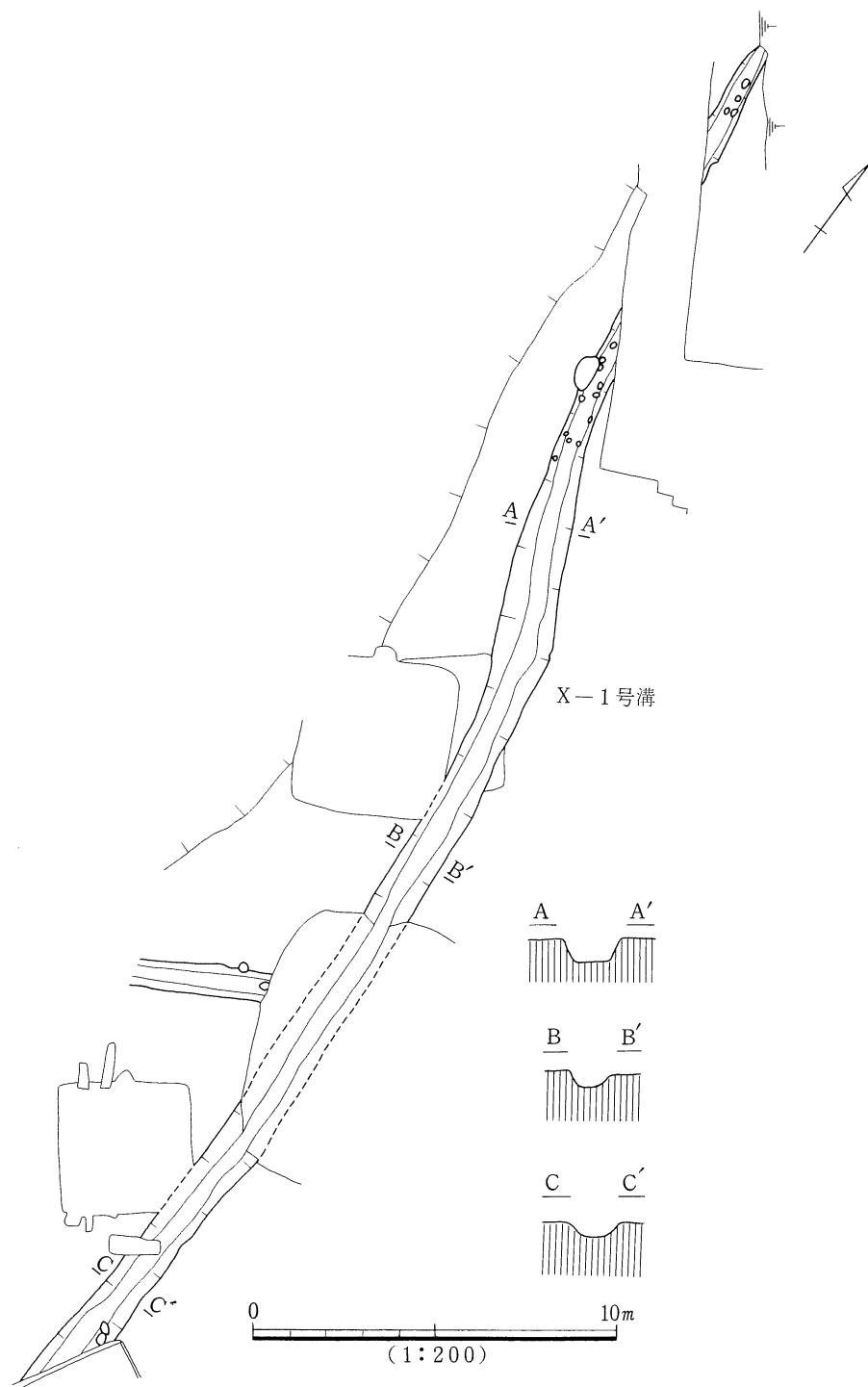
X－5号溝 遺構は、X－4号の南隣りに並行している。残存の上巾40～55cm、下巾は10～30cm、深さは確認面から10～32cmを測り、全長14m部分を検出した。溝の北端は埋没谷の斜面上位で立ち上がり途切れている。覆土は、明るい暗褐色系と黒色土粒を含んだ褐色土で占められる。側壁は凹凸が激しく、底面は比較的平坦に整形されている。

遺物は、古墳時代中期に比定の土器片と小型鉄滓11点を出土した。

X－6号溝 遺構は、X－5号溝の約8m南に位置し、南北方向に掘り込まれている。残存の上巾17～32cm、下巾5～12cm、確認面からの深さは18cmを測り、全長4.5m部分を検出した。覆土は、黒褐色土系で占められる。溝の北端は途切れている。

X－7号溝 遺構は、X－6号溝の南端と交差し、埋没谷と並行するような形で検出された。下巾は約1m、確認面からの深さは10～15cmと浅い。

以上、検出された7条の溝の内、方向性からは、X－1号溝と7号溝、X－2号溝と3号溝が、また形態からは、X－1号溝と4号溝がそれぞれ近似しているが、掘り方、覆土などの状態から、相互関係は無いと考えられる。これらの溝は、一応に時期不明遺構としたが、大まかには、X－4号・5号溝は古墳時代以降、X－1号・2号溝は中世以降、X－3号溝は近世に大別される。



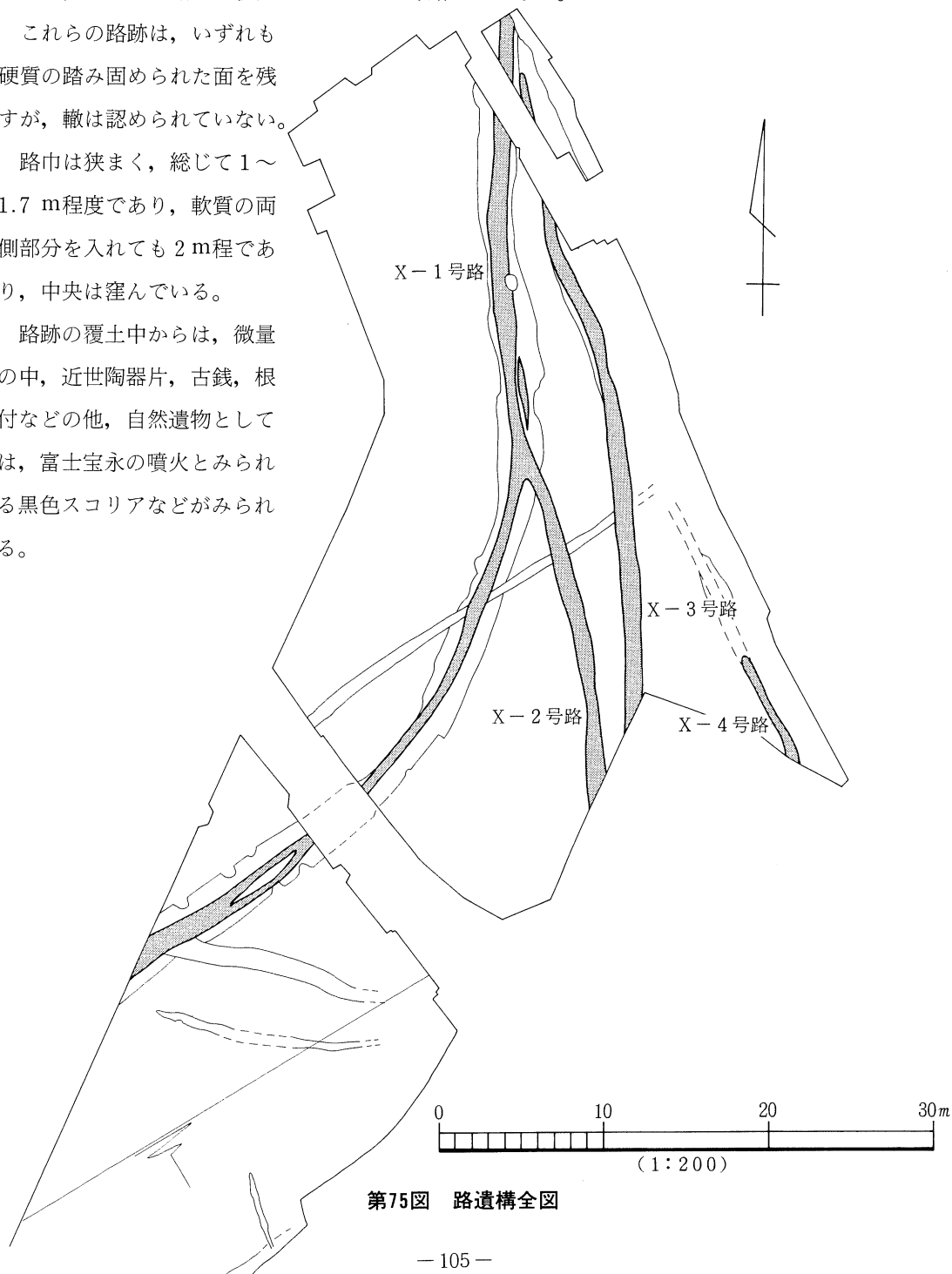
第74図 溝遺構実測図 (図版-40)

3) 路 路遺構は、調査区域の北側に4条(X-1号~4号路)、南端寄りに1条(X-5号路)の計5遺構を検出した。この内、X-1号路は環濠跡に沿っており、X-3号路はX-1号溝、X-4号路はX-3号溝にそれぞれ沿って敷設されている。唯一、溝を伴わない路跡は、X-1号路から枝分れするX-2号路のみである。

これらの路跡は、いずれも硬質の踏み固められた面を残すが、轍は認められていない。

路巾は狭まぐ、総じて1~1.7 m程度であり、軟質の両側部分を入れても2 m程であり、中央は窪んでいる。

路跡の覆土中からは、微量の中、近世陶器片、古銭、根付などの他、自然遺物としては、富士宝永の噴火とみられる黒色スコリアなどがみられる。



第75図 路遺構全図

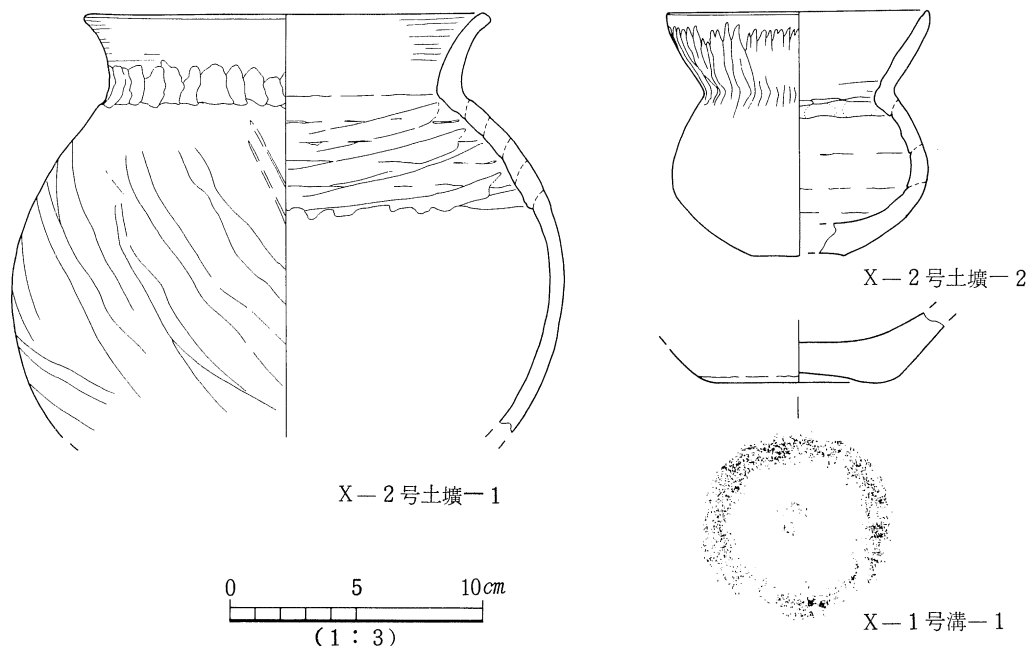
X-1号路 環濠跡の覆土土層のほぼ、中央に敷設されている。路巾は、70cm～1.3mを測り、全長68m部分を検出した。路面は黒色土上にある。土層層序では、X-2号路も含めて最高3条の路跡が確認されている。覆土巾の中層内からは、黒色スコリアと土師器片、更にはガラス製の根付けなどを出土した。

X-2号路 X-1号路の中央やや北側から枝分れしている如く見えるが、時期的には、若干新しい遺構である。路巾は、X-1号路と同規模であり、全長50m部分を検出した。遺構の南端は埋没谷方向に直行している。遺物は皆無である。

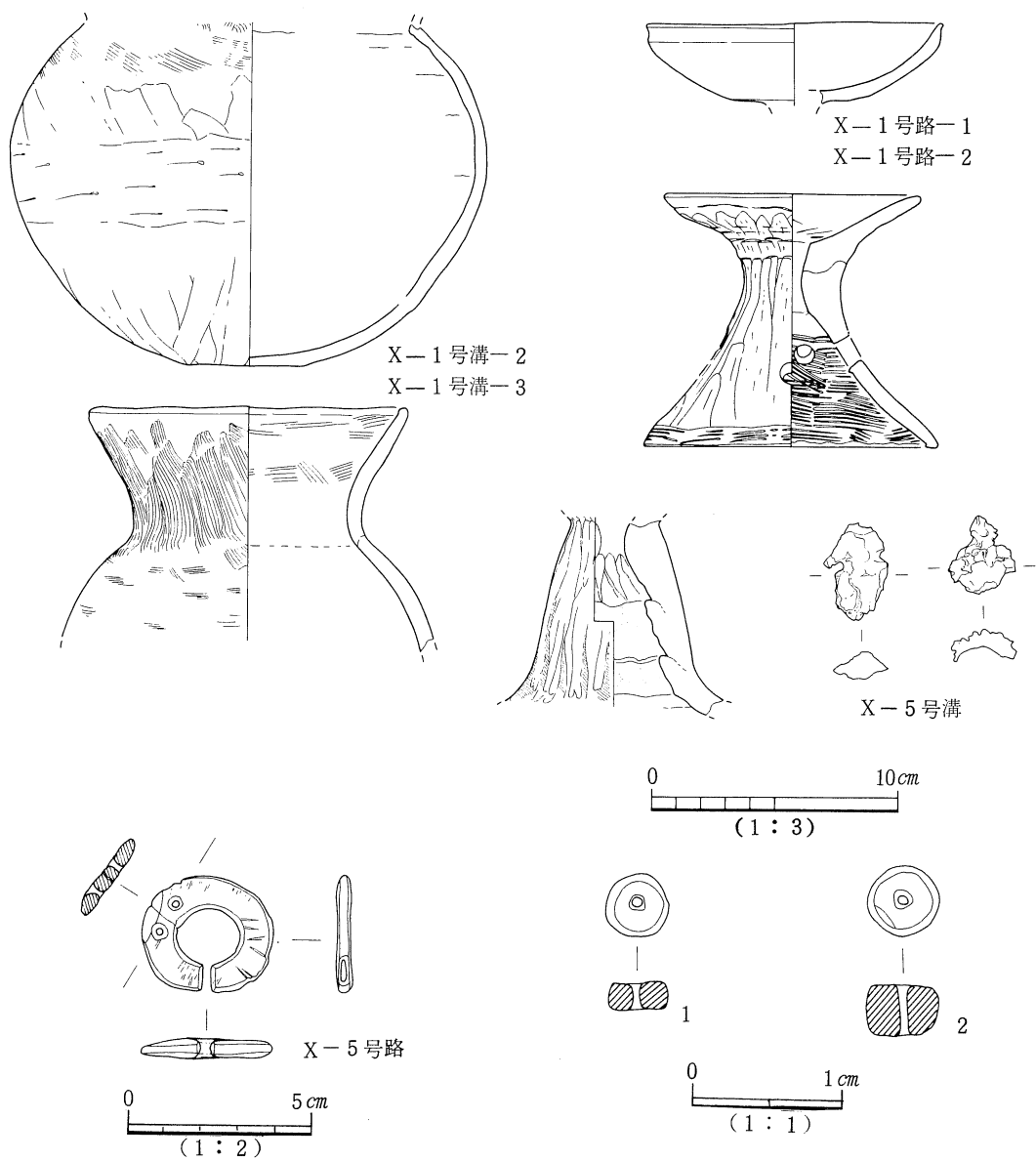
X-3号路 X-1号溝と重なる。路巾は平均で1mで、全長40m部分を検出した。路面はX-1号溝の覆土最上層にあり、極めて硬く踏み込まれている。遺物は皆無である。

X-4号路 X-3号溝と重なる。路巾は平均80～90cmを測るが、全体に断片的であり、攪乱による損傷が著しい。遺物は皆無である。

X-5号路 遺構は、南側の埋没谷の推積土上に敷設されており、谷とは直行して検出された。上巾1m、下巾は70～80cmを測り、浅く溝状に掘り込まれている。路面は、黒色土上にあり、硬い踏み固めが認められる。遺物は、覆土中から、縄文時代とみられる、珥状耳飾りを1点、文久銭1点他、時期不明の土器片が出土したにとどまる。



第76図 時期不明遺構出土遺物-1



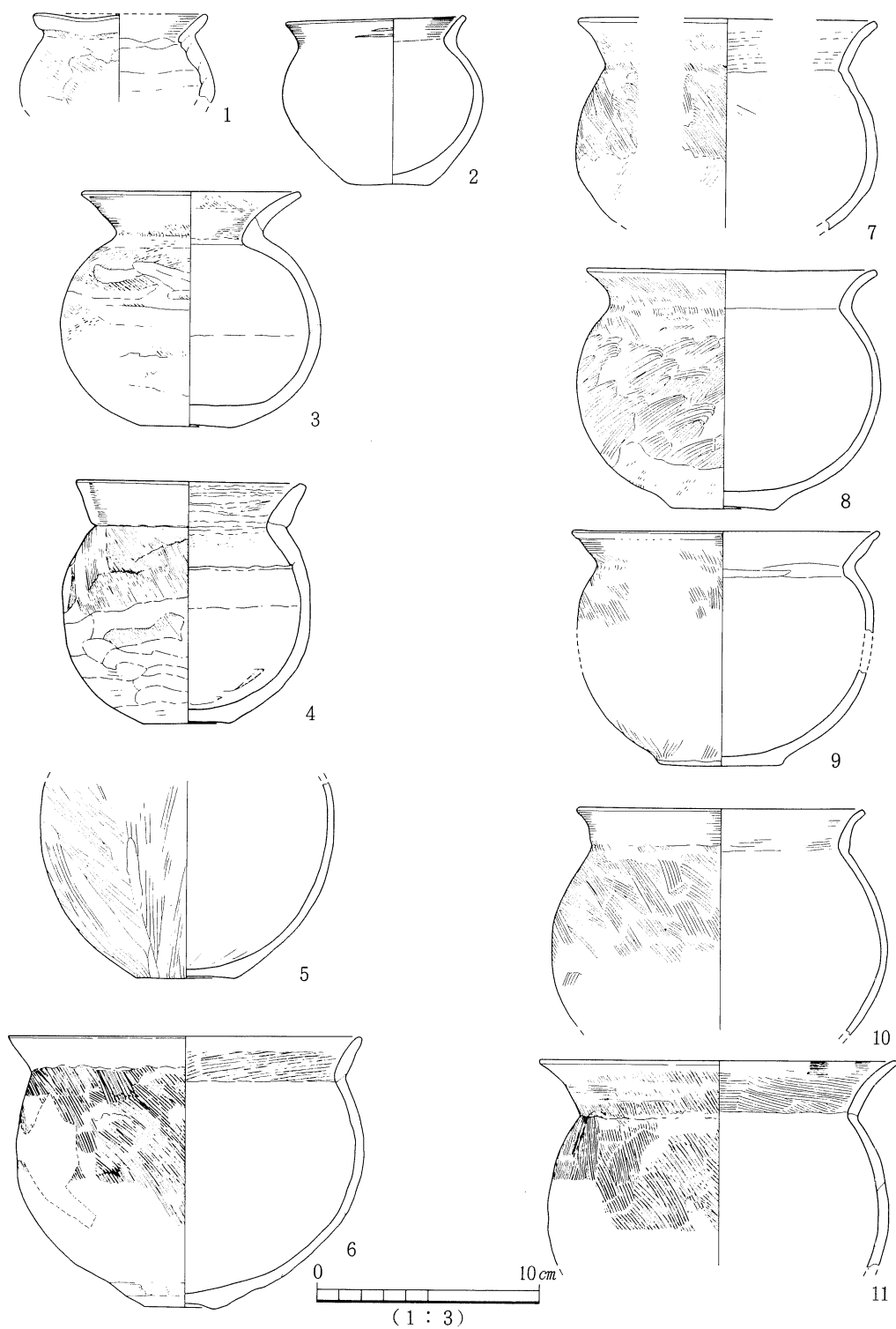
第77図 時期不明遺構出土遺物-2

第42表 時期不明遺構出土遺物観察表

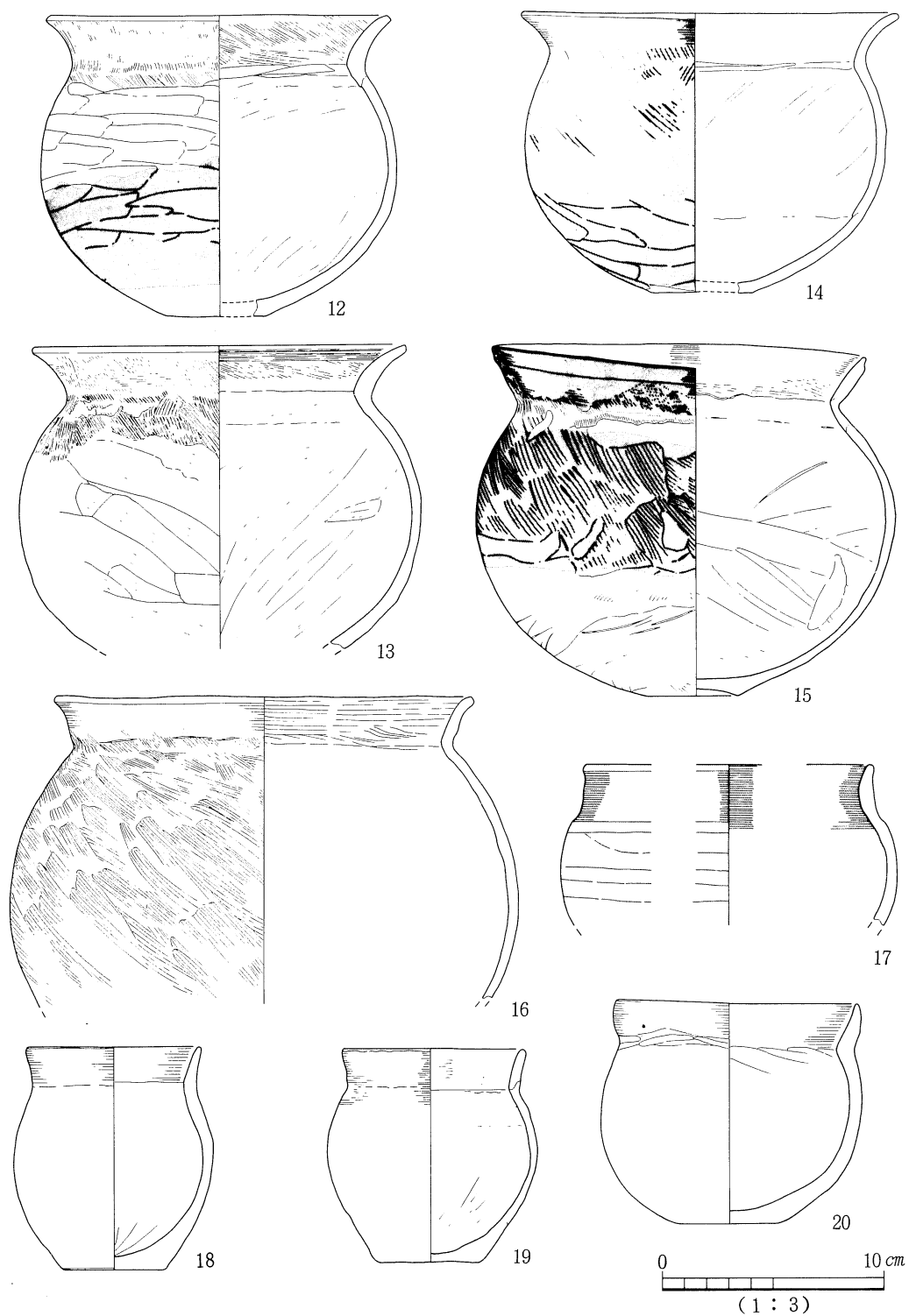
挿図 NO.	器 種 遺存度	(推) 法 量 〈残〉	胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
X-2号土壌 1	甕	1 < 17 > 2 16.0 3 22.0	微 石 粒 長 石	外-口縁・横ナデ, 頸・縦ヘラ ナデツケ, 胴・斜めヘラナ デツケ 内-口縁・横ナデ, 肩・ヘラナ デツケ, 胴・入念なナデ	良 好 (硬)	内外共に 茶 褐 色	内面肩部に 輪横痕 中期・和泉式
	上50%						
2	埴	1 9.8 2 10.5 3 10.0 4 3.8	微 石 粒 長 石	外-口縁・横ナデ, 以下, 縦ヘ ラミガキ, 胴・入念なミガ キ 内-入念なナデ	良 好 (硬)	内外共に 褐色, 明 褐色	内面胴部に輪 横痕 中期・和泉式
	全体の 80%						
X-1号溝 1		1 < 3.5 > 4 7.5	微 石 粒	内外共にナデ	良 好 (軟)	内外共に 明 褐 色	?
2	甕	1 < 14 > 3 19.3 4 5.0	赤 色 粒 白 色 土	外-肩・斜めハケ目→ナデ, 以 下・胴中位の横ナデツケ・ 他は縦ヘラナデツケ 内-入念なナデ	良 好 (硬)	外-暗 褐 色 内-茶 褐 色	前 期 五領式
	頸以下 60%						
3	甕 (広口壺)	1 < 9.7 > 2 13.0	微 石 粒	外-口縁・横ナデ, 以下縦ハケ 目→横ハケ目→ヘラナデツ ケ 内-上半部・ハケ目→ナデ, 以 下・ナデ	良 好 (硬)		前 期 五領式
X-1号路 1	高坏?	1 3.2 2 12.0		内外共にヘラミガキ, ナデ	良 好 (硬)	内外共に 暗 褐 色	?
2	器台	1 10.3 2 10.4 3 12.0	微 石 粒 長 石	外-口縁・横ナデ, 以下・縦ヘ ラケズリ, 底部口縁・横ク シ目 内-脚下半・横クシ目, 以外ナ デ, ミガキ	良 好 (硬)	内外共に 茶 褐 色	前 期 五領式
	全体の 70%						
X-5号溝 1	器台	1 < 7.5 > 上 < 3.6 > 下 < 9.0 >	微 石 粒 長 石	外-横ハケ目→縦ヘラナデ 内-ナデツケ, ナデ	良 好 (硬)	外-淡 赤 色 内-淡 褐 色	中 期 和泉式
2	鉄滓	2.5×4 cm		素材・鉱石か?			他に11点
3	〃	2.8×3 cm		素材・ 〃 ?			
X-5号路 1	块状耳飾	3.2×3.5 cm 厚4~5mm 両面・面トリ	石質・蛇紋岩			暗 緑 色	修理孔2点
1	白玉	径4mm, 厚2mm, 内孔1.2mm, 面トリ	石質・輝 岩	} 表面は黒色			K-17号付近
2	〃	径4.5mm, 原4.2mm, 内孔1mm, 面トリ	石質・ 〃				K-15号付近

6. 遺構外出土遺物

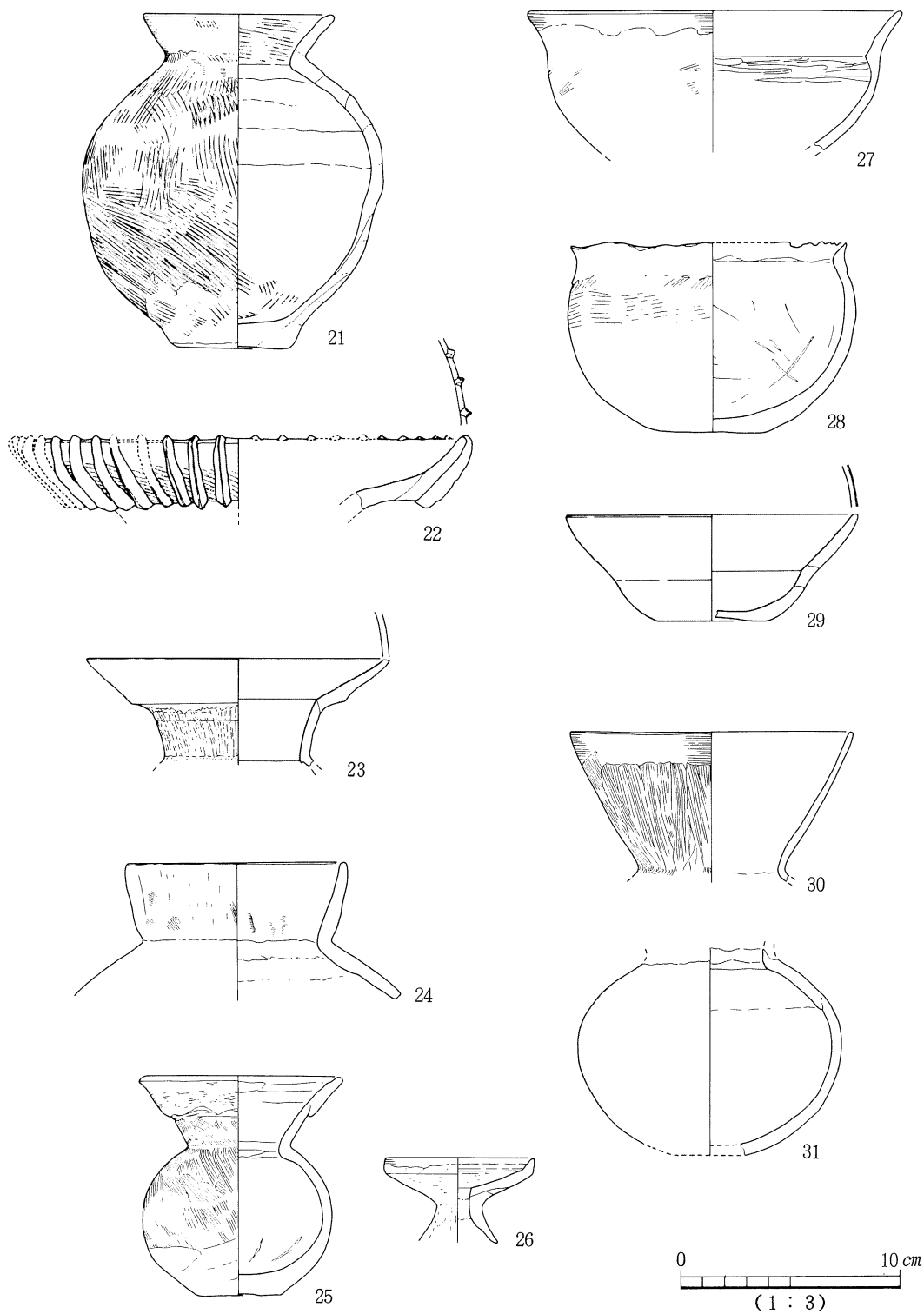
ここに掲載の遺物は、主にY-1号住居跡の覆土上層から出土した土器である。また、旧所有者の橘氏によれば「耕作中に出土した土器などを集めて埋めた」と伺っており、陶器片も含まれるため、この一群が概当するとみられる。出土土器の90%は、古墳時代前半期に比定され、IV章のI~II期の範囲に含まれる。



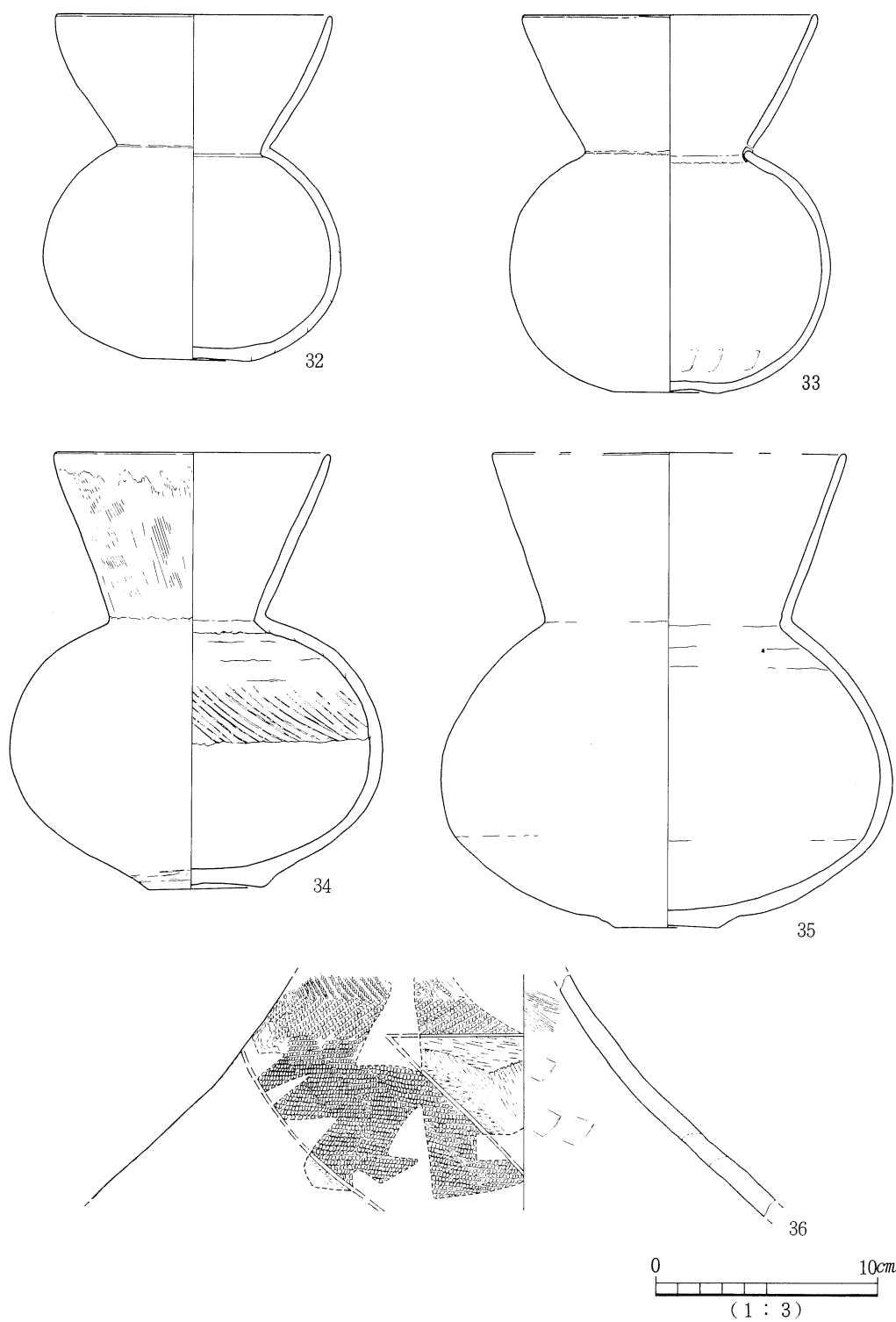
第78図 遺構外出土遺物実測図－1



第79図 遺構外出土遺物実測図－2



第80図 遺構外出土遺物実測図-3



第81図 遺構外出土遺物実測図－4

第43表 遺構外出土遺物観察表－1

挿図 NO.	器 種 遺存度	法 量 (推) 遺存度	胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
1	甕 底部欠	1 < 4.2 > 2 7.8 3 8.7		外－口縁・横ナデ, 以下・ハケ目→ナデツケ 内－口縁・横ナデ, 以下・ナデツケ, 押しツケ	良 好 (軟)	内外共にくすんだ淡褐色	内面胴部に輪積み痕
2	甕 (赤彩) 100%	1 7.7 2 8.2 3 9.0 4 3.5	長 徴 石 粒	外－口縁・横ナデ, 以下・横ミガキ, 底・ナデ 内－口縁・横ナデ, 以下・ナデ	良 好 (硬)	外－赤褐色 明他 内－淡褐色	赤彩は外面胴部下端を除く内面は口縁まで
3	甕 100%	1 10.6 2 10.0 3 11.5 4 4.2	砂 粒	外－口縁・斜めハケ→横ナデ, 胴上半・ハケ→横ナデ, 下半・横ナデ, 底・ナデ 内－口縁・斜めハケ→軽いナデ以下ナデ, 底・ナデツケ	良 好 (硬)	内外共に淡黄褐色	胴・球体
4	甕 100%	1 11.0 2 (10.4) 3 11.2 4 4.0	砂 粒	外－口縁・横ナデ, 胴上半・ハケ目, 下半・ハケ目→横ナデ, 下端一部・ヘラケズリ 内－口縁・横ハケ目→横ミガキ以下ナデツケ	良 好	内外共に黒褐色暗褐色	外面のみ, 口縁は胴部にのせた状態
5	甕 破片	1 < 8.9 > 3 13.5 4 4.5	1mm以下の石英系微石粒, 多量	外－縦・斜めのクシ目→ナデツケ, 底・ナデ 内－入念なナデ	良 好 (硬)	内外共に淡茶褐色	総じて薄手
6	甕 全体の80%	1 12.2 2 16.0 3 15.6 4 3.3		外－口縁・横ナデ, 胴上半・斜めハケ目, 下半・横ナデ 内－口縁・上半・横ナデ, 下半横ハケ, 以下横ヘラナデ	良 好 (硬)	外－黒褐色 底・赤色 内－淡褐色	外面底部は凹状
7	甕 破片	1 < 9.5 > 2 (13.5) 3 (13.5)	微 石 粒	外－口縁・斜めハケ→横ナデ, 胴上位・斜めハケ目, 下位・ハケ目→ナデツケ 内－	良 好 (硬)	外－暗褐色 内－淡褐色	
8	甕 全体の40%	1 10.8 2 13.2 3 13.7 4 4.7	微 石 粒	外－口縁から胴下位まで・斜めハケ目→軽いナデ, 下端・ハケ目→ナデツケ, 底・ナデツケ 内－入念なミガキ	良 好 (硬)	内外共に明茶褐色	
9	甕 全体の20%	1 < 10.6 > 2 13.8 3 (13.3) 4 5.7	微 石 粒	外－口縁・横ナデ, 以下・斜めハケ目→ナデ 内－口縁・横ミガキ, 頸・ナデツケ, 以下・ミガキ	良 好 (硬)	外－茶褐色 黒褐色 内－茶褐色	
10	甕 底部欠	1 < 10.3 > 2 13.0 3 15.0		外－口縁・横ナデ, 以下・斜めハケ目, 下位・ナデ 内－口縁・横クシ目→ナデ, 以下・入念なナデ	良 好 (硬)	外－暗褐色 内－淡褐色	
11	甕 破片	1 < 9.4 > 2 (16.0) 3 (15.3)		外－口縁・斜めハケ目→横ナデ以下・斜めハケ目 内－口縁・横ハケ目, 上端に横ナデ, 胴・ナデ	良 好 (硬)	外－頸・黒色 他, 淡茶褐色	口縁上位にスス付着
12	甕 底部欠	1 13.5 2 15.5 3 16.0 4 (4.5)	石 英 系 粒 微 石 粒	外－口縁・縦ハケ目→横ナデ, 頸・ハケ目, 以下・横ヘラケズリ, 底・ヘラケズリ 内－口縁・斜めハケ目, 以下肩まで横ヘラナデツケ, 胴・縦ヘラナデツケ	良 好 (硬)	内外共に淡褐色	外面胴下位にスス付着
13	甕 30%	1 < 14 > 2 (17) 3 (18)	微 石 粒	外－口縁・斜めハケ目→横ナデ肩・斜めハケ目, 以下・斜めヘラケズリ 内－口縁上位・横ナデ, 下位・ハケ目→横ナデ, 以下・斜めヘラナデ	良 好 (硬)	内外共に淡黄褐色	外面胴中位にスス付着
14	甕 30%	1 < 14 > 2 19.0 3 (23.0)	淡赤色土粒 多量	外－口縁・ハケ目→横ナデ, 以下・斜めハケ目 内－口縁・横クシ目→軽いナデ以下入念なナデ	良 好 (硬)	内面共に暗褐色淡褐色	

第44表 遺構外出土遺物観察表－2

挿図 NO.	器 種 遺存度	法 量 (推) 〈残〉	胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
15	甕 底部欠	1 12.9 2 17.1 3 16.5 4 (4.5)	1mm以下の 微石粒	外－口縁・横ナデ, 頸・斜めク シ目, 肩・胴上位・クシ目 →ナデツ, 以下・横ナデツ ケ, 底ケズリ 内－口縁・横ミガキ, 頸・ヘラ ナデツケ, 以下ナデ	良 好 (硬)	外－明 褐 色 底－明 赤 色 内－明 褐 色	胴全面から口 縁上位にスス 付着
16	甕 全体の 90%	1 16.0 2 17.0 3 19.0 4 4.0	長石, 石英 系石粒多量	外－口縁・横ナデ, 頸・斜めハ ケ目, 胴上半部・斜めクシ 目→軽いナデ, 以下・横ナデ ツケ 内－口縁・ハケ目→横ナデ, 胴 上半部・入念なナデ, 下半 部・主に横ヘラナデツケ	良 好 (硬)	外－黒暗褐色 底－暗 褐 色 内－褐 色	胴上位, 口縁 上位にスス付 着 外面底部は凹 状
17	甕 (赤彩) 破片	1 < 7.4 > 2 (13.3) 3 (15.3)		外－口縁・横ナデ, 以下・横ヘ ラナデ 内－口縁・横ナデ, 以下ナデ	良 好 (硬)	赤彩部は 淡赤褐色	内面は肩下ま で赤彩
18	甕 全体の 70%	1 10.2 2 8.0 3 9.0 4 4.6	長 石 砂 粒	外－口縁・横ナデ, 以下・ナデ 底ヘラナデツケ 内－口縁・横ナデ, 以下・ナデ 底・ヘラナデツケ	良 好 (硬)	外－明茶褐色 暗 褐 色 内－明 褐 色	
19	甕 全体の 30%	1 9.7 2 (8.2) 3 (9.4) 4 4.5	長 石 砂 粒	内外共に18に比定	良 好 (硬)	外－淡茶褐色 黒 色 内－淡茶褐色	器形, 胎土, 調整共に18と 同類
20	甕 全体の 90%	1 10.2 2 11.2 3 11.7 4 4.5	1mm以下の 石粒少量	外－口縁・横ナデ, 頸・ナデツ ケ, 胴2/3 上・荒い縦ミガ キ下端・横ミガキ, 底・ヘ ラナデ 内－口縁・横ナデ, 以下・横ヘ ラナデ	良 好 (硬)	外－明茶褐色 暗茶褐色 内－褐 明 褐 色	総じて厚手
21	壺 全体の 60%	1 15.2 2 8.7 3 13.8 4 5.2	緻 密	外－口縁・縦ハケ目→横ナデ, 胴上半部・縦クシ目, 下半 部・斜めクシ目, 下端・底 ナデ 内－口縁・横クシ目→横ナデ, 以下・ナデ, 底・斜めクシ 目	良 好 (軟)	内外共に 白っぽい 淡 褐 色	下半部は板状 粘土の結合で, 結合面が極端 に広い
22	壺 口縁片	1 < 3.5 > 2 (2.8)	赤 色 土 粒	外－口縁上位・横ナデ, 下位・ 斜めハケ目, 頸・ナデ 連続棒状浮文付加 内－横ミガキ	良 好 (硬)	内外共に 淡 赤 色	赤 彩
23	壺 肩以上 90%	1 < 4.9 > 2 14.0 頸 6.6		外－口縁・横ミガキ, 頸・縦ミ ガキ	良 好 (硬)	内外共に 赤 褐 色 淡黄褐色	内面は頸部下 端まで赤彩
24	壺 肩以上	1 < 6.2 > 2 10.0 頸 8.6		外－口縁・ハケ目→縦ナデ, 肩 ・荒いミガキ 内－口縁・ハケ目→縦ナデ, 肩 ・荒いナデ	良 好 (硬)	内外共に 淡黄褐色	
25	壺 100%	1 10.1 2 9.4 3 8.6 4 3.8	1mm以下の 微石粒	外－口縁・横ハケ目→横ナデ, 以下胴中位まで・ハケ目, 下位・横ナデツケ 内－口縁・横ナデツケ, 一部ミ ガキ, 以下・ナデツケ	良 好 (硬)	内外共に 淡 褐 色	口縁下端はず らせて有段
26	器台 上半部	1 < 3.9 > 2 6.8 孔径 1.0	砂 粒 多 量	外－口縁・横ナデ, 下位・横ヘ ラケズリ, 以下・荒いナデ ケズリ 内－横ナデ	良 好 (硬)	内外共に 淡黄褐色	
27	鉢 底部欠	1 < 6.5 > 2 17.2 3 (15)	長 石 多 量	外－口縁・横ナデ, 以下・ハケ 目→荒いミガキ 内－口縁・横ミガキ, 以下・ナ デツケ, ナデ	良 好 (硬)	内外共に 淡 褐 色	内面頸部に陵

第45表 遺構外出土遺物観察表－3

挿図 NO.	器 種 遺存度	法 量 (推) 〈残〉		胎 土	調 整	焼 成	色 調	備 考
28	鉢	1	8.6		外－口縁・横ナデ，肩上位・斜めハケ目→ナデ，胴上位・横クシ目→ヘラナデ，以下・ヘラナデ，底・ナデツケ 内－口縁・ナデ，以下・ヘラナデ	良 好 (硬)	外－褐色 内－暗褐色 明茶褐色	口唇はツマミ上げで不整形
		2	12.6					
		3	13.1					
		4	4.8					
	全体の90%							
29	埴	1	4.9	砂 粒	外－入念なナデ 内－入念なナデ	良 好 (硬)	淡黄褐色	埴形，内外共に赤彩
		2	(13.4)					
		頸	(8.9)					
		4	(5.0)					
	全体の40%							
30	埴	1	< 6.8 >		外－口縁・横ナデ，以下・縦ハケ目 内－入念なナデ，一部ミガキ	良 好 (硬)	内外共に明茶褐色	総じて薄手
		2	13.0					
		口縁のみ	頸					
		100%	6.6					
31	埴	1	< 9.4 >	1mm大の石粒多量	外－全面横ミガキ，赤彩 内－頸・横ミガキ，赤彩，以下・入念なナデ	良 好 (硬)	外－赤褐色 内－暗褐色	底部除く，外面と内面頸部上赤彩
		頸	6.0					
		3	12.0					
		4	(3.5)					
	頸以下80%							
32	埴	1	15.6	砂 粒	外－口縁から胴中位・ヘラナデ以下・ヘラミガキ 内－入念なナデ	良 好 (硬)	外－淡黄褐色 内－赤褐色	赤彩の可能性あり（明確ではない）
		2	12.5					
		3	13.5					
		4	4.8					
	全体の90%							
33	埴	1	17.0	赤 色 粒	外－全面縦ミガキ，底・ヘラケズリ 内－頸以上・縦ミガキ，以下・ナデ，底・ラセン状，ヘラ圧痕	良 好 (軟)	淡 赤 色 乳 褐 色	底部除く，外面と内面頸部以上赤彩
		2	13.2					
		3	14.5					
		4	4.8					
	全体の60%							
34	埴	1	19.8	砂 粒 緻 密	外－口縁・横ナデ，以下頸まで・縦ハケ目→ヘラナデ，肩胴上位・縦ミガキ，以下・ナデ 内－口縁・横ナデ，以下頸まで・ミガキ，胴上位・斜めヘラ端ナデツケ，以下・ナデ	良 好 (軟)	外－暗褐色 内－淡茶褐色	外面底部に回転ヘラナデ痕
		2	12.5					
		3	16.8					
		4	5.3					
	全体の80%							
35	埴	1	21.5	2mm大の石粒多量	外－口縁から胴中位・入念なナデ，以下・底部までナデツケ 内－全面入念な横ナデ	良 好 (硬)	内外共に淡褐色	赤彩の可能性あり（不明確）
		2	(16)					
		3	(20.6)					
		4	4.7					
	全体の30%							
36	壺				外－沈線区画の羽状，横走縄文無文部・ミガキ 内－上端・ハケ目，以下・ナデ	良 好	外－赤褐色	弥生中期外面赤彩
	大型片							

IV 小 結

1. 遺構と遺物

1) 縄文時代 遺構は、陥し穴状5基の他、性格不明2基の計7基の土壌を検出した。この内 J-1～3号遺構は、底部に2本の方形ピットを伴い、J-6・7号遺構では、底部施設は認められていない。以下、前者をⅠ類、後者をⅡ類とする。

立地では、Ⅰ類が埋没谷の南側緩斜面に、またⅡ類が北側斜面などに位置する。プランは、Ⅰ・Ⅱ類共長方形を呈し、上位は緩く朝顔状に開いている。

Ⅰ類 規模は平均で長軸2m、短軸1.2～1.5m、残存壁高は50～70cmを測る。壁面は縦位のヒダ状を呈し、径10cm程度の丸味を帯びた掘削工具を用い、未整形である。底部のピットは一边25～40cmの正・長方形からなり、深さは70～80cmで、ほぼ垂直に近い。

通常、この種の遺構の多くは、縄文時代早期に比定され、動物の捕獲に共する施設としてとらえられている。市内の類例では、新井花和田遺跡（1984年市原市文化財センター調査）、上大掘遺跡（1985年同）などに検出例がある。なかでも、縄文時代早期の集落跡である花和田遺跡は、Ⅰ類に属する3基の遺跡を検出しているが、包含層に多量の土器があるにもかかわらず、覆土中に土器流入が認められないものと、多量に混入するものがある。特に遺構内出土の土器は隣接する住居跡出土のものと一致しており、遺構の性格上、住居と接して位置するのは不自然である。このことから、花和田遺跡では、集落の存在期より以前のものと、廃絶した以後のものとに分けられる。花和田の例から、典型的にあてはまる当遺跡のⅠ類は、必ずしも早期に比定される遺構とは限らないようである。

Ⅱ類 Ⅰ類とは規模、形状共に近似するが、幾つかの相違点がみられる。第1に底部施設をもたない。第2にⅠ類にみられる荒掘りの壁とは異なり、多少の凹凸はあるが比較的平滑に整形されている。第3に立地。第4に覆土である。特に覆土では、Ⅰ類がロームを多く含むのに対して、Ⅱ類では微量であり、緻密な黒色土を主としている。これらの相違点から、Ⅰ類とは時期的に異なる遺構と推定できる。

当遺跡での検出数は少なく、加えて石鏃、礫などの猟に関係する遺物は皆無である。更には、この程度の規模で果して目的にかなうものか、それは、動物の生態と深く係わる問題であり、より総合的な検討が必要とされよう。

2) 弥生時代 遺構は、環濠の一部分（南東側）とその外側に検出した1軒の住居跡である。

住居跡は、隅丸長方形でしっかりした遺構をよく残している。検出遺物から、中期宮ノ台式の後半期に比定される。濠内より検出の土器が、濠の内側にあると推定される集落の存在時期と同一であるならば、濠外検出の住居跡と環濠集落とは時期を同じくするものと考えられる。

環濠は、調査区域の南側に検出した埋没谷の傾斜変換線付近に掘り込まれており、埋没谷を意識しているようである。検出部分は、南東側の一部分であるが、方向性及び地形から、全体のプランは円形ではないように思える。台地先端に張り出した、T字状小台地のくびれ部分の東西巾は、約 160m、埋没谷から以北の南北巾は、約 300mを測る。付近一帯の踏査では、くびれ部分を横断する県道の南側に土器の散布がみられる。このことから、濠内における集落の中心は、県道を含めた以南と考えられ、T字状小台地の先端までは広がらないと推定できる。

濠は、ローム層下の粘土層をも掘り込んでおり、降雨による、粘土上層からの多量出水によるとみられる浸食が激しく、発掘以後、約2か月あまりで下位形状の著しい変化がみられた。

その現象の原因は、部分発掘による水の捌け口がないことに尽きる。加えて、発掘当初の断面形態には変化の跡は確認されていない。したがって環濠が機能していた当時には見られない現象である。それは、濠内の水は常に流動していたからに他ならない。

検出した限りでは、濠は北方向に傾斜している。未調査ではあるが、T字状台地側からの濠は、逆に南方向に傾斜しているものと推定される。これは地形による推測のみではなく、現在の県道と旧道とが交差する付近の限られた一部分が、路面沈下の多発地点であるという事実がある。沈下多発地点は、検出面の延長線上に位置している。

少なくとも、環濠の東半分については、単に濠の延長ということではなく、南北の濠が合流し、排水又は集水状の施設も可能性としては考えられよう。勿論、排・集水施設の有無は、濠内における出水対策であり、規模及び形状から、濠の機能がそこにあるとは考え難い。

濠内における遺物は、壺4点、深鉢の小片6点を含む20点を検出したが、その大部分は、基底部から40～50cm浮いた状態で出土しており、下層中には含まれていない。これらの土器が、環濠内の集落と同伴するものであれば、濠は自然埋没に任せ、再掘を施すような手段は講じていないようである。いずれにせよ、比高差の少ない低位面での環濠の検出は、現時点では他例をみず、今後、この種の遺構を性格づける上では好資料となろう。

3) 古墳時代 弥生時代中期以降、この地に出現した集落は、五領式土器を伴う古墳時代の前半期からである。編年では、五領期・K-21～24号住居跡、和泉期・K-3・4・6号住居跡、鬼高期・K-1・5・7・9・13～17・20号住居跡の計17軒と不確定7軒の合計24軒を数える。

以下、時期別の遺構の形態及び諸施設などの概要を簡単に述べたい。

五領期 形態では、K-21号が隅丸方形、K-22号は東側のみ隅丸を呈する方形、K-23号はほぼ正方形を、またK-24号は台形状の不整形方形と、それぞれ形を異にしている。壁溝はK-22号の北側のみに検出されている。柱穴はK-21号がベッド状床部に、K-22号は変則的な長方形状に、K-23号は方形、更にK-24号は住居のプランに合せた台形状にそれぞれ結ばれ

る。住居内土壇では、円垂形、円形、方形と3者3様であり、南東隅に位置している。特にK-21号では、盛土の囲みを伴っている。炉はK-21・22号共に北東寄りに位置し、K-23・24号では確認されていない。

和泉期 形態の判明するK-3・6号共に正方形に近い。壁溝はK-6号の北壁を除き、完周するとみられる。柱穴はK-3号以外不明確であり、炉は北東よりに位置する。住居内土壇は南東隅にあり、K-3号が円錐形、K-6号は隅丸長方形を呈する。

鬼高期 K-9号を除き、おおむね正方形に等しい。壁高は完周し、柱穴はK-12号が確認できない他は、壁から1m内側に掘り込まれており、ほぼ正方形に結ばれる。カマドは北壁の中央に構築されている。住居内土壇は、K-15号に方形状（基底部の一部分のみ検出）のものが認められる以外は皆無である。壁溝、柱穴、カマド以外の施設では、K-5号の西側とK-7号の東側とに複数の溝状遺構が検出されている。これは、K-7号の西側が未掘であり、K-6号の東側は、住居の掘り方自体が深く、未確認であり必ずしも片側のみに所在するとは言えない。また、特異な遺構としてはK-9号があげられる。プランは長方形を呈し、柱穴は壁に近い。床面の中心部分には炉が位置しており、遺構の主軸方向も他とは異なる。このことからK-9号は住居以外の施設である可能性が強いものといえよう。

以上、前期、中期、後期と3期で検出されているが、住居跡でみる限りでは、五領期では、柱穴が柱の径と一致するとみられる程の小規模なものが多く、深さは、K-23号を除き浅い掘り込みである。K-23号では、床面が埋没谷の堆積土上にあり、掘り込みが容易な面もあると思われる。いずれにせよ、床面が硬いローム上であっても浅く、加えて柱の径からは、上屋的な規模と推定される。和泉期では、壁溝を除き五領期との差はないように思える。鬼高期では、大型の住居も出現し、それと対応するしっかりした柱穴がみられるが、柱の径は北側に比べ南側は、若干小振りにみえる。カマドでは、壁側の掘り込みが煙導部のみ浅く掘るものと、住居の床面と同じレベルで方形に掘り込んでいるものがある。全遺構に当てはまるものではないが、前者は時期的に古いようである。

次に出土遺物では、遺物を伴わない遺構が7軒と、全検出数の35%と高い数値を示している。

これらは一部分のみの検出か、又はより新らしい時期の遺構によって大部分を失っている。それ以外においても、耕作及び数次の小規模造成による攪乱のためか、全体的に検出量住居内は少ない。これに反し、遺構外として扱った土器が多いという皮肉な結果となった。ともあれ、出土の土器では、I～V期の5段階に分けられる。

I期～K-21・22・24号住居跡

II期～K-23号住居跡

III期～K-2・4・6号住居跡

IV期～K-1・5・7・9・13・16・17・20号住居跡

V期～K-14号住居跡

ここでは、I・IIが前期五領式、IIIは中期和泉式、IV・Vが後期鬼高式に比定される。

I 古墳時代の初現期につづく時期におくことが出来よう。K-21号住居跡出土の高坏及び赤彩の小型鉢形土器などによっても明らかであろう。本跡と隣接するK-22号住居跡からは、完形の甕形土器の他、S字形口縁の台付甕形土器片が出土している。周辺では、西側の谷を越えた大厩遺跡の9号墳を中心とし、また、村田川右岸に位置する千原台ばあ山遺跡などに検出例がある。これらと共伴する甕形土器などの形態比較から、K-21号を含む、22・24号住居跡は前期前半に含まれよう。

土器以外では、K-21号住居跡から石製垂飾品を検出している。石質は良質の蛇紋岩であり、県内では、向新田遺跡に次ぎ2点目である。本品については後述とする。

II K-23号住居跡1軒である。K-22号住居跡の南壁に接し、偶然とは思えないほど近接して掘り込まれている。共伴遺物は、甕、高坏形土器など少例ではあるが、Iの3遺構に比べ、後出の感がある。少なくとも本跡の構築以前から、K-22号住居跡の存在が認識されていたことは間違いないであろう。

III 検出された遺構の中では、K-3号住居跡に完形の埴形土器を含む多数の土器片の他、焼土及び炭化粒の堆積土中からは、石製鉄床と小型鉄滓を検出している。土器では、複合口縁の壺形土器2点は大厩遺跡の7号墳出土のものと典型的に一致する。その他、完形の埴形土器では、K-3・6号住居跡に各1点ずつ出土しており、甕形土器と合せ、刷毛目を下地とし、入念なヘラナデツケを施している。K-4号からは、この時期の特徴的な器台形土器を検出しており、3軒共に中期の範疇に含まれよう。土器以外では、前述の石製鉄床と鉄滓の検出により、K-3号住居跡は、鉄製品の製造又は修理に関わる鍛冶工房的性格を有するものと推定できよう。時期的にも一致し、同種の遺構の希少な例としては、四街道市の和良比中山遺跡に見ることができる。中山遺跡では、筒形の羽口の他、器台脚部を利用した羽口が多数検出されているが、現時点では、この種の遺構は中期以前には検出例がなく、鍛冶工場の初現期の様相を示すものとして注目される。⁽⁴⁾市原市内では本例が唯一の検出例であるが、K-3号住居跡では、単に推定の範囲にとどまった。

本遺跡では、K-3号住居跡の他、X-1号溝からも、中期和泉式土器と共に若干量の鉄滓が出土している。これらの出土遺物から、西山遺跡周辺では古墳時代中期を中心として、農業生産の拡大化が図られ、鉄製農工具がより広い範囲に普及していったことを裏付ける証しとしてとらえられよう。

本遺跡では、中期和泉式につづく後期鬼高式の前半の遺跡、遺物は認められない。

IV 出土遺物では、甕形、坏形土器が多く、甗形土器では2点を検出したにすぎない。総体的に覆土中の小片は多いものの、住居跡に共伴するとみられる遺物はすくない。その中から、甕形土器と坏形土器については、次の形類に分けられる。

甕形土器 Aは口縁がくの字状に外反するものでは、a. 胴が垂直状のものK-5号1。b. 最大径が上位にあるもの、K-16号1, 2, K-17号1 (K-17号1は口縁不明)。c. 最大径が中位にあるもの、K-7号6, d. 最大径が下位にあるもの、K-13号2などがある。

B 口縁は外反し、頸部が垂直状を呈するもので、a. 胴が球状のもの、K-9号3, K-13号-1。b. 胴部の最大径が上位にあるもの、K-20号1などがある。

坏形土器, Aは丸底を呈するもので、a. 口縁は垂直状, K-7号12, 15, 16。b. 口縁が外反し、口縁下は垂直状のもの、K-7号17, K-13号9, K-16号3。c. 口縁は垂直状で直下に稜がある、K-1号2, K-13号-5, 8。d. 口縁は内反し、直下に稜があるもの、K-13号6, 7, 10, K-16号2などがある。

B 体部は丸味を帯びるが、平底又は平底に近いもので、a. 口縁が垂直状のもの、K-17号3, 4。b. 口縁が外反するもの、K-17号-5などがある。

以上の型類に分かれるが、甕形土器では、口縁部の形状がA・Bの2類に、また胴部では、比較的細長いものと、球状とに分かれる。坏形土器では、丸底と平底又は平底状を呈する、A・Bの2類で、口縁部が垂直状又は外反するものと、垂直状及び内反し、それぞれ稜がつくものに分かれよう。

これらの内、須恵器を伴う遺構は皆無であり、わずかK-7号住居跡覆土から、坏形土器片1点を出土したにすぎない。したがってIVでは年代を推定する資料に欠けるが、甕形、坏形土器からは、後期の中葉から後半に比定されよう。特に後半のものが中心を占めているようである。

V K-14号住居跡からの出土遺物は少量であり、高坏形土器4点の内2点は前半期に属しており、残る2点と、坏及び蓋など3点を数える。その内須恵器では、床直出土の蓋坏1点と、覆土から坏1点を検出した。蓋坏は型類的には上ノ台のIIIに求められ⁽⁵⁾、年代的には7世紀の中葉に含まれよう。

4) 歴史時代 時期的には奈良期に属するR-1号住居跡1軒である。出土遺物は、甕形土器が多く、ついで坏、甗などの土器の他、須恵器では、蓋、坏、高台付盤形須恵器、甕片など8点を数える。

土器の内、甕形土器では、R-1号1が伊勢形式に、2～5が武蔵形式に分かれ、須恵器では、東海系4～18など外来系のものが主流を占める。甗形土器6, 9, 10では、口縁が水平又

はそれに近い形状を呈し、古墳時代後期にはみられない。坏形土器では、平底で、斜め直線状に立ち上がるもの¹¹、口縁部がゆるく外反するもの¹²、口縁端部が外反するもの¹³の3種類ある。いずれも、奈良時代の前期初頭の範疇に求められよう。

歴史時代では、R-1号住居跡の他、掘立柱建物跡と、四脚門を伴う柵列塀とが検出されているが、共伴関係を有する遺物は皆無に等しい。R-1号住居跡と時期を同じくする施設である可能性は高く、「和名抄」にみえる、市原郡6郷の1つ濕津郷との関係が示唆されている。

本跡は、西側に主要部分を残しており、全容の解明と性格は、この部分の調査にかかっている。いずれにせよ、本跡の性格如何では、奈良時代における郷の経営・管理又は支配の一端を窺い知る上でも極めて重要な資料となりうるであろう。そのためにも、今後の調査に期待したい。

以上、西山遺跡に検出された、縄文時代から歴史時代までの遺構、遺物について簡単に述べてきたが、次項では、弥生時代中期の環濠と古墳時代の石製垂飾品についてふれておきたい。

2. 環濠について

1) 機能 環濠の機能については様々な推測がなされているが、おおむね集落の区画と防禦との2説に大別されよう。特に後者の防禦説では「魏志倭人伝」にみる“倭国の大乱”の時期が弥生時代の中期項に相当するとの推論に根源を求め、加えて立地的な要素が多分に考慮されていると言える。これらの遺跡の場合、多くは河川及び支谷、沖積地などによって囲まれ、半ば、要害化した舌状台地上に位置しており、弥生時代の高地性集落と比較され、外敵からの集落の保護・防衛という一種の城塞的機能としてとらえられているようである。

市原市では、国分寺台の南西端、養老川に向って張り出した台地上に、根田遺跡と台遺跡⁽⁶⁾があり、村田川流域では、西山遺跡の西側に流れる神崎川を挟んだ対岸に位置する、大厩遺跡と村田川対岸の草刈遺跡などに検出例がある。更に市外では、佐倉の大崎台遺跡⁽⁷⁾、東金の道庭遺跡⁽⁸⁾、又、近県では、横浜の大塚遺跡⁽⁹⁾、朝光寺原遺跡などにみられる。西山遺跡を除き、いずれも、比高差の大きい台地上に位置することで共通している。

特に、中期宮ノ台期の環濠集落の全容を検出した大塚遺跡では、“生産面積の不足から耕地の争奪に対処する”⁽¹¹⁾として集落の防禦説を提示している。また市原の根田遺跡では、周辺における“母村的”集落と性格づけ、規模及び立地などから要害とする推測を加えている。⁽¹²⁾これらの説は、対人間を想定した防禦であり、環濠はそれらの斗争を前提とした施設としてとらえられている。集落防禦説に対して、道庭遺跡では、過去の検出例によって、濠に付する土塁の不備(未検出)を主な根拠とし、防禦説を否定し、“害獣から集落を守る”⁽¹³⁾ものであると同時に、集落の範囲を示す区画的機能を示唆している。

集落防禦説を強く打ち出している大塚遺跡は、一方で土塁が濠の外側に築かれていたとする調査成果に矛盾してはいないだろうか。環濠を防禦の一手段としてとらえるならば、濠本来の機能を理解する必要がある。濠は侵入者の行手を遮り、行動を鈍らせ又は停止させる機能をもつ。かつ内側からは彼らの行動を把握し、それに対処する手段を講ずるのである。土塁が濠の外側に築かれた場合、侵入者にとってこれほど有利な条件はない。土塁に隠れ、それを突き崩すことにより濠は埋り、防ぐという機能はこの時点で停止しよう。したがって、濠外に土塁が築かれていたとする調査成果が正しいとみるならば、防禦という説の根拠にはなりえないであろう。更に付け加えるならば、濠の断面形態が異なる場合では、機能差も生じよう。V形と∟形がそれぞれある。西山を含む市原市内の検出例では、V形が多い。V形は、正確に言えば、濠の下位で急傾斜に折れ曲がる、薬研（薬草などを揺りつぶす動具）状を呈している。この形では、動物はいうに及ばず、人間でさえも落ちた場合、体の自由（特に足の）を奪い、脱出もまた不可能に近い。V形は、埋めない限り起えることは不可であり、∟形は、多少の困難があっても可能である。大塚遺跡の濠は∟形である。仮に土塁を内側に築いたとしても、濠自体が侵入を阻むという機能を持たなければ意味をなさない。

西山遺跡では、比高1 m強（現行では）の低位台地上に位置し、立地的には3方向を沖積地に囲まれているとはいえ、要害とは言い難い。又、調査では、内外に土塁を築いたとみられる痕跡はなく、それに変わる柵列遺構なども認められていない。覆土の最上層には、ロームブロックが落ち込んではいるが、即、土塁の崩落に結びつける材料にはならない（壁上位に崩落跡がある。冬期には霜による多量のローム崩落が生じる）。

以上の如く、西山遺跡の検出面にみる限りでは、濠自体の規模は、かなりのものではあるが、斗争を前提とした防禦施設とするには確証に欠けている。むしろ、道庭遺跡でいうところの、集落及び収穫物を獣から守る施設に近いと考えられる。少し付け加えるならば、野火止めの機能をも合わせもった施設ではなかったか。

2) 環濠の再利用 環濠内出土土器から、中期宮ノ台末期の時点では、濠は当始の形態（薬研状の）は保っていないものの、規模的には維持されていたと考えられる。次の古墳時代前期前半では、集落は濠の南側に集中しており、調査範囲内では濠内（又は濠跡）に認められていない。次に中期に至り、集落は北側、濠又は濠跡の内側に検出されている。また、この時期の土師片が濠の第2層（中層）上端から出土しており、再掘又は完全に埋没していない段階で、路あるいは区画の溝として利用した痕跡が認められている（調査段階では、濠の南側と中央付近の一部分に踏み固め状の硬質面があるが、7か所の断面層序では、路状と不整V字状の部分とがある）。更に後期後半では、濠は完全に埋められ、直上に住居跡が多くみられる。

因に、濠跡に床面をもつK-1号住居跡は、床面下の土を固く締めつけている。K-13号住

居跡では、北西隅が濠にかかっており、ローム大ブロックを多量に敷いて強化している。K-14号住居跡では、支柱穴P₃が濠内にかかるためか、柱穴下端にローム大ブロックが敷かれている。更に、南側の約半分の床が濠にかかるK-17号住居跡では、2回以上のかさ上げが行なわれている。このように濠にかかる各遺構では、床面沈下の対策にそれぞれの工夫をしている。

以後、時は流れ、近世には路が敷設されている。この時点においても、濠跡は凹地状に残り、道路敷設の目印になったものと考えられる。これらは又、濠の下位で出水によるとみられる浸食が断間なく続き、それを要因とする覆土の沈下現象が着実に進行していることを示している。

過年、四街道市内の小名木において、農道の陥没が相ついだ。陥没は一線上に発生し、都度埋めたてが行なわれたが、数年に1度の割合いで発生するという。発生地点は字椎木を中心として構築された“小名木城郭群”の1つである小名木椎木城の内郭を守るV形の薬研堀であり、ロームを貫いて粘土層に達していることが判明している。ローム内に基底部をとどめる濠又は溝では発生しえない現象である。

弥生時代中期と中世とでは大きな時期差があるが、条件を同じくする両遺構で発生する現象としては何ら性質を異にするとは思えない。ともあれ、今回の調査では、路は環濠に沿って敷設されており、弥生時代から近世に至る間もなお、濠はその痕跡をとどめていたであろう。

3. 石製垂飾品

西山遺跡からは、県内では2点目の石製垂飾品が検出された。過去、型類的にも同じ系統を引くと思われる同様遺物の出土が数例検出され、報告では、古墳時代の前半から後半期とされている。従来、この種の石製飾品は石製模造品又は、琴柱形石製品の異形としてとらえられ、⁽¹⁴⁾後に、出土範囲が集落に限られることなどの指摘により、垂飾品とされ現在に至る。⁽¹⁵⁾

全国では10遺跡から13点以上の検出例が報告されている。

石製垂飾品の特異な形状では、上位が屋根状に、中位が柱状を呈し、上中位を合せ上屋式の“家”形に例えることが出来よう。下位の勾玉との結びつきにヒントがあるように思える。

以下、現時点における出土例を元に、形状、文様構成を中心とした若干の分類を試みたい。石製垂飾品の下位形状が、背合せ状勾玉文をⅠ類とし、勾玉連接文をⅡ類とした。⁽¹⁶⁾

Ⅰ類 厨1号②，下佐野Ⅱ⑤⑥，本村⑧，下槇⑫⑬

Ⅰa・2孔3柱～⑤⑫⑬，Ⅰb・3孔4柱～②⑧（中位の柱状工匠）

Ⅱ類 長瀬高浜①，小深田第3③，鬼釜④，上谷本第二⑨，向新田⑩，潤井戸西山⑪

Ⅱa・1孔2柱～①，Ⅱb・2孔3柱～④，Ⅱc・3孔4柱～③⑨⑩⑪

（遺跡名及び遺物番号の○付数字は、第46表に準ずる。）

A・綾杉線刻文、B・格子状線刻文、C・縦位の連続横走線刻文、D・鋸歯状線刻文、E・平行線刻文、この内、A～Dは文様帯を区画する2～3本の陵又は平行線刻を伴う。

ここでは、平行線刻を多数付するものは文様として扱い、区画に付するものとは分けた。

これらのⅠ・Ⅱ類と文様帯の組合せでは、Ⅰ-A・②、Ⅰ-AC・⑫⑬、Ⅰ-B・⑤⑧となり、Ⅱ類では、Ⅱ-A・⑤、Ⅱ-AC・⑨、Ⅱ-AE・④、Ⅱ-CE・⑩、Ⅱ-DE・③、Ⅱ-EE・⑪となる。その他、無文（線刻）では、Ⅱ-①がある。

下位の形状では、Ⅰ類のⅠ-A・②とⅠ-B・⑧が勾玉の原形を表わしているのに対し、Ⅰ-AC・⑫⑬及びⅠ-B・⑤では、勾玉間に文様を付することにより、原形の変化がみられる。

Ⅰ類の線刻文では、A～Cに限られ、DEはみられない。

Ⅱ類では、勾玉が一方方向の接続文となる。Ⅱ-DE・③では下位の孔と共に勾玉の原形はとどめているものの、柱状部との間に文様帯が構成されている。更に、Ⅱ-AC・⑨、Ⅱ-CE・⑩では、勾玉は簡略化し、柱状部との間に文様帯の定着化がみられる。Ⅱ-EE⑪では、線刻自体が浅く、不規則になり、加えて上下の挟り、特に接続文に付する片側の挟りは形骸化し、そこからは勾玉の原形を見出すことが困難なまでに形式化している。

石製垂飾品にみる形状の変化では、Ⅰ・Ⅱ類の如く、下位形状の変化（退化）という方向と文様構成の簡略化という見方をすれば、初期形態をⅠ-②⑧に求められよう。次にⅠ-⑫⑬→Ⅰ-⑤に、Ⅱ類ではⅠ類に近いⅡ-③→④→⑨→⑩→⑪→①の順となろう。特にⅡ-AC・⑨の文様構成では、上位の屋根部がⅠ類の主流をなすA文を付し、下位はⅡ-⑩⑪にみられるC文を、又、Ⅱ-⑩では上位にE文、下位は⑨と同じC文を付しており、少なくとも、Ⅱ-⑨～⑪に④を加えた4点は、文様構成に若干の差は認められる他は、類型的に近い位置にある。

次に石製垂飾品の表裏である。この種の石製品では、表裏共に同じ工匠を施し、文様も同じであることから、どちらを向いての使用の仕方自体に特別な問題があるとは思えないと見る向きもある（報告ではふれていない）。しかし、本品の性格及び用途が全くつかめていない現状では、表裏の判定が無意味であると断定は出来ない。Ⅱ-⑪、西山遺跡の出土品では、次の現象によって表裏が判明している。以下、勾玉が左向きの面をA面、その裏をB面とする。

第1にA面では、左右2点の円孔上端に巾のある磨耗痕が認められ、B面では、左右の相対する側の両端と中間に同じ痕跡がみられる。

第2にAB両面の上下に施されているC文が、A面ではよく残り、B面の下位では線刻はかろうじて残っているものの、本数が判明できないほど磨耗が激しい。

第3にA面中位の柱状部分が丸味を帯るのに対し、B面は偏平に近い。

以上のことから、第1のA面にみられる巾のある磨耗痕は、本品が常に動いていた状態を示し、かつB面の状況からは、A面側の片方から紐を通し、B面側のもう片方から再びA面側に

第46表 石製垂飾品一覧表

No.	遺 跡 名	石 質	法 量 mm		形 状 ・ 文 様 構 成 上・屋根部，中・柱状部，下・勾玉部	出土位置 報告時期	遺 物	文 献
	所 在 地			巾＝上・下				
①	長瀬高浜遺跡 鳥取県羽合町	蛇紋岩	高巾厚	25 8・12 3	上・円孔×2 中・長方形1孔・2柱 下・半円形1孔・2連？	工 房 跡 後期前半		『長瀬高浜遺跡発掘調査報告VI』 1983（財）鳥取県教育文化財団
②	厨1号洞穴 福井県越前町	滑石		—— —— ——	上・円孔×2，綾杉線刻文 中・長方形3孔・4柱 下・背合せ状勾玉文	洞 穴 前期後半		亀井正道「琴柱形石製品考」『東京国立博物館紀要』第8号 昭和47年 東京国立博物館
③	小深田遺跡 第3地点 静岡県焼津市	滑石		20 18・20 5	上・円孔×2，平行線刻文（3本），鋸歯線刻文 中・長方形3孔・3柱 下・勾玉形2孔・3連，平行線刻（1本）	住 居 跡 ？		「小深田遺跡第3地点」『焼津市埋蔵文化財発掘調査概報II』 昭和57年 焼津市教育委員会
④	鬼釜遺跡 長野県池田町			25 16・23 ——	上・円孔×2，綾線区画の綾杉線刻文 中・長方形2孔・3柱 下・半円形3孔・4連	住 居 跡 ？		②に同じ
⑤	下佐野II遺跡 群馬県高崎市	蛇紋岩		27 20・25 3	上・綾線×2 中・長形2孔・3柱 下・背合せ状勾玉，直行格子文	住 居 跡 前 期		女屋和志雄「群馬県下佐野II遺跡」 『日本考古学年報－33』1980年度版 日本考古学協会
⑥				20 8・17 5	上・—— 中・長形2孔・3柱 下・背合せ状勾玉			
⑦				30, 10, 3	下・背合せ状勾玉の縦½			
⑧	本村遺跡 埼玉県浦和市	滑石		25 17・25 3	上・円孔×2，格子状線刻文 中・長方形3孔・4柱 下・背合せ状勾玉	住 居 跡 後期前半		②・⑤に同じ
⑨	上谷本第二遺跡 A地点 神奈川県横浜市	滑石		34 18・24 2	上・円孔×2，綾杉線刻文 中・長方形3孔・4柱 下・半円形3孔・4連，縦位横走線刻文	住 居 跡 前期後半		合田芳正他『上谷本第二遺跡A地区・B地区』 発掘調査概報 1971年 中央大学考古学研究会
⑩	向新田遺跡 千葉県印西町	滑石		—— —— ——	上・円孔×2，平行線刻文（6本） 中・長方形3孔・4柱 下・三角形3孔・4連，縦位横走線刻文	住 居 跡 前 期		『十年の歩み』－創立十周年記念誌－昭和60年（財）千葉県文化財センター 『千葉県文化財センター年報9』 1983年（財）千葉県文化財センター
⑪	潤井戸西山遺跡 千葉縣市原市	蛇紋岩		31 20・25 2	上・円孔×2，平行線刻文（6本） 中・長形3孔・4柱 下・半円形3孔・4連，平行線刻文（10本）	住 居 跡 前期前半		長橋正「山形県下楨遺跡」『日本考古学年報－33』 1980年度版 日本考古学協会
⑫	下楨遺跡 山形県西村山郡 河北町	滑石		25 11・20 25	上・円孔×2，綾杉線刻文 中・長方形2孔・3柱 下・背合せ状勾玉と綾杉線刻文	住 居 跡 前期前半		
⑬		石		27 11・20 2	同 上			

注．石質は報告された名称を記載した。挿図は，報告書より転写し，縮尺は不特定。
表中の挿図の内，⑩の向新田は，（財）千葉県文化財センターのご協力により，写真図版を図化したものであり，実測図とは異なる。

通した状態を示している。第2では、B面下位の磨耗から、常に被服などに接した状態を残している。B面上位では、被服との間には紐を介すことから、直接に接することなく磨耗はみられない。第3の丸味からは、常に人目にふれる面に入念な加工を施すのは人の常であろう。

これとは逆に、素肌と被服間につける場合は、AB面が逆になるが、本品が集落の中で特定の者の立場又は地位を表わす証しとしての性格を持ち、人目に触れることに意義をもつものであれば、常時の携帯が考えられ、被服の上にあると推定できよう。

II-⑪は西山遺跡のK-21号住居跡出土であり、共伴する土器は、古墳時代前期五領式の前半に比定される。またII-⑨は報告では前期五領式の後半とされているが、共伴土器では、西山遺跡と同時期の範疇に含まれよう。この場合、前述の文様構成及び形状の変化・退化と時期差とが必ずしも伴うとは限らないようである。特にII類に関しては、共伴関係にある土器から時間差の範囲では大差はないものと推定できよう。しかし一方では時期の巾があり、未整理分も含めて共伴関係が不明確な部分もある。とは言え、本品の出土位置は、I-②を除き、住居跡出土が11点を数える中で、I類では、下佐野II遺跡（I-⑤⑥）、II類では、長瀬高浜遺跡（II-①）の両遺跡における玉造り工房が調査されており、生産地の一端が明らかにされたことでこの種の石製品に関する研究に大きな手掛りとなるであろう。ここでは、単に集成にとどめており、何ら確たる成果を引き出せずに終ったが、いずれかの機会に改めて練り直したい。

尚、石製垂飾品の資料については、当センターの田中新史氏、山口直樹氏、千葉県文化財センター主任調査研究員の及川淳一氏、同石倉亮治氏よりの御指導、御協力をいただいた。

4. 結びにかえて

西山遺跡の調査範囲内にみる限りでは、各時期の遺構の集中か所が異なっているのが判る。弥生時代中期の環濠が、北側台地の傾斜変換線付近に掘り込まれていることは前述の通りである。次に古墳時代の前半は、埋没谷の堆積土上に位置し、ついで、中期から後期にかけては、傾斜変換線以北の台地上に集中している。

現在では大型の排水溝が設置されているが、設置以前は、埋没谷を中心に、かなり広い範囲が冠水したことが地元の証言によって明らかである。これは、台地の伐採や開墾、及び造成により、山林の保水能力の低下に関係するとみられ、台地の保水性と集落の立地とが密接な関係下にあるのではないかと考えられる。

弥生時代中期では、農地経営の初期発展段階であるとされている。この地に初めて集落を形成した中期宮ノ台期は、生産基盤に接し、かつ最っとも摘した台地の中心部分を占地している。

以後、農業生産の拡大に伴い集落の拡大及び分散、移動が行なわれた時点では、水田以外の台地の開墾はさほど発達してはいなかったのではないかとと思われる。これは、最も冠水しやすい

い埋没谷上に集落が構成されている状況を見るまでもないであろう。古墳時代の前半期では、台地の保水性は保たれていたと考えられる。中期和泉期の前後では、広範囲な鉄器の普及と共に台地深部への進出につれ、山林の保水能力の欠如を招き、集落は冠水による被害をさせて台地上に移行したものと推定できる。今回の調査では、古墳時代中・後期の集落は、すべて埋没谷の傾斜変換線の外側に集中している事実は、埋没谷を中心とする冠水と決して無縁ではないように思える。

- 註1 三森俊彦他 『市原市大厩遺跡』財団法人千葉県都市開発公社 1975年
- 2 小久貫隆史他 『千原台ニュータウン・I』財団法人千葉県文化財センター 1980年
- 3 「向新田遺跡」『千葉県文化財センター年報－9』（財）千葉県文化財センター1983年
- 4 四街道市教育委員会及び中山遺跡調査会の御好意により、遺跡見学の機会を得た。
- 5 酒井清治他 「千葉上ノ台遺跡出土の須恵器」『千葉上ノ台遺跡3』千葉市教育委員会 1982年
- 6 浅利幸一 「根田遺跡」『上総国分寺台遺跡発掘調査概報』市原市教育委員会 1983年
- 7 柿沼修平他 『大崎台遺跡発掘調査報告I』佐倉市大崎台B地区遺跡調査会 1985年
- 8 小高春雄 『道庭遺跡』道庭遺跡調査会 1983年
- 9 千貝幸之助 — 大塚遺跡をめぐる諸問題 — 「築城の歴史」『深訪日本の城』小学館 1977年
- 伊藤郭 「濠に囲まれた弥生時代のムラと墓地」『古代のよこはま』横浜市教育委員会 1986年
- 10 佐藤安平他 「朝光寺原遺跡C地区調査概報」『横浜市埋蔵文化財調査報告書』横浜市埋蔵文化財調査委員会調査団 1969年
- 11 9に同じ
- 12 6に同じ
- 13 8に同じ
- 14 亀井正道 「琴柱形石製品考」『東京国立博物館紀要第8号』東京国立博物館 1972年
- 15 田中新史 「東国の古墳時代出現期とその前後」『東アジアの古代文化－46』大和書房 1986年
- 16 石製品の下部文様。註15の中で田中新史氏は勾玉連接文としている。これに変わる適切な名称がないため、使わせていただいた。
尚、石製垂飾品については、第46表に記載の文献を参考とした。



図版 1



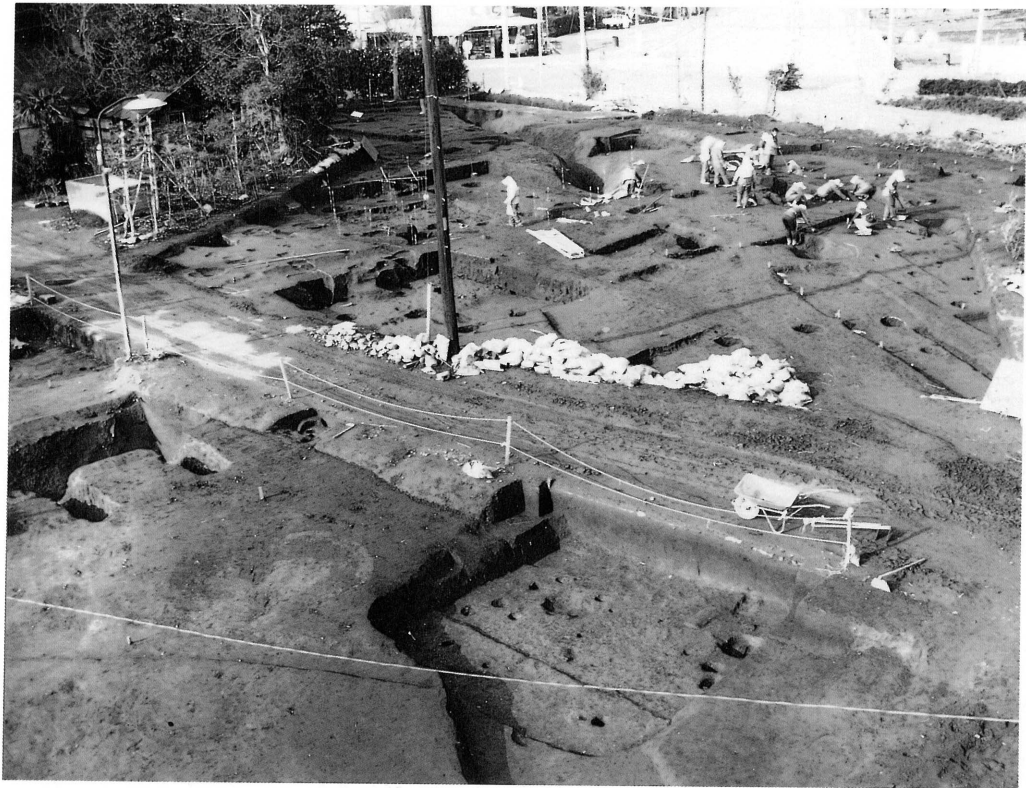


1. 調査区域の南側全景（南から），右上端は移設した南側私道



2. 同，北側私道から南方向

図版 3



1. 南側私道の移設前の調査

2. 北側私道周辺部の調査



1. 調査区域の中央部分（南東から）



2. 調査区域の北西隅切り全景（南東から）

図版 5

1. J-1号陥し穴状遺構
(西から)手前は、弥生
時代中期の住居跡

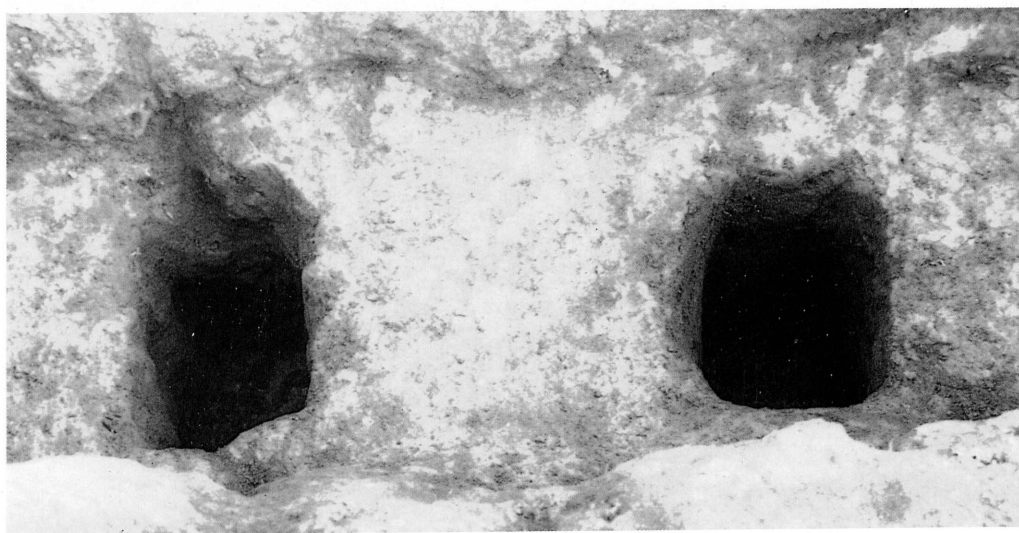


2. 同, (北から)





1. J-2号陥し穴状遺構（東から）



2. 同，柱状穴（南から）

図版 7



1. J-3号陥し穴状遺構土層層序（北から）



2. 同，全景（東から）

図版 8



1. J-6号陥し穴遺構（南から）
埋没谷の中央やや北側斜面に位置するため、出水が激しい。

2. J-7号陥し穴状遺構



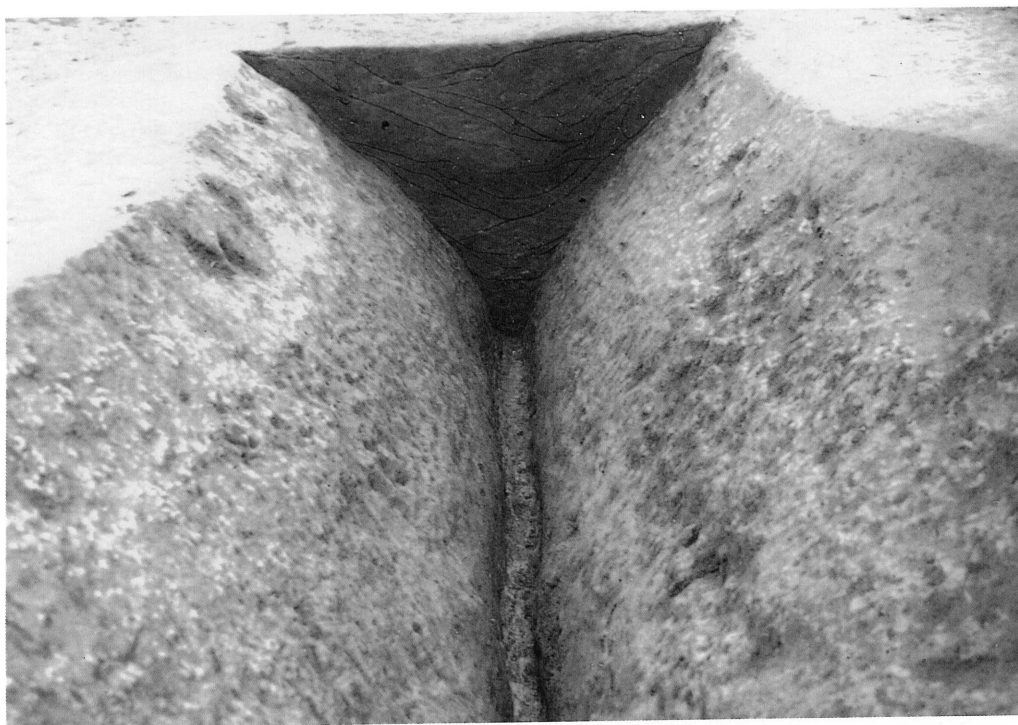
図版 9



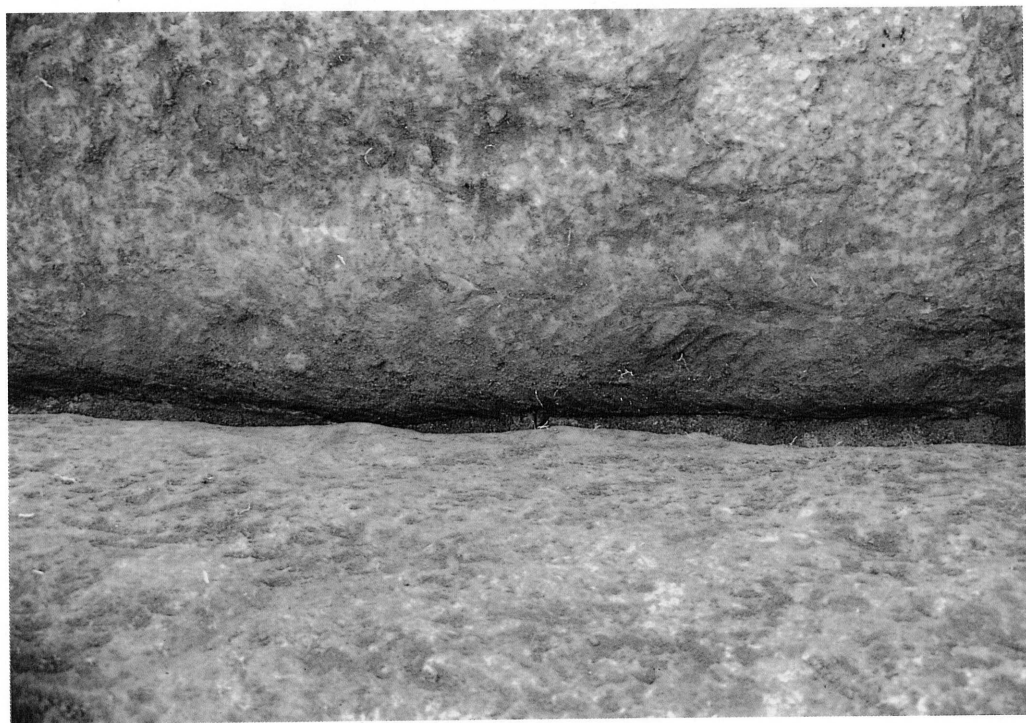
1. Y-1号住居跡全景
(西から)



2. 同，遺物出土状態



1. Y-1号溝（環濠）の土層層序



2. 同，底部

図版 11



1. Y-1 号溝
北側（南から）



2. 同，渇水期の底部

図版 12

1. Y-1号溝（環濠跡）
北側（北から）
濠内の出水は、11月から
翌年の調査完了、埋め戻
しまで続いた。



2. 同，南側（北から）

図版 13



1. Y-1号溝, 中央部分。K-17号付近の状況（南から）



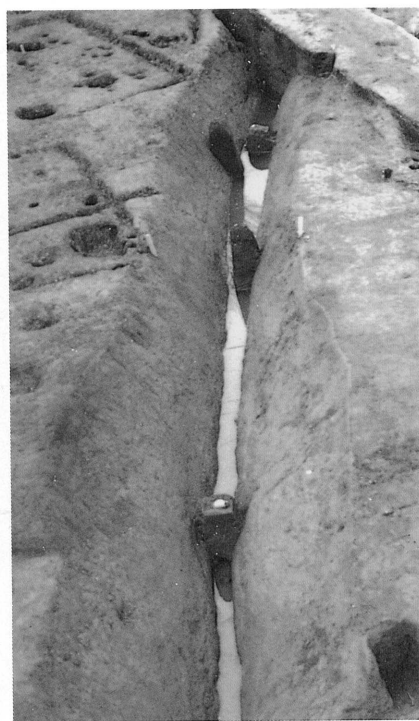
2. 同, 北側の濠内



1. Y-1号溝内の壺出土状況（第13図-2）

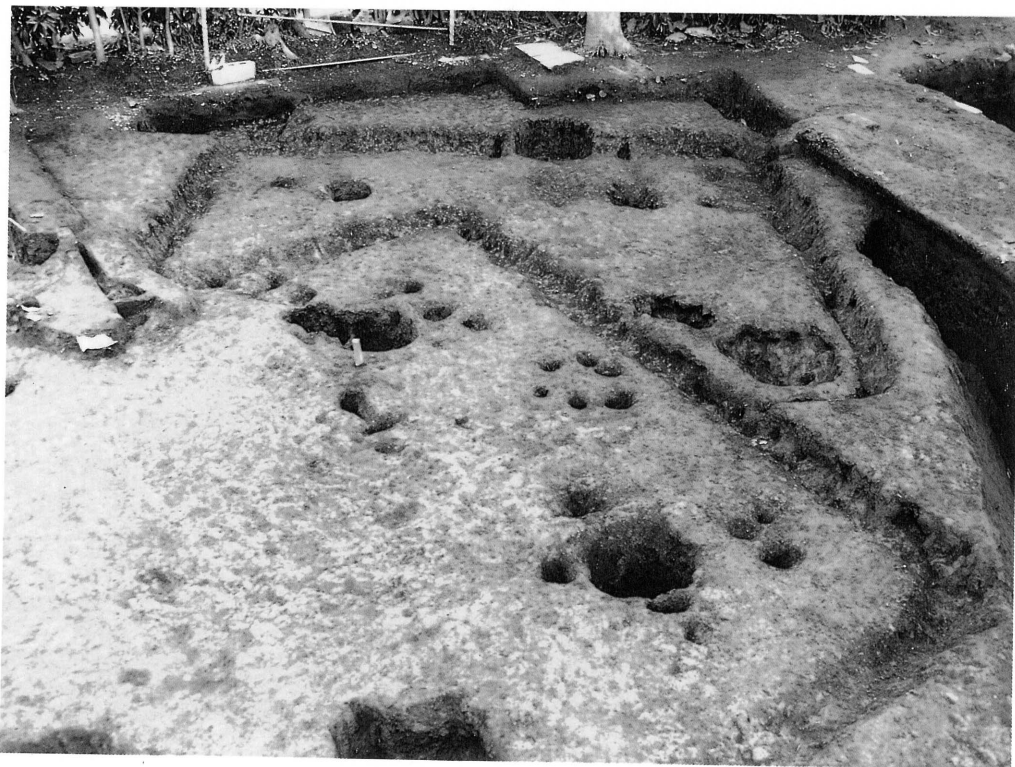


2. 同，（第13図-1）

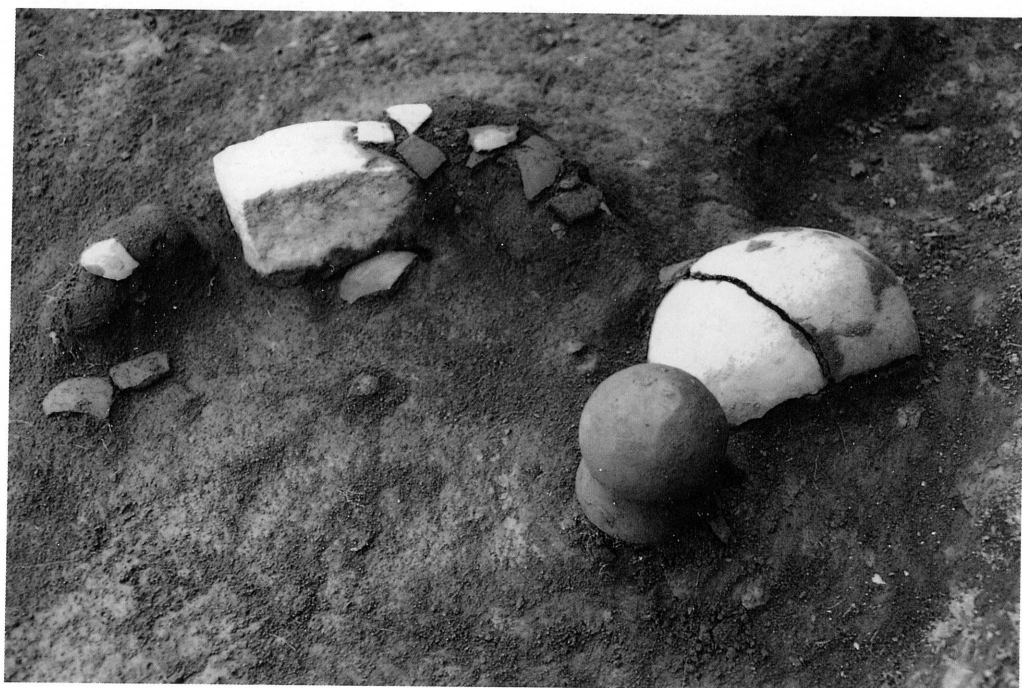


3. 濠内の遺物出土状況（南から）

図版 15



1. K-3号住居跡全景（上端はK-2号住居跡（床のみ），下はK-5号住居跡）



2. 同，遺物出土状況（左上は石製鉄床）



1. K-5号住居跡全景（西から）



2. 同，全掘（南から）左端に平行縦列溝を検出する

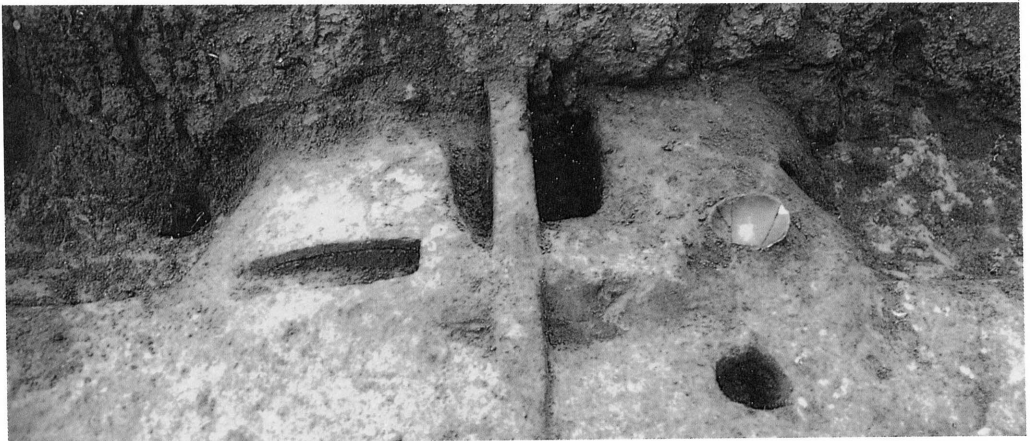
図版 17



1. K-6号住居跡全景（南から）



2. 同，土壇（西から）



1. K-7号住居跡全景（南から） 2. カマド 3. 南壁の特殊遺構（北から）

図版 19



1. K-9号住居跡全景（南から）



2. 同，遺物出土状況



1. K-8号住居跡（右端）全景（南から）



2. K-10号住居跡（白線）全景（南から）

図版 21



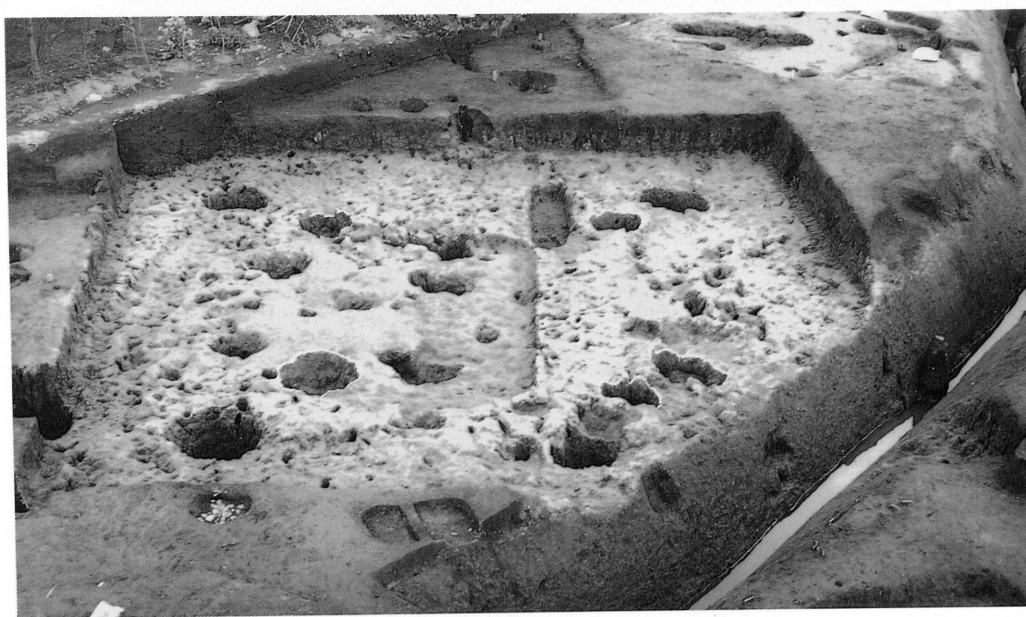
1. K-12号住居跡全景（南から）



2. K-13号住居跡全景（南から）



1. K-14号住居跡（南から） 2. 北側床柱の発掘時の状態



3. 同上の全掘（白線は、貼り床下検出の柱穴）

図版 23



1. K-14号住居跡のカマド（東から）



2. 同，袖部と貼り床（左右の袖下層）の状態



1. K-14号住居跡の北壁付近の全掘（東から）

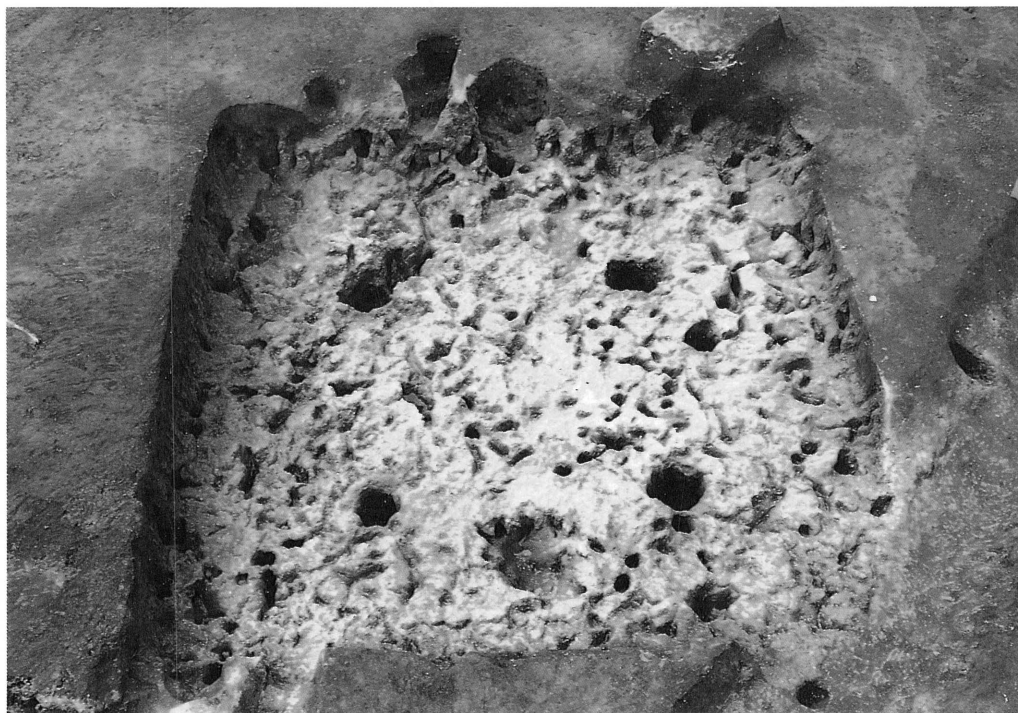


2. K-15号住居跡（白線）の全景（南から）

図版 25



1. K-16号住居跡全景（南から）



2. 同，全掘



1. K-17号住居跡全景（カマド付近に掘立柱の一部分・東から）



2. 同，カマド

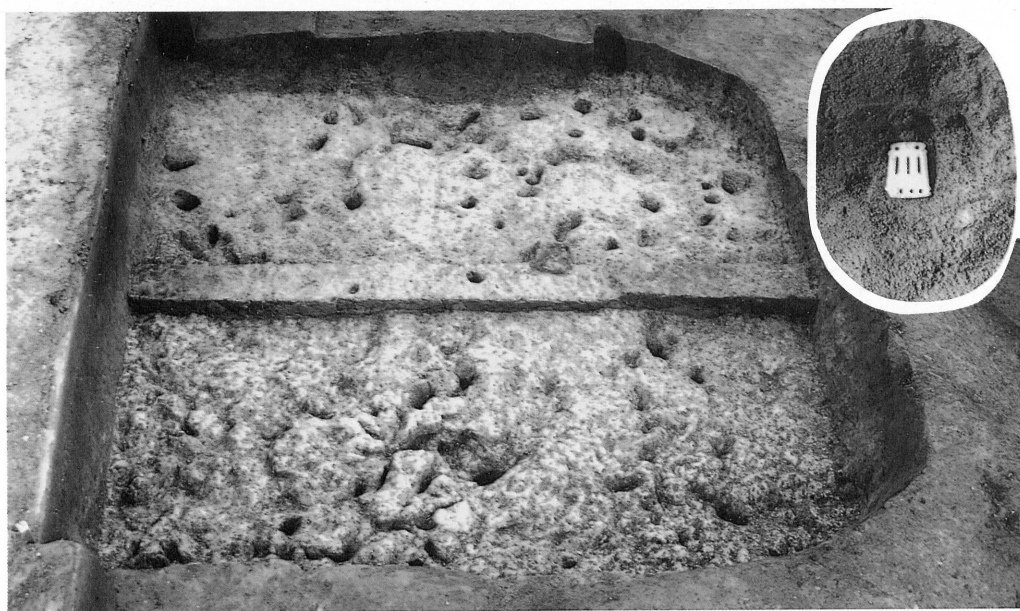
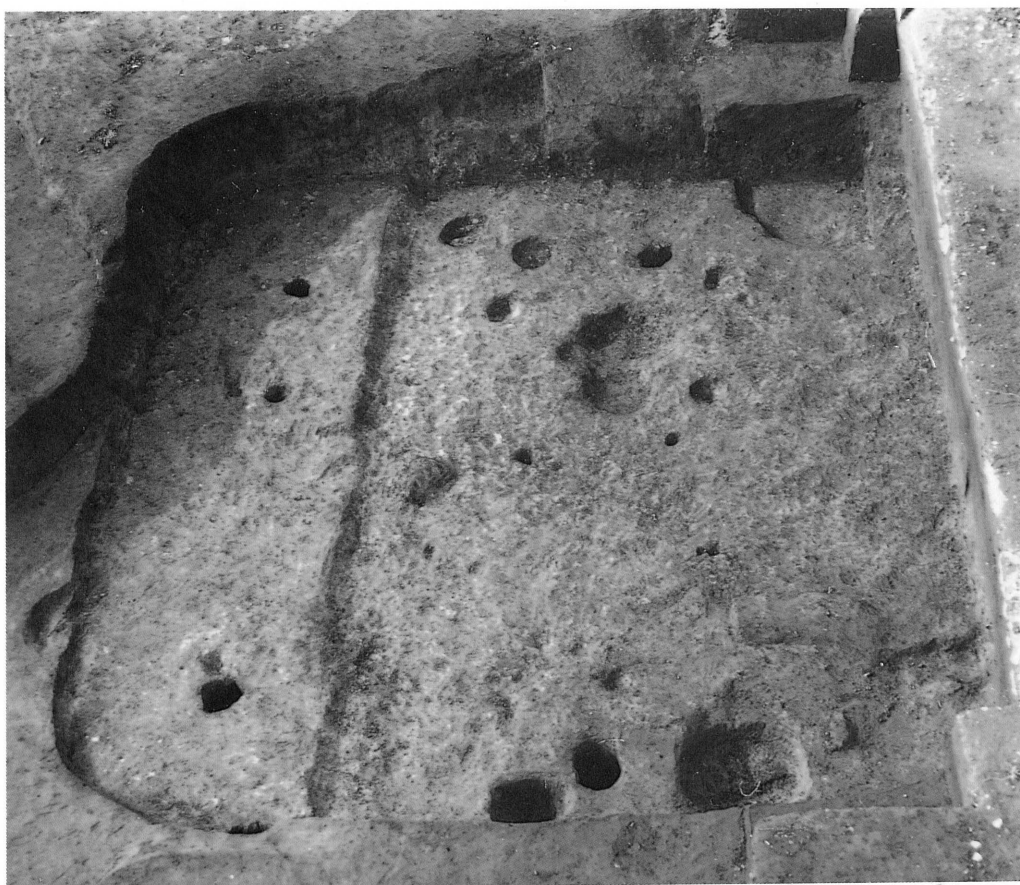
図版 27



1. K-20号住居跡全景（西から）



2. 同，遺物出土状況



1. K-21号住居跡（南から） 2. 同，全掘（北から）と石製垂飾品



1. K-22 (上) 23 (下) 号住居跡完掘前の状態 (南から)



2. K-22号住居跡の遺物出土状況



K-22 (上) , 23 (下) 住居跡の全景 (南から)

K-23号住居跡の全面にキレツ跡がある。写真では、右上隅の壁からP 2の右端を経て、P 3方向、左上壁上から南壁中央にかけて斜めに入っている線状の部分。

図版 31



1. K-24号住居跡（北西から）



2. 同，遺物出土状況



1. 歴史時代住居跡（R-1）の全景（南から）



2. 同，完掘状態（東から）

図版 33



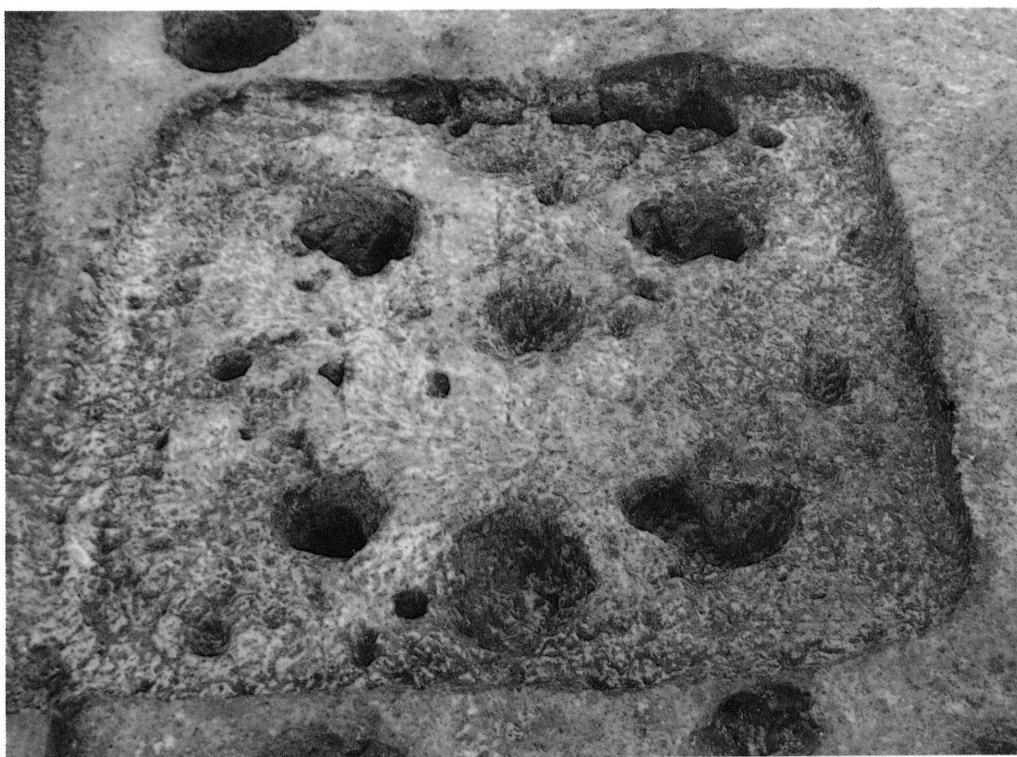
1. 歴史時代住居跡（R-1）南壁付近の遺物出土状況（白点は突然降り出したアアレ）



2. 同、カマド前面の遺物出土状況（北から）



1. R-1号住居跡のカマド



2. 同, 掘り方(南から) カマドの右側は, K-15号住居跡のP2



1. 掘立柱建物跡（南から）

2. 同，a-1柱の土層層序

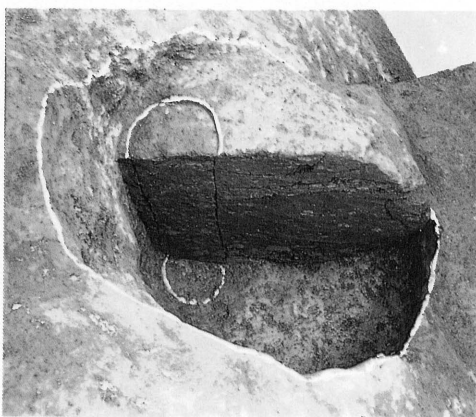
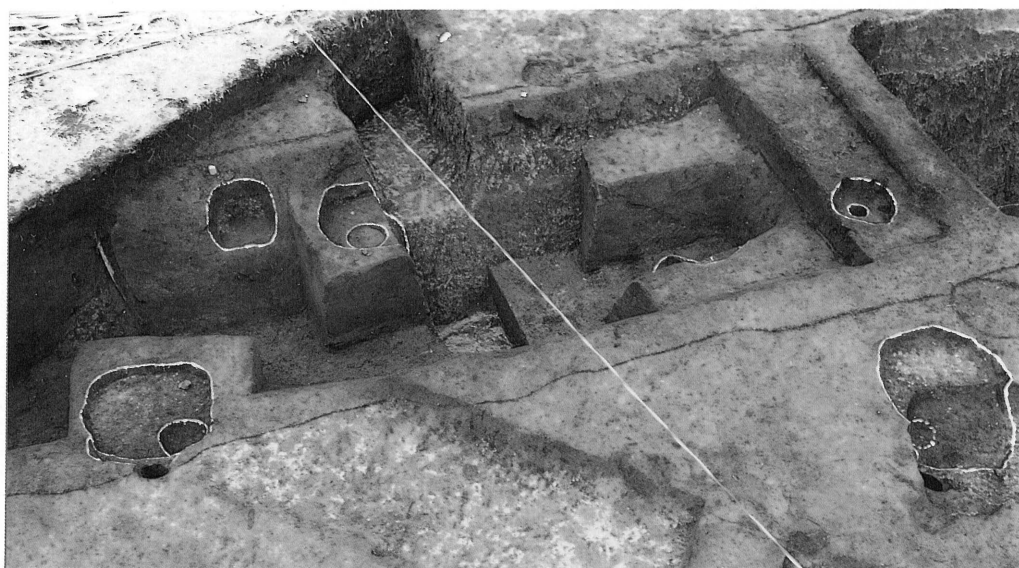


1. 掘立柱建物跡のd-3柱（上端は下水管）

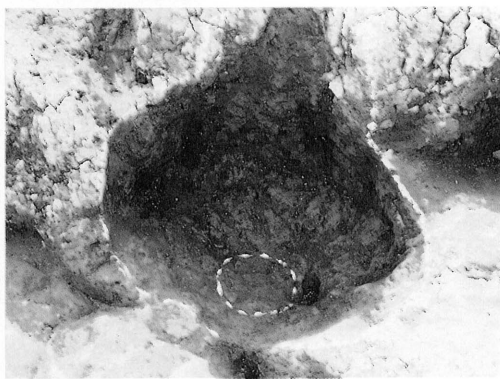
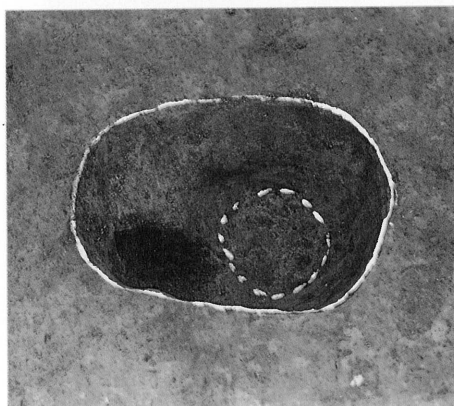
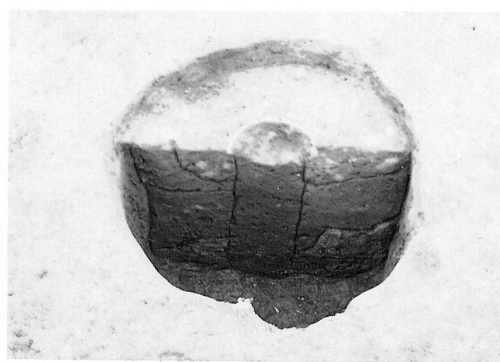


2. 同，b-1柱

図版 37



1. 門跡（南から）右上のベルト上端に新たに1柱を検出
2. 同上（西から）及び南側柵列堀跡
3. 4門内検出の妻中央柱跡



1. 東側柵列堀跡（北から）. 2～6 柵列跡

図版 39



1. 環濠上に
敷設の路
(南から)



2. 同上

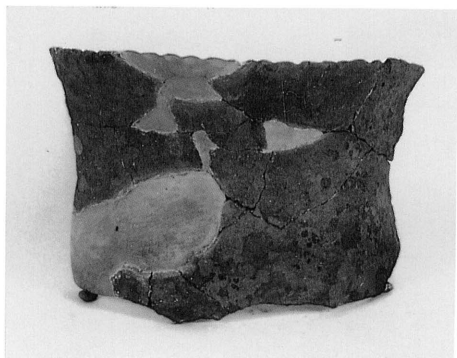
図版 40

1. X-1号溝北側



2. 同，北から南側方向

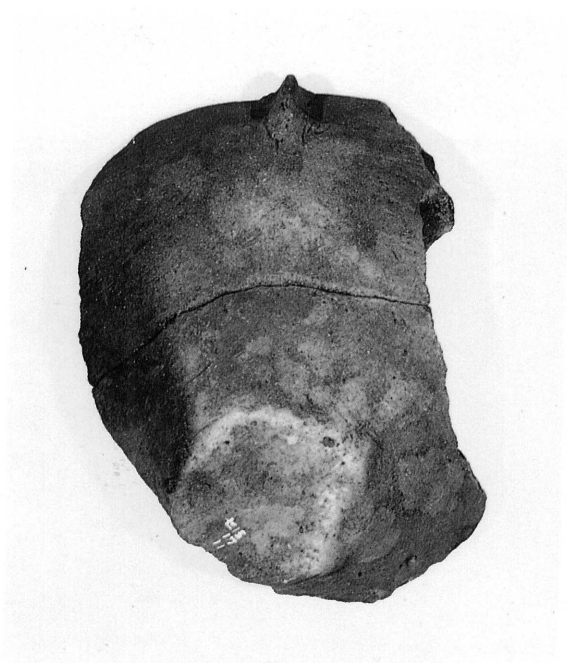
图版 41



Y-1 号住居跡-1



Y-1 号住居跡-2



Y-1 号住居跡-3



Y-1 号住居跡-3



Y-1 号溝-1



Y-1 号溝-2

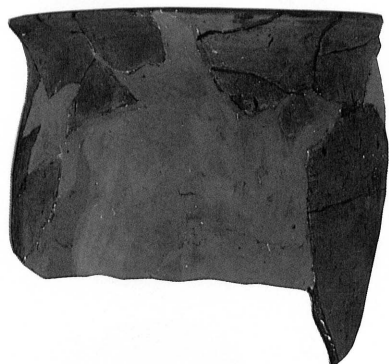


Y-1号溝-3



Y-1号溝-4

以下，Kは住居跡に限られるため，記号のみとした。



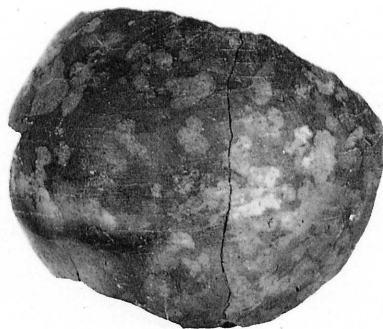
K-1-1



K-1-2



K-3-1



K-3

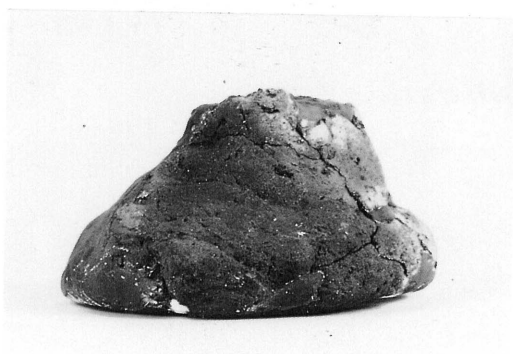
図版 43



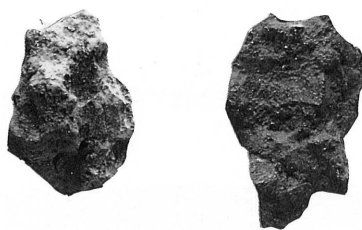
K-3-5



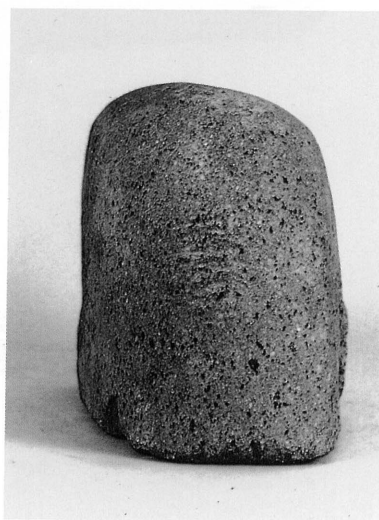
K-3-6



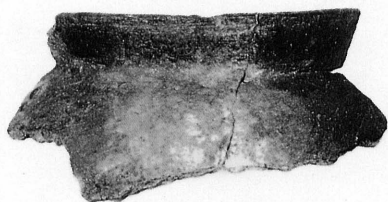
K-3-7



K-3号住居跡出土の鉄滓



K-3-8



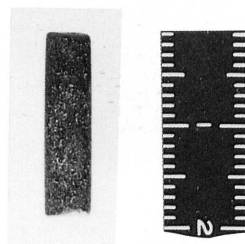
K-4-1



K-4-2



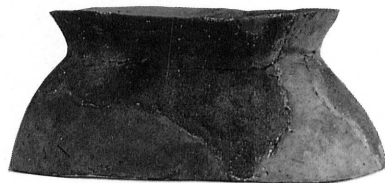
K-5-1



K-5-4



K-6-1



K-6-2

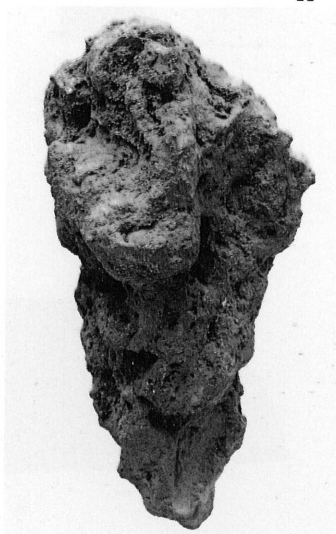
図版 45



K-7-5



K-7-6



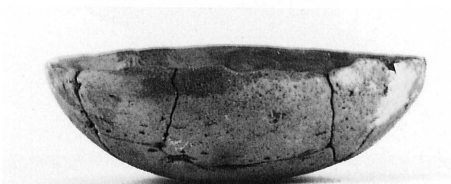
K-7-22



K-7-13



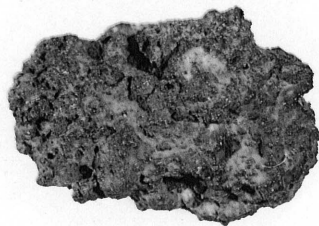
K-7-14



K-7-15



K-7-16



K-7-20



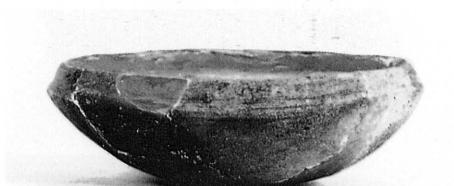
K-9-1



K-9-3



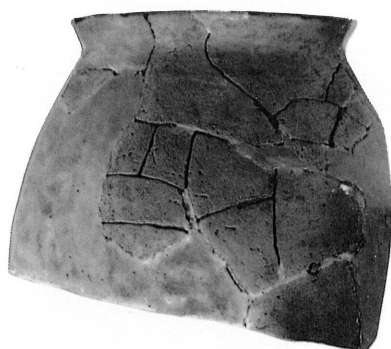
K-9-2



K-13-6



K-13-8



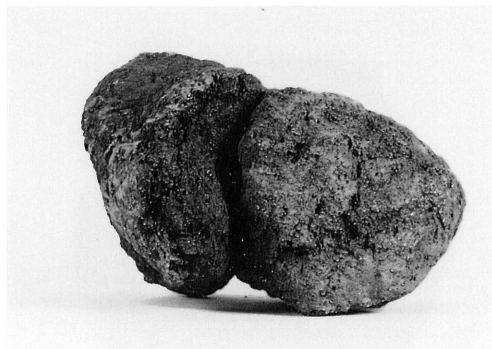
K-13-2



K-13-10



K-13-11



K-13-12
K-13-13



K-14-3



K-14-5



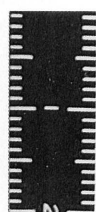
K-14-6



K-14-7



K-14-8



K-14-13



K-14-12



K-14-11



K-16-3



K-16-4



K-16-1

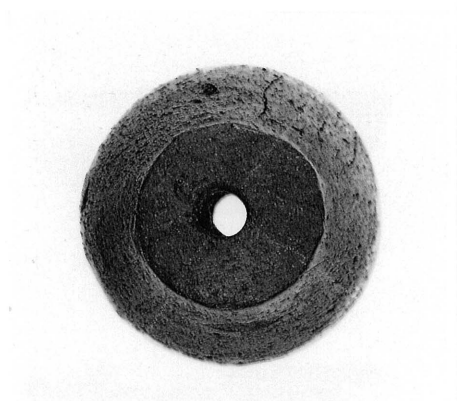


K-16-5

図版 49



K-17-1



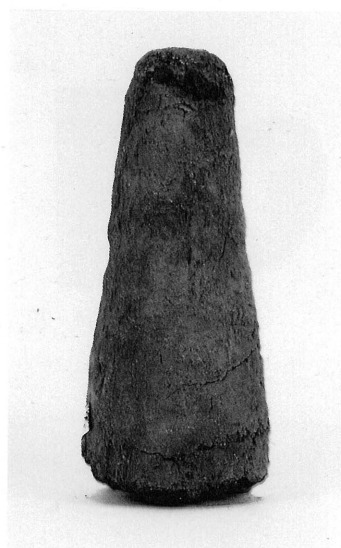
K-17-8



K-17-3



K-17-4



K-17-7



K-20-1



K-20-2



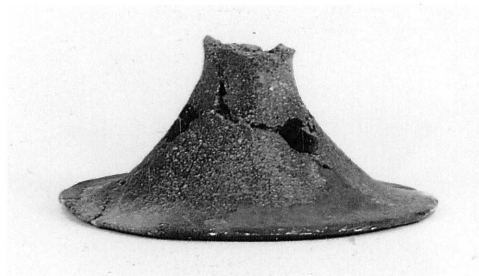
K-21-3



K-21-4



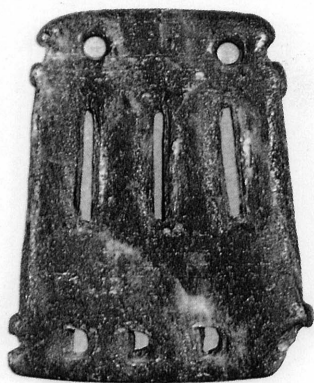
K-21-5



K-21-7



K-21-8



K-21-9



图版 51



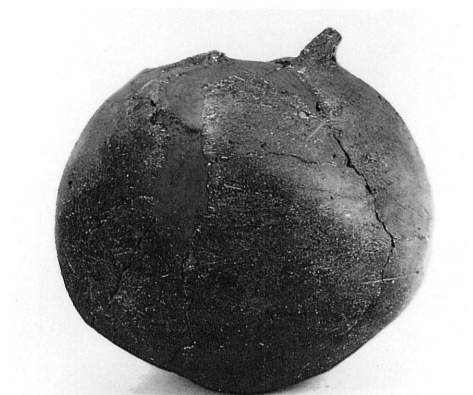
K-22-1



K-22-3



K-22-2



K-22-4



K-22-5



K-22-7



K-22-7

図版 52



K-23-1



K-23-2



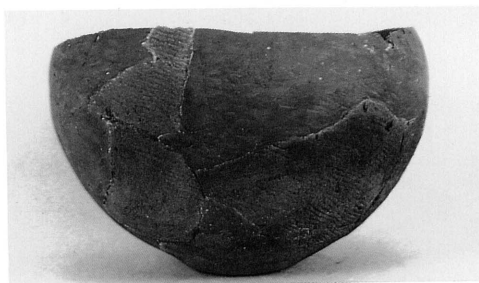
K-23-3



K-24-1



K-24-2



K-24-3



K-24-5



K-24-6

图版 53



R-1-1



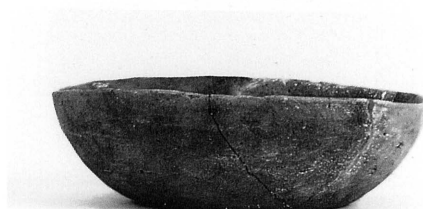
R-1-7



R-1-4・5



R-1-11



R-1-13



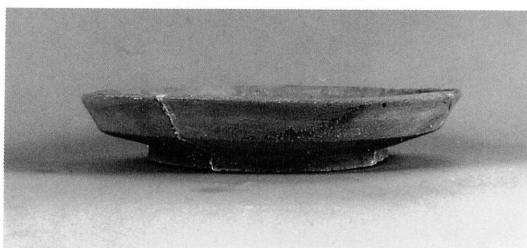
R-1-9



R-1-16

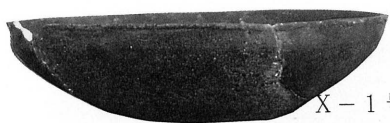


R-1-10



R-1-18

図版 54



X-1号路-1



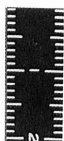
X-1号路-2



X-2号土壙-1



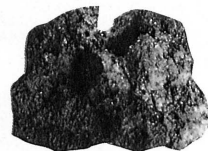
X-2号土壙-2



X-5号溝-1



X-5号溝-1



X-5号溝-2



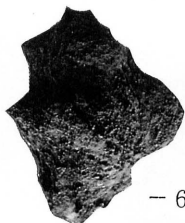
X-5号溝-3



X-5号溝-4



X-5号溝-5



-6



-7



-8



X-5号路
フク土

図版 55



遺構外出土 - 1



3



4



5



6



7



8



13



14



22



15



24



18·19



25



21

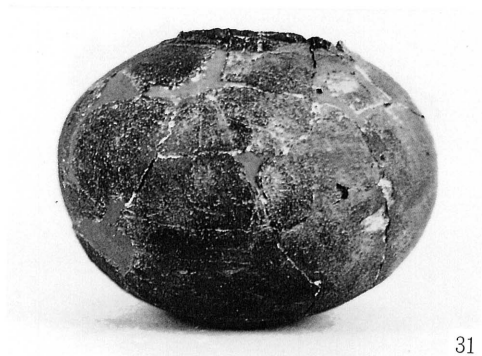


27



29

图版 57



31



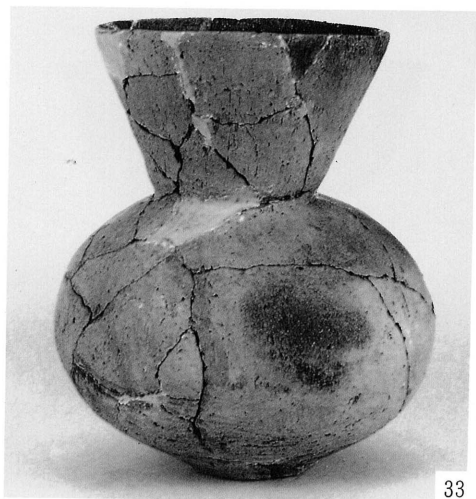
34



32



35



33

—— 千葉県市原市 ——

潤井戸西山遺跡

昭和61年3月20日 印刷

昭和61年3月25日 発行

編集 財団法人 市原市文化財センター

発行 市原市街路課
財団法人 市原市文化財センター
千葉県市原市馬立817番地

印刷 三陽工業(株) 市原支店

千葉県市原市五井5510の1
TEL 0436(22)4348